THE CENTRAL REVIEW

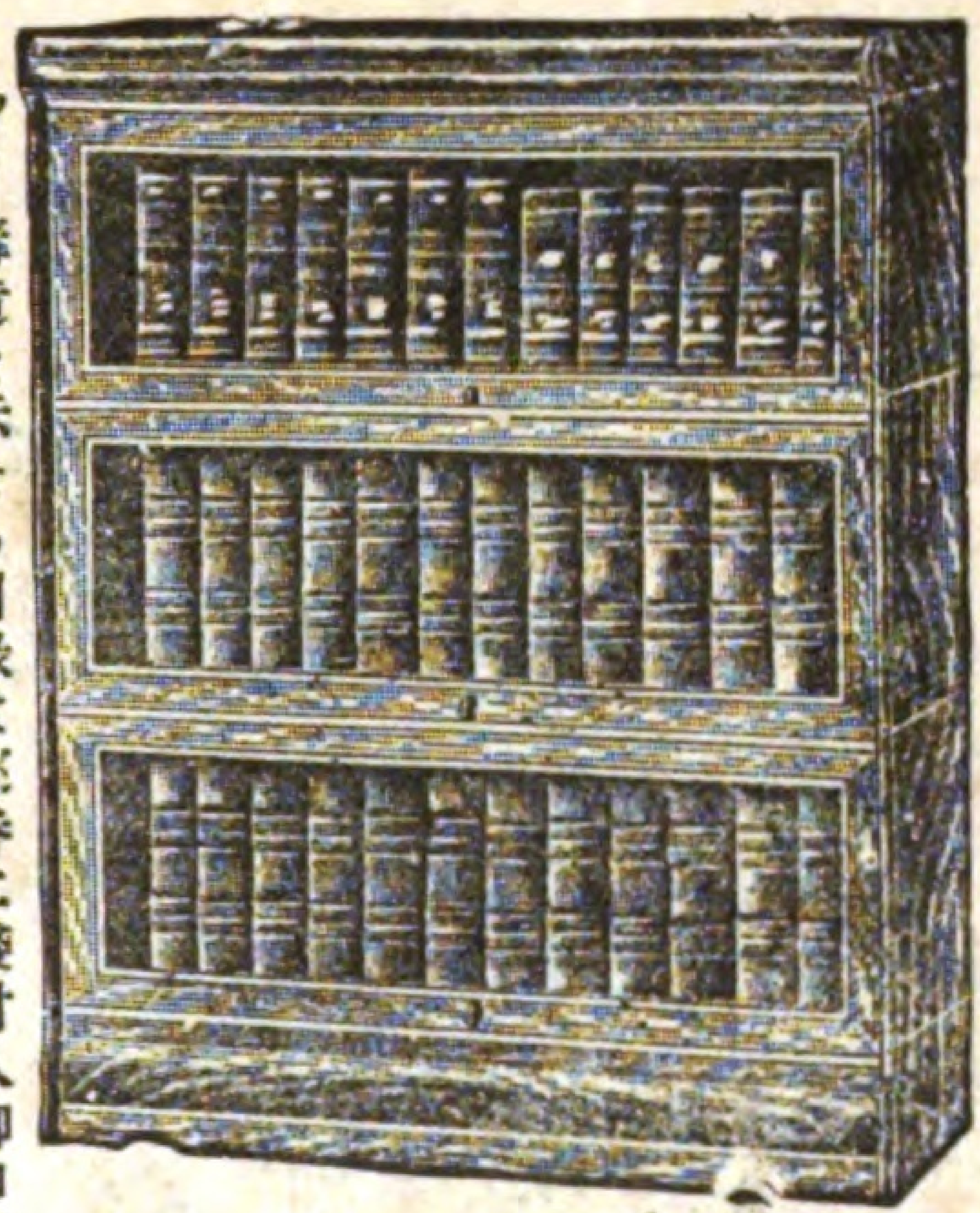
中央公論

第廿七年　第六號

第二百七十九號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新橋堂新式組合せ本箱

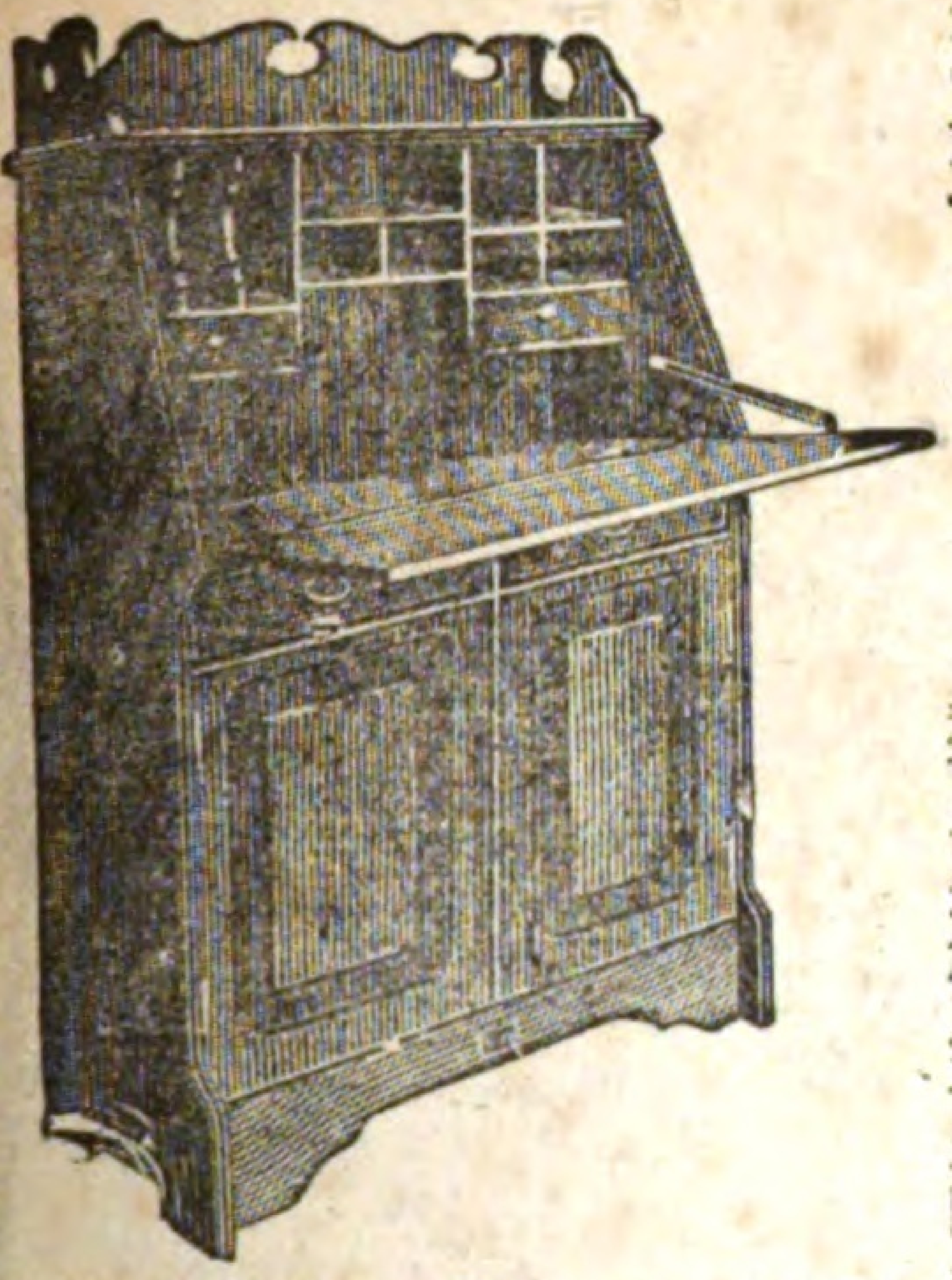


●最新式最新形の本箱にして目下歐米諸國に大流行を極め居れり
大隈伯爵家を始め其他の諸名家より多數御注文の榮を辱ふす
以て本器が如何に優秀なるかを知られよ!!

△藏書の增減に從ひ自由に其大さを伸縮し得べし
△室内の構造に應じ適宜に配置し得べし
△硝子戸の開閉に巧妙なる構造を有す
△書物を分類するに最も適當なる構造を有す
△形狀優雅色彩美麗しかも堅牢此上なし

定價 金二十六圓 檜製
金二十八圓 欅製
金三十圓 欅製
運賃荷造費御自辨

理想のデスク



(詳細)構造を示せる目錄は郵券二錢封入御申越次第進呈

=事務用定價金廿五圓 =書見用定價金廿二圓 =荷造費各一圓八十錢 =運賃は御自辨

●デスクの上部は事務用又は書見用に用ひられ下部は帳簿棚又は書棚に使用するやう構造され居ります

●帳簿又は書物を最も手近に配置し得て便利此上もありません

●此デスク使用後は机板を閉ぢて其大さを短縮する事が出來ます

●材料は兩デスク共檜です塗は木地色のデスク仕上げです

發賣元 東京市京橋區銀座大通新橋際 新橋堂 電話新橋千九百九十一番 振替貯金口座二百番

體力養成叢書

(一) 大澤醫學博士述 **冷水浴と冷水摩擦** 定價二十錢 郵稅四錢

(二) 二木醫學博士述 **腹式呼吸** 定價二十六錢 郵稅四錢

(三) 栗本醫學博士述 **海水浴** 定價二十五錢 郵稅四錢

(四) 樫田醫學士述 **滋養物の攝取** 定價五十錢 郵稅六錢

●狩野病院長狩野謙吾先生著第十二版

神經衰弱自療法

定價六十錢 郵稅六錢

此書は神經衰弱症治療の專門大家として有名な狩野先生が各種の神經衰弱症例へば**惱**神經の衰弱症**胃**神經の衰弱症**生殖器**神經の衰弱症等の治療法を通俗に而かも詳細に講述せられたものです、斯病に惱める不幸な方が是非御一讀の必要ある書物だと思ひます

發行所 東京日本橋區檜物町八(振替二一〇三〇番)文星堂書店 東京市銀座大通新橋際(振替東京二〇〇番)新橋堂書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

賜天覧

典侍従三位 柳原愛子君序　掌侍正五位 小池道子君題歌

故御歌所長男爵 高崎正風翁述　遠山稻子編

歌ものがたり

定價金壹圓
送料 市内四錢 地方八錢 清鮮臺樺十二錢

齋藤松洲畫伯裝幀　菊判總クロース　金文字函入美本

本書は故樞密顧問官兼御歌所長男爵高崎正風翁が、和歌に關する種々の趣味深き物語を輯めたり。翁は御歌所長として、

天皇陛下の御親任深く、特に、御製の拜見を仰せ付けられしこと多年、陛下の御製に就て殊に臣民の仰ぎ奉るべき御物語を初め、御製拜見の動機、和歌の精神、詠歌の心得草、翁の交友、翁が歌人としての閱歷等、面目躍如として恰も翁が温顔に接するの想あり。

而も本書は翁が生前に出版せられんとして、門人遠山稻子女史に講述、筆記せしめられ、一々翁が校訂せられしものなれば、翁の遺稿と稱すべきもの、翁が深き含蓄と閱歷とは書を俟つて初めて世に公にせられたりと謂ふ可し。行文平易、趣味横溢、卷を掩ふに暇あらざらしむ。敢て紳士淑女の座右に薦む。

發行所　東京市麴町區飯田町四丁目四番地　電話番町二三三九　振替東京一八一八　婦人畫報 少女畫報 發行所　東京社

各地書店ニ在リ

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

早稲田大學教授 **五十嵐力新著**

新刊 新國文學史

本書は久しく國文學の研究に潜心した著者が新しき心を以て古文學を鑑賞した結果で、其特色は（一）古文學の與ふる活きた味ひを其まゝ寫し出さんと試みた事……（二）各時代の中心文學（源氏物語、平家物語、謠曲、西鶴、近松、馬琴等）に對して根本的に新なる研究をなしたる事……（三）作と作家と時代思潮との交渉に對して有機的、具體的、繪畫的の説明をなしたる事……（四）舊來の國文家の形式的、常套的説明によつて石化せしめられたる古文學の厚皮を剝ぎ、血や涙の迸つた生活の泉を掬み味はゝんとした事……（五）明治維新及び日露戰爭を境として、新舊文學の相違を鮮明に寫し出さんとしたる事

國文學は本書に於て始めて活きたる説明を見出だし、吾等が祖先の内的生活は、此書に於て始めて現代の吾等の血に融和すべきものとなつた。本書は國文學の研究に新時期を劃すべきものである。

脊皮天金函入 全一冊頗美本
紙數八百頁
正價金二圓八拾錢
郵税十二錢

四版 **新文章講話**

三版 **實習新作文**

脊皮上製
紙數各約八百頁
正價各壹圓七十錢
郵税各十二錢

新しき點、完備せる點、實際に役立つ點に於て、現代獨歩の著述である。裝釘を始め、内容、形式、趣味の全體に亘り、新國文學史の基礎をなして、其美はしき姉妹卷となるべきものである。

發兌 東京牛込早稲田 **早稲田大學出版部**

一手發賣 東京日本橋區本町 **博文館**

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

萬人必携の辭書

井上十吉先生編

新譯和英辭典

氏の英文には全く和臭なく正確にして巧妙なる優に英米の名ある文士のそれと比肩するに足る此大英學者が二年以上全力を傾けて一語一語悉く新譯を施したる新辭書の如何に優等のものなるかは察するに餘あるなり

第四版

定價壹圓六十錢

郵稅內地八錢

二男爵十博士共編

模範英和辭典

本書發行以來朞年ならざるに十數萬を賣盡し語學革新の一紀元を劃したるは掩ふべからざる事實なり。今や春季讀書の好機に際す英語研究者及英語使用者諸君が速に本書の利便を收得せられんことを勸むるもの也

定價金貳圓

送料金八錢

發兌元　東京神田　三省堂書店　振替口座一五九七

(前の付五)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告は謝絕す


仕事が濟んだから
エビス
サッポロ
ミュンヘン
ビール
先づ一杯！

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士三上参次先生序
日南福本誠先生序

尾池宣鄕先生著（忽再版）

豊太閤

菊判上製美本正價壹圓拾錢
特價九拾錢
送料拾錢

三上博士曰く 此書は記事が明確で論評が犀利で肯綮に中つて居るものが多い、實に國民的讀物として群を抜いて居る。從來世に出でたる太閤の著書中では優秀のものであるから世人は之れが繙誦に倦まない、讀者に取つては多大なる感化を受け發憤興起の材料となるものである。且つ其文章が快闊であるのである。

日南先生曰く 太閤は依然として傳說及曲史の裏に在る褒者は過褒し貶者は過貶し兩ながら眞の太閤と相關しない。宣鄕は之を慨して太閤研究に從來し轉書千卷採擇取捨而る後其手を下し而る後此書を成した、赤裸々の太閤是に於てか始めて一面を現はした我亦嘗て此等を志して未だ果さず早くも宣鄕に先鞭を著けられた嗚呼智愚の相距る三十里我今にして下手の考休むに似たるよと知る感嘆極まつて獨語を禁ぜず、曰く太閤も偉いが宣鄕も亦豪い。

忽三版

珍談奇聞

名士の片影

毛内牛空君著
小杉未醒君畫

現代各方面の名士三百氏の珍話奇行一讀卷を掩ふを惜しむ。名士の陳列會、人物の解剖書とは本書のこと也

◎菊判截頗美本正價四拾五錢 送料六錢

東京本鄕區森川町
振替壹九四六七番
文成社
直接申込 送料不用

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す



中央公論第二十七年第六號目次



與謝野晶子女史論

▲詞藻

▲評論

▲小說

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

工學博士 鴨居武著

最新寫眞術

四六判洋裝 全壹冊 紙數四百三十餘頁 圖版百餘種

正價金壹圓七十錢 郵稅金拾八錢

(本書ノ特色)



(一)最新寫眞術は鴨居博士が多年の實驗及び研究より得たる蘊蓄を披瀝したる新著也(二)従來寫眞術書の多くが主として實地のみを説きて能事としたるに反し各部とも必ず學理の要點を併せて講説したり(三)各種の方法は従來の如く雜駁に記載せず總て學理に基き整然たる秩序分類を立て編述せり(四)現今流行するオゾブロム法、カタ、イプ法、オートクロム等に就て詳細に記述したり(五)針孔、閃光、望遠、實體、活動、電送、戯謔等各種特殊寫眞に就き亦最も興味ある解説及び技術上の注意を與へたり(六)光線の原理、鏡玉及び各装置の構造幷に物理的解説、藥品の化學的説明幷に特長等實際上必要ある原理を多く説きたり(七)天然色其他の寫眞標本十八種を精巧なる寫眞版とし且百三個のカット畫を挿入して以て其解説を容易に會得せしめたる如き亦本書の有力なる一特色也(八)各種の處方等は最も其粹を撰み實用上最も適當のものゝみを舉げたれば全く信頼して使用するを得べし

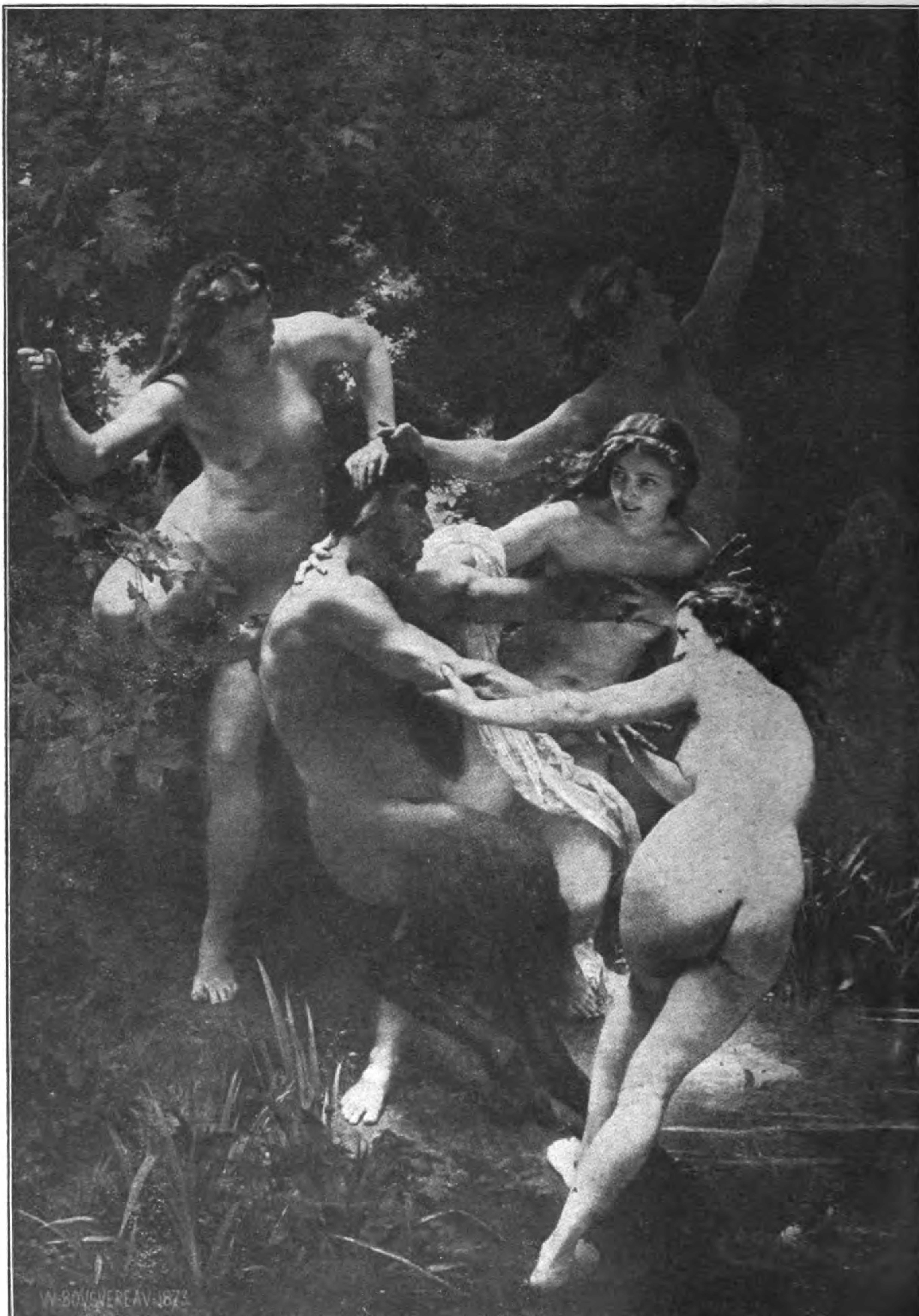
要言するに本書は寫眞術、最新知識の集成なり、若し夫れ本書に就て學び本書に従つて習練せば斯道の堂奧に入ること亦容易なることを得べき也

丸善株式會社

東京日本橋通 大阪心齋橋筋 京都三條通

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

BOUGUEREAU



"SATYR AND NYMPHS"

中央公論



第二十七年
第六號
第二百七十九號

支那問題を閑却する勿れ

（一）

世を擧げて今や政治上の最大問題とする所のものは、唯だ行政財政の整理のみ、然り、是れ洵に大問題なるべし、其の殊に内閣の死活の岐るゝ所たるに於て、最も重要問題なるべし

然れども記せよ、國家は區々たる内閣の死活以上に、更に重且つ大なる問題あるを、一内閣の死活は詮ずる所洋上の一波のみ、玆に海あれば風あり、風あれば波あり、假令風なきも波あり、洋中には一定の流潮あれば也、彼の内閣の如き、施設宜しきを得て多く民望を有するも、其の運命三五年に限るを例とし、永くも十年に達するは極めて稀れ也、然かも内閣倒るゝが故に國家衰ふるにあらず、内閣の死

活は猶ほ一波一瀾の寸毫も海洋に增減なきが如く、國家の消長には多く交渉なき也、故に識慮ある國民は、區々內閣の死活を念とせず、專ら國運の盛衰消長に關心して、其の進歩發展に鋭意し努力するのみ

然らば則ち今日眞に重且つ大なる問題は何ぞや、曰く對支那政策是れ也、請ふ少しく之を語らん

（二）

行政財政の整理といふも、畢竟する所國庫歲入に餘裕を剩して、更に重要なる事業を遂行せんと欲するに過ぎず、所謂税制整理なるものも、多少所得税に增減を行ひ、勤勞所得を減じ資本收入に增し、若くは若干の營業税を輕くするに止まらん、然かも其の結果より來る國庫收入の缺陷を補ふがためには、印紙税法を嚴格に勵行し、或は郵便税を引上ぐるに過ぎざらん、若し夫れ鹽價米價を低廉ならしむべき政策より來る專賣收入關税收入の減少に至ては、煙草又は酒造税の引上げか、土地の增差税を新設する位に止まるべし、然れども郵便税を引上ぐる結果、却つて國庫の收入を增すや否やは疑問也、酒煙草の價を今日以上に高くせば、需用者の減少によりて却つて收入を減ずるなきやもまた甚だしき疑問とす、土地增差税の如き、東京大阪名古屋等の大市街に於ては多少有効なるべきも、其の他に至つては甚だ有望ならず、三四都市の外は、土地の價尚ほ頗ぶる廉にして、公定地價と著るしき相違なければ也、土地增差税其のものは、主として市街宅地に止まるも、三四大都市の外は、宅地の價著るしく騰貴するに至らざると、少しく地方の實狀を知るもの丶齊しく認むる所也、若し東京の例を以て之を律せば、是れ机上の空想のみ、畢竟するに、增税其のもの丶多くの收入なきや論を俟たず、故に國庫に十分の餘剩を生せん

と欲せば、根本より政費に大削減を加へて、總歳出の一割乃至七八分を減ずべき果斷を行ふにあるのみ、彼の所謂天引と稱へて、五千萬圓削減を唱へたものある、未だ俄かに人を以て其の言を廢すべからず

且つ民力を休養せんとせば、地方の政費にもまた節減を加ふるを要す、彼の中學校生徒が、一年級にあつて五六百人を算しながら、卒業する者の百人內外に過ぎざるが如き、是れ半途退學者の多きためにして、大抵は學資の持續せざる結果とす、夫れ中學を半途にして止めしめ、父兄は徒らに資力を損じ、生徒は徒らに不平懊惱を加ふるに止まるが如きは、是れ子弟を驅つて不良少年たらしめ、父兄を逐て貧窮人たらしむる也、教育の局に當る者及び地方官公吏の深く意を致すべき所とす、彼の國庫金を分取りて、地方に學校を建設することを競ふが如き惡傾向は、切に之を鎭壓せざるべからざる也

徒らに罪囚を多くして國庫金を浪費することも亦戒めざる可らず、裁判官が常識を以て事を即決せず、或は其の犯罪を自首し出てゝ、犯狀の明白なるを保釋に附せず、永く未決囚に拘留するが如き、是れ國庫金浪費の主因也

總ての官公署が繁文褥禮に流るゝの弊は、實に意料の外に出づ、民間會社ならば半日一日にして決するとも、官公署に於ては五日乃至十日を費すは通例のみ、斯くして官公署自から煩ひ、公金を浪費するに止まらず、往々にして民人にも累を及ぼすの例は、幾んど枚擧に遑あらざらんとす、今の國務大臣にして、眞に下情に精通せば、先づ斧鉞を玆に下して其の弊習を一掃するに努むべし

現在の弊風を根本的に一掃し、由て以て數千萬圓の政費を節すること、果して今の內閣に望み得べきや

否や、世人の多くは之を以て黄河の澄むを俟つものとなすに似たり、吾人は素より內閣を以て能く爲すに足らずと做すとなし、唯だ行政財政の整理を以て畢生の能事とし、幾んど他を顧みず、他の重且つ大なる問題を閑却せんとするを嘆惜するのみ

（三）

昨年十月以來の支那事變に對しては、如何なる人も其の見解を謬まらざるは莫かりき、彼のタイムス通信員として多年北京にあり、歐米人中、否幾んど世界各國人中第一の支那通と稱せらるゝ醫師モリソン氏すらも、頗ぶる見る所を謬まりたりき、我が元老政事家を始め、政府の外交當局者も、民間の政事家有志者も、悉く謬まらざるは無く、極めて支那の內情に精通すと稱せらるゝ數氏者と雖も、敢て口を開かざりしのみ、或は口を開く能はざりしなるべし、之を以て單に外交當局のみの失策を責むるは酷也

然れども支那の將來は如何、未だ輕々しくいふ可らずと雖も、其の財政窮乏に苦むや蔽ふべからず、抑も支那の革命なるものは、我が日本人の心を以て忖度すべからず、彼の張謇の如き富裕にして而して革命の先驅たりしものも、尙ほ巨萬の資を擁しながら、革命のため其の一厘をも割きて出さゞる也、多數の人民（敢て國民とはいはず）は唯だ革命によりて租稅の全免又は減少を翹望するのみ、當然租稅を徵收せらるれば、直ちに革命を咒詛すべしといふ、革命の事に當る先驅の志士私財を吝みて出さず、革命の政治に浴すべき多數人民租稅の負擔を好まず、彼等にして無より有を生ずる手品を善くせざる以上、素より財用に窮せざるを得ざる也、茲に於てか何物をも犧牲として、四國借款乃至六國借款に倚らざる

を得ざる也

四國資本團には若干の弱點あり、支那の借款にして成立せざる時は、曾て放下せる資本の水泡に歸すべき虞あるが如き、其の最も著るしきもの也、故を以て、如何にするも借款を成立ぜしめざるを得ざる支那政府當局中、往々資本團の要求する財政監督を斥け、而して資本團また絕對に之を主張するを得ざるのみ、若し資本團中に先見を有する人物あり、斷じて財政監督を要求せば、支那政府は到底之に屈從するの外あらず、今や資本團と支那政府と、相互に讓步して兎も角も借款を成立せしめ得べき傾向にありといふ、果して然らば、支那政府は曲り成りにも其の財政上の大破綻を免かれ得べき乎

然れども軍隊の解散は無事なるを得べき乎、外國人の有せんとする利權に對して支那人の强烈なる排外熱を温釀し來るなき乎、總統袁世凱は能く十八省を統治して平安ならしめ得べき乎、革命共和澁滯する所なく、而して代議政治また圓滿に開始せらるべき乎、假令此等の事總て順當に捗るも、尙ほ一事の太だ難きあり、他なし、財政の獨立是れ也

測るに、今日以後支那が差當り要する借款は、少くも六七億を下らざるべし、所謂六國資本團なるもの、亦必らず之を出資するなるべし、然れども支那政府果して每年其の元利を支拂ひ往きて、竟に確實に之を償還すべき目的ありや、支那の土地洵に廣大なりと雖も、其の價値の高下は大なる疑問也、然り、其の田畑といふも、收穫割合に少くして到底我が日本と同視すべからず、隨つて多額の地租を課せんと思ひも寄らず、况んや水理治まらず、山林乏しきがために、頻年水旱の害を絕たずして、農民に一

定の負擔を分ち難きをや

課税の初歩ともいふべくして、且つ最も賦課し易しと稱せらるゝ地租にして尙ほ且つ然り、之を外にして何等有望の租税ありや、所得税妙は則ち妙なるも、支那人の如き國民性を缺如する人民に對しては所詮奈何ともすべからず、支那人の合同事業に短にして、殊に公共的性質の缺乏せるに於て、會社の與る未だ俄かに望むべからず、或は營業税を可なりとするも、隱匿の弊擧けていふ可らず、海關税を高くするは、徒らに物價を不廉ならしむる所以にして、人民生活の低度なる支那に於ては斷じて之を行ふ可らず、況んや彼の釐金税の復興をや

一面より視れば、支那共和政府をして有力ならしめんと欲せば、其の權力を强大ならしめざる可らず、然かするには、第一に海陸軍を强くし、官廳組織を莊嚴にするを必要とす、是れ皆多く政費を要する所以にして、今の共和政府なるもの、眞に統治の實蹟を擧けんとせば、勢ひ多額の政費を要すべく、租税收入の如き或は足らざるを憂ふ、斷じて借款の元利償還に充つべきものあらざる也

若し共和政府の基礎薄弱ならん乎、租税收入益々減少すべきや言を俟たず、玆に於て乎借款のためには必らず相當の利權を與へざるを得ざる也

資本團にして其の放下したる借款に相當する利權を掌握し、而して元利の償還を得ざるに及んで、竟に其の利權を各自自由に措置せん乎、事實支那の分割となるや必せり、苟くも分割とならん乎、玆に列國の競爭を現せざらんとするも得べからざる也

共和政治は中央集權に難くして、却つて分權に傾むき易し、今の米國は實に其の著明なる一例證也、況んや支那の如く各省の總督皆兵權を有し、其の勢威最も强大にして、而して徴税の職權も亦事實總督其の下僚に委任し、上下交々利を征して租税を盜み取れるをや、此の情勢は共和政治の下にも尙ほ依然として繼續すべく、其の省財政の窮するや、總督意のまゝに列國借欵の成立を圖るべく、隨つて分割の形勢は益々幇助せられざるを得ざる也

列國の多數が今や支那分割の志なしといふは虛也、彼等は皆支那に垂涎せり、而して之を自由に分取せざるは他なし、其の實力未だ足らざる所あれば也、歐米列國素より强大なるも、支那に對しては幾んど長鞭馬腹に及ばざる形なきにあらず、少くも日露兩國の意思に反しては、支那を自由にすること能はざる也、故に彼等内に相妬み相牽制して、以て分割を敢てせず、而して口に公明平正を唱へて、寸毫も分割の希望なしと言ふのみ、蓋し爲さゞるに非ず、能はざるのみ

然れども六億以上の借欵に對して、支那政府其の元利を償還する能はすんば、列國如何ぞ永く拱默せんや、必らず其の擔保たる利權を自由に處分せんと努むべく、事端是より發生して、竟に競爭を現出し、多少準備の足らざる所あるも、之を顧みるの遑なきに至るべし

歐洲の外交家は、今や列國間の協商協約の複雜繁多なるに堪えざらんとす、更に支那の借欵にして元利を收むる能はず、竟に其の利權を處分するに至らん乎、歸着する所は破裂のみ、然り、歸着點は必らず破裂也、問題たるは僅かに其の間の時機のみ

（四）

我が日本實に東亞の覇者と稱せらる、明治三十七八年役以來、列國は總て日本の承認を得るにあらざれば、東亞問題に容喙すべからざるとを領解するに至りたれば也、英佛露獨の承認を經るにあらざれば何者も歐洲問題に手を下し難く、モンロー主義を標榜する米國の同意を得るにあらざれば、如何なる國も西半球に足を投じがたきと同じく、世界孰れの國と雖も、今や日露兩國の意圖に反しては、支那問題を解かんと欲するも得べからざる也、彼の英佛米獨の四國資本團が、勉强して日露兩國を其の伍列に引き入れしも實に此がため也

殊に日本は、支那と同文の國にして、其の境域の近く相接するのみならず、利害の關係また甚だ密也、乃ち列國が支那を分割せんとするに方つても、我が日本實に其の主人となりて、之を左右せざる可らず、其の事情形勢の如何に由ては、或は彼等を指導して其の宜しきに適從せしめ、或は其の意思に反するも强行して以て我を從はしめざる可らず

茲に至て問題は理窟に非ずして實力也、然り、千言萬語は事に寸益なく、恃むべき所のものは唯だ一の力のみ、今日豫め歐米列國が支那を分割せんと欲するの情あるを察し、之に對する我が實力を十分に備へ置くを要す、此の力あるにあらずんば、我れは支那に對する本然の方策を謬まり、延ひて回復すべからざる悔を貽すに止まらず、或は國運を危殆ならしむるの虞あれば也

然らば則ち實力とは何ぞや、いふまでもなく武力と武力とを動かすべき財力と是れ也、更に語を換て

いへば、我が國の使命は東亞にあり、支那四億の民衆をして其の所を得せしむるに在り、此がために我が武力を用ゆるの必要あらば、斷じて之を用ゆべし、乃ち我が武力の用途は主として支那の方面にあるや多言を要せずとす

彼の聵々者流之を察せず、動もすれば海主陸從と稱し、單に海軍のみに重きを措きて、却つて陸軍を減縮せんとす、思はざるも甚だし、我が島國たる地位に於て、武力を支那に用ゆるに方つては、素より日支間の海上聯絡を確實に維持するがために、制海權を他に奪はる可らず、乃ち少くも最強最大にして且つ同一型なる戰艦、及び一等巡洋艦のみを以て、精鋭なる六個以上の艦隊を組織し得べき海軍を必要とし、其の程度に於て擴張を實行せざる可からずと雖も、同時に又陸軍にも相當の擴張を加へ、我が精鋭をして、十八省の要衝を制せしむるの力を備へざる可らず、陸軍縮少の如き、素より時務を識らざる迂人の見のみ

武力を動かすものは財力也、我が武を支那に用ゆる、素より歐米の如く多大なる軍費を要せずと雖も、苟くも百方の精鋭を擧げて十八省に馳騁せしむ、其の費實に貲るべからざる也、故に一面には陸海軍備を擴張すると共に、また併せて用兵の資財を作るの方途を開拓し置かざる可らず、是れ國家現今の急務にして、官民の共に何事を措きても鋭意努力すべき所なりとす。

此の大目的を以て行敗財政の整理を行ふは宜し、否、行はざる可らず。然らずして單に區々たる內閣の名譽運命のため、一時を糊塗するに止まる整理ならば、吾人は將に鼓を鳴らして大に之を責めざるを

得ざる也

我が官民は徒らに眼前の岐路に彷徨す可らず、海を隔てし西隣國の運命は、實に我が安危盛衰の繫る所にして、南滿洲及び朝鮮臺灣の如き、一波一動と雖も其の影響を免かれざるを識りて、大なる決心を以て事に當らざる可らず、明治二十七八年役の後、我が國民は實に臥薪嘗膽を心とし、官民共に極めてシリアスに事に從ひき、今や泰平四十年、勝に狃れて漸く驕泰の風を生じ、男女歡樂に耽り、衣服器物の奢侈を競ひ、局に當るもの亦動もすれば樞要なる本務を忘れて、區々の末節に走らんとす、是れ實に深く警めざる可らず、吾人乃ち殊に之を切言して官民の猛省を促がす

總選擧の批判

（一）

多少の政治思想を有するものをして、一時全く其の耳目を集中せしめたりし總選擧は、五月十五日全國一齊（唯だ根室のみは風雨のため二十日に延期）に擧行されたり、多數黨なる政友會の横暴なりしため、前議會に於て撰擧法の別表改正を實行するに至らず、爲めに市の獨立と、被選擧人の增加とを視る能はざりしは、今更ながら吾人の痛嘆に耐えざる所とす

政府には素より干渉の意思なかりしと視るを正當とす、然れども地方官中私に政府の意思を付度して

か頗ぶる干渉に近き形迹を貽せる者なきにあらず、東京市に於て政友會反對の一候補者の運動員中、違犯事項ありしを幸ひ、該候補者に投票するの危險なるを注意して、以て暗に其の選出を妨げんとしたりし巡査ありたるが如き、又長崎縣の非政友派の一候補者が二三の運動者を拉して靑樓に上りしとて、直ちに之を拘引して以て其の當選を阻止したりしが如き、其の最も著しきものならん

彼の愛媛縣に於て當選したる政友會員の選擧違犯事項を有耶無耶に附し、或は若松市に於ける同じ事項を曖昧ならしめ、甚だしきは硬直なる檢事を轉職せしめ、若くは沈默せしむる如きあらば、是れ實に容赦すべからざる一種の選擧干渉也、天下の清議は必らず之を攻めずんば止まざるべし

（二）

某老博士の曾て一地方に於て選擧を爭ふや、投票者に與ふるに米一俵宛を以てし、爲めに費す所總て四萬圓に達す、人あり、其の選擧の神聖を害するの傍若無人なるを忠告す、博士哂つて曰く『然らば則ち日本全國の四境に建つるに監獄の大看板を以てせよ、今の候補者にして孰れか違犯を敢てせざるものぞ』と、博士の言洵に理あり

今回の總選擧に於ては、意外に多くの費用を要せしものあるが如し、政友會員なる小樽區の高橋直治氏は九萬圓乃至十萬圓を費消せしといふ、無所屬なる三重縣の梅原龜七氏は、七萬圓を費消し、其の他五萬圓以上なるもの少からずといふ、茲に氏名を指摘したるもの必らずしも其の金額を費消したるに非ざるべきも、尚ほ五萬圓以上を費せしものが、投票を買收せざりしといふは、常識に於て到底信じがた

き所とす、我が司法官にして、眞に選擧の淸淨を支持して法律の威嚴を保たんとせば、今日以後に於ても宜しく之を摘抉して、以て罰すべきを罰せざるべからず、之を以て徒らに平地に波瀾を捲き起すものと做すが如きは、全く短見にして且つ姑息なる俗見のみ、選擧の以前にのみ法律の眼を開き、其の以後に之を閉るは不條理也、且つ犯罪を檢擧するにも、單に饗應者被饗應者のみに止まりて、彼の最も醜汚なる投票賣買に及ばざるも亦不條理の極也、司法官にして洵に公正の心あらば、今日以後益々犯罪捜索を嚴にすべし、而して識慮ある國民も、之に由て以て撰擧の惡弊を掃蕩して、延きて憲政を良好ならしむるの結果を想望して、司法官の措置に感謝するや必せり

（三）

吾人は近く東京市に於ける選擧を視て、敢て數言を禁じ得ざるものあり、或は後の參考ともなすに足らん歟

政友會の公認候補者三人を擧げて悉く落選せしめたるは、最も注目すべき事象とす、或は其の人物の劣等なるがためと做す者あり、勿論其れも一の原因なるべし、然れども一の前科者を除けば、一は頗ぶる古き法律家兼雄辯家にして、一時は盛名を全國に馳せしもの、老來意氣銷磨して太だ聞えざるも、別に唾棄すべき缺點あるには非ず、一は講談師といふと雖も、暫らく此の藝に由て一は其の口を糊し、一は其の主張を汎く宣傳せんとするのみ、自由黨以來一個の志士壯士にして多少世間に知られたりし者也然るに玉石共に焚かれて一併に當選する能はざりし所以のものは、實に政友會員たりしがために外なら

ず、現に他の落選者の一が失敗したりし一原因も、實に政友會に近邇して他日之に加はるの疑ひを受けしにありといふ、帝都の市民が今の內閣の基礎たる政友會を好まざるは、必らずしも抗官的意氣を懷く市民の感情よりするに非ずして、吾人が曾て指摘したりしが如く、政友會の議會に橫恣なりしと、今の內閣が電燈問題に就て頗ぶる市民を侮辱し、之に由て著るしく市民の信望を喪へるに由る、然り、是れ政黨の所謂政見にあらざるも、市民の感情實に玆に至れるのみ、一葉落ちて天下の秋を知るとせば、而して地氣の北よりせずして南よりし、早く杜鵑を聞くを以て亂を察すとせば、內閣及び政友會員たるもの、近く此の帝都の人心の向背に鑑みて、大に悛むる所ありて可也

政友會の公認侯補者の悉く失敗したりしに反して、國民黨員が五人までも當選したりしは、是れ市民が國民黨の狷介にして十年不遇なるを憫める故のみに止まらず、實は其の侯補者の人格の比較的缺點なきがためのみ

或は黃金の力、竟に演說に及ばず、市民漸く政見の良否を問ふの傾向ありと做すものあれど、是れ恐らくは事實に遠き見解ならん、看よ、彼の晝夜演說に齷齪たりし雄弁先生と雖も、其の千言萬語未だ一として國家の經論に觸れず、所謂政見の如きは、之を捉へんとするも殆んど亡羊の嘆あるにあらずや、彼等が反對黨を熱罵し、官僚を冷嘲し、人格論を喋々せるは是あり、然かも自家の政見に至ては、殆んど語る所あらず、假令語るも詳かならず、明かならず、精しからず、市民にして之を是非せんとするも到底能はざりし也、蓋し彼の演說のみを武器とせる人々の當選したるは金力に乏しくして、演說の外に

用ゆべき武器なきと、頗ぶる市民の憐れみを買へる結果のみ、倫敦市民が到る處に時の重要なる政治問題を相語るが如き政治思想は、不幸にして未だ我が東京市民の胸底に萠芽せざるを奈何ともするなきのみ。

或は黄金の威力を喪へるを祝する者あり、然り、其の威力の著るしく衰へたるは事實也、然れども所謂選擧屋なるものに至ては、純乎たる金力の奴隷にして、唯だ黄金の多き處に集まる、現に落選者の某は、投票の前四日頃より、一時金力絶斷せると稱せられて、運動屋其の手を斂めたりしがため、投票を得ること意想外に少數なりしといふ、彼の理想候補と稱する者すら現に數千圓を費し、貧乏を標榜せる者の七八千圓を投じたりしといふを聽け、黄金の威力の幾分にても衰へたるは甚だ祝すべきも、更に全然之を失はしむるに至らしめんとは、心ある者の深く希望する所ならん

東京市民の政黨に冷淡なるとは、實に思料の外にあり、地方に在ては政黨の本部又は支部の節度を遵守して指定されたる候補者に投票する者あり、隨つて假令其の黨の政見施設宜しきを得ず、而して反對の言動最も機に適すと雖も、敢て投票を變易せず、依然として自黨に拘泥する者は、地方到る處に之を視ると雖も、我が東京市民には斯の如き傾向は寸毫も之あらず、市民の最大多數は弱者を扶け、自から弱者劣者たるとを愁訴して叩頭百拜し來るものに投票するを常とし、自家の感情を損するものは、總てを擧げて排斥す、唯だ斯の如きのみ、全く政黨政治を重視せざる也、立憲政治を以て政黨政治なりと做すが如き時代遅れの瞶々者流は、此の市民に對して果して何樣の感がある

（四）

今の內務省當局は、小選擧區を以て費用を要すると甚だ少しと爲し、以て大選擧區を排する理由としたりき、今回の總選擧は、之に對して如何の敎訓を示せしや、當局先づ明白に之を看取するを要す第一に多く費消せし高橋某は、小樽區撰出にして、其の區域最も狹し、而して東京市、京都市、大阪市、若松市、前橋市等に於て總て萬以上を費したるもの多く、通例廣き郡部よりも、狹き市部區部に於て比較的多くの費用を要せるや爭ふべからず、蓋し區域狹くして票數また少きときは、彼我の投票數を豫知して勝敗を察すると甚だ易きが故に、强ひて當撰を欲するものは、幾んど其の手段を擇ばず、買收可也、親戚關係の使用可也、此がため賣買價格を競上げて驚ろくべき高價と爲し（若松市に於ける日下派は最後に一票一百圓を投ぜしといふ）、或は親戚間に悲むべき葛籐を生ずるに至り、競爭の激烈にして慘酷なる、幾んど想像の外に出づ、是れ市又は區の候補者が比較的多くの費用を要せし主因にして、小撰擧區の弊や明白なりとす、事實は何物よりも雄辯也、內務當局夫れ今回の總選擧に悟る莫かる可んや

（五）

概して之をいへば、今回の總撰擧によりて得らるべき敎訓は、第一政黨が甚だ國民に重きを置かれず、未だ政見の良否を以て撰擧の適切なる標準と爲すに至らざる事、第二政友會の專恣なる、早く最も聰明なる帝都の市民に排せられし、事第三黃金の力衰へたりといふも、尙ほ絕滅に至らざる事是れ也、殊に司法官にして法を秉りて公正ならば、選擧界の廓淸の必らずしも望みがたきに非ざる事是れ也、想ふに

政黨に超然たる政府に在ては、政黨に對する遠慮よりして、選擧後に至て犯罪行爲を爬羅し剔抉するとを止めざるを得ざる事情もありしなるべし然れども今や兎も角も政黨內閣を標榜する政府の下に在ては、斯の如き遠慮は寸毫も其の要なく、政黨口癖にする憲政發達のため、選擧界廓淸のため、吾人は司法官の剛直にして公正なる檢擧を待望す、是れ啻だ心ある國民の希圖する所たるに止まらず、又實に現內閣の理想ならん

公論

英米新聞界の趨勢

無名氏

最初に斷つて置くが、全く記憶から話す事て、多少精確を缺くの憾あるかも知れぬ。然し大體に於ては左したる間違はない筈と思ふ。英米新聞界の趨勢といへば、餘りに漠然たる題目のやうてあり、且つ之を解說するにもなか〳〵容易の業てないが、若し煙を見て火の在る所を知り、角を見て牛を察する讀者に取つては、いくらかの暗示を與へぬとも限らぬ。話は先づ米國から始めやう。

▲米國新新聞業

米國の新聞界の黄金時代といへば、先づ南北戰爭の前後から、グラント將軍（General Grant）の大統領となつた時分てあらう。其當時ては新聞界の大立物ホレース、グリーリー（Horace Greely）はトリビユン（Tribune）に據つて殆んど一世を席卷する勢てあつて、終に大統領の候補者とまて競り上げて來た。又紐育（ニューヨーク）サン（New York Sun）に於けるデーナ（Dana）イーヴニング、ポスト（Evening Post）に於けるゴッドキン（Godkin）などの諸大家あつて、眞に無冠の帝王ともいふべき威勢を揮うたのてある。併し乍ら今日に於ては彼等の流風餘韻は殆んど見る形も薄くなり、北米の天地は所謂新新聞業（ニュー、ジヨーナリズム）によつて支配せられて居る。而新新聞とはいふまでもなく、黄色新聞の事てある。而

して其巨魁が紐育ワールド(New York world)の持主で昨年の十月に逝いた普律撒(Pulitzer)であることは敵も味方も異論が無い。固より其以前にも多少其傾向がないでもなかつた。即ち第一世ベンネット(Bennett)の如き、最初より紐育ヘラルド(New York Herald)をば議論の新聞とせずして事實の新聞とし、其事實が穴探し的に、個人的になればなる程最も歡迎して居たのである。そこで紐育ヘラルドは士君子より擯斥せられたが、却て之を奇貨としていよ／＼商賣繁昌の基本としたのである。今日でも其遺業は第二世ベンネットによつて擴大せられ、彼は巴里市の眞中シャンゼリゼーの邸宅より、遙かに本國に在る新聞を指揮して、今尚社運隆々たる一個の新聞として識認せられて居る。倫敦のデーリー、テレグラフ(Daily Telegraph)と協同してリビングストーン(Livingstone)發見の爲めにスタンレー(Stanley)を亞弗利加の內地に派遣したのも此新聞である。併し乍ら所謂新新聞なるものは普氏によつて作り出されたのである。彼は何人であるか、少しく語る必要がある。

▲普律撒氏とは何者ぞ

彼は匈牙利猶太人である。十七歲の時に亞米利加に渡航したのであるが、途中漢堡港に於て泥棒に逢ひ、辛やく船には乘つたが上陸する金さへ持たなかつた。そこで彼は夜中人の知らぬ間に海に飛び込み、泳いで上陸したといふ話がある。それは兎も角も、彼は一靑年として非常なる困難と戰うて亞米利加に到着した事は間違もない事實である。扨それから彼は兵隊にもなつた。或は立坊に類したる眞似をしたり、いろ／＼の窮厄を經たが、フトした事から彼の運命は開けたのである。彼は本來將棋が上手であつた。處が聖路易で彼がごろついて居る間に、一酒肆の奧にて將棋の試合をなし、其地の名人を破つたといふ事が緣になつて、遂に獨逸人の持つて居つた同地の新聞の種取りに雇はれたのである。それからは所謂錐の嚢中に置かれたのであつて、段々頴脫し來たのである、彼はさま／＼の行徑を經て終に聖路易にある新聞を買收し一八八三年には紐育ワ

ールドをゼー、グールド(Jay Gould)より買ひ受けたのてある。當時其新聞は辛やく二萬位の發行紙數て、流石の剛愎なるグールドも其損失の多きに閉口してゐたのてあつたが、彼は之を買ひ受るや否や直ちに新生面を發揮したのてあつた。從來該新聞は金持の機關といふ嫌疑を受けて居つたが、彼の手に入つて以來、金持ても政治家ても、天地間に恐るゝものもなく、憚る處もなく、只言はんと欲する所を言ひ、爲さんと欲する所を爲した。彼は此新聞を手に取つて三日目には忽ち紐育の灣頭に、今尙赫々の光を放つ佛國より寄附したる自由女神像の爲めに、其臺を作るべく寄附金を募つて、忽ち二十萬圓を集めたのてある。彼の仕事は疾風猛雨の如くやつたのてある。彼は亦將さに來らんとする新人物に眼を着け、早くもクリーヴランド(Cleveland)が頭角を露はすべきを察して之を擁護したのてある。彼は或時には十三州に跨つて七十回の選擧演說を自ら試みたのてある。然し其クリーヴランドさへも彼は助くべきに助けて、助くべからざるに助けなかつた。ヴエネヅラ問題について、クリーヴランドが殆んど英國と干戈を交へんとする時に、彼は極力之を攻擊し、終に英米鎬を削らずして終つたのは、彼の力に負ふ所少くはあるまい。彼は新聞は議論許りてなく、又種てあるといふ事をよく知つてゐたのてある、而して當時の新聞が議論も極めて臆病てあり、諸方に氣兼をなし、遠慮をなしつゝあり、種も亦尋常一樣て、新奇を缺き、壯快を缺いて居ることを看破し、飽くまて面白き種を面白く掲ぐることを努めたのてある。彼は何事に對しても What, When, Where, How といふ事を忘れなかつた。そこて彼の新聞は固より繁昌する。從つて彼は富を求めずして富を得たのてある。而して其勉强の結果は一八八七年には全く盲目となつたのてある。けれども彼の働きは寧ろ之からてあるというてもよからう。彼は盲目となつた。けれども彼は一向辟易しない。何處までも其新聞を我思ふ通りに作り、我思ふ通りに使用したのてある。彼は金を儲くるばかりが目的てなく、勢力を作るばかりも目的てなく、更らに其金と勢力とを

彼の信ずる所に用ふるを目的としてゐたのである。此點に於ては彼は尋常一樣の新聞成金と同視することは出來ぬ。彼は盲目となつても自國の事は勿論、世界の事を殆んど知り盡さずには止まなかつた。彼の秘書は彼が如何なる場所に在るも必らず彼に向つて新聞を讀み聞かせた。又彼は如何なる場所に在つても其處よりウオールドの主義政策を指揮し、時には社說を送つたのである。彼は家にある時は其神經の過敏を防ぐ爲めに、中に硝子を籀めた二重壁を作り、其扉の如きも最も手厚くし、成るべくの外間音響の聞えぬやうにした。彼の耳は非常の鋭敏のものであつて、音樂は彼の最も嗜む一つてあつた。彼の旅行する時には、彼の秘書、音樂師、醫者、從僕等は勿論、往馬さへも携へた。彼は盲目ながらも乘馬を廢しなかつた。而して最後の數年は「自由(リバーテー)」(Liberty)と名つくる快遊船(ヨツト)に生活してゐた。之は大洋を乘り切るにも差支ない程のものであつて、彼は其れを家とし、其中にて運動し、其の中にて思索し、其の中にて生息し、而して終に其中にて死んだ。彼が如何に事務に熱心てあつたかは下の如き話て分る。彼が米國の南なる或島にある彼の別莊にて避寒をなしつゝありし時、例によつて彼の秘書は、其地方の新聞雜報を彼に讀み聞かせた。彼は長き鬚ある顏を殆んど胸まで垂れ、手の指を頭髮の眞中に挾み、暖かなる日光と芬深き花氣に醉うて恰かも眠れる如くなりしが、クリーヴランド氏が大藏省證劵二千六百萬弗をモルガン(Morgan)其他のものに賣る旨を何氣なく讀み去つた。や否や彼は勃然として眞直に向き直り、見えぬ眼をくわつと瞠(みひら)き、拳を上げて卓を打ち、如何にも奇怪千萬の事かな。商人は儲くるが目的なればモルガン輩に責はなし、然れども政府が國家の財產を競爭入札に附せずして或個人に賣渡すなどゝは如何にも不正不義である。此儘に拗辨は出來ぬと、直ちに其場所からウオールドに訓令して、反對の氣焰を上げしめた。一事は萬事、何事も此逅りてあつて、彼は地中海の海濱にあつても、又はカールス、パッドの溫泉にあつても、ウォルドの意見議論については常に自ら指導

したのである。今話した事は寧ろ彼の爲めには有利なる材料のみであるが、其半面には隨分辣腕を揮うた事もあるであらう。又紐育ウォルドも黄色新聞といはるる丈けに隨分如何はしい事をした事もある。例へばモルガンとの對話といふ事を出して、盛んに資本家の口より勞働者を攻撃せしめ、翌日は知らぬ顔で之を取消し、又其側に、それについての各新聞の評論を臆面もなく掲載したるが如きは、彼の直接の責任でないかも知れぬが、ウォルドも隨分不謹慎な不埒な遣り方をしたものといはねばなるまい。然し彼は、少くとも彼流義の信念ある男であつた。彼は生前に二百萬圓を新聞學校に寄附し、又死後に二百萬圓を寄附し、兎も角も新聞學校は彼の寄附によつて成立つべく着手せられて居る。

▲新聞王波斯圖氏

けれども所謂新新聞の機運を全く成就したものは、彼の外に他に一人ある。いはゞベンネット一變して普氏となり、普氏一變して波斯圖(Hearst)となつたのである。今少しく波斯圖について語るであらう。彼は加州に於ける成金の息子である。父は加州の拓くるに際して運命を求めに出掛けたもので、鑛山で當り、鐵道で當り、終に元老院議員まで漕ぎ着けた男である。處が彼の息子はハーヴァード大學で何か一寸とした惡戯をして退學せられて歸つて來たから、何か仕事をさせねばならぬに際して、此息子は少しく毛色違ひで、別段財産の分配を望んだのでもなく、却て父爺が厄介としたるエキザミナー(Examiner)といふ新聞を貰ひ受けたのである。扨此少年は受け取るや否や傍若無人に出掛けたのである。父の友人であらうが、同じ富豪仲間であらうが、遠慮會釋もなく勝手次第に論鋒を向けたが爲めに、大評判となつて段々讀者が増加した。之と同時に父の迷惑知るべきのみて、總ての尻は父の方に來たのであるが、それ位で辟易するやうな男でなく、終にやつつけたのである。

▲普氏と波氏との競爭

處が彼の志や小ならずであつて、普氏の成功を察

し、敵の利器を奪つて敵を打つべく自ら紐育に出掛たのが彼の三十三歳の時、即ち一八九五年である。彼はジョルナル（Journal）といふ名もなき新聞を買收し、忽ち之を以てウォールドに戰を挑んだのである。彼の考ではウォールドよりも一層其聲を大にし、ウォールドよりも其色を濃くし、何でも彼でもウォールドに倍する丈けの物を以て、之をウォールドよりも半價で賣る時には決してウォールドにヒケを取る氣遣はないと斷定したのである。而して其通りにやつたのである。彼は競爭は先づ人であると見たから直ちに高給を以てウォールドの記者を買收したのである。けれども普氏もおめ／＼指を啣へて引込む男でない。忽ち又之を取返したのである。然し波氏も又其儘引込む男でない。終に未曾有の高給を以て重ねて之を奪ひ取つたのである。其中の一人は彼の參謀とも賴むブリスベン（Blisbane）である。彼は七年程普氏に使はれ、爾來波氏の右腕となつて居る。波氏の遣り方は普氏よりも不謹愼である。又亂暴である。彼は逆に取つて順に守るといふ所までにも至らない。何處までも逆に取つて逆に行くものである。けれども彼に一つの取るべきは彼の方針は決して空言でない。彼のは The Journalism that Acts 即ち空言の新聞にあらずして實行の新聞である。彼は今日米國を通じて殆んど八箇の新聞の持主であつて、毎日約四百萬人の讀者に向つて號令を傳へて居る。で彼の新聞は俗情に投じ、下民を煽動するが如き嫌はあるが、又金持を恐れず、トラストに反抗し、隨分利益もして居るのである。桑港大震災の時に食料や醫者や其の他の救恤品を急送したのは彼の新聞である。又彼れの新聞なかりせば、紐育の市民は不廉なる氷や不廉なる瓦斯を使用せねばならぬのである。兎も角も彼の新聞は論ずるばかりでなく、論ずる丈けは直ちに之れを行ひ、且つ行はしめんとするのである。彼は一切の道樂がない。普氏は將棋も上手であるし、音樂も好きであるし、又文學にも趣味を持つて、如何なる人に逢うても如何なる話も出來る男である。且つ自己の爲めにするといふ程でもないが、自ら奉ずることも餘り

薄くはない。即ち倫敦に行つて一夜泊りをするにも、旅館の全部を買ひ切るといふやうな事もある。然るに波氏は酒も飲まず、煙草も吹かず、家も平凡な家に住み、生活も平凡の生活をなし、世の中にも成るべく差出がましく顔を出さず、如何にも紳士然たる、新聞とは打つて變つた謹直なる生活をして居るやうに思はるゝ。只普氏が堂々として六呎以上の身の丈けあるが如く、彼も亦六呎二吋の身長で、而かも兩肩張り、胸厚く、若し其顔色が白く、皮膚が濃やかでなかつたらば、恐らくは體術家(アスリート)として通用されたかも知れぬ。兎も角も彼は一個の怪物である。眼は大きく、顎骨強く秀で、口は一文字に結んで居る。其談話もいかにも靜かに力強くある。彼は尙日本年で漸く五十歳であれば今後如何なることをするか。とても此儘で死ぬるものとは思はれぬ。只彼に多しとするは人物を用ふる伎倆である。此點にかけてはなかなか凄い腕を持つて居る。要するに米國の新新聞界は先づ此二人で新紀元を作つたものといつてよからう。

▲黄色新聞の流弊

然し其流弊の甚しさや、隨分話にならぬ事がある。例へば面白き種がなき時には、殊更らに面白さうな話を拵へるなどいふ事は何でもない事である。或通信社が紐育の或醫者と相談の上に仕組んだ狂言などは隨分甚しいものである。それは事實も何にもなきに、わざと或婦人が其醫師の診察場で、醫師の無きを窺ひ、自殺を行はんとする。其處へ醫師が駈けつけて未遂に終つたといふ事を仕組んだ如き人を馬鹿にするも程があるといはねばならぬ。又或役者が紐育に乘り込んだ時に、或新聞記者がいふには、入りも不入りも技藝よりも廣告である。今最もよき廣告はお前の處に俄拵への強盜二人を遣はし、拳銃を放たしめ、それにも屈せずお前が之を追ひ除けたといふ事になれば必らず人氣を惹くるに相違はないから、其仕組をやつてはどうか。別に多額の費用も入らぬ。二百圓も出せば私がやつて見せるといつたが如き、企畫もこゝ至れば實に滑稽以上である。此等は黄色新聞の流弊といつてもよからう。兎

も角も米國の新聞界は先づ此風が吹き荒むものといはねばならぬ。然し廣き米國には今尙イーヴニング、ポストの如き高尙穩健なる新聞もある。現に普氏の如きは此新聞の愛讀者であつた。處が或人が普氏に向つてお前はイーヴニング、ポストを愛讀して居るが、何故自分でさういふ新聞を作らぬかと問うた時に、普氏の答は面白い。私は委員會に出て議論をするのではない。國民を相手に相談するのである。彼の立場は此一言で盡きてゐるのであらう。

▲英國新聞界の風潮

英國はすべての事に於て自國の流儀があつて、容易に他より動かされぬといふ事を誇として居る。殊に新聞の如きは、英國が最も健全に發達した國として、世界唯一のタイムス（Times）を持つて居るといふ自覺は、タイムスを讀まぬものまでにもあつた。けれども事實は決してさうではない。英國の新聞界の變化は變化というてよいやら、革命というてよいやら殆んど見當が附き兼ぬるのである。世界唯一と稱するタイムスさへも、新新聞の狂熱には多少感染したのである。否感染せねば其儘成立は六つかしいのである。タイムスの歷史を語れば煩はしいが、兎も角もタイムスはウォルター家（Walter Family）第四世に至つて其主を代へたのである。其の轉換については訴訟もあつたし、內部には隨分暗鬪もあつたらうし、又込み入つたる事情もあつたらう。兎も角も今日は七百五十萬圓の合資會社となつてウォルター氏が取締役會長の名譽ある位置を占めて居るが、世間は夙に其重もなる持主は、新聞界の成金男ノルスクリッフ卿（Lord Northcliffe）であることを承知して居る。タイムスは愛蘭自治問題について熱心なる格翁（グラッドストーン）の反對者で、終に「パーネリズムと罪惡」（パーネリズム、アンド、クライム）（Parnellism and Crime）といふ長文を揭げ、其中にはパーネル（Parnell）が暗殺者に關係したといふ、同人の眞筆と稱する證據物までも揭げたのである。處がそれは大問題となり、審理の末、其文書が僞物であつたといふ事が證明せられ、タイムスは之が爲めに物質的精神的に少からざる打擊を受けたのである。或はタイムスの總

支配人マクドナルド氏(Macdonald)が其後幾もなく病死したるは、之を苦にしたる故だらうといふ說さへもある。其後タイムスはモーベリー、ベル氏(Moberley Bell)の經營の下にいろ〳〵の新案も出した。或は出版物も出し、豫約法を設け、若くは書籍購賣組合の如きものも設け、いろ〳〵收入の道を計つたのである。處がなか〳〵以て時勢の變遷は、タイムスをして居ながら新聞の王として立たせて置くことが出來ぬやうにしたのである。そこでタイムスの紙面も漸次に變化したのである。今日ではタイムスが嘗つて例のない大いなる字を用い、大いなる題を用ひ、又廣告などにも大いなる挿畫などを挿むことを許したのである。從來は社說に論題を揭ぐることも許されぬ位であつたが、持主が變れば紙面も變り、或人はタイムスの墮落玆に至れるかといふたが、何れにしても時勢の變之をして然らしめたのである。

▲**新新聞の率先者ステッド氏**

英國の新聞界に於て新新聞の率先者は、頃日、タイタニック號の初航海に於て、船と共に海中に沈みたるステッド(Stead)其人であらう。彼は確かに英國に於ける新新聞業の率先者であらう。今彼について些か語る必要がある。彼は大學の教育を受けたものでない。又名門の子でもない。父は英國の地方にある組合教會の牧師である。彼は學校を終へてから直ちに小者として店に傭はれてゐたものであつた。然し彼は子供の時からなか〳〵其位置不相應の志を抱いたもので、何事も自分の思ふ通りにせねば安心せぬといふ男であつた。獨學の傍てそ〳〵新聞にも投書をしてゐたのである。彼の父が嘗て彼に斯くいふた事がある。お前も時偶には宇宙の攝理を神樣の思ふ通りに任せて置いてはどうであらうかと。彼は動もすれば神の仕事にまでも立入つていろ〳〵我思ふやうにやらんとする程の男であつた。彼は二十二才の時に英國の北方の地方新聞ノーザン、エコー(Northern Echo)の主筆に聘せられた。其時恰かも廣翁が東方問題を唱へ、バルカン事件について土耳其の亂暴を攻擊し、土耳古を助けんとせる微(ビーコン)

伯(Beaconsfield)の政府を攻撃したる當時であつて、ステッドも忽ち其急先鋒となつた。それが爲めに彼の名は自由黨の諸名士に知られたのである。彼は一八八〇年モルレー卿(Lord Morley)の下に、パル、マル、ガゼット(Pall Mall Guzotte)の副編輯長となつた。パル、マル、ガゼットの事については、後から話すが、玆には只ステッド其人の事を話して置く。ステッドは何れかといへば自然の子である。モルレー卿は教養ある英國紳士の中に於て最も教養ある一人である。彼は三年の間、モルレー卿の下で隨分手酷く鍛はれたのである。モルレー卿の留守中に、彼が其仕事を假攝したる場合に、彼の書いた社説についてモルレー卿が與へた手紙の中には、お前の失策で、俺の髮の毛が一時に眞白になりはせぬかと思うたといふ手紙もあつて、彼の無鐵砲の遣り口はモルレー卿に迷惑であつたかも知れぬが、機敏なる彼は、モルレー卿の性質を呑み込み、時としてはモルレー卿の筆と思はれたものが却て彼の筆であつたといふ話もある。扨モルレー卿は一八八三年に新聞記者を罷めて、政界に入つて以來、其後六年間は彼の全盛時代である。彼は其間に英國新聞に例のなき訪問、對話を初めた。又挿繪も初めた。其他種々の新案を行うた。之と同時に彼は其淋漓として人を鼓舞する文筆を以て盛んに當世の務を論じたのである。眇たる一夕刊新聞のパル、マル、ガゼットが俄然として政治上に於ける一大勢力となつた。ゴルドン將軍(General Gordon)をカルツムに遣したのも彼である。又英國海軍の弱點を暴露して之を覺醒し之を擴張せしめたのも彼である。彼は又刑法改正論の盛んなる場合に、其目的を達せんが爲めに、自ら少女賣買の事あるといふ事を聞いて之を實驗し、其事を臆面もなく新聞に掲げた。處が其少女賣買なるものは彼に論據を供するが爲めに殊更らに之を作爲したるものであるといふ事が摘發せられ、彼も全く己が手先のものに欺かれた事が分り、其爲めに三ケ月入牢したのである。之が爲めに彼の信用と勢力とは非常なる打撃を蒙つた。然しながら兎に角刑法の改正案は通過したのである。一八八九

年には之をやめ、今日まで繼續して居る所の「評論之評論」(Review of Reviews) を初めた。之れは彼れが自己の意見を天下に發表する演壇であつて、彼は今日まで之を頗る有効に且つ有力に用ひたのである。彼の新聞記者としての第一期は帝國主義の唱導であつた。彼はセシル、ローズ(Cecil Rhodes)の親友であつたのみならず、殆んど彼の皷吹者であつた。處が其第二期には彼は平和論者となり、今日に至るまで彼は平和主義の爲めに奮闘したのである。而して始終を一貫したるは、彼が親露論者である事である。之が爲めに或は彼が露國の廻し者でないかと疑はれた程であつた。若し彼が心理的研究に深入りし、終に廣翁を呼び起して愛蘭自治案を語らしめたり、微伯を作し來つて東方問題を談ぜさせたり、遠隔の精神的感通のみならず、幽明を隔てゝも感通する如きことを信じて、之を盛んに吹聴するが如き事がなかつたならば、彼の政治的社會的勢力は未だしも宏大であつたらうが、彼は之が爲めに或識者には物笑ひの種となり、彼の議論は何となく眞面目でないといふ風に思はるゝやうになつた。けれども彼の新案奇想を有したる事、又彼の筆が一種の氣慨あつて、且つよくいはんと欲する所をいふたる事は、最後までも爭はれぬ一つの勢力であつて常に英國の新聞界に新たなる空氣を注入したのである。然し經營者としては充分の成功を彼に認むることは出來ぬのである。嘗て彼がサー、ジョージ、ニューネス(Sir George Newnes)と提携して「評論之評論」を創刊するや否や、忽ち双方の間に確執が生じた。ニューネスが言ふには、僕と君とは目的が違ふ。君は政府を作つたり顚したり、海軍を強くしたり、國家を大ならしめたりするが目的であり、僕は面白く可笑しく新聞を拵へ、人を喜ばせつゝ金儲をするのが目的である。そこで斯く目的の違ふ以上は銘々の思ふ所を取るがよからうといふて、「評論之評論」は全くステッド一人の經營に歸することになつたが、此雜誌は確かに成功した。然し彼は之にては物足らぬと感じたらしく、理想の日刊新聞を作らんとしたのであるが、思ふやうに參らなかつた。それて

直きに廢めて了つたのである。

▲ノルスクリツフ卿

若し眞の成功者を求むれば、そはノルスクリツフ卿にして、且つ彼は同時に英國に於ける新新聞の實行者である。彼は天性の新聞經營者である。彼は十六歳にして已に記者となり、十七歳の時には二千圓の年俸を得たのである。二十二歳でアンサース(Answers)といふ週刊雜誌を初め、十八ヶ月間に十五萬部の賣高に達せしめた。之が一八八八年である。それから一八九四年には倫敦の夕刊新聞であつたイーヴニング、ニユース(Evening News)を二十五萬圓で買收した。之は今日では倫敦で最も賣行のよき夕刊新聞であるが、彼の手に渡らぬまでは毎凡そ十三年間に二百九十八萬餘圓の損をして、持主も持て餘し、一時は十圓の株が十錢でも二十錢でも買手さへあれば買はれる程であつた。而かも彼れが最も成功したのは一八九六年にデーリー、メール(Daily Mail)を發刊した事である。之れは確かに特色ある新聞である。元來英國の新聞は英國流義で鷹揚である。英國の料理も同樣で、鹽を加へたり、ソースを掛けたり、或は香料を入れたりするは喫者の嗜好一つで、料理人は只性の正しきものを形を毀さず其儘料理して出すといふが本色であるかの如く、半ば未成品の中から、讀者が勝手に我好む所のものを選び取るといふことが英國新聞の流義であつた。處がデーリー、メールは或意味に於ては讀む新聞でなくして見る新聞であつた。一目瞭然直ちに其要領を得る如く書いてある。それと同時に大切なることは殆んど逃さず書いてある。詰り極めて要領を得る新聞であると同時に又最も面白き新聞である。社會種も澤山だし、又出すにつけては人の注意を惹くやうにして出す。之と同時に堂々たる大議論大文章も原稿料を惜まず出す。然しそれとても只專門的冗長でなくして、チヤンと讀者の眼に入るやうにして出す。そこで一言にしていへば幾分薄つぺらの感じはあるが、亞米利加流の新聞の爲めの新聞といふものと、佛蘭西流の精選して仕上げた仕方と、英國流の實質ある正味あるものと、詰り三ケ國

の特徴を併せ兼ねたかの如き趣きがある。そしてそれが半ペンニーの廉價で賣られたのであるから、忽にして新聞社會を風靡したのである。固より餘りに新奇を求めたが爲めに、隨分早まつて誤報を傳へたこともあり、中には嘘吐新聞と批難するものもあり、其批難も多少道理ある批難であるかも知れぬ。併し乍ら一般の讀者には誠に重寶の新聞であつて、終に今日に於ては百萬以上若くは其内外を出すことになつて居る。而して其の新聞の成功からしてハームスウォルス(Harmsworth)は準男爵となり、終に眞の男爵となつて、眇たる當時の一青年は今てはノルスクリッフ卿となり、新貴族として倫敦の交際社會にも幅の利く男となつたのてある。彼が新聞界に如何に有力てあるかは、倫敦に於てはデーリー、メール。デーリー、ミルラー(Daily Mirror)。イーヴニング、ニウスの三新聞の所有者なるのみならず、英國の各都會に幾多の有力なる新聞を有し、且つ事實に於ては殆んどタイムスの持主ともいはるゝ位になつた事ても分る。タイムスは或意味に於ては彼の摸倣者若くは競爭者といふべきピアソン氏(Pearson)の手に入るべかりしも、否な其事は已にタイムス夫自身の紙面にさへ記載せられたるに、如何なる調子にて彼の手に移りたるかは、委しく語るまでもない。恐らくはタイムス總支配人モーブリ、ベルなどの盡力てあつたらう。彼は其儘新らしき組織の下にも總支配人として居たが終に其タイムスの事務室に於いて書簡を認めつゝ昨年卒倒して死んだのてある。ノルスクリッフの新聞の遣り方は波氏程には惡辣でない。然しながら野呂間なる英人の中にあつて最も機敏に働き、他人の油斷をして居る中にドシ／＼新計畫を遂行する手際はなか／＼等閑のものではない。飛行機に拾萬圓の懸賞を掛けたのも彼てある。ニユウフアウンドランドの大いなる森林を買收して、それによつて製紙會社を作り、我製紙會社にて作りたる紙を自己の新聞に供給しつゝあるのも彼てある。彼は一八六五年に生れたれば日計本流義の算て漸く四十八てある。彼の前途はなかなか遠いものてあらう。

▲其他の主なる新聞と記者

彼以外に新聞界の成功者も澤山ある。モーニング、ポスト(Morning Post)、デーリー、テレグラフの如きは嘗て舊式の新聞として知られて居つたが、よく時勢に追随して尚一廉の勢力を張つて居る。特に社會的側に於てはデーリー、テレグラフはノルスクリッフの好敵手であつて、双方日曜の休刊を廢し、無休刊として競爭したる爲めに、一時非常の物論を惹き起し、終にローズベリー卿(Lord Rosebery)の仲裁で、双方共に日曜丈けは休刊することになり、辛やく其始末がついた事がある。

又雜誌記者としても月刊十九世紀雜誌(Nineteenth Century)創立者たるサー、ゼームス、ノールス(Sir James Knowles)の如き、最も必要なる場合に、最も必要なる人に寄稿せしむる魔力を有したる者もあつた。例へていつて見れば對馬海戰の後に東郷大將に對馬海戰に關する寄稿をなさしめ、選擧干渉の後に品川子爵に選擧干渉の顛末を書かしめ、或は西園寺侯に政友會内閣の前途、桂公にポーツマス條約前後の事情を語らしめるといつたやうな風で、中の正味は兎も角も、題目を見る丈けで、人をして魂飛び神躍らしむる如きことを集むるに、非常なる手腕を有つて居つた人もあつた。又サー、ジョールヂ、ニューネスの如く定價五十錢するものを廿五錢で販賣し得るが如き手腕あり、別に何等の物々しき騷ぎもなく、人の知らぬ間に我仕事を擴張し成功するといふが如き人もあつた。それ等を數ふれば數限りもないが、我等はこゝに英國の新聞界に於て最も其歴史の變化に富みたる一を擧げやうと思ふ。そは其新聞の歴史が取りも直さず英國新聞其物の趨勢を語るものなればなりだ。

▲英國新聞界の趨勢を具體的に語る一新聞

そはパー、マー、ガゼットである。之は紳士の爲めに作る紳士的新聞として當初より高尙なる目的を以て出て來りたるもので、最初の主筆はフレデリック、グリーンウード(Frederick Greenwood)である。彼はヴイクトリア朝の後半に於ては傑出せる記者の一人て

あつた。嘗て埃及王が蘇士運河の株を賣却せんとするの噂を聞いた時、時を移さず之を當局者に告げ、當局者を慫慂して之を買收せしめたるは彼であるといふ話である。果して然るや否やは別として、彼はそれ位の見識はあつた男である。彼の輔助者として有力なる文豪記者が少くはなかつた。處が其新聞は持主のスミス氏(Smith)より聟引出としてなるや否やを知らぬが、其聟たるもの丶手に移つた。新持主は本來の自由黨であつた。グリーンウードは保守黨であるが爲めに到底相容れず、そこでグリーンウードは退社をした。退社をすると同時に殆んど總ての社員、校正までも引張つて直ちに其れと同樣なる新聞を作つた、それが即ちセント、ゼームス、ガゼット(St. James Gazette)の起りである。グリーンウードの後に來るべきものは、少くとも彼より以上の記者でなからねばならぬ。そこで今日のモルレー卿、當時のジョン、モルレー(John Morley)を聘したのである。當時のモルレーの俸給は新聞記者として隨分安からぬものであつたと聞く。或は一萬磅といふ說もある。それは兎も角もモルレー卿は已に一代の大家であつた。而かも彼が編輯局に來て見れば、總てのもの殆んど拵へて取つた如くであつて、何とも致し方がなく、當座は紙屑籠から沒書にしたる原稿を引出して、殘りの紙面を埋めたといふ話であるが、其時分はモルレー卿、チエムバーレン(Chamberlain)ヂルク(Dilke)は政界の三人男といはれ、チエムバーレンは內閣に入り、ヂルクは外務次官として政府に立ち、モルレーは記者として野に在り、互に氣脈を通じて、政界に呼號したる爲めに、パー、マー、ガゼットは一つの政治上の勢力となつたのである。處が政治と新聞とは到底兩立せず、孰れかを選ばねばならぬ場合になつて、モルレーは新聞を見捨て丶政治に入つたのである。其後を引繼いだものは、其助筆たりしステッドである。ステッドの事は前にもいふたから繰り返す必要はないが、其助筆としてはミルナー子爵(Viscount Milner).即ち前南阿總督の如きものがあつた。兎に角ステッド

は其編輯局から殆んど英國に號令をしたのである。扨ステッド氏が辭職したるや否や、其あとには助筆てあつたクック(Cook)が襲いた。クックも亦有名なる記者てある。彼は牛津(オックスフォード)てはユニオンの長てあつた。ユニオンの長といへば討論會の長てあつて、其長となるものは往々首相となるのてある。虞翁も其通りてあつた、今日のアスキス(Asquith)も亦さうてあつた。クックはステッド程の妙案新機軸に富んでは居らぬが、其見識は透明てあつて、其筆はモルレー卿程の典雅にして雄健なるには及ばなかつたが、ステッド氏に比ぶれば下女と奥様程の相違はあつた。處が幾もなく又持主が代つた。今度は亞米利加の金持アスター(Astor)の手に歸した。そこてクックは又殆んど編輯局全部を携へてサー、ジョージ、ニューネスの手によつて新たに始めたのが今日の所謂ウエスミンスター、ガゼット(Westminster Gazette)てある。セント、ゼームス、ガゼットは今や夕刊スタンダートと合併して了つた。けれどもウエストミンスター、ガゼットは今日に於ては殆んど自由黨の夕刊新聞として最も有力なる一となつて居る、但しクックが去つて、其あとをスペンダー(Spender)が引受けることになつたが、スペンダーも亦立派なる記者てある。彼の筆には毒もなく熱もない。併し乍ら秋の空の如く澄み渡つて居る。如何なる黨情の激昂したる場合にも彼は離隔的精神を以て、恰かも裁判官の如き立場に在つて諄々として、之を批評し且つ指導するのてある。

話は元に戻つてパー、マー、ガゼットは幾多の變遷を經て、今日はガーヴイン(Garvin)の主宰の下に立つた。我等はガーヴイン其人について語らねばならぬ。

▲現在の最有力の記者

凡そ英國の今日に於て記者として有力なるものは彼れに若くはないのてある。彼も亦別に大學敎育を受けたのてはない。彼は自ら敎育したのてある。嘗て今日のウエストミンスター、ガゼットの主筆スペンダーが或田舍の新聞の主筆てあつた時に、屢々投書したものがあつて、其投書が面白かつたが爲めに、其投書家に

逢ひたいといつて詮索したけれども、とう〳〵出て來なかつた。處があとてそれがガーヴインてあつたといふ事が知れた。そしてガーヴインがいふには其時出て來なかつたのも致し方がない。若し出て來たならば、餘り俺は小供てあるから、其後は俺の投書を掲げぬだらうと思うたといふた。處が今は不思議にも、スペンダーとガーヴインとは殆んど英國に於ける二個の代表的記者として指定せられて居る。現に最近のネーション(Nation)にはマッシンガム(Massingham)が二つの異つた新型の記者として兩人を對照比較して論じて居る。ガルヴインは嘗てパーネル黨てあつたといふ説もある。そして今日彼が帝國主義者となり、非パーネル黨てある事を、其意見を變更したとて攻撃する者もある。然しそれは恐らく酷論てはあるまいか。彼は記者としてはニユーカッスルのジョセフ、コーウエン(Joseph Cowen)の下に働いたのてある。コーウエンは自由黨とはいつてゐたけれども、其實は最も虞翁に迷惑をかけた黨員て、彼はマジニーとも親友てあり、ガリバルヂーとも友人てあり、又心の底ては徴伯も好きてあるし、殊に熱心なる帝國主義者てあつたのてあるが、彼は其の感化の下に記者たる生涯を初めたのてあつた。かくて彼はいろ〳〵の徑路を經たが、終に彼のペンは何れの紙面にも動かざることはなく、彼の論は何れの新聞雜誌にも載らざることなしといふ程になつた。彼が如何に活動家てあるかといふ事は、「隔週評論」(Fortnightly Review)にも投書をなし、「國民評論」(National Review)にも書き、又デーリー、テレグラフの社説も書き、時としてはメールにも載せ、且つ週刊アウールック(Outlook)の記者となり、續いて日曜に發刊するオブサーヴアー(Observer)の主筆となり而して今は終にバーマー、ガゼットを主宰することになつたのである。彼の最も勢力を發揮したの最近數年てあつて、ステッド氏の如きは彼を評して事實上在野黨の首領であるといつた。彼の命令は上院の首領ランスダウン卿(Lord Lansdowne)も、前議院の首領バルフォア(Balfour)も殆んど首を俛れて聞かねばならぬ程であつた。關稅改

革を旗幟としたるも彼である。上院を壓迫して政府の財政案を否決せしめたのも彼である。筆の力若しありとすれば彼程大いなる力を揮つたものはない。實際の政治に其意見が實行せらるゝ點に於ては、タイムスの大記者であつたヂレーン(Delane)でも、到底も彼に及ぶものでない。彼が經營の上に如何なる材能があるか、それは予が知る所でない。されど有力なる論文と、又大事件を敍述する筆力とに於てはノルスクリツフ卿の如きも彼に匹敵するものは、只ウオールドの盲目持主普氏であるといつた。只彼が普氏程の經營の才あるや否やは、今までの處では確められてゐない。寧ろ今後の問題であらう。然し彼の志は新聞經營者としてよりも、筆を劍となし、紙を楯となし、活戰場に臨むにあるかも知れぬ。彼は經濟問題にも通じて居る。關税改革の議論は彼によつて最も有力に唱導せられて居る。彼は獨逸の文學にも通じて居る。彼は只政治的健鬪者てなくして、個人としても多趣味多方面の紳士である。彼はウオルズウオルス(Wordsworth)の嘆美者で野花啼鳥にも其詩情を慰むるの性情を有して居る。然しながら一度筆を握れば、味方に於ては百萬の援兵の如く、敵に於ては一大恐怖である、此人が今日、運命の變化に富んだパーマー、ガゼツトの主宰となつたのも何かの因縁かも知れぬ。

◆新聞經營の困難

最早英米兩國の新聞界の趨勢については其一班を語つたと思ふ。が序に一言したい事がある。それは外ではない。新たなる新聞と作るといふ事がなか／＼容易でないといふ事である。それには一つの例がある。英國の自由黨が廿年も荒野に迷つた後に、未曾有の多數を以て政府を乘り取つた曉、即ち一九〇六年の一月、其機關新聞として發刊せられたのが、トリビユンである。自由黨にもいろ／＼の機關があるが、之は正眞正味幹部の機關として成立したのである。其新聞は、新たに出來た新聞として殆んど申分なき新聞であつた。なか／＼拔目なく作られてあつたのてあつたが、二年の後、忽ち廢刊の報は世の中を驚かしたのである。そ

れは何故であるかといへば引合はぬからである、最初に刷つたのは廿三萬九千部である。併しながら其實際の賣高は辛く五萬五千内外であつた。さうして經常の損耗が毎週一萬圓であつて二ヶ年の後に二百五十萬圓の資本は全部消費し了ひ、其資本全額三百萬圓も殘少くなつた。即ち二ヶ年で三百萬圓を使ひ拾てたのである。一ヶ年に百五十萬圓づゝの損である。如何に有力なる在朝黨にても之で成立つ筈はないのである。此一事は英國の同業者にも多大の警戒を與へたであらう。兎に角新たに新聞を作るといふ事は、何かの風雲に際會するか、何かの特色を持つて居るならば格別、只人の爲す丈けの事をして而かも新聞をして一頭地を出すといふ事はなか／＼困難であることが分る。世の中の素人は、ナニ金さへあれば、新聞は出來ると思うて居るが、ノルスクリップ卿とか普氏などは金があつて新聞が出來たのでなく、人があつて新聞が出來たのである。波氏の如きは最初より金力もあつた。然し彼は金力ばかりではなかつた。兎も角も金も大切だが金より大切なのは人である。新聞記者は製造したるものでなくして成長したるものであるといふ事も亦分る。最も成功したるものは大抵自ら教育したるものである。

▲新聞と群衆心理

敢て結論といふてはないが、只一言申し述べて置きたい事がある。英米兩國を通じて新聞が平民主義の勢力に押されて段々平民的になつて行くといふ事は自然の趨勢である。之と同時に新聞が政黨の機關でもなく、政府の機關でもなく、金持の機關でもなく、殆んど讀者の機關となつたといふ事も爭はれぬ事實である。讀者の機關といつて、別に何とも明白にはいへぬが、そこが所謂群衆心理で、成功したる經營者は其群衆心理を捉へ得たものといはねばならぬ。然し是を捉へるについて、時としては群衆心理と戰ふ程の大決心大勇猛心が無くてはならぬ。輿論は常に廻轉するものであるからして、輿論のあとを追うて行けば、いはば弥り且つ偃るにの外はない。そこで時としては合し、時としては戰ふといふ事は止むを得ぬことである。合したる時は進潮の時で、進んで大いに發展を計り、戰ふ時は退潮の時で、退いて守るの時である。今日では新聞が或力を代表するといふよりも、新聞其物が已に一つの力となつて居る。そこで新聞を操縱して、金力や權力で支配せんと思ふものは、最早や時代後れの考といはねばならぬ。（完）

悲觀論者に問ふ

男爵　後藤新平

世の中には所謂悲觀論者あり、又所謂樂觀論者もあるが、吾輩をしていはしむれば、必らずしも悲觀せなければならぬ理屈がないと仝時に、又是非共樂觀せなければならぬといふ道理もない、極く簡單にいへば詰り人次第の事で、例へば駱駝と驢馬との相違の如きものと思ふ。多數の驢馬が寄り集つて、僅か許りの小荷物についてガヤ〳〵議論をして居る間に、一匹の駱駝は之を背負うて、直ちに遠い砂漠を越して了ふ。世の悲觀論者は概ね駱駝の荷物を議する驢馬の群の如きものであつて、多くは力を缺き、勇氣を缺く所から左樣な論を唱へるのである。然し驢馬と駱駝と別々になつて相反目するといふ事は、日本帝國の爲めに賀すべき事でない。水と食物とを用意して、多數の驢馬を率ゐて、砂漠を越すのは實に駱駝の任と思ふ。

若し議論をいへば双方に相應の理屈はあるであらう。けれども自分の考ふる所では、何でも彼でも樂觀するといふ事は固より弊がある。然し悲觀ばかりして居つては即ち士氣を沮喪せしめる。然るに今日の論壇を見るにどつちかといへば悲觀論を唱ふる者が多く、一般の人士も競うて之に和するが如き傾向あるのは、我豈其可なる所以を知らんのである。今日の日本の如く、國運の發展する時代に於ては悲觀論を唱へた處で、到底之を實行するの途なくして、到頭元の杢阿彌に歸つて了ふてはないか。此一年間の經驗から見ると、悲觀論の利益は果して幾何あつたか。極端の悲觀論の損失は、國家社會が之を荷ふのである。國家社會が荷へば即ち個人も之を荷ふてはないか。悲觀論の爲めに、貨物の生産も又其取引も多少の惡影響を蒙るに相違ない

が、然しそれでも我鐵道收入の金額如何と顧れば、所謂悲觀說の、國家の實况に適したる議論なるや否や我輩甚だ疑なき能はざるものである。

悲觀論の勞力は恰度米價の騰貴に對して鐵道の賃銀を下げれば利益があるだらうと唱へたと仝じ事になりはせんか。又日露戰爭の際に金の指輪や金の盃を潰せば、大いに軍費の助けになると論じたのと仝じ結果になりはせんか。強いて理屈をつければ、金の指輪や盃を潰す位の氣慨があつたから、戰爭に勝利を得たのだと辯護されぬ事はないが、然しそれ丈け辯護すれば、世の中の何事でも悲觀說の効力に歸せざるを得ぬ事になるであらう。此等の連中は法華がお題目を唱へ淨土宗が南無阿彌陀佛を有難がると仝じ事である。然し大乘佛教の趣旨が其處にあるや否やは我輩之を知らんのである。

凡そ國家の運命を考ふるに當つて、如何なる場合にも決して悲觀すべきものなしといふことは出來ぬ。運命は猶氣象の如きもので、靑天白日の時もあり、曇天幽暗の時もあり、或は强風大雨の時もある。而して其時々の場合に處して之を凌ぎ行くの方法は豫め之を考へて置かなければならぬ。今日一般の人は正貨準備が減少することに注目して居るが、之が爲めに外國品を多く買はないやうにするといふ趣旨は惡い事ではない。併しながら買はない事を主義にするといふ事は少し病がある。自分の近來考ふる所によれば、主義即ちイスムスといふ事は結構である。然し主義に凝つて、動きが取れなくなつては病がある。固まり法華まではよいが、焦げ臭くなることはいけぬ。料理も如何によい献立ても焦げ臭くなつてはもう口にすることが出來ぬ。我輩は敢て樂觀論を主張するものではない。悲觀論、緊縮主義もよいが、固まり法華を通り越して、焦げ臭くなることは御免を蒙りたい。是れ獨り我輩一人の迷惑にあらず、實に國家全體の迷惑となることを憂ふるのである。從て正貨準備論なども注意すべき事柄であるには相違ないが、今直きに不換紙幣になるかの如くにいふのは、恰度盛者必滅、會者定離といふ事を

理解し、初めから明日死ぬことに斷定したり、明日離別することに斷定するのと同じ事だらうと思ふ。是等は即ち佛敎信仰といふよりも佛敎中毒である。而して佛敎の趣旨とする所は所謂世間身出世間身の間に中を得ることであらうと思ふ。世にいふ所のペスミスムスに至つては甚だ不健康な議論といはざるを得ない。何故かゝる事をいふかなら、今日の正貨準備が明日に若くは明年に危くなるといふ人が、若し此原則によつて數學的に日本の財政を論究したならば、論者の所謂危險は、啻に今日に始まつた事ではなくして、幾年前にも已に不換紙幣となり、且つ破産しなければならなかつたと思ふ。我輩は數學の專門家でないからよく分らぬけれども、論者の數理を前年に遡つてやれば確かに幾年前に不換紙幣となり又破産してゐなければならぬ筈と思ふ。然るに現在まで不換紙幣ともならず又破産もせざるのに、何故に、現在に限つて左様の極端なる悲觀論を唱へざるべからざるか。過去を支配する數理と將來を支配する數理とは其法則を異にするのであるか。此點所謂悲觀論者に取つて一つの問題であつて我輩は是非之に答辯して貰ひたいものと思ふ。此答辯は一個人の爲めに希望するにあらず、實に國家全體社會全體の爲めに希望するのである。

一體外國品は買はんなどいふ事を一の主義として旗を樹てるといふ事は、どういふ譯か。かういふ旗を樹てゝ、さうして世界の日本として世界に發達して行かうするのは餘りに愚なることではないか。旗を樹てるといふ事も場合により、事情によつては必らずしも惡るい事ではない。以前獨逸などでやつた事もある。然し今日の日本の如くまだ理化學や工業の進歩が世界のそれと伴はぬに方つてそんな事をいつてどうするか。昔、獨逸の行つた時と仝樣の處まで我日本が進歩して居るのであるか。之を對照比較して我國運の進歩茲に至れりと證明して、而して後かゝる旗を樹てゝ貰ひたい。此證明も亦一個人の爲めのみでなく、社會公衆の爲めに我輩の聞かんと欲する所である。

又今の世の中には、外國から金を借りてはならぬと

いふ論もある。之も金を全く借れない事が出來れば誰も批難はしない。然し金を借れゝば破產するから借れぬといふは何事ぞ。之れ殆んど五千萬の國民を瘋癲白痴と侮辱した所の議論といふべきである。何となれば世界の金を借れて之を生產的に運用して行くのが今日の大經濟主義の原理てはないか。高利の金を貸りて、借金の奴隷になることは固より愚である。然し相當の資本家から相當の利子を以て借り、勞働の力を以て、之を生產的に運用し、其元利を拂つて、尙自分の財產を殖やして行くのが、之れ取りも直さず經濟の原則てはないか。個人の經濟然り、國家の經濟然り。然るに國家は生產的事業の爲めにも金を借れていかんといふのはどういふ譯てあるか。吾輩殆んど其解釋に苦むのである。今日の金を借れてはいかぬといふ人の議論は恰度、火打箱て燒味噌を燒き、線香を焚いて蒸汽機關を動さうと企てるのと全樣である。よし線香てなく石油てやるにしても其規模狹少にして殆んど線香を焚くと擇ぶ所がない。而してかゝる議論を歡迎し、之を推奬するはどういふ譯か。我輩は世間有識の士にかゝる人のない事を希望する。若し我輩の有ると見るのが誤解ならば、喜んで其誤解を取消す。我國民が世界の金を自由に使つて、世界て一番之を有効に使つて、一番よく生產力を有する、名譽ある、實力ある國民とならんことを希望する。かゝる能力なきことを自ら宣言し、其宣言に贊成する無氣力、無能力なる國民が多數を占むるならば、之こそ最も悲觀せざるべからざる現象と思ふ。我全胞が果して何れの論に贊成するや、聞きたいものと思ふ。

今より十餘年前臺灣を一億圓て賣るといふ說が行はれた事がある。有識者と目せられたる人にして、全部之に贊成せぬまでも七部通り贊成した人もある。其意見の切拔もある筈であるから、其證據は何時でも上げることが出來る。若し其際に臺灣を賣つて了つたならば今日は如何てあつたらう、今此臺灣なるものは年に六千二百萬の收入があるんぢやないか。此金額を五朱利とすれば殆んど十三億に近い價があるんぢやないか。

而して之は臺灣經營以來十年にして初めて玆に至つたのである。若し今日日本帝國の發展が、殖民政策上若くは拓殖政策上に依賴することが不必要なりといふ人があつて又之が母國に不利益なりといふ人があつて、朝鮮滿洲を賣却して三十億圓を得たならば、日本の公債が丸て無くなるから、直ちに之を賣却しようぢやないかといふたならば、諸君何とするか。矢張り臺灣の一億圓賣却說と全じ事であるか。我輩は其決して然らざることを信ずる。而して其然らざるは是れ十數年間に於ける我國人の進歩を證明するのであつて、我國は今日、全然悲觀論によつて支配されぬ所まで來て居るといふ事を證明するものと思ふ。人動もすれば國債二十億圓といふが、其本心に於ては此位の債務を負ふの自信ある又實際之に堪ふる同胞なることを我輩は確信する。果して此信賴空しからずば、我國は玆に初めて名譽ある一等國に列することが出來るのである。若し然らざれば吾人は到底一等國に列する資格なきものと考へる。悲觀論、樂觀論、吾輩は其何れをも主義とすることを好まぬが、悲觀論に凝り固つて、焦げ臭くなつて居る連中に向つて、以上の數言を費し、敢て其反省を促がすのである。

滿洲問題と支那の將來

文學博士　白鳥庫吉

（一）

滿洲や朝鮮が我國と密接の關係ある地域なることは、我國民中誰も知らぬものがない。然るに此密接の關係ある滿韓に對して、我國人の知識が甚だ缺乏して居るといふことも是れ亦誰も知らぬものがない。朝鮮の如きは我國の歷史の初まりから關係ある國であつ

て、絶えず我國の利害消長にも至大の影響をなし來つたのであるが、我國人は朝鮮の事について、トント知る所がないのであつて、漸やく近頃、統監府が置かれ、併合が行はれてより以來、少しづゝ分つて來たといふに過ぎないのである。然し併合の後とても、未だ根本的に朝鮮を調査して、精確なる知識を得んとするの興味は一般に起つて居らぬやうである。況んや朝鮮の北にある滿洲については、我國人の知識一層淺薄であつて、極言すれば丸で何等の知る所もないといつてもよい位である。然しながら滿洲の地が日本の運命に關係を有することは決して朝鮮に劣らぬのである。何となれば朝鮮に於て我國の勢力を維持し得るや否やは滿洲に於ける我國の對策が其當を得るや否やによつて決せられるのであつて、廣くいへば、東洋の平和が維持せらるゝや否やも實に此滿洲問題によつて決せらるゝといつてもよいのである。かゝる重大なる關係を有して居る滿洲について我國人の知識が甚だ淺薄であるといふ事は大いに憂ふべきことゝ思ふ。

一體滿洲といふものは、如何なる物を產し、如何なる人種がゐて、如何なる風俗習慣を有し、又如何なる歷史からして現在のやうになつたか。此等各種の方面から根本的に滿洲を研究し、其實際を知悉せんとするの志が各種の階級に起らざるべからざる筈であるのに、少しもかゝる傾向を認むることが出來ないのは、是れ啻に我學界に於ける一の缺點なるのみならず、又實に我國民性の一の大缺點と考へる。兎角日本人は何事をするにも物を根本的に調べて其結果を實地に應用するといふ習慣が無い。之が未だ歐米人に及ばざる原因であつて、心ある人の慨嘆せざるを得ぬ所である。

凡そ世の中の事て、偶然に起つたものはないのである。現在は過去の連續であつて、現在をよく知るには必らず過去を知らなくてはならぬ。未來をよく知るには過去と現在とを調べなくてはならぬ。此道理は何事に對しても同一であつて、滿洲の現時に於ける施設を完全にやらうとするにはどうしても過去に遡つて、滿洲といふものを根本的に調べた上でなければならぬ。

又將來に對する實際上の劃策をなすについても、過去と現在との滿洲を研究して、而して後初めて百年の大計を定むることが出來やうと思ふ。

一體日本人は現在の事については深い興味を有つ人民で、現在の事の中でも實利實益、特に目前の實利實益に對しては非常に深い興味を有つ人民であるけれども、利益の眼前に見えぬ事や、少し時代の古い事になると、よし其事が百年の利害に關することであつても、現時と全く緣なきものとして、之を閑却するの癖がある。故に歷史などゝいふものは、一の骨董品、娯樂品若くは裝飾品の如く心得て、歷史の活きた敎訓によつて現在の事物を根抵的に處理して行くといふ事を解しない。此點は西洋人と日本人との物事に對する觀察の異ふ所であつて、西洋の文明を採用しても多くは皮相に流れ、其文明の眞髓に達し得ぬ所以であらうと思ふ。或西洋人は日本人を惡口して half civilized barbarians といつたのは、勿論惡口には相違ないが、其惡口の半面には確かに日本人の考へなければならぬものを含んで居ると思ふ。

自分は歷史家の立場からして滿洲といふものゝ過去に遡つて、滿洲の今日に至りたる理由を述べやうと思ふが、世人の中には矢張り、一種の骨董扱ひ、若くは道樂扱ひにするものがあるかも知れぬけれども、然しながら見樣によつては、又滿洲の現狀を知り且つ將來の劃策をなすについて、利益あるべきを信ずる。

（二）

何人も知るが如くに、滿洲といふものは今日一種奇妙な狀態になつて居る地域であつて、其主權はいふまでもなく支那にある。けれども、然し支那は十分此地域に權力を振つて居る譯ではなく、北に於ては露西亞が鐵道を布き、南に於ては日本が鐵道を布き、若し此日露といふものが、かゝる一種特別の利權を有して居らぬならば、此地域は全く馬賊の巢窟となるべき運命を有して居るのである。而して滿洲が支那と露西亞と日本との間に、今日の如き一種奇妙なる關係にあるといふことは、即ち前三國の此地域に於ける勢力の衝點

になつて居る結果であつて、之は深く研究して見なければならぬ問題と考へる。

滿洲が今日かゝる奇妙なる狀態にあるといふことが、若し幻の如き一時の現象であつて、何時か忽ち消えて亡くなるものであるとすれば左程研究する價値が無いかも知れぬ。然し若し此現象が、ずつと前に芽を出して居た木が、段々に生長して、幹も太り、枝も蔓らしたといふやうに、歷史上に深き根抵を有して居るものとすれば今日の現狀をよく了解するには是非共之を歷史上の事實によつて證明する必要があると思ふ。

私の研究したる結果によれば、滿洲が今日の狀態にあることは決して一時の現象でない。是は滿洲が芽を出してから、即ち滿洲の歷史の初まりから引續いて居る所の現象であつて、既に二三千年の昔からして同一の理由で、同一の現象があらはれて居るのである。して見れば今後と雖も、此狀態、此關係といふものは容易に變らぬものと見なくてはならぬ。然らば何故さういふ狀態になつて居るかといふ事は、當局の政治家及び實業家の心得て置くべきこととして、所謂滿洲問題を解決する際の如きは、最も此事を心に入れて置く必要があると信ずるのである。

今を去ること凡そ二千一百年前、秦末漢初の時代—即ち漢の高祖の時代に方つては、漢の勢力は鴨綠江の下流域まで及んで居つたのであつて、鴨綠江南、今の朝鮮の西北部即ち平安道、黃海道、京畿道の大部分は箕氏の朝鮮であつたのである。箕氏の朝鮮は即ち箕子の建てた國であつて、箕子は支那人であるけれども、朝鮮に於て漢より獨立したる所の一國家を建てたのである。其時一方に於ては、遼西及び遼東の塞外から鴨綠江、圖們江、及び南の方は朝鮮の分水嶺を堺として今の咸鏡道、江原道に至るまで穢、貊といふ種族が據つて居つたのである。後の高句麗といふ大勢力は此穢、貊の中から現はれたのである。そこで此時代には遼東遼西に於ては前漢の勢力、朝鮮の西北部に於ては箕氏の朝鮮、それより東の方には穢、貊と、斯う三つの勢力があつて其三つの勢力が、鴨綠江の下流域で衝突する

ことになつた。滿洲及び朝鮮の東北に據つた穢貊は流に沿うて鴨綠江の河口に出て、南に下つては箕氏の朝鮮、北に上つては漢の領土に入らうとし、それを漢も防ぎ、朝鮮も防がうとし、又漢も朝鮮も互に相侵さんとするのであるからして、此鴨綠江の下流域は三ヶ國の衝突點即ち紛爭地となつたのである。即ち漢の高祖の初めには鴨綠江より南、日本の里數にして八里、當時の支那の里數にすれば百里の地――尙具體的にいへば今の龍川、義州の邊は三國衝突の結果何れの國も入ることが出來ず空地となつて了つたのである。史記などに秦の故の空地いふ字句があるが、空地は或は間空地ともいひ、全く主のない土地の事で、朝鮮も、漢も、穢貊も此處には手を着けることが出來なかつたのである。間空地は無論荒蕪地とは其意味を異にし、假令其土地が農饒であつても、三ヶ國の其地域に及ぼす競爭的勢力が平均するので、何れの國も其主權を及ぼすことが出來ぬ所を指すのであつて、若し其處に據るもののありとすれば、馬賊位のもので、定まつた主權のない土地を指すのである。而して此間空地が二千百年前に於て已に此鴨綠江の下流域にあらはれたといふとが、史記並びに漢書に見えて居るのである。

それから漢の武帝の時代になつては、漢の勢力がずつど南の方まで入つて來て、一時漢江の流域にまで及んだ事がある。然し漢江の流域は之を防禦するに困難であつたが爲めに後漢の時代になつては之を捨てゝ、黃海道の北部から今の平安南道の處を領して、玆に漢民族の郡縣を置いた事がある。其時分には穢貊が矢張り江原道の南端にまで及び、それより南には日本でいふ三韓即ち馬韓、弁韓、辰韓が據つて居つたのである。さういふ譯で、前漢の初めに鴨綠江の下流域に現はれたやうな現象が、後漢の末になると、漢江の流域にあらはれたのである。即ち今の京城の邊一帶は農饒な土地であるに拘らず、後漢と三韓と穢貊の三國の勢力の衝突からして間空地となつて居つたのである。さういふ具合に、三ヶ國の勢力が或地方に於て衝突し、而かも其勢力が其地方て平均すれば、其地が何時も間空地

となるといふのが歷史上のテオリーである。

それから後漢から三國、晉、南北朝、隋、唐となつたのであるが、隋の煬帝の時には高句麗征伐が初まり、又唐の太宗の時にも高句麗征伐をやつた。けれども此高句麗といふものはなか〳〵强大なものであつて、どうしても之を滅ぼすことが出來なかつた。然らば高句麗は何處に據つて居つたかといへば、朝鮮の北部から今の日本の勢力範圍なる南滿洲を領して居つたのである。隋の煬帝、唐の太宗がいくら之を征伐しても高句麗は之を擊退する力を有して居つたのである。

處が太宗の次の高宗――之は恰度日本の天智天皇と戰爭をした人であるが――此高宗の時代には朝鮮の南半は高麗と百濟(本の馬韓)と新羅(元の辰韓)の三國に別れ、遼東、遼西の塞外から今の吉林省一帶にかけては、靺鞨或は肅愼といふ古の穢貊の一種で、今の滿洲人の祖先なる渤海といふツングース人が居つたのである。そこで唐では新羅と同盟して今の忠淸道に據つた所の百濟を滅ぼし、又朝鮮の北部並に遼東に據つた所の高句麗を滅ぼろして、悉く唐の郡縣となして了つたのである。そこで南には僅かに新羅一國即ち今の慶尙道だけが命脈を保つて居つたのであるが、然し唐は武氏韋氏の二皇后によつて――即ち武韋の亂によつて著しく其勢力を失墜したが爲めに、朝鮮に於ける勢力も昔日の如くならず、高宗が高麗百濟を治める爲めに今の平壤に置いた安東都護府といふものも、其處に置くことが出來ず、遂に遼東に引込まして了つたのである。そこで鴨綠江以南大同江に至るまでの地面といふものは、名義に於ては唐の領地であるけれども、唐の實勢力が玆に及ばず、全く無所屬の空地となつたのである。之は即ち新羅が唐の衰へたるに乘じ、唐の郡縣であつた處の高麗百濟の地面を略して大同江の處まで擴がつたのであるが、一方には前に言つた渤海があり、遼東には唐の勢力があるので、矢張り此三ヶ國の勢力均衡したが爲めに、此廣い閒空地が出來たのである。

（三）

唐からして五代以後になると、東洋の形勢殆ど一變

して、漢民族の勢力は、全く北方民族の爲めに壓倒せられ、其結果として北方民族が支那に入つて、黄河の流域を占領することになつたのである。之は支那の歴史が初まつてから初めての事であつて、五代から宋にかけては契丹即ち遼（Mongol）が出て、其次には女眞即ち金（Mandju）其次には蒙古即ち元（Mongol）などいふものが現はれて漢民族を壓倒することになつたのである。前にもいつた通り、間空地といふものは其地域に於ける三ケ國の勢力の均衡した時に起るもので、其の國の絶對の勢力の均衡したのをいふのではない。例へば唐と渤海と新羅とは其絶對の勢力に於ては固より非常の相違があつて、到底比較になるものではないけれども、只鴨綠江から大同江邊にかけての地域に及ぶ三國の勢力が均衡するが爲めに、此處に間空地を生ずるのであるからして、遼とか、金とか、元とかいふ北方或は東方から起つた勢力が南方支那を抑壓して了ふことになれば（勿論遼と金とは支那全土を支配したのではなく、黄河の流域の眞中から下流を支配したものであるけれども其根據は矢張り東方に有して居る。）滿韓方面に於て相接觸する勢力は只二つに限られて了ふからして、間空地といふものが起り得ないのである。即ち鴨綠江の下流域から咸鏡道の南部にかけての土地が高麗と遼との境であり、又同時に高麗と金との境であつて、此兩方の國は何れも勢力の中心點を東方に有して居つたが爲めに其間に間空地が起ることが出來ず、直ちに其領土を接近せしめて居つたのである。況んや蒙古即ち元の如き支那の北方及び南方はいふに及ばず、歐羅巴に於ては露西亞の大半を支配するといふ大帝國が起るに及んでは無論其間に間空地などを容る餘地がなかつたのである。此時分の蒙古と高麗との境は咸鏡道の南部から黄河道の北部、恰度大同江の河口から少し南の慈悲嶺であつたのであるが、要するに間空地は三つの勢力が或地域に於てバランスを得た時でなければ起るものでないのである。

併しながら明末になつて、明の勢力が衰へた時に、蒙古民族の勢力が遼河の下流まで入つて來ると、吉林

省の邊には女眞が居つて、又三勢力の平均を得、鴨綠江の上流域に間空地があらはれたのであつた。

明がいよ／＼滅びて、清朝の頃となると、清の勢力が段々大きくなるに從つて、間空地も亦從つて其區域を廣めたのである。何故なれば、元來清朝は漢民族にとつては外國人であるからして、支那の主人公たりし漢民族を征服しても、之を支配し鎭撫するといふ事夫自身が既に大なる負擔である。加之康熙帝の時分からして露西亞の勢力が已に黑龍江邊にあらはれて、追々に興安嶺以南の地を略し、終には松花江の流域にまで進み、滿洲の本地今の南滿洲まで突進し來らんとする勢を示した。南に於て漢民族を治むるに大いに手古摺つて居る清朝は、更らに北に於て露西亞といふ大敵を持つことになつたからして、朝鮮の方面に於て成るべく事勿れ主義を採るのは勢ひの自然である。此時の朝鮮は李氏の朝鮮であるが、そこで又露西亞と清朝と、朝鮮と、此三つの勢力がバランスを得ることになつたのである。露西亞の勢力は固より本國に於ては強大であるけれども極東にあらはれたる勢力の程度は、朝鮮及び清朝の此方面の勢力と相匹敵したのである。此關係よりして長白山を元として、東に於ては圖們江の流域殊に其北部ブラハト河並にハイラン河の流域、西南に於ては鴨綠江の全流域殊に其北部がニユートラル、ゾン即ち中立地帶となつたのである、之を朝鮮の方では間島といふのであるが、後になつて鴨綠江の流域に於ける間島即ち間空地は支那人が之を領することになつたが、圖們江の方面に於けるものは、依然として康熙帝以前の儘であつて支那人も朝鮮人も共に其主權を有して居らなかつたものだから、先年支那との間に屢々交渉を重ねた間島問題が起つた次第である。

（四）

然るに日本の勢力は極東の方面に於て漸次に伸長し日清戰爭に於ては朝鮮に於ける清國の勢力を引込ましたけれども、清國の勢力を引込ませると同時に、露西亞の勢力といふものが現れて來て、日本は其目的を遂することが出來なかつた。仍て終に日露戰爭をやつて、

勝つた爲めに、朝鮮は我國に併合して了ふことが出來又南滿洲に於ても一種の利權を得、所謂滿洲即ち支那の東三省の地といふものは劈頭にいつたやうな一種奇妙なる狀態に置かるゝことになつたのである。此一種奇妙なる狀態が、私が歷史上の事實を擧げて述べた所の間空地狀態――即ちニユートラル、ゾンであつて、只世の文明が進んだからして、此地面を間空地として馬賊の巢窟に委することをせず、支那は主權を持ち、露西亞は北に鐵道を持ち、南には日本が鐵道を持つといふことにして居るのである。然しながらかゝる一種變挺なる狀態にあるといふ理由は全く間空地のテオリーによるものであつて、昔の漢の高宗時代に鴨綠江南義州龍川に胚胎した空地が芽となつて、今日まで及んだのであつて、滿洲といふ大きな間空地のあるのは、即ち、此處を紛爭點とせる露西亞も支那も、日本も、共に大いなる勢力なるが爲めである。此方面に於ける支那自身の力は勿論弱いものであるけれども、然し其背後には、南方に勢力を有する英吉利などいふものがあつて、以て日露の勢力と均衡して居るのである。

滿洲の今日の狀態は以上の歷史上の理由から來て居るのであるが、元來今の滿洲といふものは二つの地域に分るゝものである。今日本の勢力が入つて居る所の南滿洲といふものは、由來支那のものであつたけれども支那の振はぬ時代には、朝鮮半島に據つた所の勢力が之を所有する狀態を呈した經驗がある。即ち高麗が朝鮮に勢力を得た時には、遼東の地は高麗の支配下に立つたのである。又今の北滿洲の地は、古より露西亞の今日に於ける地位を得た所の北方民族の所有地であつたのであつて、現今日露間の鐵道の連絡點となつて居る長春近傍までは確かに昔高句麗國の有して居つた土地である。それ故に今日日本と露西亞とが長春近傍を境として滿洲の地を二分して居るといふ事は、今日始まつた現象ではなくして、今を距ること千二百年前の高句麗時代にあらはれたと同一の現象である。夫れ故に若し日露兩國が、互に其範圍を犯して、北なるものが南に出て、南なる者が北に出づる日に當つては

茲に其權力の平均を破ることになつて大いに憂慮すべき結果を生ぜずとも限らない。私は現狀維持といふとが最も此方面の平和を永うする所以だと考へて居る。

（五）

滿洲が今日の如き狀態になつて居る理由は、以上述べた處で略ぼ明かであらうと思ふが、今回の支那の革命後、滿洲問題が果して如何になるべきかは又一つの大きな問題であつて此事を知るには是非共先づ支那の將來は如何といふ事からして論究しなくてはならぬ。

今回の支那の革命は固より東洋に於ける一大事件であつて、其結果の如何は特に我國の利害休戚に大關係のあることであるからして、我國人も亦其成行について深く注意し、其落つく先きについていろ〳〵見解を下して居るやうであるが、私の見た所では今回の革命は、支那四千年の歷史に曾て例を見ざる新思想の所產であつて、支那といふ國が初めて世界の一國として、世界に存立して行かねばならぬといふ自覺心から起つたものと思ふ。此事は昨年十二月の本誌に委しく述べて置いたから、今改めていはぬが、要するに西洋乃至日本の新思想を呼吸したものが、初めて支那の世界に於ける地位を自覺し、支那といふ一國が世界の列强と對立して行くには今までのやうな事ではいけぬと、迷夢を破つた所にあることは毫も疑を容るゝの餘地がない。勿論其中には個人的の權力や名譽に渴した奴もあらうし、又陰謀や叛亂を好んだ奴もあらう。然しながら夫等の連中と雖も此大勢を利用するにあらざれば何もなすことは出來ぬのである。

今回の支那の革命は世界の大勢より割出した新思想の發現であることは疑なしとして、扨、此大勢を了解し新思想を懷抱して居るものが、支那三四億の民衆中何程あるかといふに、それは實に數ふるに足らぬ程僅かなものである。ワイ〳〵革命に贊成したものは決して、改革の原因に贊したものではなく、只革命が成就すれば、世は堯舜時代の如き理想世界となつて、租稅は丸で取られなくなるといふ思想から贊成して居るのである。然し支那が革命をして、革命本來の目的を達

して近世的國家を形成する爲めには、今後鐵道も布かなければならぬ、軍艦も拵へなければならぬし、教育事業をも普及せしめねばならぬ、而して其等の事業を遂行するについては何れも金の要ることとて、其金を作る爲めにはどうしても税を取らなければならぬのである。税を取らずに國家に必要なる施設をして、世界の列强と肩を並べて行くといふ事はどうしても不可能の事である。處が支那の大多數の人民といふものは、革命をすれば税が取られないと信じて革命に贊成したのてあるからして今までよりも更らに多くの税を取るといふが如きことになれば、非常の惡政暴政と思ひ込むのであるから、袁世凱初め今日の局に當るものが、何れも困難して居るのてあつて、借欵問題といふものもつまり政府て金が要るけれども、人民からは税が取られないといふ所から起つたものに外ならのてある。

一國の政治を爲すに方ては金が要る、其金は税として人民から取立てねばならぬ事は分り切つた話てあるのに、何故支那人には其道理が分らぬかといふに、之には深い歴史的の理由のあることとて、一言にいへば儒教の然らしめた所てある。儒教が三千年來支那の道德政治を支配したものてあることは、何人も知らぬものはないが、其儒教は實に人民から税を取らぬのを理想として居るのてある。

私は近來「書經論」をやつて、儒教は實に春秋戰國の時に作られた教てあつて、堯舜の如きは、其當時の人が理想の人物として描き出したものに過ぎぬとして堯典、舜典を抹殺した。之は酷く漢學先生の怒を買つて今尙攻擊されて居るのてあるが、然し私の考では當時の人が理想として堯舜の如きものを作つたといふ事は堯舜といふ人物が實在したよりも却て堯舜的人物を崇拜する思想の激しかつた證據と思ふのてあるが、その論は今は別として、兎に角儒教といふものは春秋戰國時代に出來たものてある。儒教の主旨を簡單にいへば一國の君主即ち天子なるものは天の子てあつて、天自身が此地上の萬物を愛撫するが如く、少しも人民を損はず、萬民をして各々其處を得せしめなくてはならぬ

といふのであつて、極端に人民を擁護する所の、いはゞ一種の民主的道德的憲法である。

かゝる儒教が何故に春秋戰國時代に出來たかといふに、支那は春秋戰國時代に至るまではユニバーサリズムであつたけれども、此時代に至つては全くナショナリズムに變つて、七國十二雄各々盛んに富國强兵を主張して、人民から多くの税を取つて、民の塗炭に困むるを少しも顧みなかつた。其結果民力が殆んど疲弊し盡した其反動として一種の理想的道德を抱くに至り其が大成されて儒教といふ者になつたのであると思ふ。

それで此儒教では何でも民を劬はり、民を富まし、民を損はぬことを理想としたものて、それには一點の私心を挾まず、總て天の心を體して天に從ふものを聖人としたのである。それで舜に位を讓つた堯、禹に位を讓つた所の舜を理想的君主として尊崇し、秦始皇の如く、自分は始皇（第一代）て、自分より二代、三代、而して百代も千代も自分の子孫を天子にしやうとした所のものを暴君と見做したのてある。それてあるから支那に於てはいくら人民に利益ある事業でも、人民から税を取つて經營するやうな事は惡事として居る。例へば萬里の長城の如きものでも、確かに當時の支那の國防に必要なものであり、又運河の如きものも民福を增進するに必要なものであるけれども、税を取つてかゝる工事を起すことは皆惡事て、之を爲したものは暴君とせられて居る。官吏が其地位品格を保つ費用に充てる爲めに、蔭では巨額の賄賂を取つても、面向きの俸給の安いのも、兵隊には多く囚徒や不良少年などを使つて、一種の廢物利用の如きことをするのも、皆民を損はぬといふ思想から來て居る。それてあるから支那の天子はどうしても此思想に逆らうことが出來ず。漢の武帝の時に至つて董仲舒の言を容れて儒教と政治とを結び付けて、一種の民主的政治を行ふことが出來其爲めに一種特有の文化の華が咲いて以つて、今日まて及んだのてある。

儒教は今日までの支那の大原動力てあつて、此教は確かに支那にとつて利益あるものてあつた。然しながら其理想は民を害はぬといふのてあるからして、善政といふものは税を取らぬことてあるといふ思想は牢と

して扱くべからざるものとなり、其爲めに今日の政府も大いに弱つて居るのである。其れで今後支那がどうなるかといふことは固より疑問であるけれども、革命の眞の良き結果を得るには、どうしても、國家を盛大ならしめるには税を收めなくてはならぬといふ思想が行亙るまで待たねばならぬのであつて、私は之は主として時日(タイム)の問題であらうと思つて居る。

（六）

支那の革命の結果は、時日(タイム)の問題であるといつたが然らば其時日(タイム)は如何にして來るかといふに、之はどうも今後外國の壓迫が益々加つて、遂に蒙古も取られる西藏も取られる、滿洲も取られるといふ事になつて、ウカ／＼すると支那本部も危くなるといふ所まで行かなければ六つかしくないかと思ふ。かゝる所まで壓迫が行けば、支那も本當に固まつて、どうしても税をかけなくてはならぬといふ事を本當に自覺するやうになるだらうと思ふ。何處で固まるかといふに、十八省で固るのである。斯く支那が固まれば今の滿洲に於て矢張り日露と支那の三國が相對峙することになつて、滿洲は矢張り今日と同じ原理の下に支配せらるゝてあらう。若し又支那がかく固まる前に列國――英米佛獨等に分割せらるゝものと假定すれば、此等の列國が互に相爭うては到底北方に於ける露西亞の勢力に對抗することは出來ない。何となれば露西亞は大陸の地續きであつて、且つ根據を北方に持つて居るのであるからして、支那を制するに最も便利の地位に立つものであつて、他の列國が相反目しては共に倒るゝの外はいのである。恰度七國時代の秦對六國の關係であつて、蘇張が書策した如く他の六國――即ち英米佛獨等が合縱連衡して、秦即ち露西亞に當らなければならぬことになる。然らば矢張り同じく、露西亞と英米佛獨と日本と三つの勢力が衝突することになつて。滿洲方面に於ける間空地の原理は依然として存すると考へらるゝ。

然らば即ち支那が固つて鞏固なる一國となつても、或は列國に分割せらるゝものと假定するも、其支那一國若くは列國勢力と、露西亞と日本との勢力の衝突點は必らず極東の一角に出現すべきものであつて、此事は東洋歴史の初まりに鴨綠江南にあらはれた間空地と同一の原理であるからして、政治家及び實業家なども只目前の事實をのみ視ずして、遠く眼を歴史に曝らし決して將來の劃策を誤らぬやう希望するのである。

（完）

同盟罷業問題

現在に處すべき最善の政策

法學博士 田中穗積

一、雇主被雇人の關係と同盟罷業

一體同盟罷業を叛逆若くは內亂と同一視し、强壓を加へるは何れの國でも昔はやつたものだ、近く我電車の同盟罷業問題に對する檢事の論告も同一筆法に出て居るのは、必ずしも怪むには足らぬ、けれども今日は歐洲の先進國では左る古めかしい思想を抱き居るものがなくなつた。只露西亞だけが慥か同盟罷業を公認して居らず、勞働紛議に對し、多數の勞働者が一致の行動を取るをば犯罪者として處分する樣だけれど、是は他の歐洲諸國にはない事である、勿論同盟罷業は企業家側から見て恐るゝには相違はなけれど、困るものは只企業家のみでなく、同盟罷業者その者が第一番に困る、加之今日の如き經濟組織の下に於ては又一般消費者が困る、のみならず場合によつては廣く社會上、色々の方面に迄も打擊を與ふるから、其避く可きは言ふ迄もない。が今日の如き經濟組織の下に在つては避け樣とて十分には避け得られぬ。即ち如何に强壓的に抑え樣とするも不可能である。何となれば昔の如く、雇主、被雇人が主從關係で、被雇人即ち勞働者なるものは、企業家の爲なり唯命維從ひ、漸く口を糊する丈の報酬に對して自己の勞力を提供し、而かも之を宿命の如くに考へ居るならば、隨分强壓を加へて濟むでもあらうけれども。我國の今日は敎育の發達を圖り、西洋と比

肩すべく勉むるのであるが、教育が盛になれば各自の自覺が開ける、自覺が開ければ如何しても是迄の如き主從關係は自から敗れなければならぬ、雇者被雇者が主從關係で結付いて居る場合には、雇主は只勞働者を目し、氣の毒のものだ、憐れのものだ、可愛相だから出來る丈扶助提撕を與ふるといふ丈で凡てが恩惠的である、少しも被雇人に對して同一人格を與うるてない、それに對して勞働者にも亦人格の自覺がなく、甘んじて器械の如く遣はれるから兩者の關係は無事に納まつて行くのだけれども、一度び人格の自覺が開けると左樣はいかぬ、我等は勞力を賣らねば生活が出來ぬ、それ故賣ることを敢てする。雇主は勞力を買はねば企業が出來ぬ。それ故買ふ事を肯てする。即ち雇主は勞力を買ひて賃銀を拂ひ、被雇人は勞力を賣つて賃銀を取るといふので、普通の取引に過ぎぬ。雇用契約に依つて取引が行はれる丈である。何も企業家が金持ちてある故を以て勞働者がそれに服從すべきだといふ理合の者てない事が分つて來ると、此方から勞働を賣るに就いて希求する丈の代價を拂はなければ賣らぬといふ、それは當然の事と言はねばならぬ。雇主が勞力を要せぬ時には勞働者を解雇するてあらう。然るに被雇人の方では如何に安い賃銀でも甘んじて働くといふ道理はない。一方に雇主が不必要の時には勞働者を解雇するの自由を認めながら、一方勞働者が雇主に對して勞力を賣らざる權利を拒否せるのは、國家の正義の原則に背反する譯である。普通教育を盛にし人格に對する自覺を起さしむることに努めながら、昔の主從關係を飽までも維持せんと努め同盟罷業を叛逆と同一視し威力を以て強壓せんとんるものは甚しき矛盾の政策てある。斯の如くんば寧ろ普通教育の發達を圖らぬが宜い。國民を愚にして昔乍らの雇者被雇者の關係を維持するが宜い。けれどもそれては國家の獨立發展が出來なくなるてあらう。

二、勞働團體と同業組合の必要

今や政府は全力を擧げて教育の發達普及に努力しつゝある事情の下に於て雇主の自由そのみ認めて被雇人

は依然只命維從へといふ事は、所詮言ふべくして行はれぬ事に相違ない。如何に政府が是に對して强壓を加ふるとも、同盟罷業は益々續出するであらう。殷鑑は遠からず各國の例に在る。初の中は强壓を加へんとしたけれども遂に抑え切れぬ、て初めて雇主被雇人に對しての處置の根本に間違つた事が判つて來た。日本は再び西洋の覆轍を踏むべきでない。所謂採長補短を爲すべきである。外國で初に間違つて段々に好くして來た實例が眼前に在る。强壓を用ふる事の不可は判り切つて居るから、左樣な時代後れの事をして紛爭すべきでない。

勞働紛議の避くべからざる勢にして而かも甚だ悲むべき事なるは已に前述した如くである。何等か正當の方法によつて出來る丈其起らぬ前に豫防する事が必要と信ずる。それには如何にするも立派な勞働團體が出來なければならぬ。それを又政府が是認する事とならなければならぬ。凡そ此勞働紛議を平和的に解決する手段は、和解。仲裁。即ちコンシリエーション若くはアービトレーションに依るより外に仕方はない。此和解若くは仲裁は私設の機關に由るか但しは官設の機關に由るか、或は其裁決を任意的のものにするか、或は强制的にするか、是等が又問題であらうが、兎に角一方に立派な規律節制のある勞働團體の存在すると同時に他方に又企業家側の同業組合がなければならぬ。是等がなければ到底仲裁も和解も有効に行ふ事は出來ぬのである。即ち一般社會の共に苦しむ同盟罷業を豫防するには、此二の團體の設立が今日最先の急務である。從來政府は同業組合なるものを獎勵して居るがそれは西洋の同業組合なるものとは大に違ふ。日本のそれは、兎角我邦の貿易品に粗製濫造の弊を免れぬにより、斯かる組合を設けて粗製濫造を防がうとするのである。目的は單に此に在る、即ち西洋の其れとは大に違ふ、本當の意味に於ける西洋の同業組合なるものは日本には存在せぬ。加之勞働者の團體がない。それを亦日本の政府は恐れる、今日身を挺して大にその團體組織に盡力するなら、直に注意人物と爲り當局者から如何樣の

壓迫を受くるか知れぬ。電車の同盟罷業を叛逆同然に認めんとする位てあるから、斯ゝる團體組織を恐れるのは日本の政府として當然てあらう。兎角已に此の二つの大切な團體がないから、和解仲裁等平和の手段を以て紛議の解決を見る事が出來ぬ。勞働者の智識が進み、彼等に人格の自覺が起る時には、據ない、問題の解決は同盟罷業に往けといふ樣になる、如何しても和解若くは仲裁等温和の手段を以て、勞働紛議を未然に解決し、若くはそれの起つた後に善後の處置をするには、前述二種の團體の設立が必要てあるから、政府は今迄の如き偏見を捨てゝ、寧ろ其勞働團體の設立を促進するの態度を取るが必要てないかと思ふ。斯く雇主被雇人の團體が整うて、然る後に勞働紛議は私設機關によるか若しくは官設機關による、そして其仲裁、和解を強制にするか、或は任意にするか等幾多の問題が起らうけれど、今日それを言ふても殆んど無用てある、先づ何よりも團體を作ると云ふ事が、今日の急務てあらう。

三、裁決の强制と任意

左れば今より遠き將來を考へて論ずる必要もない樣てあるけれども、假に團體が出來たとするならば紛議の平均的解決は官設機關によるか私設機關によるか、又强制にすべきか將、任意にすべきかと言ふに私は任意を宜しとする。官設、私設孰れにしても要するに其和解、仲裁には强制力を持たせぬが宜からうと思ふ。と云ふのは、其和解、仲裁の任に當るものが、全智全能であるなら雇者彼雇者兩方の利益を保全すると同時に、又國民經濟の發達に最善の裁決を與ふる事を得やうけれど、左るものを得る事は言ふべくして行はれぬ話てある。されば屹度雇者彼雇者孰れかの側に無理があるに相違ない、其結果國民經濟の發達を害する事とゝなる。それ故其裁決は强制てなく任意を可とする。それは濠州などに於ける仲裁裁判の治績に徴して窺ひ得る、惜か今より十七八年前にニユージーランドに强制的の仲裁々判が行はれ、それ以來廣く濠洲に實施されて今日に至つて居るが、其結果を見るに勞働者は頗る滿足し居るけれども、それは濠洲に於ては勞働者が非常なる

勢力を持つて居つて內閣は勞働黨を以て組織し居る如き處であるからて、仲裁々判の結果は常に勞働者にのみ有利となり、勞働賃金は大に上つて居る、從て企業家に取つては苦痛である、爲に企業家は斯ういふ理屈を言ふ。一體裁判所が勞働者の最低賃銀を規定するならば、此の如き勞働者を使役して作れる商品の最低價格を定めて貰ひたい、賃銀には最低賃銀を規定して賣る品物には何等の保護を與へぬ、是は徒に企業家を壓迫するのであると。即ち企業者は非常に不利の位置に立つ、此に於て濠洲の產業は國際間の競爭に堪へぬ事とならば。特に外國の市場て他國と競爭する事は殆んど出來ない、只國內たけては他國から地理的に餘程隔絕して居る。即ち亞米利加合衆國、歐羅巴、日本などから餘程遠く離れて居るから、外國より此濠洲へ物品を送るには高い運賃と手數料を要する、其上濠洲には高い關稅を課して外國品を拒絕して居るから外國商品の壓迫を被らぬ。が從つて濠洲ては物價が非常に高い、其の結果南米亞弗利加又は支那のいふ如き方面に自らも亦販路の開拓は出來ぬ。即ち外國の市場には販路を求めず、自國にも亦外國商品の輸入を防ぎ、加之外國人の入國さへも防ぎ、甚しきは自分の母國の人間をさへ入れまいとする。濠洲はそれ故全然經濟上に於て鎖國孤立の狀態にあるといふても宜い。斯の如き結果であるから仲裁裁判の結果は企業者にとつて頗る苦痛に相違ないけれども、兎に角國內にあつては他國商品の競爭壓迫を被らぬ丈けに生命を保持し行く事が出來る、以上述べたる如く仲裁裁判が强制の効力を有する時は、是に依りて紛議を抑止し得らるけれども、國民經濟の發達は阻止される。濠洲には企業者が苦むが、若し之と事情を異にして企業家側に利益なる裁決が常に與へらるるならば勞働者が苦む、そして其結果矢張り又國民經濟の發達が阻害される事となる。であるから裁決の効力は任意を可とする。が今日の我邦ては此の種の問題は餘り行過ぎた論だから是れ以上詳論する必要はない。唯試に說くなら斯樣だといふ丈の事だ。

四、目下の時務に適切なる方策

兎に角今日の處では先づ何よりも勞働組合の成立を必要とする。けれども只漠然勞働者の團結した丈では駄目である。勞働組織を平和的に解決するには團體そのものに統一がなくてはいけぬ。又團體員各自は自制力を要する。更に又洞察力を要する。即ち充分な規律節制があり訓練が行屆いて居るにあらざれば之を率ゐる人の命令によつて進退する事が出來なくなる。すれば勞働紛議の平和的解決も出來なくなる。それ故只烏合の衆のみでは何にもならぬ、須らく團體員各自の修養と訓練とがなくてはいけぬ。けれども日本今日の勞働者に果して左る諸要素が完備し、以て勞働者團體の成功を期し得るかといふに迚も望まれぬ。即ち今日勞働團體の成立たぬのは、獨り政府の壓迫に因るのみでなく、又勞働者自身が頗る無智無能であるからで、到底我國今日の勞働者を率ゐて、秩序あり統一ある團體的行動をするは覺束ない。それ故目今では勞働團體を設立するといつても却つて産業界の平和を破る事となるも知れぬ。で私は、今日の時勢に適切なる手段としては、時勢の推移に察して政府が今迄の如く、同盟罷業を叛逆視する陋弊より脱し、そして只或る種類の事業に對してのみ同盟罷業を絶對的に禁止するといふ事にしたら如何かと思ふ。即ち取るべき手段は、此同盟罷業の爲に及ぼす所の利害範圍の非常に廣い種類のもののみを限り、之を禁止することである。然らばそれは如何なる事業かといふに、先づ日本でいふなら鐵道、海運、それから市の電燈、瓦斯、水道、それから郵便、電信、電話といふ如き事業である。此等に對する同盟罷業を禁止して貰ひたいといふ事の半面には、其他の事業には自然是迄の如き壓迫を加へず、同盟罷業を認めるといふ事になるのだ。何故かといふ上述の如き諸事業は其利害痛痒を感ずる範圍が非常に廣く、是が爲に國家の存立を危くす事のあるも知れぬ。即ち國家的の大問題である。啻に雇者被雇者の間の問題ではない。假令ば鐵道の如き、外國と一朝戰端を開いた場合に、勞動者が突然同盟罷業をやつたならば軍隊の輸送が止まつて仕舞ふ。又海運に於ても左樣である。兵器彈藥

其他兵站の輸送が全く出來なくなる。郵便、電信事業に從事する勞動者が同盟罷業をすれば通信の道が全く杜絕しそれこそ國家の重大な問題である。又範圍は稍狹くあるが例へば東京市の水道に從事する勞働者が同盟罷業をすれば約二百萬の市民が甚しき窮態に陷り、若し久しきに亘れば幾萬の生靈が飢渴の爲に死ぬるも計られぬ。瓦斯、電氣の類に於ても其需用の範圍が今日の如く廣きに至ると、又其影響する場所は甚だ廣い、それ故斯ゝる事業に從事する勞働者に對しては同盟罷業の權利を始めから奪ふべきである、而して此等の事業に於て若し一朝勞働紛議が起つたならば、政府は須らく之れに干涉し紛議の調停解決に努力す可きことは勿論である、即ち私案に依れば紛議の起つた場合には農商務大臣は雇者側から一名、被雇者側から一名、其れに農商務大臣の適當と信じた委員一名、都合三名の委員をして充分に審議させる。そして其裁決には絕對の强制力を持たしめ、雇者被雇者の兩方に絕對に服從させると云ふのが先づ私案の大體であつて何故に此法が良いかといふに。是れによれば單に勞働紛議を平和的に解決し得るのみならず、併せて勞働者の自重心を强くし、見識を高め、又其の權利を尊ぶの氣風を鼓吹する事となると思ふ。即ち自分達の總代が雇者の總代と、更に農商務大臣の任命したもの一人と一堂に相會して審議するに於ては、是れ旣に被雇者の地位を高め、雇者と對等に置くものだから、其處に必ず勞働者としての自覺が起らうと信ずる。今日の彼等の狀態では、未だ舊來の陋習が脫せず、紛議起れば理屈や權力では雇者に叶はぬから、我慢の出來ぬとなると、雇主等に優る唯一の武器たる腕力を振るより外ないと思ふ。が上述の機關が出來て自分等の總代がそれに加はるとなると初めて人格の自覺が起るに相違ない、そして自分等に相當の理由あり、條理さへ一貫して居る者ならば、紛議は自然に自分等の勝に定まるといふ事さへ分つて來れば、又それが因となつて次第に有力なる勞働團體の成立する端緒を爲すてあらう。すれば紛議の解決を平和の間に、和解若くは仲裁の方法によつて着ける事は

困難てなからうと信ずる、而して仲裁々判の裁決に强制力を持たすることの不可なる理は既に先きに述べた如くてあるが、是れは一般の場合を論じたのてあつて其結果は濠洲の如く産業萎縮の恐るべき弊害に陷るが、私案の如く二三特別の事業に限つてのみ仲裁制の裁決に强制力を持たするのは實際に已むを得ないのてあつて、多少の弊害も伴ふが是れに依つて利益の保全さるゝ利益に比ぶれば殆んど論ずるに足らぬことは明白てある。斯樣な譯て私は刻下の急務としては或種の事業に關する勞働者の同盟罷業の權利を奪ひ、今言つた組織の機關によつて凡ての紛議を解決すべく、是丈の事が差當り政府の取るべき政策てはないかと思ふものてある。（完）

仲裁機關を設けよ

慶應義塾々長　鎌田榮吉

歐洲各國の同盟罷工は段々廣く流行するように成て來たが世界共通の現代に於ては我邦にも善悪共に這入て來るのは仕方がない。産業の發達に連れて自然の勢是から資本主と勞働者との間に紛議が起るであらうこ資本主等が安閑として居て而かも驕奢を極めた生活をして居るのに勞働者は獨り衣食の資に窮して居るといふんては。實際つまらないとの念が起り、資本主の壟斷する利益を今少し自分等に分配して欲しいと思ふ樣な事になつて來るてあらう。窮民は皆怠惰の民かといふに實際を調べるを必ずしも左樣ではない。今日は稼ぐに追付く貧乏ありてある。とすれば如何しても是から勞働者對資本主の紛議は免れぬ。日本は餘程事情の違ふ所があるにも拘らず矢張此等の事が流行して來る兆候のあるのは困つたものだ。然るに日本の現在には之を平和の間に解決すべき調停機關がないのであるから、最後の解決を同盟能業の手段に訴へるのは已むを得まい。仲裁方法は英國あたりで現に之を行つて居る樣だ、外國の同盟罷業といつたらそれは大袈裟なものである。平素勞働者の間に常設の同盟が作られ、事ある時には仲間の勞働者に衣食を供給し得る樣になつて居る。一體歐羅巴の勞働運動には國境が撤してある。英佛獨の何國といはず氣脈を通じ、普段醵金して太きな共有財産を有して居るので、いざとなればそれで幾許かの間は自活する組織となつて居るから。彼等の運動は持續する。資本主に對抗して何時迄も罷業を續ける事が出來る。が日本にはまだ此樣な團體組織所ではない。從つて勞働者の資本主に對する運動は永續し得ぬ、勢ひ短い期間に十分の効果を得やうとする故暴行手段を敢てし、法網に觸れるに至る。是は勞働者自身にも決して利

全でない事は各國の例を見ても分つて居る。尤も勞力も商品と同様で特別の誓約が無く之を賣ると賣らぬとは銘々の自由である譯だから苟も受動的でない以上はそれを制するといふ理由はない筈である。が此間の電車問題の如きであると少しく性質が違ふ。あれは市の交通機關に屬するもので、それに就いて勞働者の同盟罷業が起れば全市の交通機關の運轉が全く阻害せれる。少くとも是等の如きは先づ最初は仲裁機關に訴へ到底平和の手段で主張の通らぬ時に至て初めて罷業するならば兎に角だが出し抜けにやる抔は言語道断だ。「暴動の伴はない同盟罷業を最初から犯罪視する態度は宜くない。又國家の威力を以て漫に强壓せ樣とて出來る事ではない。それ故仲裁機關の設置が當面の急務であらう。即ち、資本主、勞働者の兩方面から代表者を選出して組織するのである。それは事業の各種類に從ひ、銘々別々に設けると限らず、異なる事業を通じて設けるも宜い。けれども初は先づ私設されねばならぬ。公設にするには今少し時代が進んで自然の要求が其處へ行かなければならぬもので、結局の處資本主と勞働者の戰爭も國際間の戰爭と同じ事で軍費の充實したものが戰はずして勝つと云ふ事になるのであらう。双方の力を比べて見れば戰はぬ内から勝負は明白に分つて居る、資本側と勞働側と對抗して双方の主張を表明すると同時に孰れがより長く罷業に耐へ得る資力を持て居るかを見ればそれ丈で紛議は解けて仕舞ふ譯だから、勞働同盟資本同盟の機關が充分に發達した曉には、同盟罷業は事實に於て消滅するであらうと思ふ。

同盟罷業論

法學博士　神戸正雄

一

近頃、同盟罷業は内外に瀕出を見る。日本にても今後は益々增加するてあらう。是に於てか如何なる態度を以て之に當るべきかは是から先きの一問題である。一部の學者は之を以て恰も善行美擧の如くに解釋し、他部の學者は之を以て罪惡非業の如くに解釋する。思想上の衝突が行はれ、政策上の矛盾も亦行はるゝ。然らば如何に之を解釋し、如何に之を處置するのが至當であらうか。

二

予輩は同盟罷業を以て理想的の美擧と解することは出來ない。之と同時に之を以て極惡非道の業とも解釋することは出來ない。或場合に又或程度に於て勞働者が之を行ふことが避くべからざることであり、且つ良好なる結果をも生ずることゝなるてあらう。然しなが

ら間々之によりて勞働者自身の目的を達すべかざるのみならず、社會全般の上にも重大なる災害を生ずることゝなる。即ち大に寒心すべき結果を齎らす。而して之に代つて勞働者の相當なる要求を充たすの方法も別に存し得ることを信ずるものである。

三

凡そ同一の利害關係を有する者が相集團して他の利害關係を有する箇人又は團體に對抗して其利益を主張することは當然の權利と認むべきものである。企業者側に於て聯合を結びて勞働者に對抗するを得る以上は、勞働者も亦聯結を爲すことによりて資本主に對して同盟罷業を爲すことが出來なければならぬ。特に勞働者と企業者との對抗に於ては通例企業者の方が强者てある。資本の力も豐富て抵抗力が强く、利害を同ふする人の數も少ければ其共同一致の態度を採るに至ることは一層容易てある。勞働者は同盟能業の權を認められた所で、まだ〳〵企業者に對しては寧ろ弱味が多い。况や勞働者に此を認められないに至ては、愈々以て勞働者をして逆境に沈淪せしむるものである。同盟能業が濫用すべからざるものなりとはいへ、せめて勞働者が之を行ひ得るの權利だけは是非とも認めなければならぬ。即ち勞働者に同盟罷業の權利を認むるのは條理上當然である。

四

政策上からいふても之によりて間々勞働者の企業者に對する當然の要求が貫撤せられ、勞働者の境遇が物價の上騰に伴ひ、生計程度の昂進に伴ひ、勞働能力の増進に伴ひ又は企業の繁榮に伴ひて、相當なる上進を爲すを得ることゝなりて、隨ては又勞働の功程又は給付能力も增大して、其生產する貨物の品質の改良、分量の增加ともなり得、外國貿易上にも良好の結果を齎らすことゝなる。即ち社會政策上にも生產政策上にも得策といふことゝなる。此に於てか前に條理上よりの理由と相待つて少くとも勞働者に同盟能業の權利を認むることは避くべからざることゝなるのみならず、又間々有益なる結果を生ずることゝなる。

五

然るに同盟罷業は其結果として遂には勞働者の勞働條件を改良することゝなるとはいへ、勞働者も少くとも一時は給料を失ひ、企業主よりいへば必然一時事業を中止することによりて特に其固定資本の利用を妨げ、又切角此迄苦心して得たる販路をも失ふことゝなる。特に此際國際的競爭の盛に行はれ居る場合には此虛に乘じて其事業の根柢を危ふせらるゝの恐もある。而して又原料の供給者は原料價格の下落、原料の販路壅塞の爲めに苦しみ、消費者は貨物供給の缺乏、物價の上騰によりて苦まざるべからざることになる。且つや一般經濟界に取りても内國事業への放資を躊躇せしめ、資金の過大流出をも誘ふことになる。丁度佛蘭西や。最近の英吉利などに此傾を認むる。罷業の行はるゝ業體が交通機關とか燈火薪炭供給等の場合には其影響頗る廣くして、一般人の生活を危ふし、特に交通機關の如きは精神的文化の發達をも阻碍する事となる。

六

斯くて同盟罷業の結果、勞働者の相當の目的なりとも達せらるれば良いが、間々此が達せられない。此罷業によつて敵黨を苦しめやうとするが、其の之を苦しむる以上に自黨を苦めることゝなり、所謂自繩自縛、頗る進退谷まることが屢々である。とつふのは勞働者は元來弱者にして資力乏しきものなれば、資力豐富なる資本主に對抗すること困難となつて勞働者の目的を達する能はざることゝなる。勞働者は之によつて高き代價を拂つて極小の報酬を得るか、又は何の得る所なきに終るの愚を見ることが少くない。此の如く勞働者自身に於ても間々不得策であり、而して他方諸多の重大なる弊害を有する所なれば、假令前にもいへるが如く同盟罷業の權利を認むることは差支なきにせよ、尙ほ勞働者に於て之を濫用せず無暗にやらぬやうにすることが肝要である。行ふべき場合を選まなければならぬ。

七

夫れから又同盟能業を行ふ方法よりいふも、間々暴

行に訴へ、公の秩序を紊すが如きこともあり得る。此は斷じて許すべからざるもので、假令同盟罷業の他の方面に於ける弊害も少くて却つて利益の多きを得る場合なりとも、此の如き暴行其ものは許すべからざるものである。少くとも此暴行につきては抑制を加へなければならぬ。此と同時に此暴行によらずして整々堂々と同盟罷業を爲す者にありては、必然之を認容しなければならぬ。此點に於て日本の其が暴行を伴ふこと多く、歐米のに之を伴ふこと少きは最注意すべきことである。戒めなければならぬ。我邦人に同盟罷業を罪惡の如く考ふるものの多きは又一には此によるのである。

八

偖て又同盟罷業が單純に同盟罷業を爲すだけでは有功ではなくて、平素より勞働者が別に職工組合を作り積立金を豐富にして、即ち同盟罷業の場合の軍用金を充實して置かなければならぬ。之が豐富でないと、同盟罷業は勞働者の立場から遣り損といふことゝなる。然るに旣に此組織にして堅く、其資金にして豐富なるに於ては、勞働者は格別に同盟罷業によつて勞働條件を有利とすることを主張するの理由なきときにも之を敢てすることゝなり、即ち同盟罷業の頻發を齎らして、勞働者自身は利益すとも、國民全體の損失は免れざることゝなる。此に至つては勞働者の自制心公德心によりて防ぐの外はない。然し勞働者に於て此精神が相當に行はるゝ程の社會なれば、雇主企業者も公共心道義心よりして賃金等を不當に定めざることゝなり、又此際職工組合の基金の豐富なる場合には事實上にも企業者は勞働者の同盟罷業により企業者に對抗することの容易なるを知るの故に、出來るだけ勞働者の利益をも保全することになる。同盟罷業の起らぬやうにすることになる。故に同盟罷業を行はずとも、行ひ得るの準備を爲すことは必要であり、公平を齎らす所以である。他面に於て勞働者企業者双方の道義心を堅くすることは同盟罷業を起らしめずして公平の結果を齎らす所以である。

九

斯の如くにして同盟罷業は行ひ得るも、成るべく行はしめざることゝするのが有益である、而して同盟罷業を行はずして之と同一の効用を發揮する他の方法は企業者側、勞働者側、及學者官吏より出せる委員會に於て、勞働條件につき爭あるとき一般物價の指數其他のものを基礎として判決を與ふることである、此際政府官人及學者が公平無私なるべきは勿論であるが、勞働者企業者の兩當事者が其正當の利益を主張すると同時に他人の正當の利益をも尊重するの美風が發達しなければならぬ。然らざる以上、此制度の効果は十分に現はれない、要するに一面に或設備を設くることが肝要であるが、別に又一國の倫理教育の方針をして右の如き點に基礎を置かしむることが根本的の要求てある。此倫理的基礎は實に同盟罷業に關しても、更に代るべき他の方法に關しても亦た有要なるものである。

同盟罷業問題

法學博士　鹽澤昌貞

一、同盟罷業を犯罪視すべからず

同盟罷業が國民經濟上又は一般公益上に取りて、頗る忌むべき現象なるはいふ迄もない。が歐米諸國は勿論日本に於ても、近來頗る其發作を見る樣である。之を如何にして豫防すべきかに就いては、今日世界中の識者が頭を痛むる所、過去に於ては已に長い間此種の立法上の施設もあり、又學者の研究も頗る多い。けれども實際上全然之を豫防する程に成功し居らぬのは遺憾の次第である。

先づ初に、同盟罷業なるものは不法行爲なるか或は不法行爲ならざるかが問題になるが、文明の歐米諸國(露國は例外として)では、立法上其リーガリテーに付ては殆んど認められて居る。是に就いて詳説すれば種々の變遷沿革があり、過去に於てはそのリーガリテーの認められなかつたのだけれども、大勢の歸する處遂に同盟罷業それ自身の合法的性質を何國にても認むる事となつた。尤も同盟罷工に附帶する種々な行爲に就いては、多少立法上疑問が殘つて居るけれども、大體では暴行脅迫といふ如き特別の行爲以外に於ては、之を不法と認めぬのが一般の通勢と稱して宜い。本邦に於ては治安警察令第十七條に於て、同盟罷業を禁止

る精神を以て規定され居るかの如き條項があり、少くも勞働者が同盟罷業を爲し得ぬ樣に制限してあるが、事實の問題としては已に今日迄にも至る處に同盟罷業がある。特に今日の如く、中等以下の多數人民間に痛切なる生活難の現象を呈しつゝある際に於て、生活の必要上から勞働者が雇主等に對し、種々の要求を提出する必要に迫られ、其結果同盟罷業の武器に訴へるといふ樣な危險が一層甚しくなる恐がないと言へぬ。一面から觀察すると、所謂勞働者の自覺、即ち勞働者が自家の人格に對する自覺を生じて、其位置の改善向上を希望するといふ精神的の運動といふ事も、勞働爭議、或は同盟罷業を惹起する潜勢的原因ではあるが、併し今日に於ては寧ろ直接生活上の必要から斯ゝる現象を惹起し易いのである。世間には、勞働者とか或は細民の困窮を見るは、罪を彼等の怠慢不注意に歸する議論もあるけれど、色々事情を聞くに强ちそれのみではない。幾ら働らいても物價は益々騰貴し、所得收入は之に應じて增加せぬ爲に、衣食住に就いて大に缺乏を訴へる場合が少くないのである。即ち幾ら働いても食ひ得ぬ狀態の少くないといふ事は大に注意を要する事項であらう。

從つて勞働者も此の如き事情から生活の必要上、勞働賃銀なり又其他の待遇に就いて雇主に要求を提出する事往々にしてある。斯樣な場合ては私は之と實質ある原因を備へた要求、即ちサブスタンシアルの原因ある要求をするのである。斯ゝる場合に、若しも雇主に於てそれが適當に考量され又採用されぬに於ては、已むを得ず最後の手段に訴ふることも、强ち之を非難する事は出來ぬと信ずる。

此の如き眞面目なる爭議に就いては、立法、行政の局に當る者も、社會は勿論、雇主の側も共に愼重の注意を拂はなければならぬ。中には又往々にして勞働者の一時の氣まぐれから不當の要求を提出するとか、或は見當違の主張をして其結果、同盟罷業を生ずる事の無いではない。此等を私は實質の無い同盟罷業といふ、又之と同時に、雇主側でも前に述べた實質ある要求を正當に考量せぬ爲に同盟罷業を起させ、或は雇主の側に於て勞働者に對する待遇上から同盟罷業を起さすことも往々ある。即ち支配人或は直接に勞働者に接する役員が橫慢とか、何か勞働者より見て氣に喰はぬといふ樣な、感情の衝突からして實質の無い同盟罷業を生ずる事が少くない。是等は感情の衝突で適當に雇主の方で注意を拂ひさへすれば治まり易い。即ち御互の意思が疏通さへすれば宜いので、何國にも此種の同盟罷業はあるけれど解決は六かしくない。只何としても大切なる問題は前述の實質ある爭議の場合である。是に就いて適當な解決の法の立たぬ以上は同盟罷業を强ち否定する事は出來ぬ。

斯ゝる理由からして各國皆此同盟罷業を不法行爲とは認めぬ事となつて居るのだ、本邦にも理論は暫く措き、事實問題として、社會生活上の大勢を無視すること出來ぬのだから、今日の場合ては、獨り我國のみが同盟罷業を不法行爲と見做すのは、何としても穩當でなからうと思はれる。先年我國で身司法の局に當り事理に最も明るき司法官連中が俸給の要求から同盟罷業を起したと云ふことを私の在外留學中に聞て驚[illegible]に

感じたことがあるが、勞働者が或る事情の下に之を訴ふるに不思議はない。即ち勞働者が已むを得ざる必要に迫らるゝ場合ならば、之が權力で抑え樣としたとて所謂脊に腹は換へられぬから只面倒を來すに過ぎぬ。同盟罷業は忌むべき事であるけれど、其原因の治らぬ以上は致方ない。此原因を一掃する方法が立つか、若くは爭議の起つた場合に之を適當に解決すべき方法が立てられ、勞働者も正當に利益を維持するといふ事が定まつた上ならば、同盟罷業を禁止するも强ち不當でなからうけれど、是等の根本的解決方法が立たぬ現狀に於ては、同盟それ自身は已むを得ぬ事と信ずる外はない。

二、爭議を未然に防ぐ道

同盟罷業の根本的豫防方法を講ずる事が必要なるは勿論である。が是は仲々容易な事でない。之に就いては社會階級上の調和、即ち社會問題の根柢に觸るゝのであるが、現在の社會經濟組織の下に於ては、要するに雇主と勞働者の融合調和を計る方法を講ずるより他に道はないと思ふ。勿論公の手段としては或は最低賃銀法とか、或は最高勞働時間又は其他の勞働條件に對する立法等の事例もあるけれども、是れ等は社會關係の複雜なる諸邦に於て容易に實行を期し難いと思ふ。ニュージーランド若くは濠洲の如き、主として勞働本位の比較的單純な社會ならば行へるか知れぬけれど、歐米や本邦の如き事情の複雜な國に在つては結果を收むる事が容易でなからう、例せば最低賃銀法といふ如きでもだ。今度英國で炭礦勞働者に對する法律が出來たが、私はまだ其內容に就いては詳細に見て居らぬから批評し難いけれども、兎に角賃銀率といつても地方により事情により又多少相違のあるは經濟上免れ難い事である、從つて金額一定といふ事は容易でなからうと思ふ。已に地方に應じ事情に應じて區別を立つるとすれば、亦地方に於てそれぞれ樣々に其決定をせなければならぬ事となるから、其處に爭議の伏在を免れぬ。兎に角全國に對して千篇一律の賃銀を定むる事は殆んど不可能であらうと思ふ。但し大體の方針の規定は然るべき事と思ふが、其實行細目に至つては困難であらう。さればそれ丈で解決が出來るかは疑はしい。從つて勞働爭議の起らぬ樣にするには、平凡の策ながら勞働者と雇主との間の調和策を採るより他に道なからうと信ずる。是に就いては一方に於て雇主の勞働者に對する態度に大に工夫を凝す事が必要である。例せば彼の利益分配制度(プロフイットシアリングシステム)の如き者をも適用し、雇主が其事業に於て相當な收益のあつた場合に、勞働者に幾分を分配し、勞働者をして其事業に對し、利害共通の感情を起さしむるが良き手段の一であらうと思ふ。是にも其實行方法には色々違つた道もあるが、歐米各國に於て幾多特志の實業家が、已に之を實行して好成績を擧げた場合も少くない。此方法の如きも、雇主さへ大に注意を拂つて實行する事になれば、雇主と勞働者なるものが、其實益上にも將た其感情上にも常に相互一致の精神を誘致し、和氣藹々として共に圓滿に事業を始め得る結果を生ずるだらうと思ふ又或は雇主が勞働者の共濟方法に助力し其の費用の一部を

負擔して、勞働者の生活上の安固改善を計るのも亦調和の方法である。

尙ほ其他にも種々な組合、例へば消費組合の如き方法を、雇主が助力して勞働者の間に行はせ、そして間接に勞働者の生活上の負擔を減ずる如きも一の方法であらう。此等に就いては要するに雇主が勞働者の利害を誠意を以て顧慮し。相互に相待つて益を爲すもの、即ち雇主も亦是によつて利益を舉げ得るものだといふ事を了解して掛らねばならぬ。只賃銀勞働制度の下で、賃銀さへ與へて居れば、他に何等の法律上の義務なしといふ如き考では實行し難い。所謂情誼關係といふ事を必要とするものである。

尙ほ廣くいへば社會政策の要義を雇主も能く了解して、其精神を汲んで勞働者を使ふ態度が必要である。すれば雇主その他の勞働者に對する役員と、勞働者との間に意思の疏通せぬ憂も少くなり、感情の衝突を來すことも減じやう。又物價騰貴とか其他の原因により生活上の事情が勞働者の側で一變すれば、雇主も矢張り利害共同の精神を以て之を適當に考慮するといふ心懸を有せなければならぬ。斯ゝる態度となれば勞働の者も所謂なく爭議を來すことはなからう。是は強ち恩惠的行爲と思ふてはならぬ。何となれば一面より見れば勞働者の利益を維持するは結局雇主自身の永遠の利益を保護する所である。それを雇主が只勞働者に恩惠を與ふとのみ思ふのは間違である。根本は正義の觀念である。即ち誠實に相互の關係を意識しての上でなくば駄目である、此邊の理合を能く會得し行けば爭議も起らずに濟む譯である。勿論勞働者に於て自助の精神の必要は言ふ迄もない。之に就いては勞働組合等の方法もあるが、此は今暫く論ぜぬ、兎に角勞働者に對する雇主の態度に於て爭議を防ぐが根本的方法の一である。

次には又勞働條件に就き、雇主と勞働者との間に相互の協定をなし、勞働者は之によつて働くといふ方法も、大に注意を要する事項である。英國等では、以前すらジョリントコンフエレンス、或はジョクルトコンミツテーともいふ方法により、雇主と勞働者とが、其賃銀勞働時間又は其他の勞働條件に就き、一定の時期を劃して協定する。即ち今後每一年とか二年とかいふ期間を定め、其期間に對して以上述べた協定をするのである、又其期間の一年なり二年なりを經過した後、當時の事情に應じて前條件の通にするか、或に變更するかする。斯くして相互の妥協に本き、事業を繼續し行く仕組がある、是にも英國などの實際を見ると、一地方的の協定もあり、又全國の協定もあり、一會社丈の協定もあり、分類すれば種々のものもあるけれども、兎に角雇主と其下に使役さるゝ雇人との間に斯ゝる方法の設けられ居る點は注意すべきである。又英米等に於て賃銀屈伸率(スライギルグスケール)と稱し、事業の產物の價額の高低により、賃銀率を高低する方法を行ふことも矢張り此相互協定の結果である。例せば炭鑛であるなら、石炭の價額が騰貴すれば、それに從つて賃銀を上げる、之に反して低落する時は損を生ずるから賃銀をも下げる。此方法が雇主と勞働者との相互の協定組織の下に行はれるのであつて、炭鑛業、其他の或る種の事業の此方法によつて經營され居るものも少く

ない。獨逸等にも、或る特種の工場主が相互の協定法によつて勞働條件を定めて居るといふ樣な實例もある。又亞米利加では此種の協定は往々行はれて居る。千九百三年のペンシルヴエニアの無煙炭鑛の大罷業のあつた時、大統領が委員を設けて調査し、其調査報告の結果炭鑛主と炭鑛勞働者との間に、毎年事情に應じて賃銀を協定する事として、コンシリエーション、ボオード（和解局）と稱して居る、英國のジョイントコンフエレンスと同一方法を執るのである。勿論此方法はその以前から米國二三の洲に於て行はれて居つたものだ。

此等の方法をも爭議の起らぬ前に於て、事業の種類によつては實行出來る事と思ふ。先づ公の力でなく私の力に於て、相互の妥協により爭議の發生を防ぐに就いては、色々工夫すれば色々方法もあらうけれども、各國で實際に行ひ居る以上の數項を參考すれば、勞働爭議を一掃するに大に與つて力あらう。雇主の方にも勞働者の方にも大に修養の必要がある。勞働者には十分の教育を與へ、不法不規律な行爲に陷らぬ樣にする事が肝要だが、之と共に雇主の方にも自家の態度を誠實にし、單に我慾心を全く去り、永遠の利害を觀察して勞働者と融和するの精神を實現する事が、缺くべからざる要件であらう。

三、爭議を解決すべきの道

旣勞働爭議の起つた上は、雇主及勞働者の間に妥協が調へば別に問題にならぬけれども、其妥協困難といふ場合に、之に對して何等か調停の道なきに於ては、同盟罷業の現象を生ずるより他に道がない。それ故之に就いては色々私設の調停機關によつて其融和を圖ること固より一策だらうけれど、兎に角各國で久しく實行し居る樣な、公設の和解及び仲裁の機關を整へ、其解決の道を拓くといふ事が今日の要務でないかと思ふ。英國を初として米國なり佛なり、獨なり、又其他の國々では久しい以前から法律によつて之に就いての制度を立てあり、又それ等の諸制度に就いても幾多の變遷沿革ある事だが、此處には紙面を要するから、それを述べる事は略する。要するに是は和解と仲裁裁判とに歸着する。政府が此制度を公の機關として中央若くは地方に設け、爭議の起つた際に相互に妥協せしめ若くは裁定を與へる。之にも亦任意主義、强制主義の二つある事は云ふ迄もない。即ち爭議の起つた場合には必ず此公設機關を經由せなければならぬといふのが强制主義で。之を經由すると否とは一に關係者の隨意にするといふのが任意主義である。是迄各國の實例を見るに、歐米諸國は概して任意主義を取つて居る。千八百九十四年にニュージーランドに於て初めて一般的强制主義を取つた。

元來同盟罷業は或る場合には一般の公利公益に直に影響を及ぼす事が多いから、從つて雇主勞働者間の私の爭であるとて、國家が全然干渉せぬ事は出來ぬ。即ち一般の生活上に影響を及ぼす場合には公利公益に於ける問題となるから、國家が之に干渉する事は當然である。そこで强制主義を取るにも自ら事業の性質によつて取捨するを必要とするとの議論も起り、又立法上其先例も已に現れて居る。即ち概言すると、公益に關

する事業、例せば交通事業、鐵道、電車、電信、電話とかいふ者及び水道電燈、瓦斯等の如きものである、歐米では更に又炭鑛業の如き者も、直接に一般人民の生活に大影響を有する。例へば冬期に炭鑛勞働者のストライキが起り、石炭の供給に不足を告げて、その價格が暴騰すると、多數の人民は殆んど凍死に陷るの危險を生ずる。日本の如きは石炭はまだ普通の必要品でないから左程にもあるまいけれど、歐米では直接に一般の公益を害するから、矢張り是も公益事業に屬するといつて差支ない程である、此の如き事業に於ける勞働爭議より同盟罷業が起れば、關係者の經濟上の損害は暫く措くとしても、一般人民の損害は計るべからざるものだから、國家は當然是に干涉して然るべきである。それ故此種類の事業の勞働爭議に就いては、國家は當然直接に干涉して公の和解、仲裁に依らしむるが宜い。斯かる精神で成立つた立法で、世界の研究者の注意を惹かしめたものは、千九百七年の加拿太の產業爭議審査法（インダストリアル、デスピユーツ、インヴエスチゲーシヨン、アクツ）である。是は以上述べた鑛山其他公益事業に關する同盟罷業に就いては、政府で設けた爭議調査局の審査、和解、調停、若くは裁定を經た後でなくば、同盟罷業若くは事業閉鎖を行ふ事能はずと規定したものである。つまり雇主と勞働者との兩方から代表者を出し、それ等と政府の指名した第三者とが相會して、事情をも能く調査し、要求主張をも能く比較するので、斯くして意思が十分に疏通さへすれば大抵の場合は融和が出來る。それでも猶は和解が調はなければ、審査局で其爭議に對する裁定を下すのである。又其調査した爭議の事實と裁定とは勞働官報を以て世間に發表する。此に於て社會が其是非曲直を判斷するから、同情の向け方が自ら公平に行く。それ故大抵は其處迄立至らずして和解するのである。

加拿太政府は飽く迄政府の力を以て强制するの困難を認めたと見え、其裁定に對して絕對服從の規定を設けぬが、是はニユージーランドの强制の結果を斟酌したものと思はれる。ニユージーランドでは、强制審判の判決に兩方とも絕對に服從すべき事を命ずるけれども、事實上兩方が不備の場合には仲々其實行が困難である。尤も濠洲は多く英人の氣風を存し、法律を尊重するから、全くそれが守られぬとは言はぬけれども往々にして行はれぬ事がある。斯かる場合に如何するかといふと、盡く法律違犯者として牢に入れる事も困難なのである。そこで此點に至ると姑息的の慣例によつて居る。即ち其判決が遵奉され居るか、若くは關係者がそれに違犯したか否かを決定するには、一に審判裁判所の認定に屬することゝして居る。從つて、判決に服從せずして同盟罷業をしたとしても、裁判所が其判決に違犯したと認めなければそれで濟むのである。違犯の場合にはブリーチ、オヴ、ロー、即ち法律違犯、或はコムテムプト、オヴ、コート、即ち法廷侮辱といふ罪案で更に所罰すべきであるが、判決を下した後に關係者の行爲が法律違犯か若くは法廷侮辱かを決するのは一に裁判所の認定である。斯ういふ譯で此邊の處置になると頗る姑息になつて居る。此樣な事で御茶を濁す事も少くない。加奈陀では此點を鑑みて裁定に對する絕對服從を强いないのではないかと思はれる。

我邦でも矢張り和解仲裁の機關を政府で設け置くが宜しいと思ふ。勞働問題の今後益々多くなる事は、産業の發達に伴つて必然の結果であるから、平素勞働に關する統計其他の調査をする制度を定め、專門家、卽ち政治以外に立つ其道のものを以て組織した役所を常設して、それを中心として、和解及び仲裁の方法を講ずべく、各地方に和解仲裁の支部を組織する事が必要であらうと信ずる。其和解仲裁の方法は、雇主、勞働者兩方の代表者と、それに政府の勞働局の役員なり若くは其指名に因る第三者とが相集つて熟議し、相互の主張をも十分に了解した上でするので是でも尙ほ和解せぬ場合には裁定を與ふる事とするが宜い。是は英國を始め各國に澤山例のある事だから、實行細則等に參考とすべきものが多い。普通の場合には任意主義を取り、勞働者なり或は雇主の方に於て和解、仲裁を希望すれば、何時でも之に應ずる事とする、公益に關する事業は矢張り强制主義を取るが宜いと思ふ。卽ち先づ加奈太巴の法律を斟酌するを適當と信ずる。それから矢張り勞働局で、平生一般の公報を發表し其中に爭議に關する事項をも公表するが宜い。尤も事業の秘密に關する事は公表し難くもあらうから、其爭議に關する事だけを發表する。斯の如くして先づ成るべく調停、和解を勉め、已むなき時には裁定を與へるとするが宜い。斯くせば我邦は今迄起つた場合の如き多くは大概無事に纏りがつくと思ふ。而かもそれが社會公衆の目の前でする事だから、雇主に於ても自然不當の待遇はなるまじく、勞働者も亦不當の要求を愼むこととなるであらう。勞働爭議といつても必ずしも勞働者の要求のみが正當といふ事は出來ぬ。場合によつては却て惡い事も少くない。が此等の事は多くは相互の意思が疎通すれば穩かに濟むと思ふ。或は此論は尙早といふ議論も出るか知らぬが、私の見る處では尙早ではない。早く定めて置いて以て非常の紛爭の起る時に備へるが宜い。事實紛爭は今日も絕えぬので、最近には電車の罷業もあり又近くは航業勞働者の紛議もあり、又細かなものをいへば各地方にも其數少くない樣である。且何等か正當の要求の容れらるべき道が立つてさへ居れば、大なる爭議もなくて濟むから、今日の場合の如きは斯かる制度を設くるを要する。前にも言つた如く、雇主の側に於て十分今日の社會上經濟上の大勢を了解し、爭議の起らぬやうにするが肝腎だけれど、已に其爭議の起つたときには、國家も公平なる態度を取り、雇主、勞働者といふ其一方のみを考へず、一般の利害を考察するを勉むべく、且同盟罷業は一般に害を與ふるからいけぬ、これを敢てするものをば犯罪者とするといふんでは公平でない。場合により勞働者の方が不當のこともあり雇主の方に於て責任を有すべきことがある政府は局外に立つて之を公平に裁斷することが必要である。

立法、司法、若くは行政の職に當るものは、同盟罷業といふ如き事の原因は頗る深い故、社會經濟上の大勢に十分着眼し、愼重の注意を拂ふ樣にありたいと思ふ。同盟罷業といふ樣な行爲を犯罪視する說も、是迄全然無くもないけれど、斯くするには大に或る前提を必要とする。卽ち一般の法律によつて勞働者及び雇主の間に於ける爭議に付、相方の利益

を十分に保護する方法が規定され、勞働者も雇主の不當なる待遇に苦む心配なく、彼等の利益の保護を十分に受け得、又爭議も公平に解決される方法が規定せられたる後に於て、初めて同盟罷業を犯罪行爲として不可はないのである。けれども今日に於ては未だ此の如き社會の階級衝突を根本的に整理すべき法律は出來て居らぬ。此の出來て居らぬ以上同盟罷業犯罪論なるものは、理論上又實際上適用出來ぬ事である。差當り我邦ても前述の和解、仲裁々判制度を設くるを目下の急務と思ふのである。

同盟罷工論

神戸高等商業學校教授 津村秀松

（一）

同盟罷工といふことは、我國に於ても別に珍らしい社會現象ぢやない。以前から年に十回や二十回は所在之を見るといふ有樣であつたが、今年の春からは俄に事件が殖え、著しい色彩を帶びてきたことは、確に注目す可き價値あることだと思ふ。

一寸數へても、今年の正月に東京電車の運轉手及車掌の一大罷業あつて以來、東京組合石炭廻漕船頭千五百名の罷業、東京電氣會社川崎製作工場の罷工、横濱ヘルム商會船夫百六十名の罷業、青森市の駄賃附三百五十名の罷業、福岡縣信夫郡大工佐官の罷工、岩越鐵道工夫三百七十名の罷工、三井物産會社小樽支店木材積取人夫百四十名の罷工、四國水力電氣會社工夫百五十名の暴行、三重紡績男女工二千名の罷工、吳海軍工廠職工千七百二十名の罷工、東京砲兵工廠職工の不穩、岡山縣玉島町半田綿行紡績部の女工百餘名の罷工、大阪市友禪染職工六十名の罷業、郵船商船其他外船の火夫數百名の罷業等、各種の同盟罷工及び之に類するもの、到る所に頻發するといふ有樣であつた。

固より之は日本ばかりでなく、英吉利を初めとして、獨逸でも、佛蘭西でも、米國でも、露西亞でも、近頃同盟罷工といふことが、一つの流行物で、又一の傳染病であるが如き觀がある。日本に於ける火夫の同盟罷工の如きも、幾分か英吉利に於ける坑夫の同盟罷工に感染した形跡ないでもない。然し又世界共通の原因で

もあり、特に我國に於ても一般的原因をなすものは、近頃の物價の騰貴に基く生活の困難と、教育の普及に基く自覺の發生にあると思ふ。果して然りとせば、罷工を以て、單に一時の暴擧と見做す譯には行かないので、識者は豫め之に處するの道を講ぜねばならぬ。

(二)

近年に於ける物價の騰貴、從て生ずる生活の困難といふことは、東西多少其の原因を異にするとはいへ、爲めに感ずる一般下民、殊に勞働者の苦痛は皆同一で、特に我國に於ては近頃其の程度著しく加はりたることは、誰れしも承認する所であるから、今茲に改て論ずることを避くるが、之と相對して大なる原因をなすものは、我國に於ても亦教育の普及に基く勞働者の自覺にあると思ふ。

無智蒙昧なる野蠻人である間は、人と稱するも其の實牛馬同樣であるから、又牛馬同樣に奴隷の如く扱はれても、不平の念が起らない。否な、起り能はない。さりながら一旦小學を卒へるとか、中學に入るとかいふやうに、一通りの智識を備ふる職工が殖えてくると、幼稚ながらも人格の自覺といふものがあるから、牛馬扱は勿論のこと、人の人たる待遇に少しても反することがあるならば、承知しなくなる。表面は承諾しても内心に不平を持つことになる。それも其の筈である、元來、普通教育なるものは、人の人たるに是非共必要な智識を備へしむるにあるのであるから、普通教育を了へた職工が、人の人たる待遇を要求するは當然の結果で、それでこそ教育の趣旨を貫徹し得たもので、それでこそ教へた甲斐があると申すものである。

であるから日本の會社商店其の他の雇主のやうに、自分が小僧上りであるとか、若しくは主として小僧や小僧上りを使て居つた昔の頭で以て、今の學校出の者を支配しやうとか、又は自分が職工上りであるとか、若しくは主として子飼の職工を使て居つた時分の考で以て、今時の職工に盲從を望むといふことは、望む者の非で、望まるる者の苦痛であると謂はねばならぬ。小僧上りは使ひ易いが、學校出ては使ひにくいといふ

雇主の喧聲も、一應は道理てあるが、使ふに道を以てせば必ずしも左様てなく、而も永遠の功果は遙に大なるものがあるのてある。之を察せず、之を知ない雇主の今尚ほ甚だ多いといふことが、現今日本に於ける同盟罷工其の他雇傭者の紛擾が、主として物質的利害の衝突に基くよりも、感情的意思の衝突に基くものなる所以を説明するものてあつて、從て又日本の雇主が物質的利益の犧牲を拂はなくとも、感情的意思の疏通を計つたならば、日本に於ける同盟罷工の半を減じ得るてあらうと思はるる。

(三)

今日の日本職工には、それても未だ無智蒙昧なるものが多いのてある。明治の初期に生れたものが今尚多數を占むるし、比較的年少者を收容する工場ても、多くは義務教育實施前の人々てあるから、文盲が少くない。從つて反抗心も反抗力も薄い譯てあるが、今や我國に於ても亦歐洲諸國の如く義務教育の制を布いたから、此後は年を逐ふて文盲が減ずる。斯くて人間らしい職工が増加する。所が人間らしい職工が増加するといふことは、即ち人間らしい取扱を要求する職工が増加することになる。又人間らしい取扱を要求する職工が増加することは、總て人間らしい生活を欲求する職工が増加することになるのてあるから、其の之れある一方に、生活の困難が今の如くに加つて行くと、一般に勞働社會の神經が過敏になるから、其の結果、感情の衝突に基く者の紛擾も増加するが、然し感情ばかりてなく、實際生存の苦痛に基く紛擾が主となつてくる。即ち是迄の日本のやうな同盟罷工のみじやなくて、此度は今の西洋のやうな同盟罷工がだん／＼盛んなるに至るは、火を睹るよりも明かてある。

過去又は現在の日本のやうに、人間らしい取扱を要求するといふことが、主なる原因て起る同盟罷工てある間は、職工の團結も堅固てなく、解決も容易て、威脅手段も時には功を奏する、然らざるまても、雇主の方から言葉を和らげ、幾分増給する位のことにて、間もなく無事に鎮定するが、將來西洋のやうに、人間ら

しい生活を欲求することが、主なる原因で起る同盟罷工といふことになると、欲求が現實であるだけに、必要は切實で、從て豫め充分の覺悟と用意とが備はるだけに、解決が困難で、威脅には屈せぬ、懷柔に靡びかぬ、最早や感情の融和だけでは濟まぬ、給料の引上げに依る外ないことになる。即ち勞働條件の改良といふことは、結局賃金の增加といふことに終つて、それが又主なる要求であるが故に、其の結果後日は兎に角、若し差し當り生產費の增加といふことを伴ふから、又差し當り其の國の工業の競爭力を殺ぐことにもなるし、從つて輸出力をも減退せしむることになるてう、愈々大なる影響を喚起することに至るのである。

(四)

そこで西洋でも、日本でも同盟罷工に對する呪咀の聲が起るのであるし、又之が勢力を扶植する兆である勞働組合に對する批難の叫も聞ゆるのであるが、それは唯結果の慘憺たるをのみ恐れて、之が原因の無理ならぬを確めない、寔に同情のない聲で、從つて又無効なる叫であると謂はねばならぬ。元來、勞働者なるものは、一般に貧困にして、其日の收入を以て、其の日の生活を維持せざる可からざるの窮境にあるものであるから、唯一の收入たる賃金に對する慾望は常に强烈である。然るに其の賃金を求むる者が多數で、與ふる者が少數であるといふ、量の差違と、質の相違が、勞力の買手と賣手である雇主と勞働者の間の勢力に非常なる懸隔を起さすものであるから、自由なる契約たる可き筈の勞働契約も、其の實常に不自由なる契約となつて、至當なる勞働條件を得る能はざるのみか、勞力は勞働者の身體を離れて存するものでないから、勞力賣買に關する契約の不自由と、軈て勞働者の心身の不自由を伴ふ事になり勝ちである。そこで此種の不利益、不自由より脫せんと欲すれば、差し詰め、勢力の權衡を圖らねばならぬ。それには小能く大を制するの唯一の方策たる一致團結、即ち勞動組合の組織による外ないのである。

且つ夫れ今日の如く、雇主の間にも、それは假令ひ

直接勞働者に對抗する爲めの團結でないにしても、兎も角も「ツラスト」とか「カルテル」といふやうな、同種の企業者の間に、企業の聯合とか合同とか提携とかが盛に行はれ、社會に對する資本家の勢力が更に一層も二層も加はつて、其の結果、「ダンピング」といつたやうな隨分亂暴な商略を行つて、全然内國消費者の利益を犧牲に供しても、國家は之を禁壓しないし、又禁壓しやうとしても出來ない今の世の中で、能く勞働者の團結、(即ち勞働組合)、從て生ずる勞働者の團結的行動(即ち同盟罷工)を禁壓せんとすれば、それは誠に不公平なる處置で、所謂る「弱い者虐め」たるの譏りを免れない。それも弱い者だからとて虐め了せるものならば宜しいが、教育の普及は勞働者間に自覺を促すから、遂には却て一層强烈な反抗を起し、暴動を起し、然らざるまでも、秘密結社のやうなものが組織せらるるに至る一方には、社會主義者や無政府主義者が、勞働者間の不平を利用して危險思想を增長せしむるに至らないとは限らぬ。西洋諸國でも十九世紀の中頃から次第に政府の態度が一變して、勞働組合を認むるし、從て生ずる同盟罷工をも承認するに至つたのは、全く之れが爲めである。

(五)

然るに我國政府の態度如何如何んと云ふに、憲法に於て集會結社の自由を下民に保障してあるから、勞働者に對しても勞働組合をを組織することを妨げないが、同盟罷工となると、少しも調定の勞を採らないで、何んでもかでも之を壓迫する一方に、凶徒嘯集罪とか教唆罪とか罪名を附けて其の主謀者を獄に投ずる。別に機械を破壞するとか云ふやうな亂暴をしないで、内に引込んで居る者が何んで凶徒であらうか。如何なる社會でも主謀者のない團結は起りやうがないのに、獨り同盟罷工の場合に限り、其の主謀者を教唆罪に問ふのは、果して公正であらうか。今日のやうな分業の盛んな世の中に、罷業の結果、社會に迷惑をかけぬものは一つもないので、車掌運轉手の同盟罷工が、社會の公安を害するものであるならば、紡績聯合會が操

業短縮を企つるのも亦社會の公益を害するの罪に問はねばならぬ。兎角裁判官が社會經濟の理法に通ぜないから、片手打をやることが少くないと思ふ。

斯く言ふも私は決して是迄我國に起つた同盟罷工を其の儘是認しやうといふのではない。同盟罷工は盛に起るが、其の脊後に堅實な勞働組合があるではなし、言はば烏合の衆て、文明國の軍隊てない。勞働時間の短縮を要求するものとては皆無て、常に勞働者賃金の増加を欲求して、動もすれば之れを元手に浪費に耽けるといふやうな、目先の欲に發するものが多い。元の主人に對する怨を、今の主人に晴すといふやうな見當違ひな東京電車の罷工を見るに至つたのも、勞働者の智識が未だ幼稚なからてある。これでは世間の同情を得難いが、又これだけ憐む可きものであると謂はねばならぬ。加之、勞働者の智識が淺いから、動もすれば其の行動が定規を逸するからとて、之を頭から抑へ付けては、勞働者の智識が深くなつた後日に、一層大なる反動が襲つてくることを覺悟せねばならぬ。

之れを要するに、同盟罷工は決して望ましき現象てない、成る可く其の發生を豫防し度いことは、寸度、彼の戰爭が決して望ましき現象てなく、成る可く其の發生を豫防し度く思ふと同一てある。然し軍備は撤廢し難く、戰爭も時に必要なる場合あるが如くに、勞働組合も廢棄し難く、同盟罷工も弱者の强者を制する唯一の方法として避け難い場合があるのてある。さりながら國も文明國にはなる程、無暗に戰爭をしなくなるやうに、人も智識が進む程、無暗に同盟罷工はなくなる。唯一旦開戰となると、文明國ほど其の響影が甚しいが如く、一朝罷工となると、文明人ほど其の打撃が著しくなる。今回の英吉利の石炭坑夫の總同盟罷工ても、坑主と坑夫の一日の損害を合すと、南阿戰爭に際する一日の出費に近いといふことてある。てあるから世界の國が漸次集中して數箇の大國に別れ、其の間の勢力が平均してくると、假令ひ睨合して居ても、大抵のことは妥協て行くと同じやうに、一國内の勞働者も雇主もそれ〳〵團結して、互に相拮抗し得る勢力を保つに

至ると、容易な事では相手を屈服し得ないことを悟るに至るし、又爭鬪の結果被むる損害の莫大なるを思ふから、睨合ふやうなことが起つても、多くは妥協で濟ますとことになると思ふ。であるから、勞働者の知識を啓發して、組合の組織を進むることが、同盟罷工を全滅し得ないが、之を減少する唯一の方策だと謂はねばならぬ。

水を山に行るべからず

伯爵 大隈重信

產業制度の進步、社會政策の發達に伴ひ、次第に大規模の事業が企てられ、大規模の工場が立つ樣になる。先づ諸種の專賣がある。運輸交通、即ち電信、電話、鐵道、郵便等は國家の專賣だが、尚ほそれには外にも鹽若くは煙草等の專賣がある。又電車、水道等の市の專賣もある。外に國家が特許を與ふる專賣もある、即ち市の瓦斯、電燈等の類がそれである。是等は何としても大規模に經營されるに定まつて居るが、又民間の諸事業に於ても、產業の發達、其制度の進步に伴うて次第に小事業が集合の形を爲し大規模のものに移りつゝある。凡そ物は集れば必ず勢を成す。集らなければ其力微弱にして能く爲す事が出來ぬ。集合の威力は素晴らしいものである。で近來は續々資本が集合される。そしてトレド、ユニオンが起る。即ちトラストとかシンヂケートとかいふ者が出來て財界の利益を我手に壟斷せんとする。是に對して勞力も亦次第に集合される。小事業が廢れて大事業等が起れば勢ひ個々に散在した勞力が一所に集合されねばならぬ。大工場、大會社等に吸收されて夥多しく都市に勞力が集合される。此に於て資本同盟に對して勞働同盟即ちレーボアユニオンなるものが起つて來た。が凡そ物集れば必ず勢を成すとはいつても、只漠然集つた丈けではいかぬ、畢竟烏合の衆で大した力にはならぬ。それ故それには、更に統一あり規律あり、節制あり訓練ある樣でなければならぬ。それには勞働者の智識が要る。一體勞働の效果からいつても無學のものよりは智識あるものゝ方がよい。熟練ばかりではいかぬ、熟練に智識が加はると更に大なる効果を擧げ、生產の額も大に增加する。例へば煙草製造に於ても、假令無學な者が卷煙草を一日に一ダース作るものとすれば、それに智識が加はると銳敏なる腦の働で一日に二ダースも作れる事となる、それ故前者が五十錢の日給を得るなら後者は一圓の日給を得て然るべきだ。智識あるものが次第に勞働者となり勞力の質が改善されるに從つて其賃銀率は增加されねばならぬのだが、一方又物價が次第に騰貴する。迚も在來の給銀では今迄の生活を維持しかねて來る。

とすれば此方面からも賃銀增加の要求は起るべく、又起つて當然の筈である。それに一體が智識が進めば銘々の自覺が開ける。即ち向上心が旺盛になる。地位を高めんと欲する。地位を高むるといふ事は外でもない。生活程度を次第に引上げて諸種の希望慾望に滿足を與へ樣と欲するのである。日本は今日普く敎育を奬勵し、國民の智識を向上せしめ樣として居るので見れば、此國民の自覺の上に開ける諸希望諸慾望を阻止する事は到底出來まい。とすれば此精神的方面からも亦勞力に對する妥當の報酬、即ち賃銀問題が起らずには居らぬ。是は全世界の趨勢である。すれば、日本も勇氣いや增しに其氣運に化せられ行かねばならぬ譯である。即ち產業制度の進步と社會政策の發達とに伴ひ、勞働爭議は所詮免れ得べからざる趨勢である。

資本主と勞働者とは、斯う見て來ると其間の紛議の到底避くべからざる樣に見えるが、併し是は一時の現象で終には相調和し平穩になるべきものだ。丁度夫婦間の關係の樣なもの。男女の力相匹敵すると兎角衝突する。が夫婦相和せずしては到底一家を維持し行けるものでないから、所詮は和合して行く。衝突の間に調和點を見出して妥協して行く。其如く資本と勞力とが離れ〳〵て何の事業の出來るものでないから、矢張り兩者の欲する所は調和でなければならぬのだが、只それ一時の現象として其間に平正を失ふと爭議が起る。宛も水の如きものだ。急雨一過水に一高一低の勢が生ずると、直に平正を失つて怒號岸を嚙んで走るが、其間には高低の調和が取れ。復た穩かに碧を湛めて流れる樣になる。水は其勢に由つて治むれば能く功を成す。激して之を山に行らしむる事は出來ぬ。縱し一旦は出來たとしても、其反動は必ず卒然として至るもので、氾濫千里沃野を蒼海に化せしむるの勢と爲る、爲政者は此點に鑒みて社會自然の趨勢を國家の威力を以て强壓し樣などしてはならぬ。否寧ろ之を迎へ次第に其政策に取入れて融和を謀り行かねばならぬ。即ち夫のビスマークの如きがそれで、早くも社會政策を採り、疾病、災害、養老の三保險の組織に力を致し、勞働者保護の道を講じた。その後各國共に之に倣うて此等の保險事業が續々創始され、就中英國の如きは國家の費用を以て之を設立するにも至つた。此等は賢き態度である。特に近來勞働問題は國際的となり、勞働者は互に國境を撤して同盟するに至つたから、其勢力は益々侮るべからざるものである。で獨逸のカイゼルは嘗て勞働問題を國際間のコンフエレンスで決定し樣と試みた、即ち婦人の勞働問題幼年者の勞働問題に關する諸般の事項を協定し樣としたが、單に試みた丈で功を奏するには至らなかつた。が是が今日の大勢である。局に政治に當るものは大に此處に注目せなくてはならぬ。然らずして漫に此大勢に逆行した政策を取り勞働爭議に片手打の處置をするといふ樣になれば、好し偶々一時の効を奏し得たとするも、其結果は必ずや我產業の發達を阻害する。產業の發達が沮害されゝば、國際間に商權を競ふ事が出來ず、國家の富力は次第に減少して國勢委靡遂に振はぬ事と爲る。之をしも甘ずるといふなら又言ふの辭はないが、然らずんば斯ゝる無謀の態度を取るべきでない。同盟罷業防止の惡法の如きは我輩はまだ考へて居

ぬ、考へるには幾くも外に適當の人があらうし、又考へたら幾らも良法もあるであらうが、今日では先づ局に當る爲政者の態度が一番大切で一番根本的のものである。それ故我輩は此點に於て我輩の所見丈けを述べて置く。

同盟罷業問題は今後の我國に取つて實に重要なる社會問題の一なれば、本號に掲載したるものの外、尙寄稿を依賴したる大家少からざりしも、本號には長論文多かりし爲め、總て割愛するの餘儀なきに至れり、機を見て更らに之を掲載し、此重要なる社會問題の解決に資する所あらんを期す。

本號に掲載すべかりし稻葉良太郎氏の「勞働者の生活問題」は頁數超過の爲め又々次號に廻すこととせり。乞ふ諒せよ



淪落の女

松崎天民

新俳優喜多村緑郎氏に宛たる「累縮緬」、小說家正宗白鳥氏に宛たる「拾ばち」、女子教育家宮田脩氏へ宛たる「お小夜」の他。牧師綱島佳吉氏への「さまよひ」、救世軍將校山室軍平氏への「十二階下」、等、凡て五篇より成るを、我が「淪落の女」となす。これを個々別々の斷片と見るも宜く、また全篇相通ぜる一種の續き物と見るも妨げず。要するに「淪落の女」一篇は、社會の暗面に沈淪せる婦人の研究錄にして、且つ予が人生觀察に於ける道中記なり。

三、お小夜

一、何所へ行つたらう

お小夜は、何時の間にか、居なくなつてしまつた。何所へ行つたのであらう。

「淪落の女」の第三篇として、成女學校長宮田脩君足下に宛て「お小夜」を書く豫定であつたに、未だ書き得ない間に、お小夜の所在は判らなくなつて了つた。妾に爲つたのか、廢めたのか、死んだのか。それさへ今は、確と判らなくなつてしまつた。

喜多村君に宛た「黒縮緬」、正宗君に宛た「捨ばち」と同じ調子で、先づ……、

成女學校長宮田脩君　足下。

去年の春も未だ淺い三月下旬、東京朝日新聞に、「現代の女學生」を書き初めた頃一度と、神田一ッ橋の帝國教育會內で、女子教育家懇話會があつた折に一度と貴君にお目にかゝつたのは、僅に此の二回に過ぎぬけれど、私は何だか貴君を忘れる事が出來ない。

私の樣な微々たる新聞記者に、記憶されて居やうが、忘れられて居やうが、教育家たる貴君に、何等影響する處有りとも覺えぬが、然し私は貴君が好きである。當代の女子教育家の中で、比較的舊い型に囚はれて居ない、何と無く奔放自由な調子の有る一人として、私は貴君が好きである。成女學校の經營者であり、學長でありながら、常に教育者の立脚地を離れて、今の教育界を是非し批評し得る一人としても、私は貴君が好きである。好かれた貴君に、好いた私から此んなものを送るのも、何かの因緣と一笑して頂き度い。

實は此の一篇を何人に宛て送らうか、と私は種々考へた。女子教育家の中で、一度なり二度なりお目にかゝつた方は、成瀨仁藏、三輪田元道、山脇房子、嘉悦孝子、下田歌子等の諸家の他に、五指に餘る位は有る。然し「成瀨仁藏君足下」とか、「山脇房子女史足下」とか書き出すと、派手な事は派手であるが、何だか斯う反響が無い樣な氣持がするので、私は思ひ切つて貴君

に宛て送る事にした。新俳優や小說家などゝ違ひ、世間から眞面目な地位の人と目されて居る教育家の群へ「淪落の女」みたいな題材を提げて、臆面も無く見參すると云ふには、私に於てこそ多少の意義ある仕事なれ、送られた御當人に取つては、多大の迷惑であるに相違ない。其御迷惑も或る程度までは察して居ながら、私は思ひ切つて此れを貴君に宛て送る事にした。江湖に落魄して、私娼の群に泣いて居る女と、賢妻たれ良母たれと教えて居る女子教育家との間に、何の交涉する所があらう、などゝ云ふ可からず。女子教育家も斯う云ふ問題に就て、何時までも素知らぬ顔の門外漢て、過ごしては居られないと思ふ。

宮田君足下、常に社會の各方面に接觸して、明るさよりも暗さを見る事の多い私等は、「淪落の女」が、單り私一人の空想の所産でなくて、世間の到る所に實在して居る眞實の前に、且つ悲しみ且つ痛み、且つ戰慄せざるを得ないのに驚く。宗教も、道德も、教育も、法律も、藝術も、新聞紙も、凡てのものが皆權威を失つて居る世の中にと……。こゝまで書きかけて居た三月十五日、突然、社命を受けて、甲州へ出張する事になり、滯留二十日間。皇太子殿下の行啓やら、山梨縣の視察やらで、方々を飛び步いて居る間に、お小夜は何所へ行つたのか、其の姿を隱して了つた。

「現在」のお小夜を捉へて、大に寫しもしやう、大に論じもしやうと思つて居たに、今は最う「過去」のお小夜になつて、飛々の日記のページに、僅に其の面影を尋ね得るに過ぎない。それにしても、お小夜は何うしたらう、何所へ行つたのであらう。

仕樣が無い、過ぎ去つた日記の所々を拾はう。

二、不得要領の日なり

……月……日、雨、風少しく吹く。

探訪にも出ず、雜報も書かず、編輯もせず、終日「敷島」を吹かして過す、無爲。

「平家物語」を讀てみたいと思ひ、「獨步全集」を見たいと思ひ、強烈な洋酒を飲みたいと思ひ、表情の强

い女と話したいと思ふ。何か斯う、世間をアッと云はせる様なものを書いて、知らぬ女からでも、手紙を貰ひたい様な氣持がして堪らず。玉突三ゲーム、悉く敗。

　夕暮、銀座通りを歩く。男の顏、一人として疲れざるはなく、女の髮、一人として亂れざるは無し。金の千圓も懐中にして、欲しい物を買ひ、飲みたいものを飲み、食ひたい物を食つて、自働車に乘つて、東京市中を飛び廻つたならば、少しは面白からうと思ふ。何うしても電車に乘る氣がせず、八十錢と云ふを六十錢に値切つて、雷門まで人力車を走らす。

　駒形邊て日暮れたり。電燈と瓦斯の光、電車の響、いよ〳〵「我が世」が來た様な心地す。よか樓に入つて、パン、スープ、ビフテキを食ふ、皆、申し合せた様に美味からず。小山内薫さんを知り、生田葵山さんを知り、永井荷風さんを知り、吉井勇さんを知り、市川猿之助さんを知り、兒玉花外さんを知り、大學の御連中さんを知ると云ふ女あり。高髷の娘にして、薄化粧に赤い帶、美貌を誇り顏の態度可愛からず。八十五錢の御會計に、十五錢の剰錢受けて、更に一圓紙幣一枚を惠み遣り、「お前はエラいよ、文士の名を知つてるから」と、嘲り去る。女は眼を丸くして、「貴君、酔つたわね」

　人に餘計な金を遣るは、好い氣持なり、惡い氣持のせぬものなり。よか樓の女中に一圓、何のために遣つたか、考へて見れば馬鹿〳〵し、損な事なり。あれだけ有れば、おでんが五度位は食へたものを、何のためにあんな眞似をしたか、淺間しとも淺間し。一代の運命を占ふにも、十錢の代價にて足れるものを、西洋料理の女に一圓は、過ぎたり、大に過ぎたり。

　中店より觀音堂、活動寫眞の方へ出て、更に其の裏通りに出づ。おでんや、いり豆屋の匂ひ鼻を衝く。所謂銘酒屋の所在地、「梅ぞの」「吉の井」などの軒燈も、大方は電氣なり。

「金縁眼鏡の先生、お寄りなさいましな」

「外套の先生、一寸、外套の……先生てばよウ、親方さん、一寸、親方……」

「あら、杉山さんぢやなくて、杉山さん、杉山さんに似た何所かの人、一寸、色男……」

「一寸、一寸、お君さんの方、お信さんの方、寄らないと言附けますよ。中折に、鳥打帽、ねえ、一寸、お上んなさいよウ」

雑司ヶ谷の鬼子母神て、恰も雀の囀るのを聞く様なり。學生風した勞働者、勤人風した中學生、印判纒、インバネス、背廣服、羽織など、ぞめきつゝ行く。藝妓は座敷て客をあやなせど、こゝの女は軒端て男を招く。商賣に變りなけれど、境遇に相違あり。格子先に立止まつて、チヤホヤ言はれて居る男の顔は、判て押した樣に皆間抜面なり。淺間しとか何とか云ふは力弱し。こんな所は、大阪にも京都にも稀なり、有つても斯う猛烈てなく、露骨て無し。歩いて居ても、殖民地的の不安な氣分がして、撲られ相なり、蹴られ相なり踏まれ相なり。

何しに此所へ來たか、お小夜に逢ふため、お小夜の變り果た姿を見たい爲めなり。諸所を尋ねても判らず、「居ない女なんか探さなくても、女の多い國てすよ」と、一軒ては散々に毒口吐かれたり。天下の新聞記者、人生問題に就て、特種の感興を有つて居る男も、二束三文の價値しか無い人間に扱はる。

赤電車て歸宅、不得要領の日なり。

三、お小夜であれかし

……月……日、好い天氣の午後三時頃、お小夜を使つて居た××家から、松崎さんに電話とあり。書きかけた情死の雜報を半にして、受話器を耳にすれば、先は女の聲なり。

「お小夜の居所が判りました。淺草の……何でも御堂の裏の方て、白首になつて居るのてすつて。何うしたんてせうねえ、何うしたと言ふんてせうねえ。全く墮落だわ、貴君、大變な墮落よ、何う思つて、何とも思はないんてすか、貴君は。白首、淫賣……」

お小夜を女中に使つて居た、牛込の××會社員の夫人からの電話と判る。「はア」と「へえ」と「驚きました

ねえ」と、「何うしたと云ふんてせうねえ」と繰返して、電話を切つて了つたが。續きの情死記事を書かうとしても、筆が鈍つて少しも進まず、一段半を書いて了ふのに、一時間と二十分を費したり。愚、愚。

夜、大阪の齋藤弔花より電話、「二三日前上京す、久しく君に逢はず、痛飮淋漓を欲す。宿は日本橋本石町、代議士某々等あり、久し振に浪花節を聽かしてんか」と。弔花にも逢いたく、お小夜の居所も突き止めたし。弔花は感興の人なり、お小夜に逢はんとする男も亦、感興の人たるを失はじ。先づ弔花を訪ふ。

「淪落の女」に、何等、藝術的の色彩あることなし。事實か、事實に非ず、創作か、創作に非ず。然も小說に飽き、事實譚に倦みたる讀書界は、一種特別の興味を以て、君の「淪落の女」を見るべし。書くべし、大に書くべし。と弔花、口を極めて煽動す。一度はくすぐつたい樣な氣持がしたれど、考へて見れば或は左樣かも知れずと、少々自惚れざるに非ず。

今の世の文人に、藝妓を崇拜し、藝妓を謳歌し、藝妓に同情するもの三人あり。その一を泉鏡花となし、その二を田村西男となし、その三を杉村楚人冠となす。何れも實在の藝妓を捉へ來りて、自家空想の所産となし、盛に其の意氣を上げ、その情操を說き、その眞面目を論ず。唯一人の「松崎天民」なるものあり、藝妓を見ずして私娼を說き、賣笑婦を論じ、そこに人生の深底を探らんとす。大に佳し、折角奮ふべしと、弔花、醉に乘じて益々煽動す。辭去して後、好い氣持になつて、淺草行の電車に乘る。宛然、大家にでもなつた樣な氣持なり。

觀音堂の裏手を徘徊す。鼠鳴きの聲頻りに聞え、「一寸、一寸」と小聲で呼ぶ聲も盛に聞ゆ。我が尋ねる「お小夜」は、此の夜何所の奧座敷で、男と對座せるにや。巡査に尋ぬべき事ならず、辻待の車夫に問ふべき事ならず。探訪術に掛けては、神出鬼沒とは行かずとも、大概の人にはひけをとらぬ男も、お小夜の所在を尋ねるには、實際閉口頓首の他なし。十一時、失望して歸らんとし、料亭一直の近所を公園に出んとする曲り角

に出づ。

『一寸、お入んなさいよ』

呼込まれたるを幸ひに、曲り角より×軒目の銘酒屋に入る。フロックコートに山高帽、金縁眼鏡に細卷の洋傘、踵に護謨の附いた靴と云ふ扮裝。この邊の女の眼には、新聞記者とは見えず、醫學士位の相場ならん。萬事鷹揚に「ビールでも飲まう」と口を切る。

チャブ臺の上に、エビスの大が二本、白い豆、海苔など出て、女二人頻にチヤホヤ云ふ。

『お前の所へお小夜と云ふ女、居ないか』

試みに問うて見る。女は變な樣子をして、

『お小夜？　居ません、ねえお芳さん、お小夜さんなんて、居ないわねえ』

『えゝ、あのお艶さんが、お小夜と本名、云ひはしないか知らん、聞いて御覽、御信さん』

二人は心當りでも有る樣に、神妙らしく云ふ。あゝ天の引き合せか、お小夜であれかし。

四、唯一の道は何ぞや

お艶が、其の尋ねるお小夜であつた。

牛込の××君の許で、女中奉公して居た頃は、未だ處女の色艶があつた。何を言つても直ぐ顔を紅くして、オド／＼したのが可愛かつた。十六から十八になるまで、歲月にしては短い三年の間に、若い女は斯うも變るものか。お小夜は最う、處女では無かつた。

昨夜、お小夜に會つて歸ると直ぐ、牛込に宛て長い手紙を書いた。後日の思ひ出にもと、こゝへ書き止めて置く。何かの材料となる事もあらう。

拜啓、今夜淺草觀音堂の裏手、××家と申す銘酒屋にて、漸くお小夜に逢ひ申候。

仰せの如く、白首の群に墮ちて、晨に南の客を迎へ、夕に北の人を送るの境涯。荒い鼠縞の新お召に、茶色がゝつた大きな模樣の帶、濃藍色の半襟に、赤い帶揚の映り好き。長襦袢が縮緬に化るの日は、未だ遠かるべき樣子なれど、此の節はメリンスでも事足

る柄合の美しさ。××家でも客分たり、女王たるの格にて、他の女を尻目に見る樣。これがお小夜かと驚かれ申候。

（まア、松崎さん、妾が此家に居ること、何うして判つて、え、え、え）

と、膝すり寄つた時、安香水の匂が致し申候。大きな廂髮の昔は夢と過ぎたり、根の低い銀杏返しに、兩鬢を深く取つて、耳を掩へる樣、場末の安藝妓そつくりの姿に候。

（驚いたらう、僕も驚いたよ）

と云つて遣ると、心持悄氣た樣子になつて、

（牛込ても、知つていらして、妾がこゝに居ること、え、妾、最う何うしようか知ら……）

と、身を慄はせて落涙致し候。戶籍面は十八歲ても、ほんとは十九歲の皮膚の色艷、張り切つた筋肉に、未だ女盛の匂が漾へど、其の眼は最う男を知り初めた女の瞬きに候。何うしてこんな所へ來たのかと云つても、お小夜はそれに答へず。

（男て、二つの名が有るのは、繪師や、小說家や、新聞記者や、役者てせう。女て二つの名が有るのは、藝者、娼妓、賣春婦、ね、女は割は惡いわ、おゝ厭、厭）

とて、今は世を欺く假の名を、お艷と云つて居る由を、冷たく笑つて語り申候。

世間では斯うした女の現狀を見て、一も二も無く「白首」と輕蔑すれど、白首それ自身に云はすれば、皆男が惡いのに候。皆世間が惡いのに候。

（男つてもの、馬鹿ねえ、男つてもの、罪人ねえ。男つてもの、助平ねえ。妾最う覺悟してよ、世界の男を咀ひ殺す……）

傍に居た二人の女に妨げられて、眞面目な話も得せず、其の儘立歸り候。今の問なら海のものとも、山のものとも成り得べし。借金と申しても、五十圓か六十圓を越えざるべく、何とか仕てお遣りなさる御考へ無之や。取敢ず、右御報告のみ、匆々。

月　　日

松崎生

××兄

夜、土曜日の當直、淺草の警察て、私娼の大檢擧をなす由、通信社の電話があつた、百人の内、八十名は梅毒患者て、殘る二十名も壯健て無しと、曾て某署長の語つた事を思ひ起す。お小夜も彼な所て鼠鳴きして居ると、何時かは拘留處分を受け、恐しい病毒を受けて、泣くに泣かれぬ身とならう。

彼等を救ふ唯一の道は何ぞ。信仰か、否、說敎か、否、法律か、否、敎育か、否、唯、男の同情のみ、唯、男の誠心のみ、唯、男の淚のみ。

その男は、何所に居る？

五、過去と現在と未來

……月……日、休、終日在宅。

大阪の客人と共に、一家擧つて三越見物、帝劇見物。雨催いの空陰氣にして、本を讀む氣もせず、手紙書く氣にもなれず。一人て茶を沸かし、一人て飯を食ひ、一人寢轉んて詩吟、薩摩琵琶、磯節、假聲、浪花節。これても三人の子の父かと、自ら嘲り自ら笑ふ。

こんな日に誰か來れば宜いと思ふ。社の同僚を厭はず、同鄉の友なら結構、女客なら大に妙なりなど、待つ心も無く待てど、誰も來らず。酒屋、薪屋、洗濯屋、郵便脚夫、近所の犬ジョン、瓦斯會社の男など、出たり入つたりす。あゝ斯んな日に、お小夜ても遊びに來れば、おすしを取寄せて、お蕎麥を注文して、天麩羅を買つて、キリン位は飮ませて遣るべきものを。それ程の間柄ても無きに、此の二三日、お小夜は我が考察力の全部を侵略して、晝寢の夢にまて髮の香漾ふ。

お小夜の過去、現在、未來を思ふ。

未來は何うなるか、運命の神樣ならては、御承知の無い事なり。現在は何うか、白首なり、賣春婦なり、私娼なり、醜業婦なり。警察の嚴しい眼を忍んて、一圓乃至五圓の僅少な代價て肉體を賣つて居る女なり。泥水に沈むこと、僅に半歲ならずして、天下の男を呪ひ殺すと云ふ女なり。淺い反省と朧氣の覺醒はあれど、

自分が惡くて墮落したとは思はず。何事も男のために斯うなつたと云ひ、男が惡いために、多くの女は此の樣な所に落ちるゝと思つて居る樣子なり。謂ば淪落の第一歩に入つた、娘々した白首の一人なり。

其の過去は何うか、神奈川縣の海邊に生れて、横濱の高等女學校に、卒業間際までは學びたり。父あり、母あり、姉あり、弟あり、今日でも生活に困る樣な實家で無し。世上、多くの賣春婦は、墮落し行く原因と經路とを大抵同一にす。即ち「境遇」の方では、

家庭の事情｛實父の亂行、繼母の虐待、
兄弟の不和、一家の貧苦、
家内の病苦、生活の窮迫、

などに原因して、これ等の不快や苦痛より脱離せんとして、知らず識らずの間に身を持崩す者あり。また一家の悲境を助けんが爲めに、女にして比較的收入の多き職業を求むる結果、事の善惡を識別する暇もなく、一種の傳習的婦德觀に囚はれて、醜業婦の群に投ずる者あり。お小夜には、こんな原因絶えて無し。

更に、これを「運命」の方から見れば、

一身の事情｛性來の多淫、虚榮心の果、
男子の誘惑、自暴と自棄、
生學問の弊、男への反抗、

など樣々あり。お小夜は性來多情の女とも覺えざれど、相當の文字もあれば、女並の虚榮心もあり。何れかと云へば、墮落し易い性格を持つて居るに相違なかるべきも、白首にまで――極めて安價なる――墮落するとは、如何なる事情ありての事か、甚だ合點されず。

二十四五歳より三十五六までの女、小料理屋の酌婦、待合、宿屋の女中、乳母、賣春婦の類は、能く口癖の樣に、「男には最う凝り〳〵した、世の中に男ほど薄情て、男ほど馬鹿な者は無し」と云ふ。これ女と云ふ一種の人間が、何も彼も男に信頼するが爲に生ずる所の結果にして、こんな事を云ふ女に限つて、實は男が居なくては、一日も活きる事が出來ぬなり。我が「お小夜」も、今日あるの責を、男になすり附けんとするに

非ざるか、男こそ好い面の皮なれ。

薄暮、「二葉亭全集」を見る氣になり、二葉亭の傑出した文人なりし事を思ふ。——

帝劇の連中、未だ歸らず。晩飯は一人て、鳥鍋。

六、痴ならずんば狂か

朝來、氣分勝れず、もの思ふ日なり。妻が平生の苦勞を慰めて遣りたく、金あらばお召の袷衣造りて與へたく思ふ。三人の男子、何れも皆可愛し。養子にと望まるればとて、誰をか手放すを得べきぞ。長男に學校の帽子、二男に玩具の鐵砲、三男にゴム人形と靴を購ひ遣る。三圓足らずの金、飲めばとて、何程の醉をか買ひ得ん。三兒の嬉ぶ顔見て、心は耻づること多く、且つ深し。愚なる父……。

十一時出社、この日頃の怠慢、同僚に對して申譯無く思ふ。爲すべきこと、書くべきこと、一再ならざるべきに、何うしても仕事をする氣になれず。社に在るの間、妻を忘るゝ事あり、兒を忘るゝ事あり、家を忘るゝ事あり。心を白紙の如くにして、探訪に從事せんと欲し、雜報を書かんと欲すれど、心身倦怠して、唯、事無きのみ喜ぶ。斯る日ぞ、熱き湯に浴して、冷水を頭より浴び、强烈なるアブサンに醉ひて、淺草公園を徘徊するに宜からん。あゝ此の心、强き刺戟を求めて休まず、怒りたく、泣きたく、叫びたく、唄ひたし。

夜、カフエー、ライオンのバーにて、强くして甘き酒を飲む。夜の歡樂郷は銀座なり、銀座の歡樂郷はライオンなり。諸種の刺戟に生きんとする人々、來り群いて當代の風を展開す。西洋人あり、代議士あり、式部官あり、伯爵あり、畫家あり、俳優あり、會社員あり、官吏あり、敎育者あり、番頭あり。强き酒と、人間の言語と、瓦斯の光と、電車の響と、相觸れ相接して、こゝに「夜の歡樂の都會」をなす。

銀座を歩きながら、別れたる「大阪の女」を思ひ起す。妻あり子あるを忘れて、戀に狂ひたる當年の狂態を、懷しむの情に堪えず。妻は妻として相愛すべし、兒は兒として撫育すべし。然も此の「心の寂寥」を如

何せん、新しき戀を戀する心、甘き酒の醉より來る。
途行く男の顏に、戀に餓えたる人の表情あるを見ずや。
途行く女の顏に、戀を得んとする慾望あるを見ずや。
何となく、俄に、お小夜に逢はん事を思ふ。

淺草行の電車に乘る。淺草橋にて、行くのが厭になりたれど、心を勵まして行く。銀座を歩いて居れば、何の遠慮も會釋も無けれど、中店より雷門界隈に入れば、何ものにか怯ぢ恐れるが如く、顏を見られる樣な心地す。銀座は燈火に燥けど、公園は淋しく暗し。

お小夜の家を訪ふ。「お小夜さんはねえ、昨夜からお客樣に連れられて、川向ふに行つてるのです」とて、他の女二三人、頻りに遊興を勸む。

「貴郎が歸つたてせう、あれからお小夜さん、何だか變なことよ。松何やらさんは何だけれど、牛込に判れば何だとか云つて、それは〱悄氣て居てよ」

女等二人は、この刺戟を求むる男を、お小夜に戀する人と思へるにや。口を極めてお小夜の初心な事を語り、妾達、變な女の仲間ても、お小夜は學者なり、しつかり者なり、行末の事も考へて居れば、

「隨分、いろ〱と煩悶して居てよ、妾達の樣になつてはねえ、最う六百六號なんてすけれど、お小夜さんは、ほんとに可愛相ね。貴郎、何とか仕て上げては不可ないの？」

など云ふ。お小夜不在、面白からず、歸る。

「醉ざめ」を乘せたる靑電車にて歸宅す。

妻の寢亂れ髮、子供の不樣なる寢姿を、五燭光の下に見る。戀も、酒も、歡樂も、刺戟も何も彼も有つた譯のもので無し。「家庭」と云ふ重荷を負つて、戀の重荷を負はんとするは、痴ならずんば、即ち狂か。

七、其の鳥啼の夕暮に

お小夜の事が、日記に記入してあるは、以上の五日だけてある。其の後一度、社命を奉じて甲州へ出張する前に、わざ〱尋ねて行つて、少し許りの借金ならば、牛込の方て何とかすると云つて居るが、眞面目に復活しては何うかと、種々說いて見たけれど、

「御深切は難有う御座いますが、最う二三ヶ月辛抱して、自分で何とかして切り抜けますから、何うか構はずに置いて下さい、ごしようですから……」と、笑つたり、泣いたりして答へた。

甲州の旅は長かつた。櫻開かぬ雨の朝に立つて、櫻咲いた雨の夜に歸るまで、三週間を峽山峽水に送つて、お小夜の事は、忘れるともなく忘れて居た。猿橋の茶店や、大月の宿屋や、鰍澤の小料理屋などで、我が「淪落の女」を見る度毎に、お小夜の行末も斯うかと、涙催さぬでも無かつたが、新聞通信の任務が忙しいので、「お小夜」のために考へる暇とては無かつた。

東京に歸つてからも、「甲州見聞記」の愚文に惱んだり、「春を追ひつゝ」馳せ歩いたりして、お小夜を訪れる時間がなく、櫻の花の散つて了ふ頃まで、××家の座敷に通らずして過した。二三ヶ月は辛抱して、自分で何すると云つて居るもの、俄に居なくなつて了はうとは、實際、夢にも思はずに日を送つた。

四月……日の午後、水戸の東京朝日新聞通信員、東白蘋君が突然遣つて來て、未だ帝國劇場を觀ないから案内しろとの事で、二人連で帝劇を見物した夜。佐藤紅綠君作の悲劇「母」に出る一女性、宇治龍子孃に扮した流れ渡りの賣笑婦を見て、俄にお小夜の事が氣になり出した。宇治龍子孃の女は、

（妾は斯うして、世間を流れ渡つて、一生を送らねばならぬのか。顏には段々皺が寄る、髮の毛は次第に拔けて來る。末は野末でのたれ死をする運命か）と、悲しい述懷をして、妾になつて居る家を出て了つたが……。お小夜も今の所に愚圖愚圖して居れば、皺が寄る、毛が拔ける、病氣になる。暗い觀音堂の裏から、明るい銀座へ連れ出すのは、浴衣の頃を待つて居られないと、其の夜、白蘋君を上野驛へ送つた序に、××家を訪ねて見ると、あゝ最うお小夜は居なかつた。何處へ行つたのであらう！

家の女達の話に據ると、「借金四十圓の代償として、冬の衣類十餘點を置きます」との置手紙して、御堂の屋根に烏啼きの胸騷ぎする夕暮に、默つて出つて行つ

て了つたとか。これぞといふ情夫も無かつたが、隨分勝氣のテキハキした氣性だから、居所が判つたのを迷惑がつて、一時、姿を隱したのではあるまいか。と、家の者等は、猫の子一匹の行方を失つたよりも、大問題にして居ぬ樣子である。

お小夜には、未だ二三度逢ひたかつた。「淪落の女」の一人として、より強い印象、より深い感銘を、現實のお小夜によつて受け、これを成女學校長宮田脩君足下に送る筈であつたに。胸中の未定稿に着手しない以前、女主人公の所在を失して、生くべき筈の「お小夜」が、影の人「お小夜」に過ぎなくなつたのは、何よりも、口惜しく思ふ、損失の樣に思ふ。

あゝ、お小夜は、何時の間にか、居なくなつてしまつた。其の所在を晦ましてしまつた。妾になつたのか、廢めたのか、死んだのか、それさへ今は、判らなくなつてしまつた。

世の光の蔭に咲く、「白粉の花」達が、その姿を隱すのも、さうした烏啼の夕暮か。――（五月十九日夜記）

大陸巡遊日記（三）

漱石生

九月五日

一日位は雨が降つて呉れゝばいゝにと思ふに今日も雲影の無い上天氣だ。天氣の好いのは見物には都合がいゝが、かう毎日暑くちやよわる。

十時過にパンテオンの前に立つ。

鐵柵の中央にある入口を入ると、十一段ある石段へ行く途中に、ロダン作の、かの有名な大銅像『思考家』がある。日本に居るうち、何かの雜誌の口繪で見たも

のだが、實物を見ると更に一層の興味を覺える。日は高いが、此の像の處はまだ日蔭になつて居る。そこて、ポケットに納れて來た、百頁許りの「パンテオン案内記」を取出して、臺石に身體を靠らせながら讀む。

「佛蘭西のエストミンスタア、アベイたるパンテオンは、元サント、ゼネヸエヱヴ寺院と稱せしものにして、巴里の最も壯大なる建築の一なり。傳へ言ふ、千七百四十四年ルイ十五世病んて殆ど回復の見込無きや、切りに巴理守護神ゼネヸエヱヴに祈願し、病氣恢復せば必ず巴理にふさはしき又た此の守護神にふさはしき一大壯嚴なる殿宇を建立すべきを誓ひ、かくて約を果して創建されしものなりと。」

と書き起こしてある。いよ〳〵千七百五十七年に王命が當時の建築の大家スフロオに下つて、五月の二日に建築の圖案を國王に呈上したら、餘り規模の偉大なのに王が驚いたといふやうな、細々しいことが書いてある。スフロオが死んて、未完の建築を高弟のロンデレエが引繼いだこと、當時の設計、内部の裝飾の圖案、千七百九十一年四月當初の目的を變じて偉人國葬の堂宇とすることに國民議會が議決したこと、その月十五日にミラボオが始めて此處に國葬されたとなど書いてある。『正に夜十時なりき。ミラボオの遺骸靜かにその前廊の下に安置さるゝや、參列の群集閴として聲無く、四周恰も死の如く靜かなりき。忽ちにしてラフアエットの號令響くや、二萬の吊銃轟然として……』云々のヂユウル、ミシユレの當時の光景を描いた文まで載つてる。ヺルテエルの國葬、マラアの國葬ルウソオの國葬からして、ヸクトル、ユゴオ、ゾラの國葬など、後ほど詳細に記述してある。面白い。見ると、僕の寄掛つてるロダンの「思考家」の頭に日が射して來て居る。

仰いで殿堂の正面を見る。前廊の眺は實に壯大だ。丸溝のあるコリント風の、直經一間、高さ十間餘の石柱が前列に六本見える。全體ては二十二本あるのだ。蛇腹の下の、繪樣帶には『祖國はその偉大に感謝す』

(Aux grands hommes la patrie reconnaissante) と題してある。その上の、破風の三角面の處には、ダヰツ、ダンゼの傑作と稱せられて居る浮彫がある。中央には、高さ十六尺の女の立像が、自由と歴史との二人を左右にして、その子供達に花冠を分配して居る。その子供の顏は、遠いから能く判らぬが、左方には、ミラボオ、ラプラアス、デルテエル、ルウソオなど全體て十四人居る。右方には、共和國時代帝國時代の有名な武將が居る。ナポレオンの顏だけは判る。隅の方には大學生や工藝學校の生徒も加へてある。

石段を昇つて、前廊の石敷を七八歩行くと、正面の壁に大きな銅の扉が三つある。中央のは、幅二間餘、高さ四間半。この扉の左右に大理石の像がある。アチラに巴理を破壞せぬやう懇願して居るゼネヂエエヴと、レイムの大僧正レミに洗禮を受けて居るクロヂス王と。扉の上にまた浮彫がある。何んてあつたか今忘れた。右の方の扉を押して殿堂の中へ入る。

全體この殿堂は、籠字て書いた十の字形に建つて居て、横が四十六間、縦が六十一間餘ある。側堂は、コリント風の柱廊になつて、柱と壁との間は、本堂の床よりも四五尺高い、石敷の廊下になつて居るのである。

本堂の中央、十の字の中央に當る處を、直徑十二間半、高さ四十五間餘の圓頂閣が蔽ふて居る。外部から見ると、此の圓頂閣の上に更に明取の二重穹窿があつて、その上に更に小形の圓頂閣がありて、その頂上に金の十字架が燦然として朝日夕日を射返して居るのてある。地面から十字架迄の高さが六十四間あるといふことだ。

殿堂の中へ入つて直ぐ眼に付くのは左右の大きな壁畫だ。

右側の第一のパネルは、ピエエル、ヂクトル、ガラン筆「サン、デニの説教」だ。次の四枚のパネルは、ピエエル、プヂ、ド、シヤバンヌ筆「サント、ゼネヂエエヴの幼時」だ。

右へ曲つて、右側堂の右側を見ると、レヂ筆の「シヤルマアヌユの戴冠」を現はした四枚のパネルがある。

紀元八百年十二月十五日、羅馬のサン、ピエトロのバジリカで、時の法王レオ三世が西羅馬帝王の王冠を彼に加へた。シャルマアヌユは右の方から六七段ある大理石の段を上つて最上段近々て將に跪かんとして居る。後ろには幾十百の式參列の臣下が見えて居る。段上の法王は侍僧のかざす天蓋の下を出て、兩手に捧ぐる王冠を前方眼の高さに差し延べて、之を王の頭に加へんとして居る、その書は、どうした理由(わけ)か今だに頭に判然(はつきり)殘つて居る。

この右側堂の突當り、即ち正面には四枚のフレスコ畫があつた。中央にゴブラン織の大掛毛氈(タペストリイ)があつて、その右の二枚は、かの千百三十年巴理の大疫病の折、市民がサント、ゼネギエエヴに疫病消滅を乞ふの圖。その左の二枚は、千四百九十六年雨歇の祈禱の爲め、その聖骨匣をノオトル、ダアムへ運び行く行列の圖、であつたことと程は記憶して居る。

右側堂の左側には、確かジョセフ、ブラン筆の、「クロギス王の洗禮」と「トルピアク戰場にてのその祈誓」であつたと思ふ。

今度は、普通の寺なら內陣(クワイア)のある處へ行つて見る。右側には四枚つゞきの「サント、ゼネギエエヴの最後と葬式」とがある。正面の出張間(アプス)に、デタイユ筆の三枚續のパネルがある。共和政帝政兩時代の佛軍の武功を一つの構圖に描き現はしたものである。「光(エル、ラ、グロアアル)榮さして」と名づけられて居る。此の繪の上の圓天井(ヴオルト)に金色燦爛たるモザイクがある。エベルの作で、基督が佛國の天使に運命を示して居る圖である。今度は內陣の左側の壁畫を見る。四枚ある。ゼネ井エエヴが巴理を防禦し巴理へ食料を運入るゝ圖だ。いづれもシャヷンヌの筆だ。實にいゝ。

黒衣に白の被衣(かつぎ)を頭から長くかぶつたゼネ井エエヴが明月の夜、石敷の庭へ出て、低い石壁に片手を置いて、包圍せられて居る巴理市街を見下ろして居る繪は、終生忘るゝとはあるまいと思ふ。

左側の側堂(アイル)には、右側にジョン、ダアクの四枚續の壁畫がある。正面にはラメイル圖案のゴブラン織の掛毛

氈を中央にして、左右に四枚、人道、故國、家庭、祈禱の壁畫がある。左側にも四枚ある。これはサン、ルイの一生を描いたもので、確かその三枚目のに、クワンズ、ヴン病院の創立ソルボンヌの設立などが現はしてあつたかと思ふ。

これ等を見終ると、今度は本堂入口の左側の壁畫を見て居ることになる。初めの四枚は、デロオネエ筆で、「アチラの巴理への進」軍と「サント、ゼネヸエヴの市民鼓舞」。最後がボンナ筆の「サン、デニの殉教」である。後歸して、殿堂の中央へ行つて仰いて圓頂閣を見る。四つの偉大な拱が結合して居て、穹窿が三段に重つて居る。その中段の穹窿はグロの壁畫で飾られて居る。サント、ゼネヸエヴに對して、上はクロヸス及びその妻クロチルドより下はルイ十七世、ルイ十六世の妹エリザベスに至るまでの國王女王が、歸敬して居る壯大な畫だ。そして拱の三角穹窿には、故國、死、正義、光榮を表はした寓意畫が描かれて居る。すばらいものだ。頸の骨を痛くして見て居ると入口の方から、どや〳〵二十人許り人が來る。制帽をかぶつた銀釦フロックの男が先に立つて大聲でわめきながら來る。壁に反響して能く聞こえぬ。近くへ來た時に、

「地下室を拜觀したい方は唯今私に蹤いておいてなさい」

と反覆して居るのであつた。僕もその連中の一人となる。

狹い石段を曲り〳〵降りて地下室に達する。厚い石壁で仕切つて、三疊敷位の部屋が通路の左右に並んで居る。小さな窓が明いて、中が覗かれるやうにしてある。その部屋〳〵の中に、國葬の光榮を有した偉人の遺骸を納めた石棺が靜かに横つて居るのである。五十餘り順次覗いて見たが、順序は覺えて居らぬ。ルウソオのもあつた。ヴルテエルのもあつた。カルノオのもあつた。ユオゴオのもあつた。石棺の上に、金屬製の大きな花環が供へてあるのが多かつた。

案内の男は一々部屋の前に立つて、頗るゆつくりした、例の佛蘭西一流の尻上りの口調で、聲高に偉人の名と

職業と生年月日、沒年月日を言ひきかして呉れる。能く記憶して居ることだと思ふ。

『ジヤン、ジヤク、ルソオ――フイロゾオフ、エ、エクリヴン――ネ、アン、ジユネエヴ――デユアン、ヴン、ユイチエエム、デセツ、サン、ドウズ…………』

といつた體だ。

餘りゆつくりしたので、外へ出たのが十二時過だつた。眞晝の太陽がパンテオンを正面に見るスフロオ街を眩しい程照らして居る。

直ぐと右横丁へ曲つて、ソルボンヌ大學の前を通つてクルニイ博物館へ足をむける。僅か四五丁しか無いのだが、行き着いた頃には下着は汗に浸つてしまつた。門が締つて居る。掲示を見ると、『日曜十一時より四時迄、月曜閉館、火曜一時より五時迄、水曜十一時より五時迄云々』と書いてある。今日は火曜だ。丁度腹も減つてるので、横丁のとあるレストランへ入つて一フラン半の廉料理を食つた。廉料理といつても五品はあつた。

クルニイ博物館は中世紀の美術品工藝品の蒐集で有名なのだ。品數が一萬一千點以上あるのだから、實は一日見ても見盡くせぬのだが、門内で買求めた案内記を手頼に、目星しい物だけ見ることにする。

地階の第一室はパネル、箪笥、度量衡品。第二室は浮彫物、手箱、古寺院の祭壇の斷片など。第三室も戸棚だとか、雪花石膏の浮彫とか、机だとか錫製の皿だとかで、左程僕に興味を與へるものが無かつたが兎も角、順次第九室までざつと見終て、二階も十二室悉皆見た。

地階にあつたか、一階にあつたか記憶せぬが、デジヨンの或る墓から堀出したといふ喪者の小像、デヰツドとバスシイバの一生を現はしたフレミツシユの掛毛氈、アンリイ三世が創定したオオダア、ヲヴ、ザ、ホオリイ、ゴオストの着た掛絹頸飾衣裳、十五六世紀頃の錦出のやうな七寶のやうな陶器、などは形も色も忘れずに居る。

まだ時間がありさうてあつたから、此處を出てから、セイヌ州の左岸の、並木の土手をテク／＼歩るいて、見殘しの繪を見にルウヴルへ行く。途中、話に聞いて居た、土手に並んてる古本屋を見る

胸の高さ程の、細長いテエブルを幾つも横に列ねて、その上に二尺四方許りの箱が並べてある。箱には表紙の取れた本、假綴の本、古雜誌などが、ぐちや／＼に入つて居る。箱毎に、選取一冊五錢、選取一冊十錢といつた札が立てゝある。氣長に探したら、堀出物はせんても、一寸日本て買へぬ本や雜誌が見つかるかも知れぬが、そんな閑も無いので、素通りしてしまつた。暑いせいか、立止つて見て居る者は稀てあつた。偶まあつても、それは足を休めて、セイヌの川面を渡つて來る涼氣に汗をいれて居たのてあらう。

ルウヴルては、今日も閉館の鐘の鳴るまて居た。

宿へ歸ると、毎日しとゞの汗だ。湯を貰つて身體を拭いて下着を着換るとがつかりする。

夜、煙草買ひながら納涼に表通をぶらつく。佛蘭西のマツチの高いには驚くが、煙草の高いにも驚く。英吉利ぢや十本入のスリイ、カスルが四片（十六錢）だが、此處ぢや七十サンチイム（二十六錢）だ。

九月六日

早く朝食を濟まして、宿から左う遠く無いルクサムブルの公園へ歩るいて行つた。

此處は芝生も少いし、他處で見る角に或ひは圓形に或ひは左右均齊に種々の形に花を植ゑ込んだ花壇は少いが、四方大樹に圍まれた方庭が處々にある。通路には、朝撒いた水がまだ乾かずに居て、樹々を渡る風が襟に涼しく吹く。いゝ氣持だつた。

中央に、大きな廣場がある。四周は石階て上つて行ける高臺て、その高臺には石の欄干がある。廣場には八角形の噴水池がある。この池の南側に、誰れかの紀念碑がある。圓形の浮彫の附いた方尖碑だ。左右兩側には、大理石の柱の上に、何かの彫像のあつたことは記憶して居る。

高臺の欄干に倚つてその廣場を瞰下ろす。

高臺には、五六間置に、有名な婦人の大理石像が欄干に接して立てられて居る。全體で二十あるといふことだ。そしてその欄干の上には、一間置位に、Uの字形の石の鉢が据ゑられて居て、その鉢には一々異つた花ものが一パイに植えられて居る。いゝ眺望だ。

これと少し離れて、ドリア式の池だ。「メデシの池」といふがある。鍾乳洞を模した、柱と柱の間の龕にあるオッチンの彫刻がよかつた。

ルクサムブル博物館に入る。

入口の大きな部屋に彫刻があつて、その右の小さい部屋には、主として近頃の印象派の畫があり、他の數々の部屋には左らぬ繪がある。

僕はルウヴルと此のルクサムブルとを見た丈けて、はや巴理へ、佛蘭西へ、來た甲斐があつたと思つた、ことほど左樣によかつた。到底、繪も彫刻も其妙を筆に書き現はすことは出來ぬ。彫刻のある、入口の大部屋の奥に、十一室あるのだが、どの繪を見てもいゝ。僕のいゝと感じたのは、或ひは僕に了解出來る繪が多いからかも知れぬ。

彫刻では、デラプランシユの「百合の乙女」――垂れた兩手に百合の根元を支えて花の處を右肩に當てゝ居るあの立像。ルメエルの「朝」――頭を右へかしげて兩手て左の鬢の縺れ毛をほどいて居るあの裸體の座像。ブウシエの「野にて」―右頰を正面に身體を斜めに、左手に膝近き花を摘み、花を持つた右手は輕く右膝の上に置いて居るあの半裸體の高浮彫。アラアの「アルセストの臨終」――泣き縋る二人の子を兩手に胸近く抱へつゝ椅子に凭れて仰向けに呼吸絶えなんとして居るあの大きな像。…………と書きつけた處が讀者には判るまいが、僕の頭には歴然と殘つて居る。どれもこれも震ひつきたい程いゝ。

油繪ては、新らしいのてはモネエの「朝食」、モルベリの「病院の診察日」、…………いや、これも徒らに人名書名を列記するに過ぎぬことだから略してしまはう。

午後は電車の中て、右にオテル、デ、ザンヴリイドを望み、暫くして左にエッフエル塔を仰ぎ見て、ダルマ

橋を渡つた處で下車。歩るいてガリエラ博物館へ行つて見た。

建物ほどは立派な——大きくは無いが——伊太利ルネイサンス式の建築だが、内部に陳列してあるものに、左程眼を惹く物は無かつた。

次に、これと遠からぬギメイ博物館へ入つて見た。此處は印度支那日本の宗教に關するものが多く蒐められて居るので有名だ。陶器も随分と集まつて居る。例へば地階のガレリイ、ボブシエエルといふ處が日本の銅陶器に當てられて居るが、それが七區に小分けされて居て、地方分け技術家分けになつて居る。第五區の第十三の箱が萬古、第十四五が九谷、第十七の箱が樂といつた風になつて居る。第七區に香合があるが、驚く勿れ、點數二千七百點ある。

一階のガレリイ、ボアシエエルといふに、日本の宗教に關する物がある。三室あるが、一室／＼がまた幾區にもなつて居る。芝の増上寺(？)と貼札のしてある佛畫のいゝのが幾幅もある。觀音、釋迦、大日如來などの坐像も幾個かある。一寸奈良の博物館へでも入つてるやうな氣がした。

それからテク／＼歩るいてプラアス、ド、レトアアルの大廣場へ行つて見た、有名な凱旋門を見る爲めに。凱旋門は實に壯大だ。莊嚴だ。高さ十六丈四尺、幅廿四間半、奥行十二間あるといふ。正面の大拱は、幅八間、高さ十六間。左右側面の拱は、幅四間半、高さ十間餘、柱脚は、一丈六尺の像を中心にした高さ六間の戰勝紀念像を以て飾られて居る。

東正面の右には千七百九十二年戰神に激せられて佛人奮起出陣の意を現はしたもの。その上にはマルソオ將軍の葬式を表はした浮彫。左には墺地利役の那翁の戰勝とポンナの平和を表はしたもの。その上にはムスタファ、パシャがアブウキルの戰役に降服の光景。此等のその又上の繪様帶には軍隊の出動と歸還とを表はした緻密な浮彫がある。

西正面の右には、千八百十四年の侵入軍に對する佛軍の抵抗。その上にはアルコル橋の通過。左には平和。

その上にはアレキサンドリアの占領がある。左右兩側面には、北にはアウステリッツの役、南にはジエマップの役。

仰いて、長押の上の蛇腹を見ると、東西南北とも圓い楣が彫られて居る。全體て三十あるといふ。眼には能く見えぬが、勝利を獲 大戰役の名が一々に刻まれて居るといふことだ。そして小戰役百四十二の名は、大拱の中の穹窿に彫つてあるのださうな。その穹窿の眞下へ行つて見る。

千八百八十五年六月の一日、ヸクトル、ユゴオの遺骸を納めた棺を此處に安置して市民の禮拜を許し、後ち盛儀を以てパンテオンに埋めたと聞いて居る。その有樣が能く偲ばれた。

二百七十三段あるとかいふ、螺旋形の階段を、汗を拭き／＼昇つて、此の凱旋門頂上の露臺へ出た。寒い程風が吹いて居る。蘇生したやうな氣がした。

俯して凱旋門近くを見ると、門を廻つて石を敷きつめた楕圓形の廣場が小盥程に小さく見える。廣場とその外側の廣い車馬道との境には、太い鐵鎖で繋がれて、御影石の低い圓柱が一間置き位に立つてるだが、圓柱の頭はピンの頭より小く、鐵鎖は髮毛よりも細く見える。人は蟻のやうに動いて居る。遠く東の方を望めば、シャンゼリゼエの大道坦砥の如く、左右の人道を限る二條の大樹の並樹欝蒼として綠滴るばかりだ。正面遙か遠くにルウヴルが見えて、その後ろの宏壯な建物に抽んでゝ、サン、チヤックの塔、オテル、ド、ヸイユなど指摘し得られる。その右にノオトル、ダアムの塔、少し離れてパンテオンが聳えて居る。地圖とひきくらべて見ると、右の方遠くに見える高い建物がヴアル、ド、グラアス寺院、その手前の金色の大圓頂閣がオテル、デ、ザンヷリイド。その又右にエッフエル塔、トロカデロと順次明瞭に眺め得られる。

ルウヴルの左方はといふと、低い圓頂閣が取引所、屋根の綠色のがマドレイヌ、高みに見えるのがベル、ラセイズとベルヸイユ。ずつと北に廻つては、白色の寺院がモンマルトルのサクレ、キユウル。遠くに霞んで

居るのがサンデニ寺院。西を顧みれば、今、日はヴレリアン山に續く連丘に沒せんとして、金色の光線を雲無き青空に高く遠く射て居る。脚下を見れば、シヤンゼリゼエと一直線を爲すグランド、アルメエの大並樹道が少しの曲折も無く、末遙かに郊外の森林まで續いて居る。此の凱旋門を中心として、十二の並木道が八方に輻射して居る光景は實に奇麗だ。飽かず四方を眺めて薄暗がりになつてから、階段を手探りて降りた。

九月七日

今日も無類の快晴。

朝はサン、ボオル迄地下鐵で行つて、カアナバレ博物館を見た。

此處には巴理の歷史と革命の歷史を說明する物品が蒐集されて居る。地階が九室、一階が二十二室ある。殊に僕に深い興味を與へたのは、一階の「革命行廊(ガレリイ、ド、ラ、レボルシヨン)」と「バスチユ室」とてあつた。

前者にはマラア、ダントン、ロベスピイル等の肖像畫があり、マラア遺愛の嗅煙草箱とか、ザルテエル臨終の折座つてた椅子とか、革命を諷刺した掛時計とか、ルイ十六世死刑に關しての文書など、珍らしいものが澤山ある。

後者にはバスチユ牢獄の模型がある。バスチユの石で造つたものだといふ。或る箱には捕縛令狀(レツトル、ド、カシエ)はかり入つて居る。千七百九十二年八月十日の日付の、チユイレリイ防禦者に與へた發砲中止のルイ十六世自筆の命令書もある。革命當時使用した諸隊の旗が天井から垂れて居る。千七百九十三年の憲法の人間の皮で表裝したのがある。バスチユ破壞の光景を現はした簞笥の横に「人間の權利」の表が壁に掛つて居る。こんなことを詳しく說いた本には載つて居やうが、知り給はぬ讀者もあらうかと、茲に一二をわざと原文で御眼にかける。

XXXIII

La résistance à l'oppression est la con Séquence des autres droits de l'homme.

XXXIV

Il y a oppression contre le corps social, lorsqu'un seul de ses membres est opprimé. Il y a oppression contre

chaque membre, lorsque le corps social est opprimé.

XXXV

Quand le gouvernement viole les droits du peuple, l' insurrection est pour le peuple, et pour chaqun, portion du peuple, le plus sacré des droits e le plus indispensable de devoire.

といつたやうな激烈な文句だ

此の外、當時の武器刑罰の諸道具、審問中に撮つたシヤアロット、コルデエの小さな像、マダム、ド、ポムパドウルの不興を招いて三十六年間バスチユに幽囚されて居たラチユウドの像、そのラチユウドが最後の逃亡に役立つた繩梯子など、とりどり面白かつた。

前記二室の外に、「帝政時代室」といふに、千八百六年に那翁一世が使用した獨逸の地圖、那翁の戰時の衣裳那翁の自筆物などあつた。これも面白かつた。

それから地階か、一階か、二階か忘れたが、「演劇室」（サル、ヂ、テアアトル）と稱する一室があつて、其處には有名な役者の肖像、自筆、遺品、親子孫とデユウマ三代の遺物があつた。

此の博物館を出て、晝食に歸る途中でボクトル、ユオゴオの邸宅を見に行つた。

町の名は忘れたが、鐵柵で圍んだ、樹木の植はつた、廣場を中にして、四方に建ち列つた三階造りの建物の一方の、隅の確か六番地と札が出て居る家であつた。元はその六番地の三階（日本で謂ふ）に住居つてたのださうなが、千九百三年に地階から上まで、一切ユオゴオ博物館にされたのだといふ。家の表面の煉瓦壁に石を嵌めて、それに

Victor Hugo
Habita dans cet Hotel
De 1833 A 1848

とあるので、之に違ひ無いと、門の扉を開けて入る。誰れも居無い。のこのこ獨りで階段を二階へ上る。階段の壁には、ユオゴオの著書中の諸景を現はした繪が澤山掛つて居た。

階上の諸室にも、壁には色んな繪があり、壁近くには彫像があつたが、その中頭に殘つて居るのはロダンの

ユオゴオ半身像とダヰッ、ダンゼエ作のユオゴオ青年時の大理石半身像とてある。

階上、入口近くのグランド、ガレリイと呼ばれて居る部屋の中央にユオゴオ作のテエブルがある。ラマルチイヌと、ヂヨオジ、サンと、老デユウマとユオゴオとの自署があり、四人の印氣壷が備へてあるので有名なテエブルだ。

書齋には、全體で四千册あるといふ本棚があり、ユオゴオ自筆の挿繪の下書が壁に隨分と掛けてある。部屋の中央には、千八百八十一年國民の寄贈に係る頗る華麗なセエヴルの大花瓶がある。

三階の入口の部屋にもユオゴオ自筆のペン繪が夥しく掛列ねてある。滑稽畫など仲々旨いもんだと感服した。臨終の間といふのがあつた。小さい暗い部屋だつた。床に近く大きな手箪笥があつた。原稿を納れて置いたものださうな。

何の部屋であつたか記憶せぬが、氏の半身像の前に大きな花環の捧げてある部屋があつた。花環の花は既に凋み枯れて居たが、それに次記の札が吊るしてあつた。

The House of Shakespeare
to
The House of Victor Hugo
26th February, 1911

沙翁の誕生日にはユオゴオ家から、ユオゴオの誕生日には沙翁家からと、毎年缺かさず花環を贈るのださうな。ゆかしい習慣だと思ふ。

午後は餘り暑いので、宿で靜養して、伊太利案内記を繙いてミラン迄の日程を造つた。夜、月明晝のやうであつた。

九月八日

今日も快晴て、朝から暑い。

オペラ座に近いトマス、クツク社へ行つてミユンヘン迄の切符——瑞西のロザンヌ、ルツアアンを經て伊太利のミラン、ゼノア經由て羅馬、それからネエプルス、後返りしてフロレンス、ヹニス經由ての——ミユンへ

ン迄の切符を明日迄につくつて臭れるやう　頼む倫巴間の三等に懲りたから、總て二等切符にと頼んだ。オペラ座の前へ行つて見ると、今夜は「テエス」を興行すると書いてある。二階正面の一席を一フラン五十で附込した。

今日は巴理から西南十一哩のヱルサイユへ行つて見る豫定だから、オペラ座を出るや否や、大急ぎて地下鐵てモンパルナスの停車場へ駈けつける。

ヱルサイユの宮殿！佛蘭西の近世史を讀む毎に、革命史を讀む毎に、幾度逢着した名であらう。千六百八十二年ルイ十四世が巴理を去つて此處を王宮としてより國民に對しての又軍隊に對しての命令は總て此處から發したのであつた。千六百八十四年マリイ、テレエズ死して十四世はマダム、マアントナンを娶つた。そして此の王宮は彼の女の爲に矯飾僞善の中心となり、輕佻奢侈の風を漲らした。續いてルイ十五世に至つては、マダム、ド、ポムパドウルとマダムドバリイとの爲めに此の一國の王宮は殆んど豪奢を極めた娼家の觀を呈するやうになつたものだ。千七百八十九年、國家の破産を救はんが策を講ぜんとして召集された三部會(ステエツ、ゼネラル)は此處て開かれたのである。投票の法に就いて貴族僧侶平民意見を異にして激論の末、平民は別に國民議會(ナシヨナル、アセムブリイ)を設けて憲法を制定せんとするや、ルイ十六世は此の宮殿内の會議室の閉鎖を命じた。それがそもそも革命の端緒であることは誰も知つて居る。此の王宮はバスチユ牢獄破壞後間も無く、即ち十月の六日に、巴理の暴民に襲撃された……といふ王宮だ。また普魯西王ヰルレム一世が巴理を圍んだ時、千八百七十年九月十九日から翌年三月六日まで、此の王宮を己が本營とした。その年五月の十八日、ヰルレムが獨逸皇帝の位に即いたのも此處てであつた………と知つてるその王宮だ。

十一時四十分に巴理を出て十二時十五分に着いた。王宮近くのレストランて手輕な晝食をすまして、すぐと王宮に向ふ。

前面の大廣場を幾十歩にして鐵柵の正門を入ると、左

右に翼閣を有ちその左右に更に鶴翼を伸ばした如き長大な翼閣のある王宮の正面が奥深く見ゆる。その正面の遙か前方に騎馬の大銅像がある。ルイ十四世の像だ。之を圍んで左右遙かの距離に、高さ一丈三尺の大理石の像が十五箇立つて居る。大政治家元帥等の像だといふ。

銅像の處から斜右に進んで翼閣とその右の大翼閣との間の入口から入る。

右手に禮拜堂がある。それを見てから案内書を手にしながら、裏庭の見える小さな部屋を第一第二と第十三室まで殆んど素通りする。クロヸスの時代から革命時代までの歴史的事件を描いた油繪が、大小、年代順に掛け列ねてあるのだが、先が急がれるので立停つて見ては居れぬ。

十三室から今度はその裏側の「石造行廊」と稱せらるゝ長い廊下を後と返りする。主として中世紀の彫像が壁に沿ふて並んて居る。

行廊の中央部から表の方へ向つて、中庭に面した部屋が二室づゝある。その先は表庭に面した大きな部屋だ。此の五室は「十字軍室」と稱せられて、十一世紀より十三世紀に至る十字軍の遠征を描いた大きな油繪が隙間なく掛けられて居り、天井も柱も總て此の遠征に加はつた諸王諸侯の紋章で美しく飾られて居る。

入口の處へ歸つて、大理石の美しい階段を二階へ上る。此處にも裏庭を見渡さるゝ部屋が順次十二ある。「千七百九十四年より千八百三十年に至る歴史畫々廊」と稱せられて居るものである。これも殆んど素通りにして、地階の「石造行廊」の眞上に當る廊下を通る。「彫刻行廊」と名づけられて居る。古代の彫像が列んで居る。

次に、地階の「十字軍室」の眞上に當る部屋へはいる。ルイ、フイリップから那翁三世に至るまでの歴史畫のみ壁に掛け列つて居る。よいゝのがあるから少しゆつくりと見る。ヱルネ筆の「オウマル侯スマラア占領」といふ繪なんど、素ばらしく大きなものだ。幅七十呎高さ十六呎半といふ大きさだ。其他同じヱルネ筆の「コンスタンチン攻略及び其の占領」と題する三枚續の大

幅もある。クリミヤ戰爭伊太利戰爭の大幅もある。ドレの「露國退却」もある。ミュルレルの「恐怖時代の最後の犧牲」もある。

階段の處へ後と歸りして、今度はいよ〳〵、王宮正面の本建物の二階の部屋へ入る。

此處が王の居られた部屋〳〵なさうなが、その後改造もされ、什器繪畫も昔の物は無いといふことだ。然し天井、鍍金した漆喰(スタツコ)の裝飾、パネルなどは昔の儘だといふ。所謂「ルイ十四世式(クロトルズ)」なる裝飾は充分に窺ふことが出來る。

入口の「エルクウル室」といふにはルモイン筆の「ハアキユリイズの崇敬」と題する六十呎に五十五呎の天井繪がある。畫中の人物百四十二あるといふ盛んなものだ。

それから四つ目の「軍神(マルス)の室」、――これは音樂室に使用されたものさうなが、此處の、狼が牽いてる戰車に乘つてるマルスの天井繪は美しかつた。それから「マアキユリイ室」、「アポロン室」、ともに天井繪がいゝ。次の「戰爭室(サロン、ド、ラ、ゲエル)」の天井繪は、ル、ブランの筆だ。圓天井には、佛蘭西が片手に楯を提げ片手に電光を放射して居る。その四隅の拱側(スパンドレル)には、ベロナ、西班牙、獨逸、和蘭が恐怖に打たれ畏縮して居る。

其次が音に名高き「硝子の行廊(ガレリイ、デ、グラアス)」と稱する大廣間である。幅五間半、長さ三十九間半あるといふ。此の王宮正面の二階の裏坐敷に當る處になるのだ。裏の大庭園を見晴らすべき、アアチ形の窓が十七ある。その窓の反對の側の壁には、ヱニス風の歪角に切つた大鏡が、華麗な飾緣に篏められて、窓と相對して居る。壁の鏡ならぬ處は悉く大理石で、それには大きな鍍金した銅の戰勝標が飾に篏められて居る。蛇腹(コルニス)には、鍍金した漆喰製の佛國の王冠勳章が飾られ、その上の半圓形の穹窿は總て皆ル、ブラン筆の油繪だ。その油繪は大きいのが八枚、その間々に、左右に、小さいのが十八枚ある。ルイ十四世の千六百六十一年から七十八年までの事蹟、殊に獨逸和蘭西班牙との戰爭に因んだ繪が多い。中央の一番大きい繪は、王と王の主權を天下に布

告して居るマアキユリイを現はしたものである。床板はといふと、埋木細工で、鏡のやうに光つて居る。一歩を運ぶ毎につる〱辷りさうだ。此の部屋の什器は悉く純銀だつたといふことだ。普魯西王ヰレムが獨逸皇帝の位に即いたのは實に此の部屋てであつたと思ふと感慨無量だ。

それから、何んの部屋、何んの部屋と幾つか過ぎて、ルイ十四世の寢室も見た。壯麗眼を驚かす許りである。次に十許り、いづれも華麗な部屋があつて、南の翼閣の「戰爭書堂」へ入る。「硝子の行廊」に劣らず壯麗だ。幅七間長さ六十五間半。左右の壁は總て三疊敷以上の大幅の戰爭畫て充たされて居る。三十四枚あるといふ。壁に近く、左右相對して有名な武將の半身像が規則正しく整列して居る。計八十箇ある。

次にこの南の翼閣の各室、本建物の地階の各室を順次あるいたが、記憶して居らぬ。兎も角百五十幾室見巡つて、疲れた足をひきづりながら裏の大庭園へ出たら日は餘程傾いて居た。

庭園は僕等日本人の眼には餘り規律正し過ぎる、均齊過ぎるが規模の宏大なことは驚くに足る。園内處々に大理石像銅像がある。ル、ブランとミニヤアが監督して一百の彫刻家を使役したといふのだから、彫像の數も推察される。

森林かと思ふ喬木の並木を左右にして芝生の大道を數百歩行けば菱形のアポロン池といふがある。盛んに數丈の噴水をあげて居る。その先には十字形の大池がある。右へも左へも大道があつて、横道――と言つても少さからぬ道が幾何學的に幾本もある。花壇があるかと思ふと、林があり、又芝生がある。道に迷ひさうだから引還した。

六時前に宿へ歸つて、下着を着換へて、すぐ飛び出す。途中レストランで夕食をすまして、八時前にオペラ座前の地下鐵から地上へ飛び出る。

此の座は十四年の星霜を費して成つた世界一の大劇場だ。建築だけに千四百六十萬圓を費したものだといふ。

惜しいことには見物席が二千百五十八席しか無いさうな。

敢て巴理に限つた譯ても無いが、平土間さては棧敷にぎつしり詰込んだ看客が、男は純白なシャツに燕尾服、婦人は夜會服、そしてその婦人の腕飾首飾の寶石がきら〳〵燦く。そして玩具のやうな扇で胸先を輕く扇いて居る。その光景をいかにも巴理らしく感じた。

序樂が歇むと、芝居と違つて、拍子木で舞臺の床を丁丁と敲く、と、ずる〳〵と緞帳が捲き上る。

舞臺正面、低い砂丘が遠く起伏して居る。青空には白雲が著さうに漂ふて居る。下手に椰子林の一端が見え上手には椰子の樹蔭に敗屋一二軒。總て埃及ナイル河岸なる修道者の庵室の體。日はまだ暮れ切らぬ。修道者十二人と老人のパレモン、長い食卓を圍んで座つて居る椅子が一つ空いて居る。それはアサニエルのだ。

一人の修道者が

『此處に麵麭が』

と麵麭を食卓へ載せる。他の一人が

『また鹽も』

また他の一人が

『また、そつぷも』

と順次聲高に然し靜かに歌ひながら質素な食物を運ぶ。お恥しい次第だがオペラといふものは今夜が初めてだ。芝居と能とを折衷したやうなものとは心得て居たが、皆んなの歌ふ臺詞が——こんな修道者なんか端役が遣つて居るのであらうが——實に旨いには驚いた。やがて疲勞しきつたアサニエルが憤懣の色を顏に浮べて下手からゆる〳〵出て來る。皆々に迎へられて食卓に就く。そして

『アレキサンドリアの町は罪惡に充ちて居る‥‥
テエスといふ女が』

と此の美人の爲め淫亂逸樂の盛んに行はるゝことを說き、町を救はては止まじと慨嘆する。

いや、「テエス」の筋書を書く積りでは無かつた。

此處ばかりぢや無い、西洋の劇場は背景が極めて美術的に出來て居て、そして光線の使用が實に巧みだ。

三幕七場の此のオペラは、どの幕も、どの場も、呼吸もつけぬほど面白かつた。最後の場が濟んだ時は、氣が拔けたやうであつた。

九月九日

今日はまだ夜が明けるからはや暑さが非常だ。そよとの風も無い。到底もこれぢや遣り切れぬと思つた。

朝食後クツク社へ行つて、昨日賴んで置いたミユンヘン迄の汽車の切符を受取る。二百四十八フランと十五サンチイム（九十六圓餘）拂つた。

一旦宿へ歸つて今日は何處へ行かうかと考へて見る。連日の見物て、それに毎日の暑さて、少々屁古垂れの氣味だ。瑞西へ行つたら斯んなに暑くはあるまいとも思ふ。まだ瑞西、ミラン、羅馬、フロレンスと伊太利の諸都も見なきやならぬ。斯んなにゆつくりして居ちや獨逸へ入る頃には寒くなりはせぬかとも心配される。巴理から白耳義和蘭獨逸と經て、伊太利を歸路にすればよかつたと後悔をする。

手紙が三通來た。一つは巴理のメルキユウル、ド、フランス新聞記者て倫敦タイムスの文學附錄へ寄書するアンリ、ダヴレイ氏からのだ。面會したいが、例年通り、今ノルマンデイへ行つて居る。急がぬ旅ならば遊びに來て吳れぬかと極めて親切な手紙だ。今一通は那翁三世皇后ユウジイヌの親近のクラリイ伯爵からのて、明日エルサイユの自分の宅へ晝餐に來て吳れといふのであつた。今一つは倫敦の親友オスマン、エドワアヅのブラツセル發ので、エルハアレンへ紹介したいと思つてたが、エルハアレンは今白耳義へ來て居るから巴理ぢや會へまいといふ手紙だ。モオニングもフロツクも持出して無いことだから、晝餐の招待は斷ることにする。旅中とはいへ、伯爵家の人々に對して斯んな脊廣ぢや失禮だと、着古るした紺の略服を顧みて見る。暑いのにノルマンデイまで行く氣にもならぬ。一層のと瑞西へ行つてしまはうかといふ氣になつた。

そこて滯在中買求めた品を、カバンに入れては重くなるから、小包にして倫敦の宿宛に送ることにする。包紙と綱とを買ひに出る。小包を三つ造つて近處の三等

局へ持つて行くとその中一包は定量超過だといふ。持歸つて二包にして又持つて行く。それだけ汗になつてしまつた。買ひ殘したものを思ひ出して買ひに出る。そんなこんなで此日は到頭何處も見物せずに暮した。夕食後宿拂をすまして、馬車を飲つて貰つて、ガアル、ド、リオンへ九時に行きついた。

途中、車上から見ると、何處のカフエも人が一パイだ。例の人道を塞いで列らべてある椅子には殆んど空席が無い。納凉がてら一盞きこしめしてるのだらう。あんなに込んでちや暑からうと思ふが、人道と車道とを限る並木が瓦斯の街燈の光を遮つて、黒い葉影が卓上に人の肩の上にちら／＼して居る景色は、見ても凉しさうてある。

アウステリッツ橋を渡る時、セイヌの兩岸の宏壯な建物の部屋／＼に輝く燈光が川面に映つて居る景色はよかつた。東を見ると、月は大分上つて居る。空は水のやうに澄んで居た。

西洋では、遠くへ行く汽車は早くから停車場構內へ來て居る。時間間際に改札するてなことは無い。僕は九時半にならぬうち——喫煙と書いてある、廊下付の二等客車の一室へ——乘込んだ。でも先客があつた。三等は仲々込むらしい。二等にしてよかつたと喜ぶ。

十時十分に發車した。（未完）

緑

黒頭巾

其一

●緑の蔭にて語るは樂し。殊に、今年は語るべき事多

し。若し、それ會心の人と、野趣の漂へる雜木林の見ゆる、綠樹の下に、倚子を移して、心ゆくばかり語らんは、一年間の美しき事にはあらずや。

●綠は、柳の若葉の繁れるを愛す可し。田舍の麥畑青々として波打てる中に、處々、二三本、大なる柳の木の、若葉の、黃ろ味を帶びたる綠の、房々として茂れる塊のように浮び出てたるこそ、言ひ樣も無く匪はしきものなれ。

●綠は名の無き綠こそ嬉しきものなれ。昔より人も知り盡し、語り飽きたる綠葉の、さまて、情を動かさずして、却つて雜木の綠の、人を引くものある也。蓋し、古來、有名の風景といふもの驚くに足らずして、無名の野景、詩趣の湧くものあるが如きなり。

●花の紅なる、固より玩賞すべし。然れども、綠の中に、紅の若葉の萌え出るは、更に吾が眼に可なり。カナメの木は、這般の趣味に於て、萬木に冠たり。此の木、關西に無くして關東の名物たり。而して古、未だ稱揚せられず、今に於て、其の秀美を擅にす。明治の新しき綠の一なるべし。モクコクは關西の庭園を飾る。カナメに似て非なるもの。

●此の頃の停車場は、花と綠とを以て飾る。吾が鐵道の漸く美化しつゝあるを見る。大停車場にては、月並の樹木を植ゑて、綠葉の新らしきもの無し。趣味は小停車場に在り。就中、名も知られぬ小驛に、村趣の充てる、名も無き綠の垣を以て、驛名の揭示札のバックを爲せるを、尤も趣味深しと見る。先月、下總を過ぎしとき、印旛沼に近き小停車場に、吾等の、初めて見たる巨葉の綠の垣ありしを、窓を推して、煙草を燻じつゝ、飽くまで眺めしが、驛長を呼んで、綠の名を聞きしを、今は、驛の名も綠の名も、共に忘れしも、快かりし綠の印象は、尙ほ眼中に在り。

其二

●前日來、屢、砲聲を聞く、千葉縣あたりにて實彈射擊を爲すにてあらん。重響の到る每に、窓前の深綠、皆な震搖す。

●此の日、客の來りて地方人物を說く者あり、越後の長谷川鐵之進の事、奇談あり。錄して此の奇士を傳ふべし。

●長谷川は維新志士也。高杉、奥平に交はり、之に依りて長州に投じ、戊辰の際、北越征討軍に從事す。彼の前齒二本缺けたりしは、下總の志士、海老原郁次郎と喧嘩して叩かれたるなりといふ。海老原も大男、擊

劍を善くし、能く長谷川の腕力を控く。

◉長谷川は魁軀にして磊落、好んで朱鞘の長劍を帶ぶ。一夜、兩國の井生村樓に押上り、陰嚢を出して、大坐敷の眞中に仰臥し、頻りに手を拍つて酒を呼ぶ。

◉磊落、彼の如きも、維新志士に在つては、必ずしも珍とするに足らず。今日ありて明日を計らず、志士の命は風前の塵の如し、生前一杯の酒に氣を吐き、狂態を演じて、人も驚かざりき、今より見れば夢の如し、又た時勢の變也。酒、遂に到る。長谷川起きて、續けざまに數杯を鯨飲し、陰嚢を盃洗にて洗つて去る。

◉朝來、漸く曇、午に近くして暗雲低れて綠樹に接す。午砲鳴る時、雨パラ〳〵として落ち、綠葉音して飛ぶ。

其　三

◉綠は松魚の時節也。「目に青葉、山ほとゝぎす、初松魚」此の時の景光、此の一句に盡く、吾輩甚だ此の句を愛す、而して松魚を好まず。

◉松魚は江戶趣味の一也。吾輩、田舍漢が松魚を好まざるは、江戶趣味を解せざる所以の一ならずんばあらず。松魚は東國の鄉味也。

◉柏如亭は純たる江戶兒の詩人、神田に生る。彼の詩本草といふもの、尤も食味に精し。元と江戶兒は「味の人」なり。如亭は此の意義に於て、江戶兒の代表者たるを失はず。

◉江戶兒は端午の鯉の吹流し、口ばかりの人とも云はるれども、必ずしも口ばかりに非ず、舌の人たらずんばあらず。奇句、警句、口を衝いて出づ、而して奇味、珍味、尋常ならざる、月並ならざるの味、必らず嘗め分つ。江戶兒が初松魚に殉ずるは、舌の人たる所以なり。

◉江戶兒は、味に於ける、必ずしも食ふ人には非ず、鑑賞家たり、評論家たらずんばあらず。田舍者は、有の儘の味を賞す。江戶兒の舌は即ち、鑛山家の鍬なり。必らず奇味、所謂、味の乙なるものを堀り當てずんば已まず。これ田舍者と江戶兒との、舌に於ける都鄙の別也。

◉江戶兒の舌は、例へば評論家の筆が藝術に對するが如し。如何なる畫家の畫も、一箇の長處あり。如何なる淨瑠璃にも、其の師匠の及び難き妙處あり。其の長處と妙處とを摘出するは評論家の筆なり。江戶兒の舌は、一味の中より、乙な味を穿ち出さんとし、又た能く穿ち出し得るものたらずんばあらず。

其　四

◉地方より十四日の日附を以て通信を寄す者あり、曰く、吾地方は、總選擧、混戰の情態に在り、參謀の手腕を示すは、今夜に在り、決勝の一夜、痛快々々と。これを以て見れば、彼は、一軍の黑幕にして、決勝戰間際にヘヴォーを出すの健脚を以て、自ら任ずる者ならずんばあらず。吾輩の知るところを以てすれば、彼も亦た、早晩、逐鹿場裏の人たらん。

◉決戰の前夜、勇士の心中、ひそかに微笑しつゝあり、蓋し、光榮を待つの心よりは、其の力を自覺するの喜なり。這般の心地、月桂冠を得たる後と雖も、遂に、此の崇高なるに及ばず。輝きは、日出後に在り、榮は日出前に在り。

◉吾輩も亦た總選擧の日、一友に逢ふ。昂然として語るらく、「世上には見込無しと評判せし中に、竊かに陣を進め、石を布きたり、唯だ、其の成果を見よ」、蓋し彼は、候補者を助けて、候補者以上の熱心を發揮したり。若し、當選せば、候補者の努力よりも後援者の人格を偉なりとせん。彼は骨頭ある男兒なり。

◉吾輩は、吾が國民の總選擧に對する責任の觀念の、尙ほ薄弱なるを思はずんばあらず。例へば、同一の名を以て、二人の候補者を推選し來るが如きも、其の一事實也。東京市に十一人の候補者を必要とすればとて、投票者は、一人一票に限らるゝを奈何せんや。

◉吾國の選擧は尙ほ情實投票の時代を脫する能はず、國民の多數者が自由意思に依て投票するの時は、頗る遼遠たるの感無くんばあらざるなり。今は、投票を賴み、賴まれ、乃至、强ゐ、强ゐらるゝの時代也。賴まれ、强ゐらるゝを嫌ふ者は棄權す。吾國は憲政の光輝を有すと雖も、投票に棄權者多きは驚く可し。

◉吾輩の落手せる、候補者の告白書には、往々にして、「貴下の淸き一票を求む」と記する者あり。未だ「自由なる一票」を求むるといふ者はあらざる也。候補者及び其の援助者は、淸き運動を爲す可きを解す。恐らくは、未だ、投票の自由なるを認めざるなり。

◉東京に於て、棄權者の尤も多きは、西片町十番地なりと聞く。此の町は、所謂學者町なり。此の地帶に包容する最新智識の總額は、吾が帝國の文明に、重大なる干係を有す。此の町にして、此の現象を呈しつゝあるは、吾輩、帝國憲政の進步の爲に取らざるなり。

◉芝、京橋、日本橋、神田の方面に涉りては、棄權者少く、隨つて競爭も亦た激烈を極む。芝の洋服屋に、運動の妙手を以て知らるゝ者あり、其の秘訣他無し、

合掌して以て禮拜するの一法に在り。彼は「拜み到し」の一語々實現しつゝあり。公桂の所謂元老「拜み倒し」の、唯た、態度に表情するのみの比に非るなり。

◉鈴木梅四郎は金力を揮りかざして逐鹿場裏に立つと傳へらる。彼の代理者は、選擧の當日、有權者を三たび訪問す。未明に來り、朝來り、午後來る。二三人同伴して、羽織袴ゝ甚だ美なり。藏原惟廓の代理者の如きに至つては、綿衣つくめにて來る者あり。

◉戰敗者の運動には、形勢の有望を説く者少からざりき。高木、鈴木の如きは、期日前に迫りて、「ドウも危ないようですから、切に御同情を願ふ」と言ひ廻る。自から危い事を公言し得る者は、危からざるの自信ある者、之を能くす。

◉鳩山春子の選擧に斡旋せし以來、輓近の候補者は、夫婦共嫁といふ事、殆んど常例となる。渡邊千冬は選擧演説に於て、樋口勘次郎を紹介するに、「此の人は、諸君の御子さん達の教科書の泰斗」といふを以てす。中島行孝の子は、父に代りて有權者を歷訪す。此の次の選擧には、候補者の子、大に働かん。次ぎには令孃大に活動せん。速かに、子女を、有効に活用する候補者は奇切を奏せん。

◉小牧の役、太閤は母を德川に送りき。英雄は、夙に、人情の急處を衝く事を解す。將來の候補者は、妻といはず、子女といはず、須らく家内總出にて活動せずんばある可らず。

其五

◉山陽が箕尾瀑布を觀るの詩に、作意山風爭氣勢、橫吹黃葉滿前飛の句あり。木葉の飛ぶは秋のみにあらず。此の頃の黃風時節、綠樹の下、葉の粉々として飛ぶを見る。去年の葉の落つる也。

◉輓近の理想選擧といふものも、中々の運動費を必要とせずんばあらず。眞に理想選擧の實を擧げ得る者は、恐らくは河野廣中及び其の餘二三人者に過ぎざるべし。

◉聞く、河野は、今年の選擧に、金策に腐心す。人、其の金額を問ふ者あり、曰く、五百金なり。聞者驚倒す。蓋し、今の世に、五百金を以て、代議士たるを得る者は有らざる也。

◉然りと雖も河野に取りては五百金は莫大の大金ならずんばあらず。鈴木梅四郎の如きは五六萬以上の巨額を投じ、尙ほ、得票は藏原に一籌を輸す。河野は、昔しは十五圓あれば、運動費を辨じ得たりし也。河野は

人格の人たるを失はず。

◉政友會の天下に、帝都の代議士に、一人の黨員をも擧げ得ざるは、此の大政黨の力を以て、江戶兒の氣慨の發揮を屈する能はざるを見る可し。吾輩、之を以て、政友會の爲に惜み、江戶兒の爲には痛快とす。

◉高木益太郎は再たび最高點を得る。彼は元來、江戶兒也。思の外、如才無き人也。議員として亦た能く爲す有るを得る。彼の標榜するところは、頑を打ち、强を挫き、元老を彈劾し、藩閥を攻擊し、維新史料編纂の全部抹殺を主張するに至る。這般の態度、江戶兒の喝采に値す。

◉高木は、其の父、昔し、淺草の千束町を開き、今に於て富を爲す。其の富、其の辯、政友會に逆づて其の名を爲すに足る。吾輩は絕對過半數の大政黨、議會に跋扈するの時、幾多の快男兒、少數黨より出でゝ氣焰を吐く、あんら事を期待せずんばあらず。

◉仙石貢、柴四朗の落選は、稍、意表に出づ。政友會の內閣なれば、これ位の事はあるべき筈なり。而して一面に、壯年新人物の漸く逐鹿場裏に出るは、舊人物の交迭期の來れることを示す。此の次の總選擧には、候補者の人物、恐らくは新舊相半ばせん。

◉古島の再選は、操觚者の爲に氣を吐く者なり、而して帝都は。再び藏原に古島に同情する如きは、恐らくは地方に得難き事なるべし。藏原は議會に於ては第一流の辯士には非ず。然れども錦輝館に出現せしめば、第一の雄辯家たらん。

◉二十年前、古島が「日本」記者たりしころ、喜んで詩を作り、詩を說く。彼の友人翠城、彼の詩を論評し、氣燄大に揚る。坐に、一客あり、黑髯毿々として胸を掩ふ。徐ろに口を開いて曰く、「貴方も、詩は、餘程お好きのようてす、お相手になりましせう、お遊びにいらつしやい」

◉翠城は客の誰たるを知らず。古島は、彼が、其の詩を罵倒するを以て、遂に客を紹介せず。翠城問ふ、貴下、何人ぞや。客答ふ、國分てす。此の刹那、翠城、客の靑厓山人たるを思ひ得て、頻りに頭を搔く。翠城をして、散々に氣を吐かしめし古島は、中々、人が惡るかりし也。

其 六

◉新は、疊と衣とに限る可きや。語は須らく新なるべし。語新たらしきは、其の人新たらし。而して時代と離れては新たらしき語あること無し。靑年は擬古の文

と語とを嫌ふ。

●此の頃、小學生の文を見るに、口語文を用ゆるもの、觀察も、造句も、新意の吾輩を驚かしゝもの少からず。漢文の力、吾輩等の少年時代に比すれば、雲泥の相違あり、然れども、其の文は常套を脫して、新機軸の句あり。

●小學に於ける文才が、中學に入つても、尙ほ文章家たるを失はず。而して高等學校に進み、大學を卒るころ、全然、舊年の面影を失ふ者少しとせず。彼等は、學年の進むと共に、次第に學問に縛ばられ、書籍に、捕らはれ古人の糟魄に魅ゐられて、漸く、自己の新意を失ふに依らずんばあらず。

●學究者は、屢、無學者の名文を見て、驚嘆措くこと能はず。書籍を讀まずして、何故に、文を能くするやを怪み、文に別才あり、書に關せすなどゝ言ふ。彼等は、誤つて書を讀んで、書に捕はられ、個性を失ひたることを、未だ自覺せざるなり。

●書に捕らはれずんば、文を作るは、多く書を讀むを可とす。要は、書を以て、個性の發揮に資するに在り個性は、則ち、新意ならずんばあらず。

●川柳冠附、柳樽の類、奇句、古人を壓するは、新意に富めばなり。杜子美が語不驚人死不休の句は、彼が個性の發揮を表章す。

●語の尤も俗にして、調の殊に奇なるは、冠附ならずんばあらず。語の俗なるが故に、新意發露す。人耳に入り易しといふにはあらず、耳朶に觸れて銳き響あるなり。

●吾輩は冠附を愛讀す。冠附の名句を出しゝ人は、多くは傳はらず、往々にして、心胸面目、果して如何の人ぞやと想はるゝもの無きに非ず。

●冠附の、けんもほろゝに「あんた床几て、御ゆるりと」氣が利てに「下駄てするのか色事を」、麒麟も駑馬に「アレが百兩した娑々か」といふ如き皆誦すべし、きり〳〵舞に「違やせんのか此鍵は」に至つては、千古の絕唱なり。

●俗を穿つに俗語を用ゆ、冠附にはパノラマの味あり冠附は鄕愿者の能くするところに非ず、僞善を去つて、個性を暴露する作者に名句あり。そも〳〵姓に、奉加帳「十二銅とも付けにくい」恩を仇に「字引貸したら墨附けて」つらいナアに、異見「例の眞綿が始まつた」立鳥は跡に、げいこ「どうぞ姉はん二階のに」の如き、思ひ切つて穿つに性命あり。

◉穿つといふは、身近く引いて、餘韻を人に讓るに在り、やぼては無いに「一口呑むと去にやはつた」、口は重寶に糸切齒「もう宜しいぜ、鋏なら」「ころつと幼男にお土產を」といふ如き、卑近なるが故に、深刻を致す。深刻なるが故に印象的なり。

◉吾輩は、官立學校の作文、概ね、種々の範圍を劃し、多く自由を與へず。小學に、自然に伸びし文才を、中等以上の學校に於て、其の萠芽をむしりて取り去るの感無くんばあらざる也。

其 七

◉麻慶對戰を觀るの日、谷河梅人に邂逅し、彼の案內に依つて、慶應義塾の圖書館を觀る。彼は、嘗て館員たり、初めて目錄を作り、且つ星亭の文庫を整理せし人也。

◉圖書館の閱覽室を通過し、最高樓に登る。月波樓といふ、迎賓閣なり、中村不折が樓名の題字を掲ぐ。西に富士山を望み、東に、芝山內の蒼翠を望むべし、品川灣、碧色を展開し、御臺場を其の中に浮ぶ。海山を俯瞰し、人國の變遷を瞑想すれば、杜詩、吳楚、乾坤の慨無くんばあらず。舊義塾にありし月波樓は、木造にして、園樹肅洒たり、舊島原藩屋敷の一部たりしもの、今の月波樓は、其の名を記念する也。圖書館の建築、設備に至つては、其の後、開館式の時を以て、帝都の新聞に紹介せらる、吾輩茲に贅せず。

◉此の日、吾輩の感興を引きたるは、福澤先生の遺墨及び義塾初年の史料ならずんばあらず。是等の材料はすべて紀念室に陳列し、彼の肖像を環りて按排す、像は河村清雄の油畫なり。紀念室は、平生、兼ねて、來賓室に充つ。室を出でて正面の大階段を登れば、突當りに、和田英作の意匠のステエンド、グラス立てり、「文明」の女神、雲を排して東方に曙光を導くの圖を描く。

◉案內者は、三階の一室に滿てる古公卿諸將の書畫を誇りたれども、吾輩は、それよりも少數なる福澤の遺稿を、價値ありとして賞讚したり。古來、萬公卿、優腕なる筆冊を留むるものありと雖も、豈、敎育立言の一平民福澤に比す可きものあらんや。

◉吾輩は、今、多く雪池先生を說くの要無し。二十九年十一月十一日、彼の義塾先進の古老生の懷舊會を紅葉館に開きし、時自筆の演說原稿の中に、「老生の本意は、此慶應義塾を單に、一處の學塾として甘んずるを得ず、其目的は、我が日本國に於ける氣品の泉源、智德の

模範たらんことを期し」と云ひ、之を以て「恰も遺言の如くにして、之を諸君に囑托するもの也」と附記す。此の一條は、彼の精神にして、彼、死すとも。此の精神の儼乎として存せんことを期せしなり。

◉福翁は、明治辯論の發達に關しては實に木鐸たり、演說、討論の術を敎へしは勿論の事、其の題目、時勢の活問題を主とし、併せて學生の識見を養成す、今の所謂、擬國會といふもの、彼、其の端を啓く。

◉演說、討論會の記錄は、殆んど、すべて保存せらる。其の中、七年一月第二會、水曜日の演說日記を閲するに、宿題(一)臺灣征討軍の勝敗に依て日本國の得失如何、(二)日本政府にて蠶種の保護は、國の爲に利か、不利か(三)學黌の功能は何如程か、其の箇條は如何か、といふの類にして、議場の整理も、亦た著々として行はる。當時、議場の辯士、今、政壇に、財界に名々爲す者少しとせず。尾崎行雄、井上角五郎、波多野承五郎等、皆、此の中より出ず。

◉實を言へば、擬國會の實は、既に、維新前志士の間に發達し、唯だ、其の形式無かりしのみ。松下村塾の如きは、松陰先生を環りて門人青年侍坐し、時事問題を討論研究したるなり。高杉、久阪、伊藤、山縣は當年の少年議員たりし也。

◉松陰先生が、村塾を以て、『松下雖二孤村一、誓爲二神國幹一』と唱へしは、一村塾を以て、帝國の命脈を維持するの大抱負なり。福翁が「單に一處の學黌とするに甘んぜず」と言へるも同一義也。兩者の敎育上、偉大なる成功を敢てせしものは、唯だ、這般の大精神の發揮に外ならず。此の大精神を永遠に傳ふるは、後繼者の責任なり。

◉福澤先生は、新聞の發達にも貢獻したるの功少からず今、記者室に見るもの、彼と中上川彦次郎と協力して編輯したるもの、七年六月發行の民間雜誌の一編を留む。彼は何事にも「民」の字を冠す。平民は彼の生命なり。

◉大敎育家が、新聞に腐心するは、古今、内外同一轍ならずんばあらず。義塾が成功の一半は、福翁の新聞眼に在り。松下村塾に於て、松陰は、各地の志士政客より寄せ來れる、形勢を論ずるの書束を綴りて、題するに「飛耳張目」の名を以てし、日月を逐ひて、取捨し增補し、之を以て新聞の用をなさしむ。村塾の門人は、日本海岸の僻地にありと雖も、之に因つて天下の大勢を揣摩するを得る。蓋し、時勢を離れて大敎育の存する理無き也。

其 八

◉福翁が演說には、つねに原稿用紙に、原稿を認め、之を携へて登壇せしといふは、彼の人物の半面を見る

に足るべし。彼は、演說に原稿など携へまじく想はるゝ人也。而して彼は演說畢るの後原稿を新聞に送致す。

◉伯大隈は、如何なる大演說にも、何等原稿を有せず、壇に登りて、直ちに滿腹の大氣燄を披瀝す。而して其の筆記の新聞に現はるに及び、如何に傳へられたるやは、少しも意に介せず。

◉福澤は侍の出身にして、平民を理想とせり、彼は、封建政治を打破するを期せしも、日本刀を愛して其の氣魄を、之に寄せたり。舊道德を笑ひ、新女大學を唱へしも、護身刀の詩を賦して、刀と共に、其の愛女に贈れり。彼が晩年まで、居合を好みしも、日本刀を愛する精神也。亞米利加魂は、彼の魂に非ず、彼の末流の拜金に溺る、ハイカラに馳する者あるは、祖師の眞傳を誤れるの徒也。彼の敎育は、過渡時代の敎育也。利に伴ひ弊の活くる無くんばあらず。彼の眞面目を知らんとせば、彼の、遺墨遺品を見て、須らく拈華微笑の彼を認めよ。

◉圖書館事務室に、彼の筆「戯去戯來自有レ眞」の一幅を掲ぐ。語短くして意、言外に在り。樓上の一幅、詠ニ田舍議員一の道樂發端稱ニ有志一阿房頂上爲ニ議員一賣ニ飛累代田畑一去、買得一年八百圓は既に人口に膾炙すと雖も、總選擧の季節に、彼の筆蹟に接すれば、彼にして今日に在らしめば、また一笑せしならんと想ふ

◉義塾開業願を見れば、兼ねて時勢の變を見るべし。福澤を始め、師弟十六人の名を連署す。初に東京府管下商福澤諭吉、三十八年四月と記す。商の字、何んぞ奇拔なる。當時の政府は、學校經營を以て商と見做したる乎。此の頃は、學校に、未だ商の事實あらさる也。連名者の中に、小幡篤次郎、莊田平五郎、吉村寅太郎、米人カロザス等あり、其の中、尤も年少は後藤牧太の十九年六月、門野幾之進の十六年十月とす。

◉朝吹英二の質會社の設計、また此に標出するに足る。朝吹は、風雲の氣に富み、夙に大計畫を爲すことを好む。質會社は一小事業と雖も、銀行の未だ發達せざりし時の一六銀行なり。其の大要は、十人の株主を以て組織し、一人三百圓を醵出し、一年、一割五分の配當を爲すにあり。

◉明治七年一月より九年七月に到る義塾の諸役料帳といふもの亦た興味あり。則ち塾の職員の報酬の月額を記するもの。高嶺秀夫は六圓六十六錢六厘、則ち年額八十圓にして、箕浦勝人は僅かに三圓、中上川彦次郎は五圓九十二錢に留まる。千里の馬は一食に粟一斗を盡すといふも、其の雛駒の時は、一升を以て腹に滿つるに足りし也。

◉福翁が、廿八年十二月二十四日、田中一貞の轉地療養するに送れる書は、彼が暮年、壯心の衰へざるを見る

文中に「其の要は、唯だ精神を安んじ候より外に法は有之間敷、醫者も藥も殆んど無益と存じ候、但し人間は全く無爲にて居るも却つて苦しきもの也」と云ひ、彼が養生の方、唯ぞ居合の一法にある事を記し、居合の詩を賦す。いはく腰間秋水一揮揚。自是先生養老方。二豎多年侵不レ得。去他寶劍吐ニ龍光一。

◉吾輩は、今、福翁記念室に見る雲池先生を傳するに留むべし。早、慶は從來明治私學の先進なり。吾輩、他日、「明治の教育家」を評傳するの時、伯大隈と福澤とを細かに對論せんことを期すべし。

◉此の圖書館の中に星亭の文庫あり、和洋書約一萬卷其の種類と册數の豐富なるは、世間稀に見るところ、コーランの原書さへありて、アンダーライン或は批評などを加へ、彼が讀破せし事實を徵證すべきもののあり、彼ほど多く書を讀みて、讀書家らしく見へざりし者は稀なり、此の文庫を一見すれば、彼の人物を想像するに於て、思ひ半に過ぐるものあらん。

◉圖書館の樓上の本邦に最初に渡來せし野球のボール及びバットを藏す。平岡熙の寄附するところ、一八八八年則ち明治廿一年に米人スポールヂングより送致せる六箇箱入の球也、最近の進歩に比すれば頗る古るめかしきものなれども、また以て、吾が野球史に於ける好箇の記念と爲すに足れり。

◉此の日吾輩は麻慶軍のマッチを觀、飽まで雪池先生の遺墨に憧憬し、彼の記念球を玩賞するの後此を去つて新橋に向ひ、皇太子殿下の東海道より還啓を奉迎す。暮烟蒼然として愛宕の森より濱離宮の喬木に連なる。

其　九

◉此の夏は吾輩好機を得て國技館を初日より觀ることを得たり。又十年來得難かりし清福事ならずんばあらず。

◉角界の全盛、今日の如きは稀也。蓋し常、梅の如き非常の偉器、並立せしこと、其の要因を爲せしや疑無し、道を廣むるは、唯だ人の力に依る。

◉朝汐、荒岩、逆鉾、源氏山、谷の音の如き名力士は今に於ても追想するに堪へず雖も今日、土表の花とすべきもの必ずしも舊時に減ぜず。一花褪すれば一花次第に鮮やかなり。花形は、つねに絕えず。兩國は去ると雖も、鳳、伊勢濱、土州山、朝汐の如き、皆、稀有の奇才たらずんばあらず。

◉吾輩は、幕内よりも、幕下に多士濟々たるを以て、更に、角界前途の繁榮を祝福するに足ると思ふなり。宇都宮、淺綠、響矢、對馬洋等、他日、轡を並べて、英風を陣頭に示すのとき、如何に壯觀たる可きぞや。

◉早鷹の敏捷なる、鳴尾嶽の精悍なる、或は山田川、玉の川の遒勁爲るも亦た錄するに足る。殊に、山田川は、速りに、宇都宮、響矢を破りて、漸く名を知らる。

又た幕下の一難物たるを失はず。

●千葉嶽は身長六尺六寸亭々然として古杉の如し。徒らにヒヨロ長くして未だ特長を有せず。濱ノ浦、眞龍は美男子を以て注目せらる。强味は未だ左程の事あらず。

●響矢は强けれども、美丈夫たるを以て、身を誤り易し。而して其の美は、先年の野州山には及ばず、野州山は、之を以て伸びずして去れり、今、第二世野州山は黑瀨川あり。此の頃の彼は衰、漸く立ち初むと雖も尙ほ美顏の麗彩を失はず。吾輩は、響矢が、第三世野州山たることゝ無からん事を祈る。

●對馬洋は魁軀、千葉嶽に次ぐ。今の位置、未だ甚だ低く、其の眞價を發揮するの日は遠し、淺緑は、此の四五人中に在つては、尤も小さきも、彼の下手投は、既に精采を發するものあり。宇都宮は軀幹、膂力、まさに將來の重鎭たる可きも、其の取口の粗莽なるは驚くべし、彼や勇、餘ありて、自衞の智足らず。進んで勝つの氣に富みて、拔く可らざるの形勢を缺く。兎も角も今に於ては未成品といふを得可し。

●未成品に二大別あり。此の區別、知らずんばある可らず。或は、宇都宮を以て、將來、駒ヶ嶽たるあらんことを恐るゝ者無きにあらず。彼は、必ずしも若きが故に未成品たるに非ず。未成品を以て生命となす者は、終に既成品となるの時無し。未成品は既成品に進むの順序なり、然れども、到底、未成品を以て既成品と爲す者、往々、無きに非ず。天稟にも依ると雖も、修養に關せずと爲すを得ず。駒ヶ嶽は全く此の域に入る。永遠の未成品は、永遠に多大の囑望を荷ひつゝ未成品に終るならん。速かに大成するは器の小なると免かれざるも既成品となるもの期無きも亦た器の全きには非ず。宇都宮は嶄然頭角を拔く。自か抑へて省察すべきは今の時に在り。危機は彼の眼前に懸りつゝあるなり。

●新關脇の綾浪は、器の全き者ならずんばあらず。彼には名力士の色彩無し。無暗に强きにもあらず。而して彼の取口は、先づ難攻不落の陣形を張りて、敵の破綻を待つこと銳し。彼は、能くベストを盡して、天稟を遺憾無く發揮し得る。

●高見山は崇嚴なる體勢、土俵を飾るに餘あり、彼は鈍州を以て知らる、鈍極まるものは、銳も、乘ず可らざるの實あり。宇都宮は鈍ならざるが故に破綻多し。綾浪は銳鈍の外、地歩を占む。勝つ可きの敵に、必らず勝つといふは難事也。綾浪は、之を能くするに近し。彼の風貌を見よ、人格の耀きは、彼の面上に在り、彼は、功六級、黑溝台の勇士也。

●幕の內の美丈夫といふ者、東の朝汐、西の土州山を推す可し。朝は品位あり、旅裝して汽車に在らしむる

も紳士の風采を失はず、此の二人者は、精鋭を以て美貌に光彩あらしむ。美貌に依つて精を耗し鋭を失ふ丹治郎力士と同日に語る可らず。

●土州山は幕内の小冠者、體量二十貫を出でず。吾輩と相去ること二三貫に過ぎず。此を以て巨漢の間に介在して、雄心落々勝つも負けるも自ら精氣あり。

●土州山はキビ／＼して輕快也、黒瀬川、浦の濱を以て彼に比すれば仙凡の別あるを免かれず。彼の凛々しき顏を美しく見するものは。美女のやうなる雲鬟なるべし。彼の髮は漆のやう、稍、垂れて後ろに引きて、横さまに見れば蘭の花の輪廓を爲す。彼は白皙にして、手足、尋常に、女にしても見まほしき姿態美あり。吾輩は、彼が凛然として駒ヶ嶽に對場するとき「辨慶に對せし牛若丸」の趣味を聯想せずんばあらざるなり。

●つねに健闘の態度を失はざるは大野川也。彼は練磨と努力とを以て今の榮位に進む。彼の項の巨瘤は、彼が克己心の徽章なり。千歳川は覇心、山の如し。彼は大敵を見て益勇む。相撲氣質といへば、彼の如きは典型ならずんばあらず。伊勢濱は精悍、滿身すべて力瘤なり。吾輩は彼の筋肉美に對して、無限の快感を得る。

其十

●太刀山は現代の一名物、彼の全盛時は既に其の絶頂に在り。花ならば、一輪、二輪散り初むる位の榮華の花盛なるべし。人物論に見る彼は趣味多き對象には非ず。然れども力士を説きて彼に及ぼさゞるの理無し。

●太刀山の土俵入の型は、大きく見ゆ、自からも大きく見せんとする乎。彼の筋肉に、絶倫の力量六尺の魁軀に磅礴するを見る。而して彼に名力士の色彩を缺くは、其の表情の無趣味なるにも由らずんはあらず。

●太刀山の鐵砲は、現代偉觀の一たらずんばあらず。彼の双腕の中には、巨砲彈を包有すかとも思はる。强味に於ては、彼は歷代の横綱を凌駕し、明治中興を飾るの一人物たるを得可し。

●太刀山には梅ヶ谷の圓熟無く常陸山の氣慨無し。彼の筋肉は姿態美に於て常陸山、鳳凰に一籌を輸す。而して横綱としての角力振りに於ては大砲の過鈍なるに比し過敏なり、前代西の海の鷹揚なのにも若かざる也。

●太刀山は襟度と品位とを缺く。其の立合は殊に素人の臭味を脱せず、彼が、中年角力たりしといふばかりには非ず、彼の性格にも因るものなるべし。斯道の趣味より見れば、彼は剛勇無雙也。然れども彼は古今獨歩の草角力たらずんばあらず。

其十一

●吾が小さき書齋に、床の間の脇に、北の小窓あり。

其の前に、美人の石膏像を置く。窓と障子を開放すれば、遠近の青緑、眼中に滿つ。而して小窓より流れ入る一豚の涼光、斜めに白美人の左頰を撫でゝ、情を含んで語らんと欲するに似たり。

●白美人は加藤景雲の作る所、吾輩の家と、後ろに唯だ牆一重を隔つるのみ。彼若し醉いて氣焰を吐かば恐らくは悉く吾家に聞えん。彼が聲の聞えざるを見れば彼が近來、沈默して製作に耽りつゝあるを知るべし。

●景雲は、光雲に學びたり、雲海と共に、雲州の月山城下より出づ。趣味の人、扑直にして氣焰を吐く。吾が神明町には、富士社と神明社との森の蔭に藝術の人少からず。四方太と田村豪湖とは神明の森に近く、殊に、豪湖は、神明の境内に接して、森の綠葉、飛んで彼の書室に入る。富士の森には、前に、宮本包則あり。刀工の帝室技藝員たり、八十を過ぎて、極めて老健、日々、鍛冶を事とす。伯大隈以上なり。森の後には景雲あり。狩野友信なり、原安民の日本美術社あり。而して此の藝術家の地帶に於ける草分けは景雲なり。

●景雲は、吾輩に勸めて白美人に黑衣を掛けしむ。蓋し島田髷の日本美人は石膏像に適せず、髮の白さが殊に似合はず日本美人は木彫にせずんば則ち錦繪に描く可し。

●此の白美人は、モデルに依れるに非ず。新、柳二橋の美人を集めて、一人と爲せるもの。畢竟、景雲が理想の美人たらずんばあらず。就中其の眼以上は、多く萬龍に鼻以下は、濱勇に似たるを見る。

●聞く、景雲は白美人を作る時歷鷲尾順敬に計る。鷲尾は佛教史家を以て聞ゆ、一面藝術を愛するの士なりといふ。彼は殊に濱勇の繪葉書を美なりとし歌あり、曰く「月涼し、夕顏咲けり、枝折戶に、濱勇立たせ、吾が歌にせん」吾輩も彼に此詩情あるを多とす。而して景雲の白美人は此の歌に負ふ所少からざるを知る也。

其十二

●吾輩は、壁に面して、讀み且つ書くを樂みとす。時々、頭を擡げて、窓前の綠樹に、目を縱まゝにす。

●文を作るは綠樹微涼の時に在り。浴衣一枚、殊に裾の短を可とす。鳥聲綠葉の間を鳴きかはし聞き且つ書く興趣盡きず。日、午に及ぶか鷄の逞しく啼く。

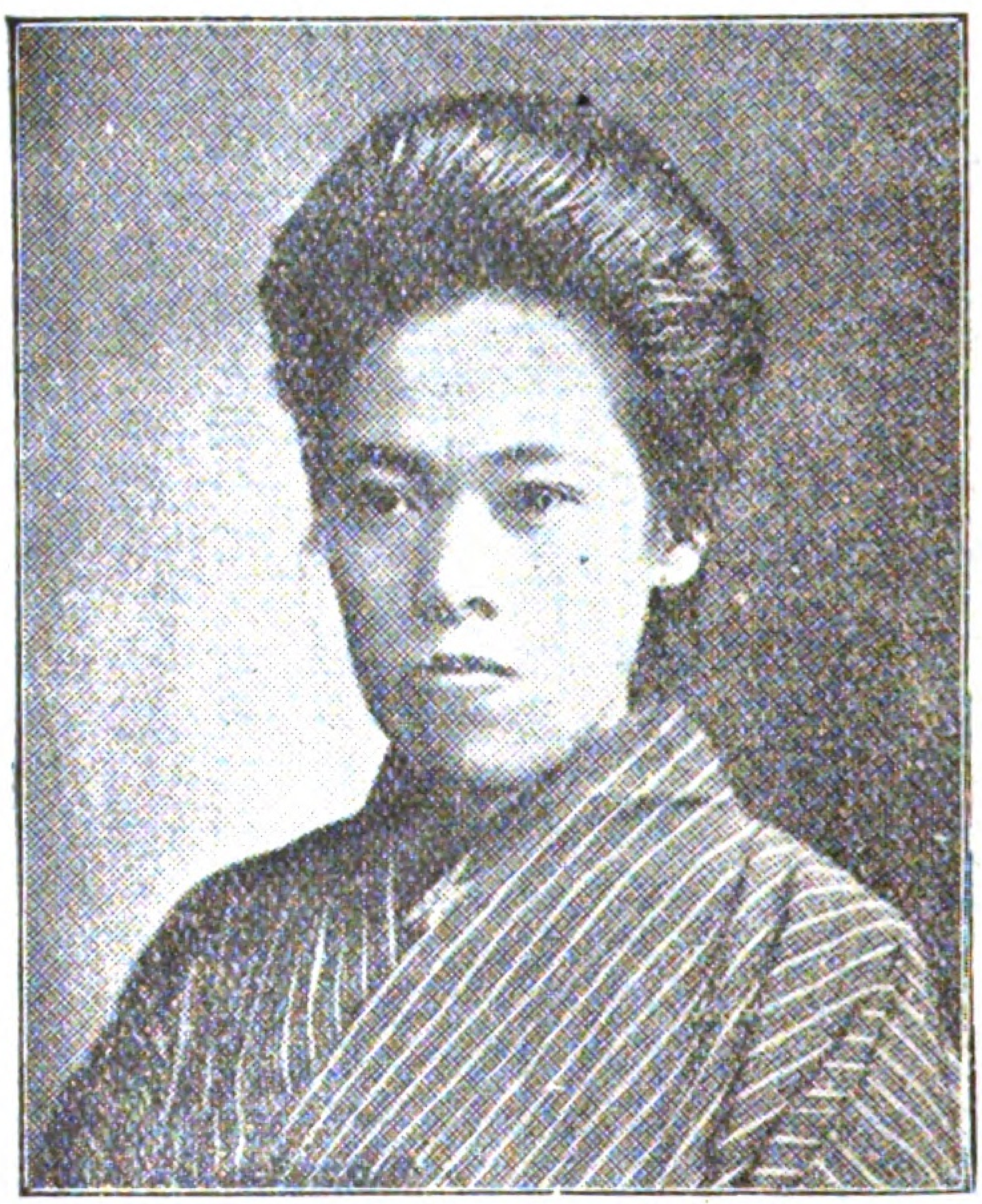
●吾輩近頃讀みし物の中尤も深く印象を得たるは、『其時、惡魔にして在りしならば、神も亦た在りし也』の一句に在り。惡魔と神とを見る者藝術の人たるを得るなり。

五月二十日、兒を携へて、國技館に太刀山、千歳川の角力を觀るの翌日、稿了。

黑頭巾記

人物評論（二十九）

與謝野晶子論



△與謝野晶子女史

長田秀雄

與謝野晶子女史は佛蘭西へ行かれた。先方には夫寛氏が待つて居られるのである。また此方には十二三歳を頭に六人の兒供がいたいけな顏付て御留守をしてゐる。

かつて女性内心の苦惱を痛切に唄つて世の舊慣に反抗した亂れ髪の女史は少時沈靜して半面を家庭に隱して居られたが今度突然華美な日本のキモノを着て世界文化の中心に直行されたのである。

私が女史に始めて御眼にかゝつたのは明治卅九年頃だつたと思ふ。女史は極めてつゝましやかな態度でいろいろと談された。私は平生夢想してゐた亂れ髪の詩人とは丸て異つた印象を受けて歸つたのである。

から眼を閉つて考へてみると先づ第一に女史の血色のよいやゝ肥滿した顏が浮んでくる。極めて派出やかな感じてある。今試みにその顏から美しい血色と脂肪とを除去して考へると後に殘つた表情は暗く固定せる苦痛の感じてある。更にその顏をすべて除いて考へると薄明の内に强弱高低さまざまの音波のやうに眼に見えない物の塊が不調和な節奏をなしてゐるのを感ずる。

今度は之れに女史の顏を加へて考へるとまた何の不調和も不思議も感じられない何時もの女史の晴やかな相貌となる。

晶子女史は一面に男性のやうな强い意力と鋭い理性を持つて居られる。また他の一面にはチブスの熱のやうにたかまつた情緒と日本女性に特有な藤の花のやうに柔婉な情緒とが交錯して不思議な共鳴をなしてゐる。

女史の感想或は短歌を讀んでその溫容に接したものは誰でも烈しい矛盾に驚くだろう。

何と云つても女史は明治の女性を代表した巨人である。私は女史の見方考へ方によつて泰西の文明が如何に報道されるかを樂んで待つてゐる一人である。

以上はたゞ漠然たる感想をだらしなく列べたばかりである。女史に對して禮を失した段は何うか御許を願ひたい。

△晶子夫人の趣味と嗜好

江南あきこ

與謝野晶子様について何か書くやうにとのお話てしたが、もとより評などゝいふとは厭てございますし又出來も致しませんし、それに平生あんまりお親しくして居りますのでこれといつて思ひつきませんけれど、とにかくふだんから感じたことやお立ち前後のことなどをと存じまして筆をとつてみました。

私が與謝野先生の奥様に初めてお目にかゝつたのは江南と結婚いたす少し前、丁度秋の中ばすぎてした。父の家から其前夜着いた麹町の兄の家まで江南が來てくれましたのはよく晴れた日の朝、九時頃て、それから一處に歩きながら行く途々も、前から、それはもうずつと前、まだお里の鳳性をなのつていらつしやる頃、明星てお名前を知つてから、其時分のみだれ髪などからずつと近頃までのお歌其他のお作て想像して居りましたゞけ、どんな御方かといろ／＼に考へながら、伺ふとお玄關に出ていらしつた色の白いすらりとし方は奥様てした。にこやかなお顔をあそばして應接間の方へとおつしやつた上方なまりのあるおことばが、またなくなつかしい感じがしました。そのまゝ奥へおはいりになつたので、始終自分の家のやうにして伺つてゐる江南はすぐ其室にまゐりますので私もそのまゝついてまゐりますと、そこは六疊に廻り縁のある室で、細長いテイブルのまはりにはひとつ／＼形の變つた椅子が四つおいてありまして、其中のひとつは伊太利大使館の應接間にあるのと同じ型でした、せいの高い大きな御本棚の中にはいろ／＼なおもちやがゝざつてあつて、壁には黒田さんの水彩畫と岡田さんのパステルがかゝつてゐました。お庭には濃い紅のダイヤがつくらないまゝの姿て咲いてゐました。のちになつてこれも奥様のおこのみのひとつて、ダリヤは自然のまゝなのがお好きと伺ひました。

ほどなく先生と御一處に出ていらつしやつた奥様を私は御年よりはずつとお若くみあげました。古代紫の銘仙の矢絣にうすいあづき色の紋羽二重の御羽織をめして、すあしていらつしやるのが、はだのうつくしいすらりとした御姿に大變うつりよくみえました。

私がお目にかゝるずつと以前に、奥様にお目にかつたといふ或人が、「やつぱり女詩人ですよ」と云ひましたけれど、私は世間やその人のいふやうではなく、やさしい、情にもろい、女らしい方らしく想像してゐましたが、お目にかゝつてみると想像のとほりの方で、初めてお目にかゝるやうな氣がしませんので、遂ひうかうかと時をすごして、御門を出たときにはもう靜かな澄んだ空のところ〳〵にあるちぎつたやうな雲に夕日がうつくしくさしてゐました。

其後だんだんおしたしくなるにつけ、ほんたうに親切なつかしい方で少しもわけへだてのない方だと感じました。

好き嫌ひは可也多くおありのやうですが、煙草はお好きて、ことにいろいろなのをとりまぜてあがるのがお好きてす。先生が御留守になつてからはなほ烈しくめしあがるやうて、又さういふこともお寂しさをまぎらすひとつとしていらしつたやうて、碁に伺つた時なんぞ澤山の種類をあつめていらつしやいました。

お召のおこのみなんぞ今度はあちらへおもちになるからでもありますが、一體にふだんからはでがおすきのやうです。

方々から何かお頼まれになると、おいそがしかつたりお氣がおすすみにならなかつたりしても、それをおことわりになることが出來ないで、こまつていらつしやることがよくありました。

花なんぞでも刺激の弱いコスモスや櫻草などといふやうなものが、お好きてすし、何事によらず、お好きなものは、あくまてお好き、お嫌ひなものは、みるのもお厭といふやうて、お感じになつたことなど、話してしまはねば氣がすまないといつたやうなところがおありのやうです。

お立ちの前の晩、お子様方をお湯にお連れになつてみなさんをひとりひとりあらつておあげになつたさうて、その歸り路でどうしてこんな旅なんぞ思ひたつたかと少し心寂しくなつたといふ御話をあそばした時に、私はやつぱりおかあさまていらつしやると思ひま

した。

世間では巴里の先生をお思ひになる御歌を廣告だなんぞと云つてるときゝましたが、平生から御樣子を知つてゐる私達は先生の御留守に奧樣は御病氣にでもおなりにならなければいゝがと心配したくらゐで、先生とのおなかはそれはそれは御親しくて、あゝいふ御歌があるのは當然のことと思ひます。先生が御立ち後まもなく伺つた時なんぞ、もう寂しくてやるせがないと思ひ入つた御樣子でおつしやつたことがありました。それでもあゝしてお氣をひきたてゝ大勢のお子樣のお世話から何から何までおひとりで、先生のお留守を、あゝまでにあそばすのは、すぐれた方でなければと、いつも伺ふたびに思ひました。かふいふ點が普通の人のまねの出來ないことで、一度決心したらあくまでもやらうといふ御氣性なのです、それですからこそ今度の御旅行もお思ひたちになれたのでせう。それでゐて又一面にはまるで子供のやうなところがおありの方で今度の御旅行について三越へおあつらへになつたお靴が出來て來た時なんぞ、すぐおはきになつて、お緣側を幾度もいつたりきたりして御覽になりましたが、其後御庭を一日其お靴でお歩きになつたさうです。エィルはとき色や水あさぎや、紫がかつたてつ色のや、其外の色のをおもちなりましたが、その時にもおもとめになつた數だけをいちいち、いろいろな格好にかぶつて御覽になりました。

御立ちの少し前、北原白秋さんから御餞別に西洋の赤だの白だの青だのの色のうつくしい、いろいろなお酒の可愛らしい罎のをおもらひになつたさうで、それを私達が伺ふとすぐおみせになつて、どれなら私にのめませう、どれをもつてゆきませう、とさもお樂しさうにいつていらつしやいました。

こゝまでかきました時浦鹽から、

戀人に逢はむ日遠しふるさとを見む日知りえずいかがすべきぞ

とゑはぎのおたよりがありました。

私には奧樣は女らしい、妻としても母としても申分

のない方だと考へられます。この女らしい奥様の見ていらつしやることのいろいろを今から樂しみにして居ります。

御立ちの日には御宅へ行くのが少しおそくなつたので伺うとすぐ、おぐしをあげたりおめしをそろへたりするのにごたごたして、落ちついて御話もしませんでしたが、おめしをめしかけた時、何だか行くのが少し心ぼそくなつたとおつしやつて涙ぐんでいらつしやるのでそれでなくても心細く思つてゐた私はたまらなくなりました。

停車場までは御一處に自働車でまゐりましたけれどたつた十分ばかりの間ですし、それに何だか氣が落ちつかないので、ただとりとめのないお話ばかりしてゐる間についてしまひました。

汽車におのりになつてから、私達は初め停車場きりでお別れするつもりだつたので、窓の下から、何だか胸が一ぱいになつてゐるので何にも口に出ず、やうやう御機嫌よくとだけごあいさつすると、奥様がいきなりうつむいておしまひになつたので、御手をとつたまま、又泣いてしまひました。

先生の時には横濱まで行き、それに船ではあり、男の方ではありますし、あとに奥様がいらつしやるといふ考へがあつたので、それほどには思ひませんでしたが、今度はとても新橋きりでは、あんまりあつけないやうな心ぼそいやうな氣がして、そのまま御別れすることが出來なくなつたので、夫と私は途中まで行くことにして、發車までにはもうわづかの時間なので、切符を買ひには夫に急いで行つてもらひまして、心ぜはしく汽車にのりました。

汽車が出てから私達も平沼まで御一處にまゐりますと申上げたときの奥様のおかほつき、そのおうれしさうなおかほつきはいまも目にうかびます。

汽車の中で何ひのこしたことや申上げのこしたことをお話してと思つてゐましたけれど、すこしも口に出てこず、今日にかぎつて汽車の速力が特別早いやうな氣がしますと申上げたら、奥様もやはりそんな氣がす

るとおつしやつて、そして光さんがうれしさうに車の中をあちこちと、とびまはつていらつしやるのを、光はどんな遠いところまで一緒に行ける氣でよろこんでゐるのでせうとおつしやるおこえはさすがにお寂しさうでした。

△與謝野晶子さんに就いて

森林太郎

僕が特に言はなくてはならない事は無いだらう。併し樋口一葉さんが亡くなつてから、女流のすぐれた人を推すとなると、どうしても此人であらう。晶子さんは何事にも人眞似をしない。個人性がいつも確かに認められる。此頃アメリカ人Percival Lorell は極東人の特性は個人性の無い處に在ると云つてゐる。晶子さんを見せて遣りたい。但パリイにはいよ／＼見せる事になつた。

序だが、晶子さんと並べ稱することが出來るかと思

ふのは、平塚明子さんだ。詩の領分の作品は無いらしいが、らいてうの名で青鞜に書いてゐる批評を見るに、男の批評家にはあの位明快な筆で哲學上の事を書く人が一人も無い。立脚地の奈何は別として、書いてゐる事は八面玲瓏である。男の批評家は哲學上の問題となると、誰も誰も猫に小判だ。

△晶子夫人

田村とし子

私は晶子さんと云ふ方には一度もお目にかゝつた事がないから、どんな御樣子の方だかちつとも知らない。想像――と云つても私には想像もできない。大きな山の影を小さい動物が仰ぐやうなもので、とてもあのかたの人格などが遠くの私などには想像の出來るものでない。

人の噂ではいろ／＼な事を聞く。それも、歌が一首三十何錢だとか。歌を頂きに行くとちやんと其の勘定

をいかにも營利的に取引きするとか。今の御年輩でも平生に緋の襦袢の袖をちらつかせてゐるやうな方だとか。又黑いお顏にお化粧もなさらず髮の毛を氣遣ひのやうにばら〳〵にさせてゐたお姿を、三越でお見上げしたとか、人と對話をなさる時は、物靜で、柔らかな優しい言葉の調子で物を云はれるとか。いかにも外面的に晶子と云ふかたを觀たやうな噂ばかりで、あのかたのほんとうの心の末端にふれたやうな批判的の噂を聞いたことがないから、猶更私には晶子と云ふかたに就いては唯偉いと思ふばかりで何も分りません。

かみがたで生れた方だから、絹糸を繰るやうなアクセントで、さうして花片のひた〳〵とふれるやうな發音で、なだらかに、美しくやさしく內氣らしく物をおつしやるのではないかと想ふ。これだけはわかる。それから緋の襦袢の袖――これも晶子と云ふかたが好んでお着けになりさうな色だと思ふ。自分の身體の周圍にわざとらしくなまめかしい色を添へて、女の美の彩りを飾らうと云ふやうな外見的の意味でなく、單に赤い色そのものをお好みになつて、斷片的に身に付ける扱きとか襦袢の袖とかに、このかたの選んで着けられさうな色合である。何かの雜誌で、あのかたがお居間の衣桁に、いろ〳〵色の美しい扱きや、帶、模樣のある衣服などを引つかけておいて、それを眺めて樂しむと云ふ樣なことの書いてあつたのを見たことがあつた。又もえぎ色の蚊帳を透かして、夜着の色や、眞つ白な肌の色などを眺めるのが快いと云ふやうなことも何かで見た。單純な平生の起居の上にも、御自分の趣味から作られた裝飾美や、きもの丶配色美によつて自分の周圍に韻のおもむきを見出し、又少しでも身につけたものの中から色彩の美を感じさせやうとしてそれを樂しんでゐられると云ふやうな優美なお人柄がそれによつてうかゞはれる。

さうして其の平凡な、生活の爲に仕事をしてゐられる樣な場合の一分一秒も、御自分の趣味で充實させやうとし、其の間にくゆらす煙草の煙りにもよい香を求め、物を書く時の瓦斯の灯一とつにも美しさを求めて

ゐられる晶子さんは、それと同時に、御自分の生そのものを華やかな光彩のある一篇の詩として作り上げやうとしてゐられるやうなところがあると想ふ。このかたの生活の上には美しい詩の薄ぎぬがかぶさつてゐて、その薄ぎぬて現實の社會と御自分の生活の上とを立派に區劃つてゐられるやうな氣がする。

私は歌はてきないし、歌人の歌もあんまり氣にして讀む方てはないけれども、晶子さんの歌だけは大好きてある。名優の舞臺上のはなやかな演技に引き付けられるやうな、眩ひ美しい心持てよく晶子さんの歌をよむ。このかたの文字は活字にしてもその活字の一とつ〳〵に絢爛なあやが織り込まれてゐるやうにきれいだと思ふ。晶子さんの歌は一度目を通すともう眞ぐ覺え込んてしまふ。そうして何時ともなく覺えた歌を我れ知らず誦じてゐるやうなことがある。男の一流の歌人と云はれる人の歌とこのかたの歌と、その價値にどんな差があるのか何か知らないが、私にはこのかたの歌が、絶妙な音樂を聞いてる時の心持、きれいな芝居を觀てゐる時の心持と同じに、その言葉のあやに酔はされるやうなのが嬉しいのてある。

七人のお子さんに對する母らしい態度、又は御良人に對する素直な妻らしい態度——御良人に對していつも處女の戀のやうな純な心を向けてゐられると云ふやうな初々しいお心持などに就いて——良妻賢母と云ふよりは賢妻良母と云ひたいやうに——この方が御良人と一所に世間的にお働きになつたり、又女らしく優しくこまやかに家政を御らんになると云ふやうな事については、唯私のやうな女は驚異の眼をみはるばかりてある。このかたと師弟の關係のあるやうな人たちは、きつとこのかたを優しい情ぶかいかたと云ふだらうと思ふ。そうしてこのかたに對しては遂に叛き去ることの出來ない親しいきづなを結び付けられるやうな和らいだ感情に浸されると云ふだらうと思ふ。藝術的權威のほかにある時のこのかたは、務めてもやさしい女人てゐられるやうな方てはないかと思はれる。

新しがつた若い女たちが、赤い酒をのみ青い酒をの

み煙草をくゆらして人眞似の藝術を論じてゐる時に、唯一人與謝野晶子と云ふ獨目の立場の上に明治の婦人中の婦人の誇りの瞳子をかゞやかし得るこのかたに對して、私ども同性はあくまで尊敬の意を拂はなければならないと思ふ。

△藝術的氣分の充實した人

馬場孤蝶

一

他人を論評するのはなか〱むづかしいことだ。我々のやうなボンヤリ世の中を渡つて居るものに取つては殊更むづかしいことだ。

我々俗人は、何か自分と利害關係の深い相手に對しては、自己の直接の利益上、多少は先方の人と爲りをも臆測して見ることもありはするが、別にさういふ物質上の關係も無いといふ人々に對しては、さして先方の人物に就て考へるといふことは無い。

與謝野夫人には度々お目にかゝつたことはあるが、何時も〱まことにしとやかな女らしいお方だと思ふのみで、此れと云つて別に異つた印象を受けたことは無い。

そんなら、何も無理に論評がましいことをせずともよささうなものなのだが、瀧田君が態々賴みにお出なされたのに對して、何も書かぬといふのも、餘まり商賣上愛嬌の無い譯にもならうかと思はれるので、筆を執つて見た次第なのだ。

與謝野氏は御夫婦とも何處までも詩人だ。總べての行動が、皆藝術的興味から出るやうに見える。藝術に直接關係の無いものには、餘まり心を向けられ無いやうな所が見える。何物を觀られるのでも、その物を彼方へ置て、その物なりに觀るといふよりか、御自分たちの持つて居らるゝ氣分の壺のなかへ移つして來て、それを觀らるゝといふ風のやうだ。從つて、物に對しては、何等か明らかな解釋を下さ無ければ居られぬといふやうな所が見える。だから、まことに要領を得た

行動に出られる。これは、藝術的氣分の充實と云ふのであらう。

考が狹いと云ふ所は見えるかも知れぬが、無邪氣で他所(よそ)から見て、心持が惡るく無い。夫人の言葉に『駿河臺から中六番へ越したのは、惡藝術の標本たる銅像が近くにあつて、その惡影響が子供に及ぶのを恐れたからだ』とあるのを、何處かでたしか讀んだことがあるが、斯ういふことを我々が云はうものなら、直ぐ氣取りだと笑はれるであらうけれども、與謝野夫人の口から聞けば、藝術に對する熱心の結果からだと、何人もうなづくことであらう。

二

關西の人と、關東の人との比較を爲て見ると、何うも關西の人は眞面目なやうだ、ユウモアに乏しいやうな氣がしてならぬ。餘裕が無いやうな氣がする。戇直に目的地に突進するやうに見える。だから、所謂る成功者は、關西の人に多いやうだ。

寛君も晶子君も、眞ッ正直な點に於て確に關西人だ。尤も婦人にはエウモアは無いものだといふ說はあるが、晶子君になると、殊にフザケタ所が無い。如何にも眞劍である。何處までも本氣である。

我々ならば、隨分氣が咎めるといふやうな感情でも晶子君は平然として歌つて居られる。態とだといふやうな所は少しも見え無い。啻に歌ばかりでは無い、論議上にもさういふ所は屢々見受けられる。

嘗て、寛君の洋行費を補ふといふので、晶子君は、屏風掛軸等の揮毫の注文を募られたことがある。我々が解する新派の文人は筆蹟を直ちに金にするといふのを潔しとしまいかと思はれるのだが、寛君も晶子君もさういふ事は一向念頭に置て居られ無いやうに見受けられた。斯ういふ所にも、兩君の勇往の精神が表はれて居るのだと、嘆服の外は無い。

晶子君は、先日洋行される時に、總模樣の派出な着物を拵へられた。途中も日本服で押し通されるといふ話であつた。我々がさういふ風なことをすれば、ひどく厭味が生ずるのであらうが、與謝野夫人だと、ワザと

やるといふ感は少しも起らぬ、藝術的氣分の充實の結果だと、誰でも思ふてあらう。身を擧げて、藝術に投ずるといふ意氣の前には、何物も荷なひ去られずには居無いのだ。

デヴオーシヨン、即ち、身を委ねるといふことは實に立派なことだ。天下は常に物にデヴオートし得る人のものだ。成功の秘訣は全く其所にある。與謝野夫人は理智の發達した婦人であると同時に、物に熱中し得られる人である。これは、夫人が關西人たると共に、詩人である爲であらう。

與謝野夫人の著書に「一隅より」といふ論文集があるのは、誰も知つて居ることであるが、あの論調――即ち直ちに明晰な斷案の下さるゝ所が、如何にも寛君の論調に似て居る。斯うまで御夫婦とも同じ思想を持ち、同じ考へ方、言ひ方を持ち、而かも歌といふ文學の同じ方面に立たるゝといふことは、如何にも珍らしい事で、まことに芽出度いことだ。斯うまで同じ心の御夫婦が世間にあるといふことは、如何にも快心のことだ。

寛君は如何にも眞面目な人であつて、着々として、自己の進むべき道を踏み開いて行かれるし、夫人はまた之に伴つて、次第に向上の道を進んで行かれる。寛君は品行方正であり、夫人も亦貞節の聞え高き人だ。何れの點から見ても、今の模範的人物と云は無ければなるまいては無いか。

全く藝術裡に生きて行くといふことは、我々にはむづかしい事なのだが、與謝野氏御夫婦は全く藝術裡に生きて居られるのだ。歌に於ては、御夫婦とも實に天賦の才能を有せられるやうだ。丸るで御自分等のエレメントのなかに居られるのだ。丸るで蠶が糸を吐くやうである。滯りが無い、あぶなッ氣が無い。確に名人の域に達せられたものに違ひ無い。

與謝野氏御夫婦は善く似た御夫婦だといふことは何人も異存は無からうが、アリストフアネスの言葉によると、男女は元と一體であつたが、神が切り放して別々の物にしたので、それで男女とも自分々々の片割れを

さがし合ふのだ、それが人間に友情あり、戀愛ある所以だといふのださうだ。與謝野氏御夫婦の如きは、本當の片割同士が旨く合致したものであらうか。

△晶子さんの人物

茅野雅子

餘り親しく御交際をしてゐる方のことを御訊ねなものですから、却つて御返事が致し難いのを感じます。况して批評といふやうな六ヶ敷いことは到底出來さうもありません、それに又未だ一度も互に批評的に考へ合ふといふやうな事もなくて、いつとなしと理解もし親密にもなつて了た友人を、今更ら理智の冷たい眼て見る氣にもなりませんのてす。それですから、出來ることなら御斷りしたいのてすが折角のことですから私の平生感じてゐることを二つ三つ御話しして見ませう。

眞實の意味て新らしい人といふのは晶子さんのやうな方だらうと私はいつも考へて居ります。詩人としては云ふまでもなく、晶子さんの日常生活といふものが眞面目な人の生活てあつたやうに思ひます。唯々あつた許りてなく、これから後もさうてあらうと信じて居ります。

晶子さんの生活の後ろには自覺した「我」と云ふものが光つてゐるやうに思はれます。それが極く些細な事の上に迄もちやんと行屆いてゐまして、例へば髮の結ひ方とか半襟の好みとか云ふやうなことでも、單に流行するからといふやうな理由からてなく、それが自分に似合ふか似合はないかといふことを、一々判斷して後にきめるといふやうな人てございます。それをもつと六ヶ敷申しませうか。それがただ舊い道徳や習慣やを無視したり、又はそれ等のものに反抗したりするやうな小供らしい態度てなく、徐ろに自信ある生活を續けるといふ様な風てした。そういふ處は、作物や議論等の上に現れるよりは、最つと穩健て、漸進的てあるやうに思はれます。

それから作物の上にもあれ程の事業をする人だけに平常見識の持ち方の高いのにも感心させられます。それは未だ生活の不如意にも苦しむでゐられる頃のことでした。女のことですから、誰しも一寸他所へゆくにも着物とか帶とかいふものが心配になります。ある時晶子さんが斯んなことを話されたことがありました。『他所へ行かうと思つても着物が無いといふやうな時に、私はいつも、自分には世間の人よりも精神的に優れたところがあるんだからと、さう考へ直せば物質上の不足は辛抱の出來ないことはありません。』斯ういふ見識は一面晶子さんをして今日あらしめた所であらうと思ひます。

それから晶子さんの特長を數へて見ますと、非常に感情的で、從つて氣分に變化の多い好奇心に富むだ、それで居て不思議に客觀的なところのある、記憶力の非常に強い神經の鋭敏な、意志も可なり強いこと等でせう。さういふ一見矛盾したものさへある種々の性質が寄集つて一つの立派な人格を作つてるやうに思ひます。それからこれは餘り人が知らないやうに思ひますから、是非御紹介致して置き度いと思ふのは、晶子さんの義俠に富むでゐるといふことです。人の困つてるのを見ると隨分迷惑になることでも厭な顏一つなさらずに直ぐ助けてやつて、恩を誇る風等を全くお見せなさらないことです。

それは大分以前の事でしたが晶子さんがある女の人のために多くもない衣類を無くしてまでもたすけて上げてゐられた事がありました。尤も當人はそんなことと知らなかつたのでせうが、或時他所で可なり立派な風をしたその人と私等二人と出逢ひました、晶子さんはどこか淋しさうな顏をなさり乍らも超然としてゐられましたが、私は二三枚の浴衣でその夏を通される晶子さんを知つてゐましたから眞實變な氣になりました。然し晶子さんは私のやうなありふれた考へを持つてゐる方ではないからと自分を慰めた事がございました、此んな事なども多くの人には一寸出來ないかと思はれます。

そして今一つ御子方の事でございます、此度の御旅行などに就きましても第一に起りますのは晶子さん御自分にも亦他人にもこの問題でございますし、又他人の中には多くの子達を打遣つてと申す人もあつたやうでございますが、日頃往來をなさる方はよく御存じの通り御子達の敎育にはより以上の注意を拂らつてゐられるのでございます。それは客が來たからと云つて無理に頭をさげさせたりするやうな形式的なことではございません、最つと根本的な敎育に力をそそいでゐられるやうでございます。この間一寸東京でお伺ひ致しました時、御自分の御旅行のお支度と同時に御子達の衣類や肌着のやうなものがうづだかく置いてございました、こんなつまらぬことのやうですが日頃の御注意が現はれてゐるやうに思はれました。

前にも申しました通り別に批評を致すのではございません、唯こんな立派な人格の方を御紹介するのは大變いい事だと存じましたから日頃感じたことの少しを秩序もなく申上るのでございます。

△晶子と一葉は明治の清紫

文學博士　佐々木信綱

小說家として故一葉女史を有し、詩人として晶子女史を得たのは、明治の婦人の誇とも言ふべきだと思ふ。極めて古い例だが、王朝の盛時に紫式部と淸少とを有して居たにもよそへらるゝ、そして紫式部と淸少との性格の稍違へ居る如く、一葉女史と晶子女史との性格も稍違へ居るかの樣にも思へる。惜い事には明治の淸紫とも稱すべき二人が時を同うして生れなかつた。

紫式部は其日記の中に忌憚なき筆を以て、淸少納言を罵るといつては語弊があるか知らぬが兎に角評して居る。近く一葉日記の出版の噂を聞くが、若しも其日記の中に晶子女史に對する品隲でもあつたら如何樣にか面白かろう。好し品隲が無いにしても、近世歌壇の偉才橘曙覽の蓮月尼と逢つた折の記事が曙覽の日記に見える樣に、若しも晶子女史の記事が一葉の日記に見え

て居るなら如何様にか面白いてあらう。

一葉女史は初め久しく和歌を學び、和歌から出發してそれから小説に筆を染め、大に明治文壇を飾つた。が其初め久しく學んだ和歌は、まだ其時機に達しなかつた爲てもあらうけれど、明治の歌の歴史に一葉の名を殘さぬ、それに反して晶子女史は和歌から起り、小説に筆を染められる、が是迄世に公にされた小説には一葉を凌ぐものが無かつたかに思ふ。近く外游から歸られて大に小説の筆を執らるゝとの豫定が新聞に見えて居るから、それを樂みにして待つて居るけれど、要するに今日ては小説に於ける晶子女史は未知數てある。

兩女史に通じて最も敬服に堪えぬのは其努力、所謂精力てある、一葉女史は一人て世を終られたが、その細い筆の力て一家を支へつゝ而かも彼の様な短い生涯の間に不朽の作物を數多く殘された。晶子女史は多くの子女を持たれ、而かも弱い小供などもなく、母として能く盡し居らるゝ間に、誰も知る如く多くの貢献を文藝に爲された。晶子女史の歌に對しては世に定評がある。更に一言を加ふる要は無いと思ふから此處には述べぬが、數ヶ月の外遊て廣き西比利亞の野邊の夕、又華かな巴里の夜に、如何に女史が其詩嚢を滿たして歸らるゝか、私はそれを喜んて待ち迎へ居るものゝ一人てある。

自分は幼い頃中島歌子女史の歌の會に毎日出て、幼かつた一葉女史を能く知つて居つた。そして又良人寛氏には逢ふが晶子女史には逢ふ事少いけれども、兎に角も此盛代に生れて此明治の誇とすべき二才媛に交るを得たのは自分の深く喜とする所てある。

△紫友染の振袖

小剣

晶子さんといふ人には會つたこともないし、書かれたものを讀んだこともないから、何んとも申しやうがありません。讀んだことがないと言つても、久しい前

日露戰爭中に唯一つ、彼女の『君死にたまふこと勿れ……』といふ長詩を讀んで感心したことがありました。當時世の好戰家や自稱愛國者がけしからん歌だ、といつて、血相を變へて怒つたことを私は今も何時々思ひ出して微笑んで居ります。

私は晶子さんに會つたことがないから、晶子さんを想像して絶世の美人としておきたい。曾つて相馬（高踏）君が晶子さんの手蹟を貰つて來て私に見せたことがあります。私は全體手蹟などゝいふものに趣味を有たんもので、短歌なぞても新聞や雜誌へ活版刷りにしてあればチョイと讀むこともあるが、小面倒な短册や色紙に書いてあると、讀みにくいのと、骨董的の臭ひがするのとて、手近く取つて見る氣にもならんのですが、相馬君の持つてゐられた晶子さんの短册は、何ういふものか手に取つて見ました。そして其の女性的手蹟の鮮やかなのに感心し、定めて容貌もこの手蹟の如く麗はしいのてあらうと獨斷て決めて了ひました。

『婦人が長い間男子の經濟的從屬として抑壓を受けた結果、婦人には婦人特有の國語すら出來て、男子に媚ぶる習性を作つた』と言つた學者があります。『アラあたし好くつてよ……知らないわ』だとか、『のうこれそもじは永らへて……』だとか、『皆みづからのいたづらから……』だとかいふのは、婦人國特有の國語てありませうが、現に世界に起りつゝある婦人解放運動が効を奏し、婦人が全然男子の經濟的從屬から放れる時節にもならば、婦人特有の國語もなくなることてありませう。ところが今日てもこの與謝野昌子さんなどは決して男子の經濟的從屬てないばかりか、寧ろアフリカ內地のあるところの婦人のやうに、男子を私有財產として自由に使役する腕力（は何うか知らぬが）と經濟力を有つてゐられるやうに思はれます。然るに其の手蹟には斯くの如く優しい女性の特性を現はし、婦人解放論者の忌み嫌ふ『女らしき女』たることを示して居られるのは私の甚だ面白く思ふところてあります。

若し婦人が全然男子の經濟的從屬から脫した世の中にならばいざ知らず、今のところては世間並みの賢婦

人といふやうなものを私は好みません。『男勝り』といふやうな名のつくものは、厭味があつてイケません。晶子さんは世間並みの賢婦人といふやうな型ではなく、單純な男勝りといふやうな方でもなく、賢婦人や男勝りを超越した人であらうと私は思つてゐます。夫に禁酒をさせたとか、幾人の小供を斯うして育てたとか、いふやうなことを、得意がつて婦人雜誌の記者などに語る厭味の多い小悧好振つた女ではなくて、晶子さんは人懷つこい、そして輕々しくはない、好き御婦人であらうと思ひます。そしてまた私は何處までも晶子さんを絶世の美人として想像してゐたい。

晶子さんは泉州堺の生れであるさうですな、スルと大阪言葉で育つた方ですから、私は人一倍懷かしいやうな氣がします。私は婦人の東京辯は柔か味もふくらみもないので嫌ひです。京都や大阪の言葉で話す婦人を見ると、自分の姉妹のやうな氣がしてなりません。紫の友染の振袖を着て、世界一の花の都の大通りを自働車で走る晶子さんは美しいことであらう。

幸田露伴氏を訪うて晶子女史の批評を求めたら、別にお話するやうな事はありません。只あの人の歌には私の大變好きな方面と、大變嫌ひな方面がある。佐々木信綱君の歌には好きな歌は勿論あるけれども、亦好でも嫌ひでもない歌がある。然し晶子女史の歌になると、好きか、嫌きか、どつちか一つに極まつて了ひます。といつて居られた。

和歌

尾上柴舟選

後藤むくろ

○

よろこびはすべてを春がつかさどるその春われに悲しくあるかな

柔かき芝生の上をしんみりとひとりあゆめる春のよひかな

うす青き春の煙草が匂ふときやるせなきかなこゝろ病むとき

なみだぐむ春の青草柔かに風にそよげば水にうつれば

しつとりと若き女の瞳のごとくうるほふ春の野のみどりかな

○

内田月城

郊外の青麥のかぞまろびふくくりーむいろの君がパラソル

音たてゝちさきかれひの泳ぐみゆしづかなるかな磯のひるすぎ

きゆうとなく人形の眼にふとわかき愁みいてぬ春のとある日

少年の春にわかるるかなしさよ山は靑みてわが前にあり

○

安井竹美

夕まぐれ蘇枋の花にうすやみのしみゆくを見て人こひわたる

泣きぬれて夕べしづかにあゆみゆく蔓草などの青き山路

手をとれば汝はそれにもまかせけりあはれわれにも汝はたよるや

暮れの街すこしはなれてあるく汝わがうしろかげいかに見るらむ

われこひしきときは心臓(こゝろ)に手をあてゝわが脈と思ひきゝたまへ君

○

齋藤微花

麥のにほひ人の情などこまやかに吸ふもかなしやたそがれの雨

風つゞく三日は烟の麥の葉のきはまりもなく顫へてありき

さや〳〵と林檎の花のあひだより輕く風わく暮れの哀れさ

樹下かげ黒くなりゆく初夏の土の匂ひに濡れし萱草

河くまに眠氣さしくる雨ふりて柳のいろの瞳に茫とせる

○　町田不破

酒に酔ひて悲しき歌を唄ひ出づ此顔父よ見給ふ可からず

ぎしぎしと古き家のみ押し合へる山のはざまのかなしき長崎

花咲きぬ流しのこしゝ此涙とく吸ひ盡せ吸へ吸へ日光

暮れにける山の彼方のうす明り明日は其處より來る人のあり

山と山青くたためる其をちの二月の峯の黄なるおちつき

○　松岡清若丸

夕されば枝垂れ櫻の咲く寺にわが撞く鐘の音の流るゝ

みだれ咲く櫻の花の下に居て美はしきかな思ふことども

夕されば鐘樓にのぼりながめやる熱田の濱の波頭かな

法華經をよむより外の仕事なきわが春の日のながきことかな

○　中島曙山

妹よながはらからは亞米利加のさすらひ人となりはてにけり

やさしかりし兄とたゝへてなが待てるわれの歸るはいつの日ならん

わが歸る日はありとてもなが待てる兄かへる日はなからじものを

古りはてし聖書を所在なきまゝに持てば寂しき手の姿かな

ゆくりなくたゞ生くて言ふ一ことが春はわきてもたよりなきかな

○　松島落果

かたをかの花ももたざる青草に夕かぜそよぎ春の月いづ

菜の花や遠き山べに佗び住まふかのわかうどになみだあらすな

あえかなる君川隈に立てるとき燕がそらをひるがへりくる

○　　　　　捫垣青花

木の間かげ五月の夕あかるきに泣きたきまでの人の戀しさ

曇りたる心と去りゆく春の日と涙のうかぶことしげきかな

しつとりとわれの心を濡らしたる五月の夜のあまき薄靄

○　　　　　田村胡春

春の夜の淡きかなしさ眼を伏せばたゞおのづから泪こぼるる

眼にいたく光りて見ゆる野の草に白くかげらふ春の午後の日

あはれわれに甘き泪もあれよかし思出すべき悲しさもあれ

○　　　　　三木海鳥

夜の街を過ぎる少女に瓦斯の火の放射も匂ふ花のかんざし

見上ぐれば目ににじみ出づる涙あり春暮れ方の山ざくら花

八月の晝の寐ざめに音もなく身に靑色の沒つるはさびし

○　　　　　山田清美

幕あひをバルコンに立ちたゞ獨り街のどよみを聞くがよろしき

春さればよく病室の窓に來し赤き胸毛の小鳥思はる

涙していとも靜にゆく春に歌よくうたふ君なりしかな

○　　　　　鹿納春吉

春の日の動物園の熊などにたはれて今日も悲しみをさく

食堂のふとカアテンをあけてみる春の夜の灯はなつかしきかな

きさらぎの南吹く日の敷石のしめれる上を步む悲しさ

○　　　　　高桑よし孝

病室や目をやむ女まぼしげ見る灯の下にさびしき椿

オルガンの覆ひとられて忘れたる春の灯の前あまき花ちる

丘ぞひの若葉の木立すく／＼と五月の空の光をすへり

○　齋藤白陽

汽車に乘りこまじろぎもせず町の灯を懷しみつゝ別れける日よ

ポプラーの青み渡れる梢より春てふものゝ立昇るかな

○　江澤虹花

渡舟水色傘のしつとりと水に映れる夏の朝霧

おどされて身の行末をはかなみし昨日の我のせちに戀しや

○　苗加白光

あゝ潮心をそゝる囁きよ若き妹に涙あらすな

うぐひすは鳴きぬ箔ほど紅梅に降らし粉雪のしづくする頃

ほとゝぎす月落ちかゝるあけ方のちさき祠草たかき丘

○　鈴木風影

巖蔭のさくらの花に流れくる朝の海邊の春の風かな

つばめ飛ぶ川沿町の夕まぐれ低き家並の哀れなるかな

○　馬場埋木

桃さきぬ櫻咲きぬと君は笑むかくてもわれは只にさびしき

楠の木の暗き下家に母とすみうらの小籔にきゝしうぐひす

○　中村紫竹

巢を立ちて雨にぬれたるつばめより吾は淋しく停車場を出づ

あかづきし事務服つけて歸り行く淋しき町の午後の片照り

○　伊瀬藻花

わびて住む親子二人の谷あひに春は悲しくおとづれて來ぬ

○　加藤爲子

うまごやし危き心抱きて踏む曉き方の旅の野の路

柳の町水の町たゞうす青しうす情け人ひとり住へる

○　道野冠峰

自らを儚なむことを時にする花の散る頃曇り日

續く

○ 丸山英

これぞとは指して云へねど何やらむ足らはぬものゝあるが淋しき

心やゝ粉るゝ隙もあらんかとはるばる旅に來は來つれども

怪しくも胸騒ぎすれ夜のうちに凶事もあると虫の知らすか

目さむれば痩せし腕をうち眺めかたみにさすりいたはりて泣く

○ 和田信義

悲し悲し吾が思ふことすべて枯れし木の色の如くづをれ行けば

○ 山田政之助

ふと乗れば女は見えず荒くれし男ばかりの電車なりしかな

女より文一つだに來ぬ我の思へばあまり淋しくあるかな

○ 森憲一

はれやかに君は笑まひて語るらん我等が植えし校庭の花

○ 鈴木小石

やるせなく物のさびしき日のあれば障子の骨を見る癖も得ぬ

山に二十日わらじをつくる事知りぬこのいさゝかの事のうれしき

○ 望月快哉

住みしことある町屋よりわが知れる女ののぞく春のゆふぐれ

○ 日柳朝街

砂の上に小さく落せるわが影のなど今日かくもからがなしきや

沈黙のながくつゞきて煙草吸ふ明りに浮きぬ白き木の幹

○ 打田紅雨

初夏は物のすべてが新らしくよろこばしくも瞳にふるゝかな

ぬるま日にひたりて咲ける紫陽花と土の匂とわれに淋しや

わが瞳投げやる白晝の坂の上にかろくをとれる黄なるたんぽゝ

○ 野々村淡霧

天地に小さき理想の現實となるあてもなき淋しき世かな

○　下　浦　潭　水

あさましやとすればこの身刃にも委ねむとてもみだれぬ心

ひや／＼と寢卷の肌にふるゝさへなつかしきまて春ぬくみけり

○　菊　亭　公　長

やすらかのはすかひの日にたんぽゝの黄き花がいだかれてゐぬ

○　井　筒　千　律

古郷の小驛を下りて君にそひ歩む麓の山櫻かな

いさゝかの酒にも醉ひて家を出ぬ春の夕の和らかき風

○　戸　田　露　葉

目つむれば未來の吾れと過去の吾卷縮の如く見る夜よ

なつかしき母の袂に顔よする十七の吾れが最後の甘え

○　竹　村　天　双

ほのかにも草もえ出てぬ春は來ぬそしるかのやう櫻花咲く

○　渡　邊　泉　花

落日にきえも入るよにほそぼそと唐人笛のさびしいかなや

○　中　田　文　三　郎

櫻咲く國に生れてゐはゐつれ悲しかりけりさくら咲く日は

○　早　川　水　骨

捉へがたき寂しみ抱きさまよへる更けたる町に雨降りて來ぬ

○　高　橋　曉　史

泥の上にひら／＼と散る花見ればあゝわが生の暗示の如く

○　宮　本　幸　三　郎

ほろ／＼と卓のつゝじ散りまろぶこの晩春の朝のさびしさ

○　佐　久　間　夢　塔

春の夜君が絹たつ白き手の光る鋏に力こもる音

○　室　町　三　枝

松透きて大海みゆる砂道を流人のごとも獨りあゆめり

○ 島翠花

何一つ飾り氣もなき事務室の簿記臺うへのフリジャの花

午後四時の倦みたる心にもたれたる簿記臺の上の白き塵かな

心ゆくまでに悲しき歌うたひこの入谷にぞ一人すむべき

○ 森青栗

二十一のわれがおびえのはかなさよ男おそるゝ處女子のごと

○ 石橋三男

爭ひてふと出てゝ來て品川の夕べなごめる海を見てあり

○ 服部桃村

桃の花垣根つゞきにほの白し林を透し月の青めば

○ 松見芳石

今宵また喜劇見にきてつくづくと喜劇役者になりたく思ふ

○ 八百村夜調子

白椿花くづれけり心よく木によりそひて泪ぐむ時

○ 横田湖峰

雪の原汽車は走れり二等車の女の顔の蒼白きかな

○ 長濱蘆琴

渚邊に小波すさりすさりして初夏の香の海にすはるゝ

○ 須賀紫浪

横町に柳の花を踏みて入る露と月とのやはらかき宵

○ 三島一

なげやりのくらしの中にめぐりこし春の姿のなつかしさかな

○ 香取秋二

暮れて行くことしの春が暮れて行く鐘しきり鳴る街の靜けさ

○ 佐々木冬雨

すてられて泣きもしたりしそのかみはわが思出の花と云ふべき

○ 奥屋白萍

淡黄なる燈臺の灯を窓に見る旅の疲れの果敢な

きゆふ。

塵募和歌投稿は東京小石川區原町百三十五尾上柴舟宛の事

俳句

初夏

高田蝶衣選

初夏の城朗かに濠の藻刈舟　月精
利き酒の藏を出て初夏の景云へる　同
案内少者が呉れし温泉花や初夏の山　同
初夏の夕日の胡桃葉照りや書架染めて　同
塀の瓦埃せる見過ぐ初夏の里　叱竹
渡り者の病み初めし宿や夏となり　同
石曳唄も夕影や初夏の里　同
水の都の初夏や家毎流すもの　同
朝は河中の巖の松初夏の風に鳴る　摘星辰
洗ひ砧の干速さ初夏の軒の風　同
徒歩渉る鏡師に水ナ上の初夏　同
印刀の柄巻き直して初夏となり　同
初夏寒き蘭の雨や川渓ひなき　紫浪
初夏の棕梠煽る密林の風　同
山桑の花淋し初夏の裾野來て　同

推に凪ぐ陶爐の煙や初夏山廬　同
器具洗ふに踏む磧草初夏の雨　公子樓
貫紙漉くに清む貯水や初夏の里　同
油井に廂掛けて初夏を唧筒据ゆ　同
桑に忌む風日重ねて夏に入る　柳子
雹の被害愁訴や初夏の小島より　同
風やそよと根なし虹見ゆ初夏の山　同
葉そよぎも煤障子初夏の日ざし暗　寝覺草
觸れ賣の聲變へぬやがて夏に入る　同
二食日頃を初夏の風瘦誘ふ　同
末社修覆も祭がまへの夏となり　羊子
えも遣らぬ孤愁や夏の初なる　同
離室成りて夏淺き野もまともなる　同
朱衣纒頭に望開けぬ今朝の夏　青蘭
夏立つ頃通ひそむ驛よりの馬車　同
塗師町は青添の香に夏ぞ立つ　同
山勢は見えずも老樹夏淺し　曉村
はつ夏の溫泉壺洗ふに鳥飛べり　同
湖畔初夏の家毎菅笠商へる　鎭西郎
端居語りに初夏の夕風寒がれる　同
島渡る青東風や初夏の欄に妓と　明兮

御堂榎蔽ふ阪町初夏を驅る　同
濡に汐の干しるさ夏に入る日とて　花啟史
砧打つ糊衣首夏艶に出づ　同
砂山に貉追ひし初夏の大凪げる　三光鳥
燕落しの風に草咲く初夏の島　同
森は朱塔の日に醉へり初夏にして　三石
水光に森透けて初夏の雲滋ふ　同
氷室訪ふ日のほろ雨や夏早し　朱雀
初夏や木蟲燒く藥か高う積める　同
初夏や大凪の果疊る海　二溪
初夏や海月筋とも汐明り　同
歌人住める樹叢夏立つ町の景　愛香
初夏の燭つめたう切るや我れ法徒　同
蹄鐵を打ちかふる家初夏の人だかり　楊杷子
初夏や窯氣配りも御庭燒　同
湖の反射に眸蒼し初夏樓の歌妓　銀竹
危言反つて恩顧得し身に夏淺き　同
木綿繰場の火騷ぎに初夏を占ひぬ　夢雪
初夏の釜据ゑも田舍住みなれて　同
釣臺もしつらひつ初夏の濱長者　竹梅
初夏夕べ這ふて灯に寄る虫も出ぬ　同

又の噂に固める出城夏立てり　松葉
港山の凪鳥や初夏の木々晴るゝ　同
庭竹の疎影新愁のあり夏初　國郎
洞しるべの燭に搖ぐ初夏の花　同
掠大樹に鳥住み初めり初夏の空　紫禽
牧車に汲む大河や初夏を澄みてあり　籠馬
桐に若う夏來て今宵佇める　更二
昨遠き心に初夏の雲動く　四十雀
結髮に油わく云へり夏も此日より　翠郭
崖下の藪跡に初夏の吹井あり　石羔
初夏や徐に雲の行く湖面　登與僣
初夏の桐の緣に帷を垂れて　胡鬼子
初夏の重たき舞の衣裝かな　萩浪
初夏や溫泉こぼれ谿の香に立てる　鬼氷
初夏や湖光秋に似る旦の帆　雨霽人
樵歌鳥聲も入峽の朝夏淺し　湖峰
初夏の江尻海門に似し波のあり　白青
初夏日照る川搖れ眩ゆ鰻搔く　馬の骨
初夏の蟲學問に灯を領しけり　小籟
樹搖れ風も繁き里初の祭ある　孤風子
草深く湖に分つ一徑夏に入る　昇月

山居成りて噴井搆も初夏や　紫樓
廻る洲鼻に踏む海月江も夏に入る　青栗
樹々擦れの斜陽明し初夏を對座して　楚丘改槐堂
南樓に初夏の雲よぶ黃なる花　眉電

課題　薔薇(茨)　六月十日〆切
閑古鳥　七月十日〆切
規定　淡路國假屋在釜口高田蝶衣宛
一人卅句限▽用紙は半紙の事

(二月號正誤)
御船戻す灯にもや千鳥啼き連れて　雪°耕°

評論

同盟國の大問題

(愛蘭自治案)

一

愛蘭自治案は今當さに英國議會の最要題目となり、龍驤虎嘯の論爭、日として新紙上に傳へられざる無し、頃日同案の詳細なる內容を手にするを得たるを以て、少しく茲に紹介せん。

新計畫に依れば、愛蘭の議會は皇帝と上、下兩院より成る、上院は四十名の任命議員より成り、第一回に限り愛蘭知事、英國政府の訓令の下に之を任命し、其後に至ては愛蘭知事、愛蘭內閣の推薦に依りて之を任命す、任期八年、二年每に循環的に其四分一を更迭せしむ、下院は百六十四名の民選議員より成り任期を五年とす、上下兩院一致を見ざる議案につきては、南阿憲法の例に倣ひ、兩院一團となり討議投票して可否を決す可し、皇帝は言ふ迄も無く裁可、拒否の權々保有す、其立法の權限に至ては專ら愛蘭自身に關する事項に限定し下記の件々を除外したり、(一)皇位、皇位繼承、攝政に關する事項、(二)戰爭及和睦、(三)陸海軍、(四)條約及英帝國內他の部分との關係、(五)尊稱爵位、(六)謀叛罪、外人及歸化權、(七)愛蘭以外との貿易、檢疫、航海、(八)燈臺、(九)貨幣、(十)商標、版權、(十一)宗敎々派の保護若くは禁止制限、(此外些細の點は略す)

愛蘭のエキセキユチヴは皇帝とす、知事之に代へて事を行ふ、知事の下に諸省大臣を置く(諸省大臣は愛蘭法に於て之を定めしむ可し)、大臣は愛蘭議會の議員たるを要す、

但し英吉利合衆王國の議會の優越權は本法の存するにも係らず依然變らざる可し、(愛蘭よりは同議會に四十二名の議員を出すことに規定せり)

次きに愛蘭と英吉利との財政的關係は如何と言ふに一切の租稅徵收は英國政府之に當り、先づ之を英國々庫に收め、然る後之を愛蘭國庫に移す、但し愛蘭は課稅に關し下記の如き權限を保有す、

一、愛蘭議會は英吉利議會が定めたる內國稅、印紙稅、土地稅、麥酒火酒輸入稅、其他の雜稅の率を增加するを得、

二、又所得稅、遺産稅、輸入稅(火酒麥酒以外の)率につきては其一割を越へざる程度に於て之を增加するとを得、

三、新稅を賦課するを得但し新輸入稅を設くるを許さず、

四、愛蘭に於ける稅率(一二三の印紙稅を除き)を低減するとを得、

而して一九一二年度に於ける愛蘭の收支豫算を檢するに下の如し

歲入

輸入稅	三、二三〇萬圓	內國稅	三、三二〇萬圓
所得稅	一、五一二	遺産稅	九三九
印紙稅	三四七	雜	一三七
郵便收入	一、三五四		
合計	一億八百三十九萬圓		

歲出

各種	五、四六七萬圓	郵便	一、六〇〇萬圓
養老年金	二、六六四	土地購買法費	七六一
國家保險及勞働仲介	一九一、五	警察	一、三七七、五
徵稅費	二九八		
合計	一億二千三百五十四萬圓		

即ち知る可し現在愛蘭財政は一千五百萬圓の不足を生じつゝあるとを、而して今回愛蘭自治成立し、議會及內閣出來するに至らば之に要する經費約五百萬圓と算せらる、從つて約二千萬圓內外は今後年々英吉利に仰く可き補助額なるを疑はざる也、

二

吾人は此案を見て先づ愛蘭人民得意の狀を想望せずんばあらず、蓋し英國前殖民卿ジョセフ、チエムバレーン氏は二十餘年前『愛蘭自治案は死せり、恰かもア

ン女帝の崩去して蘇生せざるが如し」と預言せるが、愛蘭人民の熱情は此豫言を適中せしむるを許さゞりしを以て也、而して英國首相アスキス氏も亦必らず得意ならん、何となれば愛蘭自治は自治黨多年の主張にして、故グラッドストオン氏が最も精力を集中して遂ぐる能はざりし所、今や却て氏の手に依つて成就せんとしつゝあれば也、換言すれば刻下の議會は一八八五年に於けるが如く自黨内の分裂を見るの恐れも無く、又一八九三年の如く上院に防止せらるゝ憂ひとても無く(其否認權剝奪せられたるが故に)、從つて首相の公的地位は望月のかけたるともあらぬ身の上なれば也、

然りと雖も翻つて英帝國の利害より本問題を見ば如何、人種を殊にし、歷史宗教を異にする愛蘭人の獨立熱を滿足せしむるの方策上、事玆に出づるを止むを得ずとするも、唯記憶せざる可からざるは、愛蘭の地位是也、愛蘭は加奈陀、南阿、濠洲と異り、地域英本國に近し、從つて右三洲に許せる半獨立的地位を以て之に許すが如きは是豈やがて英國の禍殃を招く所以たらざらん哉、

爾餘の點は少焉らく措き、憂懼せざるを得ざるは、愛蘭に關稅上獨立の第一歩を讓與せるの點是也、上記の規定に依れば愛蘭の議會新關稅を設定するを得ざれども其率を增加するを許さる、即ち是英と愛蘭との間に關稅率の差異を許せるもの也、然らば則ち一旦英國に入れる外國品は、愛蘭に入るに當り、更らに双方稅額の差異を拂はざる可からず、(一方に於ては稅金拂戾を得、他方には新稅を支拂ひて)、是已に英蘭及愛蘭間に關稅的障壁を設定せる第一歩にあらずして何ぞや、

夫れ愛蘭財政の不足、年々二千萬圓と稱せらる、之れ英國の補助金に依りて塡補せらるゝも、獨立を尊む愛蘭人が久しく冀望せる所は、英愛間に關稅的障壁を設け、之に依つて財政の均衡を保つの點に在り、是實に愛蘭黨が屢聲明せる所にあらざる乎、今已に同法案に於て關稅率變更の權能を附與せば、吾人は恐る、隴を得て蜀を望む愛蘭人がやがて純粹なる關稅的獨立即ち英愛間の關稅的分離を要求するに至らんことを、

而して關稅的獨立は商業的、利益的獨立也、商業的利益的獨立は人種、宗敎、歷史を殊にせる英愛兩民族の如き關係に在りては、即ち純然たる國家の分離を促さずんば止まざる可き也、

茲に於て乎吾人は我同盟國の利益を想ひ、下の一案を提議せんとす、曰く寧ろ對愛蘭補助金の增額と繼續とを許すも、斷じて關稅率變更の權を許す可からずと、顧みるに關稅を中央政治機關に占有し、之に對して補助金を各洲(即ち地方政治機關)に與ふるは方今濠太利聯邦が採用せる所なり、其の關稅率を二三になしてやがて國土分裂の端緒を造る自治案に勝る萬々なるや、則ち言を俟たざる也、

吁嗟愛蘭自治案提出を見たる英國は、最も重大なる機會に際す、一歩を誤らん乎、國運遂に危きを致さん、吾人が老婆心に驅らるゝもの、何ぞ偶然なりとせん哉、

丁抹皇帝崩御

五月十四日丁抹皇帝フレデリック八世陛下、獨逸漢堡市に崩御あり、寶算六十有九、而して皇太子クリスチアン親王、天位を踐ませ給ふ、吾人は一友邦民として一喜一憂を禁ずる能はず。

就中吾人の胸臆を打つこと深かりしは、故皇帝崩御の消息を傳へたる伯林電報是也、曰く丁抹皇帝フレデリック八世は十四日夜俄然獨逸漢堡市にて崩御あらせ給ひぬ、是より先き皇帝は烈しき肺炎に罹らせ給ひしかば南方に轉地療養を遊ばされ快方に向はれしにぞ十三日歸國の途漢堡に御到着あり十四日の夜には單身旅館を出て給ひ「ゲンゼマルクト」を御散步あらせられしに俄に心臟痲痺にて正氣を失はせ街頭に倒れさせ給しかば直に之れを漢堡港病院に運び參らせしも最早御息絕え居たりき最初は何人も之れを丁抹皇帝フレデリック八世陛下ならんと想像する者なかりしが旅館に居殘られし皇族の方々は皇帝が久しく御歸館無き爲め不安の

念を催し種々探索の結果皇帝の遺骸を同病院にて發見し一同驚駭直に之を旅館に引取り奉りぬと、吁嗟丁抹帝國、面積一萬五千六百方哩、人口二百六十五萬九千、大と言ふ可からずと雖も、亦歐洲の古國たり、而して其君主は外邦の市街に仆れて人の知るもの無し、世上の是非は區々たる可きも、吾人は寧ろ皇帝の單純生活を喜び給ふ平民的氣質を美とせずんばあらず、

そは兎も角も、丁抹正さに主權者變更の機に際す、此時別に吾人の心邊、多少の憂懼を覺え來るものあり、他無し同國の內治外交が新皇帝の下に在りて、如何なる發展を見る可きか是也、

方今丁抹政界の難問題たるもの少々にあらず、其間殊に重きを成すものは勞働者對資本家の關係及び之に關する新法律制定問題其一也、國教問題其二也、國防問題其三也、而して勞働者對資本家の關係其他社會的立法に至ては、世界大勢の趨向動かし難く、丁抹獨り局外に超然たるを得ざる可し、唯た望まざるを得ざるは、同國が成る可く速かに國教主義を捨て、政教分離を謀ると及び軍備擴張計畫を放棄すると是也、蓋し同國ルーテル教派を採用してより約四百年、その累を政治に及ぼしたるもの幾回なるを知らず、寧ろ機を見て佛國の例を追ふを可なりとせん、次きに軍備問題即ちコッペンハゲンの海陸防備を完全にする策の如きも、恐らくは海上に於て那威、瑞典に備へ、陸上に於て獨逸に備へんとするものなる可きも、是亦却て有害ならん、何となれば弱小邦たる同國の財政は如何にするも軍備擴張を許さざるのみならず、之を實行するに於てはやがて獨逸の疑念を挑發するの憂あり、事實上中立國として安全の境に在る同邦の地位を危うするの疑ひあれば也、況んや同國にして軍備案を放棄せば、最近頻々たる其內閣の更迭の如き、之を防止し得可きに於てをや、

聞說くクリスチアン新帝は賢君也、恐らくは國是を定めて小帝國を安全ならしむるに至らん乎。

ロ氏と婦人投票

ロオスエルト氏、カリフォルニヤ州の大統領候補豫選に於て大勝を博す、而して其原因は婦人の投票多く氏に投ぜられたるに依ると聞く、

顧みるにカルホオルニヤ州は一年半前新たに男子と同等なる程度の參政權を婦人に附與し、同州婦人の大統領選擧に參加するは今年を以て始めとす。世人如上の結果を見ば、必らずや悟らん「感情深き婦人の投票を收むるものは、亦平淡事理を説く實際的政事家にあらずして、煽動に巧みなる詭辯家なることを」

片々錄

△瑞典文豪ストリンドベルヒ、溘焉長逝す、錦心繡腸、北歐の文壇の華として、金聲玉振、一世を風動せしも夢なれや、然かも有力なる呪咀者を失ひたる歐洲の女性は、一先づ安心なる可し

△チリンガム移民排斥法案、米國上院を通過するや、我外務官吏、盛んに同案の邦人に害なきのみならず、有利なるを說き、數箇の味方新聞をして此説を吹聽せしむ、然かも何ぞ圖らん同案中には歸化權無き日本人の排斥を目的とし、日本が自制的に行ふ渡航禁止を解くや否や排斥を行はんとする規定あらんとは、吁嗟秘密と誤魔化しに汲々たる霞ヶ關の外交は、外交にあらずして內交なるかな

△墨國の內亂收まらざるの時、米國代表者赤十字大會に提議し、他國の內亂に對し外國より赤十字隊を送らんことを主張す、敵は本能寺に在り、あゝ敵は本能寺に在り

（懷沙隱客）

新刊批評

▲言文一致民法附戸籍法

今井高橋笠井三法學士編
東京國民書院發行

言文一致法典叢書第一卷として發行せられたるものにして菊版一千三百五十頁に餘る浩然たる大册也。今本編を通讀するに民法千百四十六條の條文を言文一致を以て諒解し易く書き下し、意味の不明なる所には、懇切なる説明を加へて法律專門家にあらざるも一讀して、其趣意のある所を知悉せしむ。私かに思ふに、我國の學者は專門的にのみ學問を講釋することを知れども、一般國民に向つて分り易く入り易く、學問を嚙み碎いて授くることを知らざるは學界の一大缺點にして、殊に民法の如き何人も心得置かざるべからざる法典が、或は之を專門的に學修し、或は煩瑣にして難解なる註釋書によらざれば、之に近き能はざるが如き狀態にあるは、法治國としての大缺陷にして且つ大恥辱ともいふべし。此編今井、高橋、笠井三法學士の努力によつて此大缺陷を補ひ得たるは學界及び一般人民の爲め我等の大いに慶賀に堪へざる所也。殊に附錄として戸籍法を載せ、又欄頭に民法正文を掲げて彼此對照するの便を與へたるが如き、何處までも親切なるやり方といふべし（定價三圓五十錢特價二圓八十錢）

▲親鸞聖跡

安藤正純著
金尾文淵堂發行

聖僧親鸞の聖蹟について一々精細なる討究を遂げたるものにして、漫ろに此靈界の偉人の偉業を偲ばしむるものあり。大谷光明師、大谷光演師等の題字を附せり（定價一圓八十錢）

▲譯文大日本史(一)

山路愛山譯
後樂書院發行

水戸の源義公が修史の業を創めしより大日本史の幕府に獻ぜらるるに至るまでは前後六十餘年の歳月を費やしたりといふ一事を見ても、此書の非常なる努力と、非常なる熱誠と、非常なる抱負の下に成れることを察知するに難からず。此書の眞正の歴史としての價値に至つては、史學に對する見解を區々にせる學界に於て、勿論種々の議論あるべし。然れども此書が國史の一大寶典として、如何なる學者も其恩澤を蒙らざるなきは疑なき事實にして、今之を假名交り文に譯し、普通一般の讀者をして此寶典に近き易からしめたるは學界の爲めに慶賀すべし。只譯文餘りに原文に忠實にして、艱險なる字句を其儘中に假名を挿みたるに止るは些か殘惜しき心地せらるれど全文の振假名附は此缺を補ふに足れりといふべし。兎に角此書の出版あるは學界の一大慶事といふべし。（全五册十二圓）

▲兵部卿護良親王

木村鷹太郎、清水孝教著
明治出版社發行

時代革命の人としての護良親王を叙述描寫したるものにして、一種の歴史小說としても讀むべし。冷たき理智の眼を以て親王を研究したりといふよりも、温き心情の筆を以て親王を讃美したるものといふべし。（定價二圓五十錢、特價二圓廿錢）

▲校訓論

狩野力著
良明堂發行

校訓問題についての著者の見解、教育界名士の意見の批評、及び校訓についての各種の方面の研究を掲げたり。（定價七十五錢）

▲日本海大海戰殉國記　高須梅溪著　明治出版社發行

露國海軍中佐にして、日露戰役の當時デイアナ副長として實戰に參加せるウラジミル、セメヨノフ氏の原著を譯せるものにして、愛國者的熱誠と科學者的眞摯とを兼ね備へたる處、近來の戰記熱に浮されて續出したる邦人の手に成れるものに優ること數等なりといふべし。我等は彼の大戰役に關する邦人の書を讀むと共に、又相手方が如何なる感想を抱きたりしかについても知り置かざるべからず（定價金一圓二十錢）

▲帝國憲政と道義　大津淳一郎著　同文館發行

我帝國が憲政の形式を採りながら、未だ其實質を備ふるに至らざるは識者の慨嘆を禁ずる能はざる所にして、憲政に關する道義心の極めて薄弱なるは、今回の總選擧に於て〻顏面に曝露せられたり。此編帝國憲政と道義に關して嚴肅なる論議をなし、我邦人を警醒する所多し。（定價一圓八十錢）

▲維新秘史英雄と女　小野蕪史著　東亞堂發行

維新當時の英雄、豪傑、志士、大官等の情事を書きたるものにして、人の性格は或意味に於ては最も酒と女にあらはるゝともいふを得べければ、此編も其意味に於て興味少しとせず。（定價七十錢）

▲法律學說研究　寺田四郎著　一星社發行

寺田法學士の新著にして、希臘羅馬の古より最近世に至るまでの自然法學派、歷史法學派の學說の大要及び其批評等を掲げたり。穗積陳重博士の長き序文あり（定價一圓卅錢）

▲人格的宇宙觀　今泉、ギューリック共譯　敎文館發行

ボルデン、バウンの「パーソナリズム」を今泉眞幸、シドニー、ギューリックの共譯せるものにして、極めて眞面目なる著也。尙バウンの著述は引續き飜譯せらるべしといふ（定價不詳）

▲史學研究會講演集（第四冊）　史學研究會編　富山房發行

上田（敏）博士の「伊曾保物語考」を卷頭に松本（文三郎）博士、高瀨博士、原（勝郎）博士、藤井乙男、濱田耕作、湯本文彥等の講演を集めたり（定價一圓五十錢）

▲日本我　遠藤隆吉著　巢園學舍發行

「日本の意義を知らしめ、日本の精神に一致せしめむ」といひ、「日本の我を明かにし、個人として之に一致せしめむとの意に外ならず」といへる序文の文句にて此書の性質及び目的は知らるべし。（定價一圓卅錢）

▲記憶力增進法　檜山鐵心著　東亞堂發行

心身健康會長檜山鐵心氏の著にして、神經衰弱者などには一讀の價値あるべし（定價四十五錢）

▲社會本位と個人本位　今井政吉著　嚴松堂發行

建部博士の編修の下にある社會論叢第六卷として發行せられたるものにして、今井文學士の著也。社會と個人との關係を研究せる眞面目の著述也（定價一圓五十錢）

▲**禪學觀** 加藤咄堂著 東亞堂發行

専門的研究の深淺は兎に角、佛教教理を通俗に、面白く一般人士に說き聞かしたる手腕に至つては、佛教界多士済々たりと雖も我儕常に咄堂を推して第一となす。此編又氏の例の筆鋒にて禪を說き、禪と各種のものとの關係とを說述せり。(定價七十五錢)

▲**哀花熱花** 兒玉花外著 春陽堂發行

現代文藝叢書第十一編として發行せられたるものにして小品文三十餘篇を收めたり。熱のある、飾りなき筆致誦ずべきものなり(定價二十五錢)

▲**少年の笛** 小川未明著 新潮社發行

「少年の死」以下十四篇の小說を集む。未明氏の作には時に字句洗錬を缺き、又内容の充實せざる驚異詠嘆多きに過ぎて、藝術品として多少の憾みあるもの少からざれども、又多感にして純白なる心を以て自然と人生とに對する著者の面目、作中に躍出し、此點讀者を惹き連れて、著者の詩中の天地に遊ばしむる力なきにあらず。未明氏の作物を喜ぶ讀者には感興多かるべし。(定價五十五錢)

▲**眞人僞人** 久津見蕨村著 丙午出版社發行

蕨村隱士の名を以て「新公論」誌上に連載せられる人物評を集めたるもの也。蕨村隱士の評は時に見當違ひあり、又時に緊實を缺くの憾あるも、概して直截にして鋭利に、其言はんとする所を言ひ、論ぜんとする所を論ずる所、痛快ならずとせず。(定價一圓)

▲**空穗歌集** 窪田空穗著 中興館發行

空穗氏は歌壇一方の旗頭にして、其作時に平凡なるものあるも、概して獨自一己の詩境を開拓して、朗々誦すべきもの多し。其篇、短歌、長詩約千首を收めたり。吉江孤雁氏の卷頭の序も讀むべし(定價八十五錢)

▲**賣文集** 堺利彦著 丙午出版社發行

賣文社主堺枯川の文集にして、氏の友人知人六十餘氏の序文を添へたり。何處までも氣が利いて、而して底に熱のある、枯川氏の文は、文壇の一の珍品にして、何れの篇も讀みて面白し。(定價一圓)

▲**新らしき抒情文** 山下寂水編著 尙文館發行

三分の二は現代名家の作例を掲げ、三分の一には新らしき叙情文に對する著者の意見を附せり。(定價五十錢)

▲**生ひたちの記 青年時代** 徳田秋江譯 東京國民書院發行

トルストイの傑作なる「幼年時代、少年時代、青年時代」の中、最後の「青年時代」を譯したるものにして、譯筆亦趣味あり。粗撲なる筆致の中に、翁の青春なりし生涯窺はれて面白し(定價九十錢)

▲**アルネ** 矢口達譯 新陽堂發行

「アルネ」はビヨルンソンの傑作の一也。北歐の名著が邦文に譯せられたるを喜ぶ。(定價六十五錢)

▲**日本文學物語**(歷史の卷) 芝野六助著 興文館發行

古事記より増鏡に至るまでの史書について通俗にして面白き説明を試みたるものより（定價七十錢）

▲英國歴史物語　西村晃一著　興文館發行

英國の古代よりの歴史を通俗に書きなるもの也（定價五十錢）

▲和譯東萊博議　田岡嶺雲譯註　玄黄社發行

和譯漢文叢書第十二編として東萊博議の和譯出づ。博議の文、全篇を通讀すれば稍々、千篇一律にして些か其單調に倦まざるを得ざるも、一つ〳〵の文章について見れば、筆路暢達にして文に精氣あり。少年、文を學ぶ者を益する所多し。漢文にて讀むの力なきものには、本書の購讀を勸む（定價一圓三十錢）

▲平家の人々　高須梅溪著　岡村盛花堂發行

何人も知るが如く平家物語は我國の最も美しき敍事詩にして、平家の末路は我國史中の最も悲哀の情調に充てるもの也。此篇著者が、或は哀れなる、或は優しき、或は悲壯なる、或は豪快なる、種々の詩材を供したる平氏の人々について、其詩思を行りたるものにして、青年の愛讀に値すべし。

本月は頁數豫定より超過せるを以て批評の長さに亘りたるものは全部之を次號に讓れり。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

百瓦入五十瓦入として全國の藥舖に販賣す



諸君にこの卓越なる
滋養強壯劑ソマトーゼの服用を勸む

獨逸國に於ける最大の染料及び藥品製造所たる**バイエル**會社より發賣せる**ソマトーゼ**は肉類の消化性蛋白質と滋養鹽類とより成り、最も服用し易くして然かも用途廣汎なる滋養劑なれば、すべて身神の衰弱せる人、平素身體薄弱なる人、常に頭腦を過勞する人等は速かに一本を試みらるべし

（說明書進呈）

發賣元　**バイエル會社**
橫濱市山下町百八十三番
神戶市明石町四十七番

（中付の一）

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此の廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新刊特價提供

東北帝國大學講師
第二高等學校講師
文學士 登張信一郎著 ● 紙數貳千三百七十頁

新式獨和大辭典

(中付の四)

◀本書の最も誇る特色▶

一 語數の多きこと空前

二 連語と根語とを問はず凡てABC順序の編成なること

三 外國語は凡て網羅せること

四 主要なる語には英語を加へ獨逸語の説明を附せること依て三體辭典の用を兼ぬること

五 發音を一々明確に記し語源語根の解釋を附したること

六 地名人名等の固有名詞を載せ悉く其發音法を明記せること

七 成語熟語の多きことと是れ又空前語の用ゐる方格の支配等を一々豐富なる文例を擧て明記し特に内容多き語は四五頁に渉りて詳解す本書を有すれば熟語辭典の用なし

八 活字は弊店特製の新七號を鑄造し用ゐ方巧妙を極め一目瞭然たり

九 譯語は凡て現代語を標準とし多く口語體となして一々斬新適確此の點に於て斬然時流を抜く

本書は獨逸文學獨逸語專攻文學士登張竹風先生が其文學語學の文才學才を披瀝し前後六年の星霜を費し斯界の爲め熱血を注ぎ献身的に新譯編纂に從事せられたる大產物模範的獨和大辭典にして今や全く大成し釘裝を凝し茲に獨逸語學界空前の光明となりて出現す

■語數拾萬言以上 ◎送本 製本完成着金順

■特價金貳圓四拾錢

壹萬部限(新形總クロース箱入美製全一冊)正價金參圓

郵送料内地金十二錢 朝清各四十錢

登張・山田大黒 著 ●新和獨辭典 價九十五錢 郵稅金六錢

登張信一郎・藤井信吉 著 ●獨逸熟語新辭典 價一圓六拾錢 郵稅金八錢

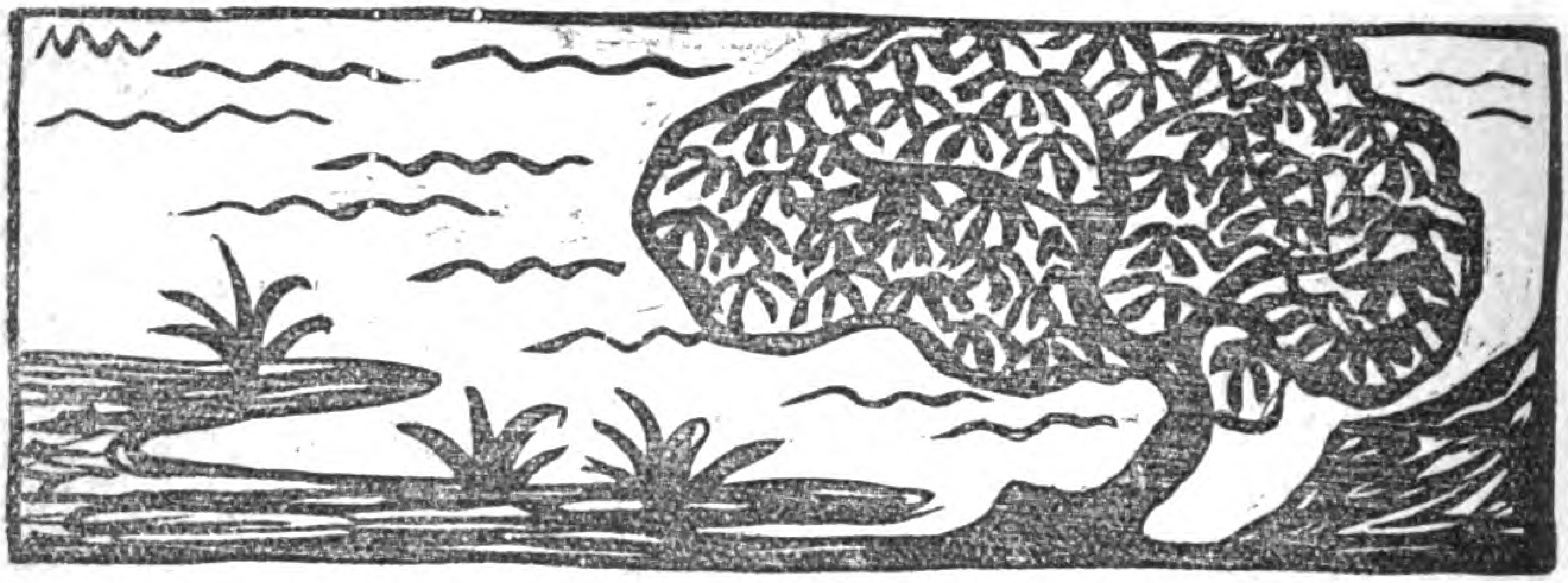
野村泰亭 著 ●新佛和辭典 價金貳圓 郵稅金八錢

松井知時・上田俊一郎 著 ●新和佛辭典 價金貳圓 郵稅金八錢

進呈 内容見本往復端書にて申越あれ

東京日本橋區 大倉書店發行 振替貯金口座東京二三八番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



涙

徳田秋聲

「今晩は」といふ親しみのない鈍い聲が、物怯したやうに私と開けられた格子戸の音と一緒に聞えて來ると、お信は慧しげな目を瞬つて、首を傾げながら、長火鉢の側を立つて行つた。

火鉢の傍には、汚れた食器もあらまし浚はれた餉臺の端の方に、子供がノートに何やら惡戲書をしてゐた。次の女の子は悲しげに二皮目蓋の目を瞬きながら、そこへ小い胸をもたせかけて、うつとりとして居た。頭の大きい肥つた末の子は、眠さうな目をしながら、まだ太い箸を手から離さずにゐた。白々した瓦斯の光が、古びた茶の室の隈々に行わたつて、何事もなささうな靜かな宵であつた。

主の貞三は晩酌の酒に顏は赤かつたが、心は冷いやうな目容をして、遠い

ものでも眺めてゐるやうに、子供達の様子を時々じろ〳〵と見てゐた。
「誰方さまで入つしやいますか。」さう言ひながら、襟を掻合して、透して見てゐるお信の目に映つたのは、何處か見覺のある二人の顏であつた。お信はこの頃滅切記憶力の衰へたのが、氣はづかしい位であつた。
「實は若杉のとこで伺つたんでござんすがな。」
お信は其言で、其人達が若杉と云ふ自分の親類續きの或青年の娵の兄と從兄とに當る人達であつたことを、直に思出した。七八年前に、若杉の結婚式の前後お信は二度ばかり逢つたことがあつた。
「おや、どうも失禮致しました。ついお見それ申しまして……。淸三郎が奈何かいたしましたのですか。」
「若杉も、急に病死いたしましてな。」
「若杉が死んだんですつて……まア淸さんが……。」
「ハ……實は二月頃からぶら〳〵して居つたんでござんすが、お醫者が少し見立違ひをしたものですから……最初は盲腸とかいふんでしたがな、實は腸に腫物が出來てをりましたので、大學の佐藤外科で手術をやつて戴きますと、間もなく亡つてしまひました。」
「まア些とも知りませんでした。いつの事です。」
「目をおとしましたのが今朝の四時でございます。」

「可哀さうなことをしましたね。」お信はもう泣出してしまつた。そしておろ〳〵聲で、「そんな病氣をしたのなら、淸さんも些とでも報してくれさうなものですのにねえ。宅へも暫らく顏出をしないから、如何してゐるかと思つてゐたんですよ。あの若さで死んでしまふなんて、まア何て可哀さうなことをしたんでせう。」

「それが、本人も死ぬ病氣とも思はなかつたものでござんすから。それで御通知の葉書は出しておきましたが、左に右兩名で伺つたやうな次第で。」

お信がぼろ〳〵涙の流れる目を拭きながら、入つて來たとき、貞三も此春暫らくぶりで寄席で逢つた其男の顏を思出してゐた。貞三は自分が表面の仲人に立つたのではあつたけれど、娵を貰ひそくなつたことを、不斷からお信と一緒に淸三郎のために惜んでゐた。娵はさうした器量のある商人の上さんとしては、餘り氣の利いた方でもなかつた。標致も好くなかつた。

「いつでも私が出て口を利いてあげるよ。」

淸三郎が日本橋邊の或賣色と夫婦約束までしたと云ふ話などをして、魯鈍な女房の愚痴をこぼした時なども貞三は今にも夫婦は別れるものゝやうに思つて、それに力を添えやうとした。しかし淸三郎は矢張妻を不憫に思つた。それにもう三つになる男の子を抱へてゐた。淸三郎の足はいつとなく遠くなつた。つい三四日程前藥師の緣日に、お信がその上さんとふと出逢つた時も、淸三郎の入院してゐる話すらしないで別れたくらゐであつた。

「きつと藪醫者にかゝつてゐたんだ。」

「さうかも知れませんよ。あの男が死ぬとはおもひませんでしたね。………東京へ逃げて來てから、隨分苦勞した男ですよ。今漸と芽の出た處で、生命を褫られちや詰らないねえ。」

お信の頭腦には、淸三郎の亡姉の片着いてゐた自分の亡伯父の處へ身を寄せて來てから、色々に闘踠いて來たその男の短い一生が、歴々と浮んで來た。色々の目にあつて來た自分の半生も、それと一つに思合された。お信の目にはまた熱い涙が湧いて來た。

「報してさへくれゝば、醫者の詮議ぐらゐしてやるんだつたに。」

「左に右私は些と行きますがね、貴方も來て下さいな。」

「よし、行かう。」

小い方の子供を寢してから、お信は貞三に香奠の包の表書をしてもらつて、旋て一緒に薄暗い外へ出た。

若杉の家は、根津の方にある姉の従兄の持になつてゐる貸家の一つであつた。シンとした其路次へ入つて行くと、直に若杉と記した軒燈が目についた。格子戸の外に垂下つた簾を潜ると、玄關には下駄が一杯に散らかつて、内は閴りしたなかにも、慌忙しく何やら犇めくやうな音がした。多勢の人達は、庭向の六疊の座敷で今湯灌をしました死骸を、棺に納めてゐるところであつた。電燈が高く天井に釣上げられて、そこらには線香の煙が一杯に漂つてゐた。中には繩襷をしてゐる人もあつた。田舎から出て來た

若杉の二人の兄の顏や聲も、直にお信の耳についた。その家は、田舎の町で可也大きな雜貨の老舗であつた。淸三郎がそこで兄に使はれるのを厭がつて、家を逃出したのは十二三年の昔であつた。

人々の背後から顏を出すお信夫婦の目に、淸三郎の蒼白い死顏が氣味わるく映つた。目を泣脹らした姉の顏も傷ましげに棺のなかを覗いてゐた。お信は黑髮の延びた死人の顏を、長く瞶めてゐられなかつた。

「變るもんですね。」手巾で顏のあたりを抑へながらお信は貞三に寄添ふやうにして私語いた。

旋て投込む茶袋で死骸が埋まつてしまつた。

「さア何ぞ入れてやりたいものがあつたら、どし／＼寄越した。」死人の面差酷肖な兄の淸七が元氣らしく言出した。

菓子箱や、煙草入のやうな持物などが、どさくさ立働いてゐる人の手から手へ渡された。

「こゝに立つてゐる。」貞三は線香を持つて、人々の背後の方に少し離れて首を俛れて突立つてゐる今茲七つになる男の子を指した。子供の顏は見違へるほど立派になつてゐた。

「まア。」お信はまた手巾を顏に押當てゝ泣いた。

「こんなものを置いて……どう云ふ氣持がしてゐるでせうね。」

お信は是迄にも、善く自分の場合を考へて見たことがあつた。良人に先に逝かれる時のことや、自分の先立つた後のことも考へさせられた。夜更の寢ざめに、ふつと其樣な恐怖に襲はれて、枕から首を擡げて、薄暗い明に照された幾人もの子供の寢顏を、心寂しく眺めたこともあつた。

「貴方に先に死なれたら、私から云ふ風にしやうと思ひますがね。」
お信は今差當つたとのやうに、其を取決めておきたかつた。
「さう決めたとほりに行くものか。」其度にお信は、良人に氣なしに非されるのであつた。
棺は蓋をされて、間もなく其處に据えられた。
「綺麗なもんさ。惡い病氣で死んだと云ふのぢやなし。」兄の清七は、着物の塵を拂つて、箪笥の前の方へ坐つた。そして更めてお信夫婦に挨拶をした。
「舍弟も生前は色々と御高配にあづかりましたが、實に殘念なとをしまして、私も片腕を挘取られたやうに思つてをりますが、如何も爲方がございません。」
貞三の背後では、次の兄の清二とお信との間に、同じやうな挨拶が初まつてゐた。貞三は其方へも振顧つた。部屋には道具好きな清三郎が買込んだ道具が、こて〳〵と積まれて、其前に色々の人が膝を並べて、入口まで坐つてゐた。清三郎が勤めてゐた洋酒問屋の傭員や、以前からの友達などの顏も見えた。
「あの元氣の好い人が、こんなに成らうとは思はれませんでしたね。」お信は去年の春頃まで、得意場廻りなどした序に、ちよい〳〵寄つては、氣忙しさうに時計を見い〳〵、急込んだ調子で、自分の商賣の事ばかり話して歸つて行き〳〵した清三郎の姿が、目に浮んでゐた。紺鐵の羽織にセルの前垂をした、嫋婷とした其體つきや聲が想出された。始終氣のいら〳〵して居た彼が、結婚してから間もなく、鑵詰事業に係はつて、さも奮發したと云ふ風で北海道へ行くとになつた時の氣慨や樣子も、目に見るやうて

あつた。幾通かの藝者の手紙や寫眞を、折鞄から出して見せて、その女を家へ引張込む相談をした時の眞劍な顏色も、まざ／＼浮び出るやうであつた。

「子供さへなけア、私も今日まで恁してゐるんぢやないんですがな。何しろ餓鬼がゐるんで……。」清三郎は手紙を捲いたり、擴げたりして、遣瀨なげに顏を曇らしてゐた。

「あの婢アぢや眞實稼ぎ效がありませんよ。私ア決して色戀に溺れて、恁云ふぢやないんでごあんす。女は實際悧巧な奴なんです。」

「好きな女が出來たのでは、それは然う思ふでせうね。だけどお芳さんも可哀さうぢやないの。」お信は言出すのであつた。そして、「私達が、何とも口は出せませんね。まア能く考へてみると好いわ」と言つて歸してやつたのであつた。

「私も實は意外なんでして、現に手術室へ入るときなども、一兩日腹を干してあつたにも拘らず、大した元氣でした。私の出て來たのが、其朝で着くと直ぐ駈着けて行きましたが、取かゝつたのが九時で悉皆縫ひあげてしまつたのが、十二時過と云ふ大手術です。處がその日は可ござんした。尤も悉皆醒め切つたのは晩方でしたからな。すると徐々痛出して來たんです。二日目三日目となると、もう如何にも恁にも我慢が爲切れない。こんな殘酷な事が又とあるか。こんな苦しい思をするくらゐなら、一と思ひに死んだ方が優だと言つて悶踠くです。看護婦や私達が言つたんぢや、迚も承知しやしない。てまア色々博士にも伺つて見ましたところ、手術は極尋常に行つてゐる。じッと辛抱してゐさへすれば癒る體だが、さ

う喧しく云ふやうては困つたものだ、と然う云はれるのです。それて氷の缺片ても可いから、食べさしてくれと言つて拜むもんてすから、博士の許を得て、それだけはくれるとにしましたつたが、其を口へ入れる時の歡喜つたらなかつたてす。死ぬと思へば、牛乳の一合や五勺くらゐ飲してもやるんてしたつけが如何も爲方のないものです。それに妾と家へ歸りたがりましてな、兄貴々々、己はもう迚も駄目だ。外には少しも故障はないが、腸のこの腫物のために生命を褫られるのはいかにも殘念だと、然ういつて此手を力一杯摑まれた時には、骨肉の情て實際私も腸を斷たれるやうてした。體を洗つて手術着を着るとき何だか經帷衣のやうだと云つて笑つてましつたけが、矢張それが前表だつたんてせう。」

「そんなに痛んだんてすがね。貞三は手術に過失てもあつたのてはないかと、それを疑つてゐるやうな目容をした。

「さあ。尤も執刀は谷口と云ふ醫學士てしたが[illegible]。」

「些とても此處へ連れて來て、死したかつたな。」聲音も目鼻立も清三郎の優しい處だけを取つて來たやうな二番目の兄の清二が、端の方から言出した。清二は町て銀行へ勤めてゐる體てあつた。

「さうすれば又病室におけば可かつたと思ふだらうしな。」清七が言つた。

「しかし斯樣のは命數とも言へませんな。」清二がまた言出した。

「清さん幾歳てしたね。」お信が訊いた。

「三十一てした。」

「それでも、もう其樣でしたかね。」

「私も何時幾日に、手術をすると云ふとを兄から聞いたゞて、それから何とも言つて來ないから、多分經過が良いのだらうと、實は安心してゐたのでした。さうすると三日目に危篤と云ふ電報でせう。着いた時はもう耳も遠いし、口も充分聞けませんでしたが、私の來たのが何のくらゐ嬉しかつたものか顔を持つて行くと此耳を引張つて放さないのです。私は今だに此處が痛くて爲樣がありません。」清二は耳朶のところを擦つて、「そして有難と〳〵といつて妾に手を合して拜むのです。それで清七兄貴は頑固で迚も可けないから、私に取計つて、家へつれて[illegible]いしてくれと云ふとを、手眞似で賴むのです。死ぬまで氣は確かなものでした。どうも死ぬ病人とは思へませんでした。息を引取つてから、醫者が馳着けて、人工呼吸ですかな、可恐しい荒いとをして、體を揉むのが痛々しくて見てゐられませんでしたよ。どうせ死ぬものなら、もう好い加減にして樂に死して、くれゝば可いと思ひましたよ。」

「でも、まあ可いや。田舍では幾許金をかけたからたつて、あゝは手當が行屆きません。」清七は病院の設備の完全してゐるとを說出した。そして出來るだけ、病人のために盡したとを自分の誇とした。清三郞の可恐しい苦悶の聲を聞いて、手術前の隣室の患者が、蒼くなつて慄えてゐた話も出た。

やがて果物や菓子が、そこへ持出された。大分たつてから若い坊さんが位牌の前へ來て坐つた。そして線香を立てゝ鈴を鳴しはじめた。鈴の音はしめやかに部屋に響いた。

お信夫婦は、少時してから其處を出た。清三郞の友達で、お信夫婦とも知合の或會社員も一緒に出た。

お信はやつと陰氣な空氣のなかから逭れたもの丶やうに、勢好く急いて歩出した。外はしつとりと更けてゐた。

「清三郎も些とお行儀が惡かつたやうですね。」お信は二人の間に挾まつて歩きながら言出した。

「然かも知れませんよ。何分あの性急ですからね。」友達も言出した。

「この春からぶら〳〵してゐて、碌々お店へも行かなかつたやうですが、私も患つて金を使つて困ると云つて、くよ〳〵してゐましたつけが、どうも清さんには然云ふところがあつたやうです。加之あのお店も、去年の暮には一萬圓からの缺算でしたから、自分も面白くはなかつたてせう。」

友達はその會社の事情などを話出した。

「何しろあの人も苦勞もしましたけれど、藝者買も散々やりましたし、短いあひだにしては、比較的面白い目も見てゐますから、まあ好いとしなけアなりません。」

通て此男と別れて、お信夫婦はやがて寂しい横町へ入つて行つた。若杉兄弟の姉であつた自分の伯父の添合の以前死んだ時の、清七や其母親の仕打などが、お信自身の心に思返へされてゐた。伯父の世話になつてゐた自分に對する、其添合の情なかつたことも考へられた。お信はそんな時分から、清三郎と同じやうな苦しい境界を通り〳〵して來た。

「私達はあの人達のためにそんなに何も泣くことはないんですよ。」お信は貞三に其時のことを話しながら、言つた。

お信の胸には長いあひだ優しい心の底から入染出すやうな涙も、涸れてゐた。

葬式もすんで、幾日も經つてからお信が一人で訪ねて行つた時、姉のお芳は寂しい部屋のなかに、蒲團を引被つて寢てゐた。お信はそれ迄にも、清七兄弟の歸らないうちに、一度訪ねやうと心にかけてゐたが、家事にかまけてゐて、出る隙もなくて過ぎた。それに、そんなやうなお義理は、此二三年持越しに幾軒も溜つてゐて、それを考出す度に、心が重くなるのであつた。

お信は今の良人のところへ片着いてからも、心の暢々してゐるやうな日は一日もなかつた。氣むづかしい多勢の子供も世話がやけたし、思遣のない氣儘な、始終神經のいらついてゐるやうな良人を取扱ふのも氣骨がをれた。伯父夫婦に死なれてから、他に身を寄せて行く處もない自分の地位を守るために、油斷のない心を張詰めて行くのが可也苦しかつた。お信の女らしい心は段々摺減らされて行つた。良人は時としては、そんな弱點を鞭つに、何の容赦もないほど、癖みの強い男であつた。貞三は長いあひだ下級官吏を勤めて、近頃漸く相當の地位に有つくことが出來たのであつた。

お信は時々良人の機嫌を損ねて、とげ／＼した苛責の言や、手強い打擲の手に反抗して泣いたり憤つたりするのであつたが、その涙には以前戀人に棄てられた時經驗したやうな、優しさと甘さとがなかつた。お信の胸板は久しい以前から、それほど硬くなつてゐた。

お信は途中で買つて水菓子の籠をさげて、格子戸の内に立盡してゐたが、幾度聲をかけても、内はシ

ンとして居た。」
するうちにお芳は、とぼ〳〵と奥から顔を出した。裏の方にゐた子供も出て來た。お芳は髮も、まだあの時のまゝて、憫い顔をしてゐた。目も落窪んてゐた。上つて見ると部屋も取散らかつたまゝて、床の間に据えた羽織袴の淸三郎の寫眞の前には、線香が立てられてあつた。隅の方に、大きい壺の据えてあるのは、兄達が田舍へ持つて行くとになつてゐる、淸三郎の骨てあつた。
「もう何にもする氣にならないものてすからね。今も引被いて寢てゐたんてすよ。こんな亂次のない風をして……。」
お芳は然う言つて、淋しい笑顔を見せた。始終にや〳〵してゐはたが、以前から淋しい氣持のするたてあつた。後頭部の低いのと、顎の詰つたのが、一層その顔を貧相らしく見せてゐた。
「然てせうともね。」お信はその顔を見ないやうにして坐つて居た。
「淸七さんは……。」
「あの人はまだ歸らないんてすよ。御自分の商賣上の用事もありますし宅の後始末もしなけアならないもんてすから、毎日出行いてばかり居ますよ。今日は多分お店の方てせうと思ひますから、今に歸て見えるてせう。」
「然てすか。貴女の御父さん達は、もうお歸りになつたんてすか。」
「父も初七日がすむと、一先づ引揚げて又出るからと言つてね。いづれ私も實家へ歸る體てすから、そ

の時には來るてせうけれど。」
「それぢや淋しいわね。」
「え、ほんとに淋しくて爲樣がないんですよ。それに子供のとを考へますと、何如したら可いかと思つて……切めてもう十年も生きてゐてくれたらばと思ひますけれど、これぢや眞實中途半端て、爲樣がございませんよ。」
「一緒にゐたのが、七年くらゐのものですかね。」
「そのうち二年北海道へ行つてゐましたから。」
「然てしたね。死ぬものも氣毒だけれど、後に殘るものは一層辛いわね。」
「さうてすよ。」お芳は目に涙を入染ませた。
「如何しても、死ぬ病氣てなかつたやうな氣がするんてすよ。癒るはづのものを、自分て不可なくしてしまつたとしか思はれないんてすよ。」
「え、然なんてせう。もつと傍て如何かしてやれなかつたものですかね。」
「出來るだけのとは爲たんてすけれどもね。」
お信は、直り母親の側に寄添つてゐる子供の顏を眺めて、目に涙を入染ませた。
「どうするんてす、此の子は……。」
「兄さんが連れて行つて、育てゝくれるとになつてゐるんてすよ。少い方は、私が連れて行くんてすけ

れど、これの方はまだ何にも解りませんからね。清之助には、私も弱つてゐるんてすよ。如何しても阿母さんの傍にゐたいつて肯かないんてすよ。」

二人とも、涙がぽろ〳〵と頬に流れた。

「それても、此頃漸く宅の死んだと云ふことが、多少呑込めて來たやうなんてす。御父さんがゐなくなつて、阿母さんと一緒にゐられないと云ふのなら、此處へ新に御父さんを一人貰つて來てくれつて、其樣事を言ふんてすよ。」

お信は顏もあげられないほど、涙が湧出して、嗚咽の聲を立てゝゐた。

「宅が目をおとす時、これを指して、兄さんや私達に手を合して拜んだことを思出すと、私も如何にてもして自分の手元におきたいんてすけれど、考へてみれば然も行きませんし……。兄さんも親切に言つて下さるものてすから、まア遣ることにはしてあるんてすけれど、別れる時は如何なだらうと想ふと、私も辛ございますよ。」

お信は體中から絞取られるやうな、涙を禁めることが出來なかつた。兄弟中て一番の强い兄、其一家の人々や子供、その中に連れて行かれる孤兒の傷々しさが、心に泌込むやうてあつた。

「……伯父甥の間柄てすから、案じるやうなことはないてせうがね。それに清七さんも、第二の弟に仕立てると云つて、あゝして力瘤を入れてゐますからね。貴女だつて、まだ若いから、何時までも獨身てゐられはしませんよ。」

「その事もね、兄さんが親切に言つて下さるんですよ。相當の緣談がありさへしたら、此方には介意はず片著いてくれろつてね。こんな道具なんかも、不殘くれるから、家を疊むとき實家へ運ぶやうにと綺麗に話をして下さるものですから、父も一切まかせすることにして安心して田舍へ引取つたんでございますよ。」お芳は三棹ばかりの簞笥や、こてこてした器具を振顧りながら言つた。

「お金といつちや、別に殘しちやありませんてしたけれどね、それでも斯樣なものは好きて隨分買ひましたよ。加之、長いあひだ醫者へ通つてゐましたから、貯金も悉皆引出してしまひましたよ。」

「さうてせうとも。あの人も、お金儲は上手だつたけれど、使ふことも使ひましたからね。」

「一時はね………。」お信はニヤリと笑つた。

「それても、去年あたりからは、滅切おとなしくなりましたよ。以前は、今の若さて二人も子供が有つちや堪らないと云つて、それは可恐しい邪慳にしたものてすけれど、近頃は歸つて來て子供の顏を見るのが一番樂みだつて言つてゐましたよ。」

二人の頰には何時か涙も乾いてゐた。子供も林檎を一つ持たされると、直にそこを離れて、茶の室の方へ入つて行つた。部屋にはもう電燈が來てゐた。

「お芳さん、私もう歸りますわ。餘り遲くなると、道が可怕ござんすから。」お信は帶のところを叩きながら、身繕ひをした。

お芳は吸子に湯を差かへに行つてゐた。

「まア可いぢやありませんか。折角入して下すつたのに、何もお愛相がなくて。私そこまでお送りしますよ。兄さんも今に歸つて來ますから。」

「でも、いづれ清七さんも一度は來て下さるでせうから。」

「それは然ですけれど。」

「貴女も子供をつれてゝ、一度來て下さいよ。いつ又逢へるか解りませんから。」

「有難う。また寄せて頂きます。」

ふと縁先を眺めてゐるお信の目に、白い影が動いたやうな氣がした。その影は音も立てずに床間の骨壺のあたりへ、ふわ〳〵と揺いだと思ふと、直に消えてしまつた。急に陰氣くさい四下が見廻はされて來た。お信は若いものゝ死んだのは、厭だ、と思つた。

「植木が隨分ありますね。」お信はそれを紛らさうとして言出した。

「これでも好いのは大概お寺へ持つて行つたんですよ。宅は植木道樂でしたよ。」お芳は答へた。

「よく、こんな家に獨てゐられますね。」

「隨分可怕ござんすよ。」

「ぢや、私これでお暇しますわ。子供が待つてゐますから。」

「さうですか。お忙しいところを何も恐入りました。」

お信は、これで此人とも永い別れだと思つた。

お信は逃げるやうにそこの路次を出てからも、蒼白い寒い影が、體に絡はりついてゐるやうに感じた清三郎の死顔も目についてゐた。そして木の影の多い薄暗い片側町を、駈出すやうにして急いだ。

家へ歸ると、貞三は火鉢の側で、子供達を相手に晩飯の膳に向つたゐた。瓦斯が眞晝のやうに照つて庭木の青々した影も心持よく透し視られた。

「私今日は散々泣かされてしまひましたよ。」

お信は晴々した顔をして、そこに突立ちながら貞三や子供達の顔を見廻した。



母の手

長田幹彦

「お母さん、お母さん。いま假寐(うたゝね)をしちや風邪をひきますよ。もう三時間ばかしで着くんだから、どうかして辛抱して被居い。」と、浩一は車窓の桟木へ當てがつた空氣枕のなかへ半ば顔を埋めながらうとうと眠りに落ちやうとしてゐる母親の耳へ口を寄せて、小聲でもの優しく呼覺まさゝとした。母親はその聲をきくと、夢のうちに口を動かして、何やら呟やくやうな氣勢をみせたが、やがて薄く眼を瞬いて浩一の方を見ながら力なげに笑つて、「あゝ、私つい うとうとしてしまつた。もう何時頃だい？」

「いま八時打つたばかしてす。」

「さうかい。……おや、まだ降つてゐるんだね。」と、母親はその儘慵げに指

先て蚊にさゝれた手の甲を撫てさすりながら激しい雨の音にうつとりと聞き入つてゐたが、いつの間にか又ぐつたり首を曲げて、深い夢路に入らうとした。

浩一は耐力のないその様をじつと瞻もつてゐた。そして心の底て、「ひどく疲れてゐるんだ。」と、傷々しげに呟いて、今起すのも却つて思遣りのない仕業だと思ひながら、そつと手をのばして今にも肩からずり落ちさうになつてゐるセル地の膝掛けをもとのやうに懸けなほしてやつた。

列車は今黒白も分かぬ夜の闇に閉ざゝれた下野の曠野をひた駛りに駛つてゐるのてある。轟々と響く轍の音とともに車窓を打ち雨の音も凄まじく、車の動揺につれて或ときは奈落の底へ墜落してゆくやうな激しい噪音が床の下から湧き起つて來る。車室のなかは人蒸息に蒸されて、咽せかへるやうな煙草の烟りと汗の匂ひが濃く空氣を彩つてゐる。そしてこゝばかりは別な世界のやうにぼやけた薄暗い洋燈の光がものゝ影をすべて暗く、朦朧と照らし出してゐた。

乗客は寸隙もないほどぎつしり込み合つてゐた。座席から溢れた多くの男女は床の上へ坐つたり、開き戸へ脊を凭せかけたりしてゐた。そして旅疲れて大方はさまざまな醜い格好をして睡りこけてゐた。或ものは腕木から倒れ落ちさうになつて、また或ものは荷物の上へ掩ひかぶさるやうになつて、しかも前後も知らぬやうにぐつすりと寐入つてゐた。そしてまた隅の方ては罎詰めの酒を呷りながら大聲て喋べり散らしてゐるものもゐた。

浩一は所在なさに煙草をとり出して吸ひながらぼんやり眠つてゐる母親の横顏を眺めた。年頃の苦勞にひどく皺ばむだ額のあたりには薄く汗が浮いて、暗い光のはひかゝつた右の頬は鉛のやうに蒼ざめて見えた。そして深い眼の窪みやうも今更のやうに眼について、じつと考へてゐると、平常から親思ひの彼の胸には情けないやうな云ひ知れぬ寂しさが自づと溢れて來た。

この母親は彼にとつて此の世のなかに殘された最も貴重な寶ものゝやうなものであつた。數多い血縁のものども、大方は死に絕えて、今では母親を除いては彼の他に唯一人の妹が殘つてゐるばかりである。それも女學校の敎員といふ職務のために體を縛られて、遠い札幌の町に獨棲してゐるので、年のうちに一度二度顏をあはせる機會はあつても、逗留の日數が限られてゐるので血緣の溫い情をしみじみと味はひ得ることは稀であつた。それ故、彼はこの四五年の間、母親とたつた二人ぎりで極めて寂しい生活を續けて來た。それと亡つた父の殘して行つた僅かな資產は彼の學資を償ふにさへ不充分だつたので、彼等は常に不足勝ちで暮らさなければならなかつた。殊に彼が肋膜を冒されて三月餘りも病院通ひをした時などは爪の先に火を點すやうなさゝやかな生活さへ持ち耐へかねて、母親は彼に隱れて自分の衣類や持物まで金に代へるやうなことさへした。それ故、彼等ふたりの間には世間並の母子が持つてゐる感情以外に或深い深い羈絆があつて、母と云ふ觀念は殆んど絕對に近いほどの力を以つて彼の心を支配してゐた。

彼は漸う今年の七月に苦しい學生生活を脱することが出來た。學んだ學校も私立大學であつたし、彼自身の才能も決して人にすぐれてゐるといふ方ではなかつたが、併し生活が彼に與へた異常な努力が結局の幸福を齎らして、卒業の成績が並はづれて善かつたため、彼はすぐ大きな紡績會社の事務員として就職することが出來た。そして會社でも彼の眞面目な、細心な勤めぶりが殊の外重役の氣に入つて、待遇も最初から極めてよかつた。

八月の月なかには會社の定例にしたがつて彼の受持ちの課にも休暇が出た。殊にその年は對清貿易が盛んであつた爲め、事務は多忙を極めてゐたにも拘らず、課長は彼に十日の休暇を與へた。彼はその短かい時日を利用して、平生から一種の狂熱をもつて夢想してゐたやうに、母を連れて旅へ出やうと企てた。それ以來毎夜、毎夜母親と一緒に寂しい晩餐を濟ます時、話の主題は必ず旅行の目的地の評議に落ちて行つた。結局彼は母が常々から一生に一度は是非參詣してみたいと云つてゐた善光寺を中心にして、甲斐、信濃の山地を歴遊して歩くことに決した。そして會社以外の端仕事や、飜譯などによつて得た四十圓ばかりの貯蓄を引出して、それに母には隱して窃かに友人から融通して貰つた二十圓ばかりの金を加へて旅費をとゝのへ、さまざまの旅仕度も自分から氣を配つて充分に整へた。

休暇になる三日ばかり前から彼はもう夜の目も睡られぬほど亢奮してゐた。緑に燃える山々や、美しい水の流れる谿流が幻のやうになつて彼の眼前に往還した。そしてその都度母親の蒼ざめた頰に浮ぶ滿足の微笑を夢想すると、彼はもう耐らなくなつて踊る胸をじつと抱きしめながら人前も憚らず嬉しさう

に笑ひ崩れた。

愈々出發の日が來た。四五日以前から降つたり、照つたり怪しげな空模樣が打續いてゐたが、その日も生憎夜半からまたひそやかな雨滴れの音が軒先に傳つてゐた。一圖に思ひ詰めた彼はそんなことには少しも頓着せず、暗いうちから飛び起きて、小供のやうにそわそわしながら、家ぢうを歩き廻つた。そして夜が全く明けはなれると、彼は雨に氣怯れして心を据ゑかねてゐる母親を叱るやうにして引き立てながら飯田町の停車場に向つた。

プラットフォムへ立つた時、母親は吹きつける濕つぽい風に眉を顰めながら、

「こんなお天氣ぢや先が思ひ遣られる。」と、いかにも氣が進まぬらしく呟やいて、暫らくの間人氣の薄い列車の前へ佇んで躊躇してゐたが、彼はそれをしみじみ聞き入れもせぬやうに煙草を喞へながら

「なあに。こんなに雲脚が早いんだもの、二十里も出離れりや靑空が見えまさあ。」と、浮々した調子で勇ましく云ひ放ちながら一足先へついと身輕に乘込んだ。母親も詮方なしにすごすご傘をすぼめながらその跡に續いた。

列車は煙のやうな小雨に降りこめられながら灰色の陰鬱な空の下を西へ西へと駛つた。郊外の寂しい新開町から雜木林の起伏する武藏野へ。武藏野の果てから國境の山地へ。そして九時少し過ぎには脚下を去來する雨雲の斷れめからはるかに桂川の谿谷を見下しながら深い地底を貫いてゆく恐ろしい笹子の隧道へさしかゝつたが、それを出ると浩一の豫言したとほり空にはところどころ靑空が見えはじめて、

線に飾られた甲斐の盆地には眞夏の生々とした日の光が斑をなして輝き渡つた。その爽やかな、明るい光景を見た時、彼等母子の胸には幸福といふよりも寧ろ限りない感激が一時に襲ひかゝつて來た。そして浩一は鞄のなかゝら地圖をとりだして、折々雲の間から紫がゝつた美しい姿を現はす富士や赤石の連山を一々それに引較べながら、慄へる指先で母親に説明して聞かせたりしてゐたが、終には胸に波うつて來る歡喜のために却つて言葉を奪はれて、唯茫然と車窓から移りゆく山河の色に見惚れてゐた。醉つた人のやうなその兩眼にはいつか涙が一杯に溢れてゐた。

その晩は甲府に泊つた。その翌晩は諏訪。かう云ふ風にして彼等の旅路は何の恙もなく漸次と捗つていつた。諏訪からは又々雨に降り罩められる恨みはあつたが、一度旅へ出て度胸の据わつた彼等にはそれも愉樂を妨げるほどでもなく、或場合には却つてしんみりとした懷かしい旅情を增す種にさへなつた。そして汽車の中にゐる時も、旅宿でほの暗い洋燈の影に枕を並べて眠る時でも、彼等は常に幸福に醉つてゐた。

當の目的の長野へ着いたのは丁度東京をたつてから五日目のことであつた。旅馴れない二人は此處まで來るとさすがに今迄經驗したことのない旅疲れを覺えて、何處となく力ぬけのしたやうな哀深い氣持に囚はれたが、それでも宿へ着くとすぐ車を命じて、車軸を流すやうに激しく降りしきる雨のなかを善光寺へ向つた。雲を突くやうな大伽藍、四時絶ゆることのない香華の薫り、さうした嚴かな聖地の光景を眼のあたりに見た彼等の歡びはどんなであつたらう。年來の宿望が叶つたばかりではなく、生命の光

が再び心の底に甦へつて來たやうに思はれて、濕つぽい本堂の疊の上へ立つた時には五體の筋肉が一時にひき絞られるやうに感じた。そして幸ひ尼公親ら執行の法會があつたので、彼等も淨財を納めて、幾多の善男善女とともに亡き人の數に入つた父親や、その他血縁の誰彼の冥福を心から祈つた。殊に信仰といふ傳習的な習慣に馴らされた母親は異常な感激に心を奪はれて、聲高に念佛を唱へつゞけながら何時やても佛前を去らうとはしなかつた。彼もそれを強ゐて急き立てやうとはせず、內陣の奥深く點つた蠟燭の光のほの暗く瞬くさまを眺めながら、ぼんやり戸外の雨の音に聞入つてゐたが、母親が折々頭をあげて涙を拭きながら、

「あゝ有難いこつた。これでもう何時死んでも安心だ。」と、夢現のやうに呟いてゐるのを聞くと、彼の胸には譯もない悲しみが迫つて來て、漸次と鉛のやうな冷たい狹霧の底へ沈んでゆくやうな心地になつた。そして堂の下の胎內めぐりをした時、冥府のやうな闇がりのなかで、淨土へ導くといひ傳へられてゐる鐵の錠を頻りに探しあぐむでゐる母親の聲を聞くと彼は耐らくなつて、そつと懷中電燈を點してまて、彼女にそれを握せやうとした。そしてその爲めに彼は却つて母親の怒りを買ひさへもした。

長野では雨と疲勞の爲めにまる二日間逗留した。そして次の日の朝早くもう一度善光寺へ參詣して、今度は信越線で愈歸京の途についた。蒼茫と雨に煙つた川中島附近の平原を出はづれると、彼等は先づ凄まじい沿道の光景に膽を奪はれた。降り續いた長雨で、洪水の聲は至るところに充ち溢れてゐた。長野の宿でその噂を聞いて、薄々危ぶんではゐたが、まさか此ほどまでに激しからうとは夢にも想像しな

かつた。遠く、近く線路に沿ふて曲流してゐる千曲川には奔馬のやうな濁水が波頭をあげて逆流してゐる。破壊された橋梁は大石を脊負つたまゝ蛇のやうに岸邊にのたうちまわつてゐる。また危げな堤防の上には簑笠に身を固めた農夫等が幾十百人となく打群れて、悲しげな絶叫をあげながら鋤や鍬を、揮つて水と闘つてゐた。そして淺間山麓の火山原に來かゝつた頃には、小雨がいつしか險惡な暴風雨に變つて、列車は轍を没するやうな深い流水のなかを、水音をたてながら進行するやうな危地に陷つた。咫尺も辨ぜぬ颶風の荒れ狂ふなかに幾度か停車に停車を重ねた。乘客は眼の色を變へて恐れ戰いた。中にも都會の生活にのみ馴らされた浩一の母親は殆んど生きた心地もなく、脣の色まで失つて、蒼白い兩手で合掌したまゝぶるぶる慄へながら頻りに念佛を唱へた。そして、幾多の危險を冒してやつとのことで輕井澤驛に到着した時には、彼等は思はず手をうち振つて歡呼の聲をあげた。そして驛員の口から中央東線はもとより、今通過して來た信越線すらもう全く不通になつて、これが上り線の最後の列車だと聞いた時には、悚然として顔を見合はせながら互に幸福を祝しあつた。

碓氷の隧道に崖崩れがあつて、四時間の餘も待たされた末、列車は又徐々と東へ向つて動きはじめた。アプト式の峻坂も恙なく降りつくして、漸う高崎市へ入つた頃には、暴風の吹去つたあとの蒸暑い黄昏が重苦しく天地をひき包んでゐた。人も、車も全く疲れきつたやうに喘いで、長い長い汽笛の音も瀕死の病人が辛うじて呟いてゐる悶聲のやうに思はれた。

彼等は此處で又意外な報に驚かされた。それは鏑川の大汎濫のため、東京までの線路は全然不通にな

つてゐると云ふのである。そして旅程を急ぐ旅客は驛長の證明を貰つて、兩毛線を經て東北本線の上り列車へ乘繼げといふのである。彼等は失望のために心を奪はれて暫らくの間うろうろしてゐたが、東京へ歸り度さの一念に壓されて、前後を省る暇もなく驛長の證明を貰つて、潮のやうに雪崩をうつてゐる群衆にもまれながら兩毛線の列車へ乘り込んだ。

今、彼等はその迂回した道を辿つて今夜のうちに東京へ入らうとする途中なのである。

母親はいつの間にか枕をずらして、快さゝうな鼾聲を洩らしながらぐつすり寢込んでしまつた。浩一は折々顏の周圍へ寄つて來る蚊を逐つてやりながら、面窶れのしたその横顏をもう一度しげしげ見入つた。年よりも老けて見える口元は、旅疲れのために一層弱りをみせて、深い息をひく度に色の褪めた唇は細かくぶるぶるとうち顫へた。それをみてゐるうちに彼の心の底には漸次と影が滲むやうにいろいろな暗い考へがとめどもなく湧きあがつて來た。

「あゝ、こんなに年寄つてしまつて、一體何時まで生きてゐて呉れるんだらう！」いろいろな考への究極する處は其處であつた。善光寺の本堂へ上つた時の激しい歡びかたや、「これでいつ死んでも安心だ。」と呟いた時の嗄れたやうな頼りなげな聲を思ふにつけ、彼はかうした疑問のために心を傷めない譯にはいかなかつた。憂い辛い勞苦に充ちてゐた生活が急に明るくなつて、そのうへ旅へ出て何ものにも換へ

難い宗教上の慰安を得た彼女の頭には何か大きな思ひがけない變化が來なければならない筈である。丁度重荷を脊負つた長い坂路を上りつゞけてゐた者が、それを下ろすと同時に激しい痲痺と、眩暈とを感ずるやうに、彼女の頭には今取留めのない弛緩と、衰弱が襲つて來てゐるのではあるまいか。そしてそれが直ちに死と云ふ恐ろしい結果を生む原因になりはすまいか。と思ふと、彼は今迄忘れてゐたさまざまな前例まで思ひ合せて、今にもその事實が迫つて來るやうな強迫を覺えながら、心を絞られるやうな氣持になつた。そして、その次の瞬間には死んだやうになつて寢てゐる母親の顔をみるさへ耐へきれなくなつて、「あ母さん、お母さん。」と、嗄えたやうな息づまつた聲で呼びながら、冷たくなつてゐるその痩せた手をそつと握つた。

熟睡してゐる母親は眼を覺まさうともしなかつた。却つて對向ひの席座に假睡をしてゐた學生風の若い男はその聲に驚かされて、ふつと眼をあいて、彼を怪訝さうに見つめた。彼はそれをみると、又急に氣恥かしいやうな、咎められてゐるやうな氣になつて、思はず握つてゐた母親の手をつきはなして車窓の方へ眼を逸らした。

窓の硝子は殘らず人蒸息で白く曇つてゐた。車が搖れる度に小さな水滴がその面から生れて、幾條となく細い縞を描きながらたらたらと滴り落ちた。彼は不透明なその硝子をとほしてみるともなく外をみた。すべては漆のやうな暗闇であつた。そして時折その暗闇のなかゝら田畑のうへに氾濫してゐる水の面だけが、ほの白く滲んだやうに浮き出してみえた。人里のありさうな平地を駛つてゐながら、唯一つの

燈火もみえず、機關車から吐き出す火の粉が闇にまぎれてついついと流星のやうに飛んでゆくはかりであつた。疲勞と心配とて極端まで感傷的になつた彼は、涙の出るやうな突詰めた氣でいつまでもいつまでもそのさまを見送つてゐた。そして一刻も早く東京の家へ歸り着いて、この苦痛を逃れ度いとあせつた。あせれば踠るほど彼の心には不安がより深く喰ひ入つて來た。

小山驛へ着くと、停車場は常非な混雜であつた。驛員のひとりはまだ停車もせぬ先に車室のなかへ飛び乘つてきて、利根川大氾濫のため東京行きは不通であることを聲高に喚きまわつた。乘客はその聲で一齊に夢を破られた。はじめは信じられないやうなキヨトリとした顏容をして互に顏を見合はせてゐたが、それが事實であることを確かめると、俄かに困惑の色が彼等の頰にのぼつた。或ものは絕望したやうに深い嘆息をつき、或者はまたうわづつた聲で激しく鐵道を罵つた。

生れてから始めてかうした出來事に出逢つた浩一はほとほと途方に暮れて、どうしていゝかまるで法がつかなくなつてしまつた。そして度を失つたやうな聲で

「お母さん、お母さん。起きて下さい。又不通なんですよ。」

母親はびくりとして眼を覺まして、愕えたやうに四邊をみまはしながら、

「あゝ吃驚した。もう着いたのかい。」

「小山へは來たけれど、東京行は又不通なんです。」

「え、不通？　そりや困つたね。」母親は襟をかき合はせながら眼の色を變へた。

「今聞いたら何時開通するか分らないんださうです。」
「困つたねえ、どうしやう。」
二人は顔を見合はせたまゝ、云ふべき言葉もなくて嘆息ばかりついてゐた。
他の乗客は口小言を云ひながら立上つて、ぞろぞろ車を降りはじめた。彼等も詮方なしに荷物を取纏めて、そのあとに續いた。そしてプラットフォームへ降りると、乗降橋のところには驛の助役が立つてゐて、旅客の群に對して一々叮嚀に不通の狀態を說明してゐた。彼等は群衆の後から首を延ばしてそれを聽いたが、その說明に依ると東京へ達する線路は四線とも總て不通で、明日の午後はそのなかのどれか一線は必ず開通する筈であるから、それまで、栃木へ引返へすなり、宇都宮へ引返すなり、また不滿足な宿屋でいゝなら、この小山から一驛先の古河へ泊つて待つてゐろと云ふのである。
旅客は方々の薄闇のなかに打群れて聲高に評議をしはじめた。彼等も荷物をもつたまゝその間をうろうろしながら、前後の處置を定めやうとしたが、徒らに氣を焦つばかりで結句はどうしやう、どうしやうと云ふ同じ言葉を繰返へすに過ぎなかつた。漸く上り列車が氣忙はしい汽鑵の音をたてる頃になつて、彼等は兎に角一足でも東京の方へ近づいてゐる方が好都合であらうと云ふので、その列車で古河まで行つてそこで一夜を明かすことに心を決した。休暇ももうあと僅か二日ではあるし、それに旅費も大方は費ひつくして、ほんの僅かしきや殘つてゐないことがそれをさせる導火になつたのであつた。

古河驛へ着へいたのはもう十時を餘程廻つて後のことであつた。

出水を眼の前に控へてゐることとて停車場はまるで戰場のやうな騒ぎであつた。プラットフォームは旅客の手荷物や、いろいろな貨物で一杯になつて、電燈の光の及ばない場内の各所には俄づくりのアセチリン燈や、篝火が煌々と燃えさかつてゐた。そして雨合羽に身を固めた驛員や、人足や、鐵道工夫が口に警語のやうな言葉を呼び交はしながら、右往左往に馳せ違つてゐた。丁度上り列車が驛内に入つた時、板や材木や土嚢を山のやうに積載した建築列車が勇ましい汽笛を吹き鳴らしながら、危險に陷つてゐる鐵橋の方へ出て行かうとしてゐた。

汽車から降りると浩一も、母親も暫らくの間呆氣にとられてその物凄い光景を眺めてゐた。その危險がやがては自分達の身の上に迫つて來るのではないかと思ふと、それでなくてさへ氣弱くなつてゐる彼等の心には重苦しい恐怖が潮のやうに襲ひかゝつて來た。彼等は殆んど一言も言葉を交はさず、その儘暗い乘降橋を越へて待合室の方へ歩いて行つた。

待合室は停滯した旅客で一杯になつてゐた。それも大方は宿をとることの出來ない人達ばかりで、土間の上へぢかに毛布を敷いたり、荷物を積んだりして一夜を明す覺悟をしてゐた。警官や、驛員等は聲を嗄らして、不慮の出來事のために放恣になつたそれらの人々を取締つてゐた。

母親はその光景をみると又蒼くなつておろおろしだした。そして此の容子では泊る旅館もあるまいと

云つて、子供のやうにむづかりはじめた。浩一もそれにはほとほと閉口していろいろになだめ慊しながら改札口を廻つて先づ停車場の外へ出た。

雨はいつの間にか小降りになつてゐた。空には雲切れがして、白けた煙のやうな雨雲が脚早に北へ北へと流れて行つた。當てにしてゐた人力車は何處を探しても見當らいので彼等は案内さへ知ぬ泥濘路を拾つて歩かなければならなかつた。浩一は鞄やこまこました小荷物を一緒に纏めて、振分けに脊負つて片手で母親の手を曳いてやりながらそろそろと歩き出した。足元が暗いので、母親は幾度か水溜りに足を踏みすべらして、横様に倒れやうとした。その都度、彼女は倚りすがるやうに浩一の腕を固く握りしめて息を切らしながら愚痴をこぼした。

人の多く行く方へあとをつけてゆくうちにやがて彼等は古い驛路らしい本通りへ出た。出水に襲はれてゐる上に、無數の旅客が入り込んでゐるので、町は何處へ行つても活氣だつてゐて、賑やかな店明りや、客を送迎へする商人の聲のなかにもまだ宵の口のやうな氣持が含まれてゐた。そして忙はしげに往き來してゐる人々の間には、大きな荷車に家財を積んで在の方から避難して來る農民の群や、提灯を振りかざして宙をとんでゆく水防夫の群があつた。

彼等は町の左右に散在した宿屋を一軒一軒尋ねて歩いた。何處の家でも店口まで客が溢れてゐて、同じやうな挨拶で斷られた。牛小舍のやうな穢らしい安宿まで探したけれども矢張り駄目だつた。そのうちに町は漸次寂れて來て、畑や、森の續いた暗い町端れに出てしまつた。と、母親は突知路傍の草叢へ

くつをれるやうに踞んで、
「あゝ、私やもう死に相だ。どうかしてお呉れよ。こんなことなら旅へなんぞ來るんぢやなかつた。」と息をきらしながら泣きさうな聲で訴へた。それを聞くと浩一は急に胸が迫つて、慄へる手先で母の肩を抑へながら、
「今そんな弱音を吹いちや駄目です。さあ、お立ちなさい。もう一度探してみませう。そしてなかつたら警察へでもなんでも賴んで探してもらひます。ほんの雨さへ防げりやいゝんだから……。」
彼はその儘母親の手をグッと握りしめて脊負ふやうにして支へながら又もと來た道に引返へした。二町ばかりも引返へしたと思ふ頃、彼はとある小路から出て來る一人の巡査を認めた。と、彼は云ひ知れぬ喜びを覺へて、つかつかとその方へ走り寄つて、
「一寸お願ひ致しますが……」と、聲高に呼びかけながら、事情を細々と訴へて宿の周旋を賴んだ。
巡査も初めは迷惑らしい顏をして默つてゐたが、さすがに氣の毒になつたと見えて、
「兎に角此際のことですから、果してあるかないか分りませんが、まあ探して見ませう。」と、云つて、角燈を振り照しながら先へ立つた。
町の中程まで來かゝると巡査は兩側の家々をとみ、かうみしてゐたが、やがて三海樓と書いた瓦斯燈の出た穢らしい二階家の前でつと立止つた。そして彼等をその門口へ待たせて置いて、中へ入つて何やらごとごと談判してゐたが、暫らくすると又來て來て、黑い暖簾の下つた戸口から手招きをした、そして小

聲で、
「何分何處も一杯で迚もいゝ宿は手に入りませんから、此處でまあ辛抱しなさい。」と云つて、彼等を中へ導いた。
店口のやうになつた狹い土間には小穢らしい五十格好の老婆が突立てゐて、惡叮嚀な言葉で彼等を迎へた。そしてバケツに水を汲んで來て、足を漱がせたあとで、彼等を正面の廣階段から二階へ案内した。階段をのぼりきると、狹い廊下が右左に續いてゐて、その兩側には小さく仕切つた部屋が幾つも並んでゐた。そしてその中からは酒の匂ひや、猥らな女の笑聲が洩れて來て、入口の障子には男と女の怪しげな姿が影繪のやうになつて映つてゐるところさへあつた。彼等は疲れきつたやうな足音をたてながらその前を通つて一番奥まつた穢い四疊の部屋へ案内された。そこで荷物を卸すと、浩一も母親も腑がぬけたやうに座布團の上へ倒れて、ほつと嘆息をついた。

物置きのやうな穢い湯殿で一風呂浴びて、汗臭い單衣を浴衣に脱ぎかへて再び部屋へ歸つて來た時の快さは何ものにも譬へることが出來ないほどだつた。天井の低い、張壁の落ちかゝつた部屋がその時ばかりはまつたく何等の不愉快をも喚起さなかつた。
殊に母親は浮々した喜びを頰に輝やかして、

「あゝ、これてほんとに命拾ひをしたよ。私やもう一しきりはあの儘死んぢもうんぢやないかしらと思つたよ。」

「私もこんな目に逢ふのは生れてはじめてゞす。お母さんはお母さんて弱音を吹きだすし、ほんとにどうなることかと思ひましたよ。」と、浩一も晴れやかに云つて、矢鱈に煙草ばかり吹かしてゐた。

「ほんとに濟まなかつたねえ。つい我慢性がないものだから、お前が心配してゐるのは見えてゐながらどうにもかうにも出來ないんだもの。」

心が靜かになつて來るに從つて、彼等は漸次と激しい空腹を覺えて來た。夕餐の出やうが餘り遲いので、若しや忘れてゞもゐるのではないかと思ひながら、婢を招んで催促すると、婢は怪訝さうな笑ひ方をして、

「御飯は一寸間合ひ兼ねますが。何にしろ手前共は平生は宿屋の方を致しませんもんてすから。……それても何か召食るんてしたら取つて差上げます。」

彼等はその言葉を聞いて妙に思つたが、その先を强いて尋ねやうともせず、何んても早く出來さうなものを取つて來るやうに命じた。そして婢が行つてしまうと、二人顏を見合はせて譯もなくクスクス笑つた。

「あゝ、それて讀めたよ。此家は絹樓なんだよ。」と、母は隣室に氣を兼ねるやうな低い聲て云つて、浩一の顏をみた。

「え、娼樓？　道理て變な家だと思つた。」と彼は初心らしく顏を顰めながら、眉を顰めて、「厭な家へ泊り合はせましたね。」

「まあ、いゝさ。雨さへ歇げりやいゝんだもの、これも一つ話になつていゝかも知れない。だけど、東京へ歸つて、私とお前と二人して娼樓へ泊つたなんて話したらさぞ皆さんがお笑なさるだらうねえ。」と、母は心から可笑しさうに笑つた。

二人はその儘言葉を奪はれて押し默つてしまつた。先隣りあたりの座敷て、客と妓達が聲をそろへて淫らな唄をうたひだした。流石に母親も聞くに耐へ兼ねたと見えて、厭な顏容をしながら話にまぎらかさうとした。

「だけど、今度はほんとにいゝ旅行をしたよ。苦しいことも隨分苦しかつたけど、これも後から思ひ出したらどんなに面白いだらう。私にも、お前にもどんなに藥になつたか知れやしない。」

「さうてすなあ、何事も經驗だと思ふと、こんな目に逢ふのも面白いてすなあ。……今年の秋には又どうにかして日光へても行つてみませう。」

「あつちは又信州などゝ變つて面白いだらうねえ。だけど今度の旅ぢや大分お金も費つたから、今年の秋は一生懸命に儉約してその埋め合はせをしなくつちやならないよ。……だけど私やお前がしつかりしてゐて呉れるんて、どんなに心丈丈だか分らないんだよ。」

浩一の心には今自分に信賴しきつてゐるこの憐れな母親の心がその儘映つて來るやうに思はれた。そ

して自分が彼女にとつては唯一の慰藉であることを確めるを、彼は明るい誇りを感じないわけにはいかなかつた。それと同時に、先刻汽車のなかて思ひつゞけたやうな不幸な氣持は跡方もなくさらりと消え去つて今度の旅が母親に思ひ掛けない滿足を與へたと同じやうに、新らしい力に充つた幸福が此れから先にもまだ數限りなく擴がつてゐるやうな氣になつた。彼の胸はどくどくと力强く踊つた。

そこへ階下から丼飯を運んで來た。彼等はさも旨まさうに最後の一粒まで貪り食つた。そして冷たい茶を啜りながらそれだけではまだ不足らしく顏を見合はせて笑つた。そしてすぐ臥床をとらせて横になつた

母親は寐てからまて心が輕さうに何くれとなく喋つてゐた。明日中にはどんなことがあつても東京へ歸つて、階下の茶の間て足を踏みのばして寐られるだけ寐たいと、繰りかへし繰返へし云つてゐた。それが今彼女に殘された唯一の樂しみてあるらしかつた。そのうちに漸次と疲れが出て來たとみえて、いつともなくだれたやうなその言葉が安らかな寐息に變つて行つた。

浩一は黴臭い蒲團の匂ひと、隣室の話聲が神經にさわつて、容易に寐つかれなかつた。通りには絶えず人の足音が響いて、雨が降り止んだのか、何處か遠くの料理屋て太鼓を入れて騷いてゐる物音までがはつきり聞えて來た。そして蒸暑い間うちの空氣の底には蚊の鳴く聲が細々と聞えて、彼は思ひ出したやうに時々團扇をばたつかせながら、半身夜着の外へのり出してゐる母をあほいてやつた。

うとうとまだろみかけたと思ふ頃、彼はふと時ならぬ人聲に呼び醒まされた。

「もし、もし、まことに願ひ兼ねますが、お合ひ宿を願ひます。もし、もし……」と、太い男の聲が云つてゐる。

彼は夢現の間に

「うん。」と、答へて、何と云ふ譯もなく母の臥床の方へにじり寄つた。そして又深い睡りに落ちて行つた。……

その間に幾時間經つたか分らない、彼は再び人聲に驚ろいて眼を覺ますと、枕元につけてあつた洋燈は消えて、四邊は眞暗闇だつた。そしてすぐ耳間近て、若い女の聲と、男の小供の聲が入交つて聞えてゐた。小供は

「お母ちやんとこへ行くんだよう。」と、慴えたやうな聲て訴へながらしくしく啼りあげて泣いてゐる。女は途方に暮れたやうにそれを賺してゐるのてある。

「お母ちやんのとこへ行くんだやう。厭だ。厭だ。お母ちやんのとこへ歸るんだ。」その聲は今にも絶え入るやうに悲しげに響く。

「そんな無理なことを云つたつて駄目ぢやありませんか。聞き分けのない人だねえ。明日は汽車ぽつぽがなほるから、そしたらお母ちやんのとこへ行きませう。ね、謙ちやんはいゝ子だから、今夜は大人し

くして寐るの。」と、女は小供の顏を自分の胸へ抱き緊めてもしたらしく、泣き聲は急に苦しげな嗚咽に變つた。それでも何時迄經つても泣き止まうとはしなかつた。しまいには女もいらいらしたやうな聲で、「困つた人だねえ。そんなに泣くなら、恐い伯母ちやんに賴んで、牛もうものところへやつちまうよ。いゝかい。そして姉さんは構はないから、謙ちやんひとりで母ちやんの處へお歸んなさい……。」

漸う泣き聲のやんだのはそれから小半時も經つて後のことであつた。それと同時に何處かで雞の啼く聲がかすかに聞えて、雨戶の繰つてない小窓の障子には蒼ざめた曉の光が夢のやうにぼんやり映つて來た。女は寐つかれないと見えて、苦しさうに右左へ寐返へりをうつてゐたが、やがて漸う靜かになつたかと思ふと今度はどうしたものか忙はしく鼻を啜りはじめた。その聲音から推すと、彼女はどうやら聲を呑んで歔欷してゐるらしかつた。

浩一は限りない好奇心を刺激されて、眼が何時の間にかぱつちり冴えてしまつた。息を殺ろして、女の一擧一動をも聞き洩らすまいとした。そして悲しげな歔欷してゐるのを聞くと耐らなくなつて幾度か聲をかけやうと腕つたが、喉に咲がからむやうで氣耻かしくてどうしても言葉が出て來なかつた。どんな顏をした女だらう、どういふ身の上で、どうした譯でこんな宿屋で落ち合ふことになつたんだらう。疑ひはそれからそれへと枝を挿して、何時纏りがつくとも知れなかつた。そして自分でも小說を書いてゐるやうな氣持ちになりながら、この二人の姉弟が親のない憐れな孤子で、今半錢の蓄へもなく、明日の糧をどうして得やうと云ふやうな果敢ない身になつて東京の方へ流れてゆくのではあるまいかとも思

つてみた。するとそれがもう次の瞬間には確乎とした事實であるやうに思はれて、それに對して同情の深い態度で救助の道を講じてやつてゐる自分の姿までがはつきりと想像の面に浮んで來た。しまいには面窶れのしたしほらしいその女の顏まで今眼の前にみるやうに、濃い夜の闇のなかにくつきりと描き出された。そして何氣なくそつと足を踏み延ばすと、彼の爪先は少し汗ばむだやうな柔い女の脛にすつと觸つた。と、彼は全身電氣にでも打たれたやうにびくりとして、慌てゝその足を引込めながら、渇いた喉を何時までもごくりごくりとかすかに鳴らしてゐた。

翌朝早く眼を覺ますと、小窓にはもうすがすがしい朝日の光が一面にさしかゝつてゐた。障子の破れめから見える大空は、昨日までの陰欝な空模樣をけろりと忘れてしまつたやうに蒼々と澄み渡つて、時折煙のやうな軟かな白雲がふわりふわりと流れて行つた。

浩一は枕の上に起き上ると、事件の多かつた昨日とはまるで別人になつたやうな輕快な氣持を感じた。そして或るはかない期待を以つて隣りを顧みた。果して部屋の隅には二人の姉弟が枕を並べて斜に寐てゐた。姉はまだ二十歳を過ぎてゐまいと思はれる年格好で、夜の間の想像とはまるで似てもつかぬ面長な何處か强つさうなところのある女だつた。弟の方は十一二で、下膨れのした可愛らしい顏容をした子だつた。浩一はそれをみると何となく張合ひぬけのしたやうな失望を覺えて、何かまだその後に隱され

てゐるやうな思ひに唆かされながらじつと其方へ眼を据ゑてゐた。二人とも前後も知らぬやうにぐつすり寢込んでゐた。殊に姉の方は昨夜の疲れが一時に出たとみえて、中形の浴衣にメリンスの帶をきちんとしめた儘仰向に寢て、二の腕まであらはに出して、いかにも取亂した姿をしてゐた。そして後髮のまつはりついた頰から額口へかけて脂汗がしつとり滲み出て、ところどころ蚊に刺された跡が紅く膨れあがつてゐた。

生れて初めて若い女のかうした姿をみた浩一は漸次と體中を針で刺されるやうな心地になつた。そして、部屋ぢうに籠つた寢臭い匂ひも、汗染みた寢衣がひやひや膚に觸れる不快さも打忘れて、うつとりと瞻つてゐたが、そのうちに何と思つたか、またごろりと横になつて忙はしげに瞬をしながら、體を棒のやうにのけ反らして、態とらしい欠びをした。

間近な停車場で消魂ましい汽笛が鳴り響いた。その物音に驚いて彼はまた起上つた。そして無意識に母を呼び起さうとしたが、中々起きさうもないので彼はその儘疲れたやうな顏をしながら立上つた。そしてもう一度鋭い流眄を寢てゐる女の方へ投げながら、障子をあけてふらふらと廊下へ出て行つた。

狹い階段を傳つて洗面所へ降りると、そこにはもう朝歸りの客がたて込んでゐた。宵々の酒氣が醒めきれないと見えて、彼等の體からは饐ゑたやうな酒の匂いが發散して、どの眼も、どの眼も一樣にどんより血ばむでゐた。そして白粉の斑らに剝げ落ちた醜い顏の女達と戲れあひながら、朽れかゝつたじめじめした流床の上で顏を洗つてゐる樣子をみると、浩一は手洗を使ふ氣もなにもなくなつて、すぐさまも

と來た方へとつて返へした。そして階段を二三段上りかけると、又氣が變つて、店口の方へぬけて、そこから戸外へとび出してしまつた。

朝日にきら／＼輝いた泥濘道を荷車や、駄馬に追はれながら停車場の前まで來ると、もう砂利を敷きつめた廣場は白く乾いてゐた。そして陽炎のやうに水蒸氣の立騰ぼる間には旅客の群が一杯に溢れてゐた。人込みを分けて待合室へ入ると、正面には大きな掲示が張つてあつて、墨くろぐろと古河、栗橋間渡船便午前十時より開始仕候と書いてあつた。それを見ると彼は急に東京の土を踏んだやうな心安さを覺えて、驛員から船に乘る手續きを聞き糺したあとで又ふらりと停車場を出た。

歸りには足の向くがまゝに停車場の横手から線路端の桑畑へ入つた。青々と生ひ繁げつた葉の上には露の玉がきらきら光つて、蒸すやうな草いきれが地の面から一面に湧き上つて來た。そして涼しい軟風が渡つて來る度に葉摺れの音がまるで甦へつた喜びを訴へてゐる囁きのやうに聞きなされた。彼はいつとも知れず出水のことも旅のことも打忘れたやうに自然と心が輕くなつてゆくのを覺えて、澄みきつた空氣を深く吸ひ入れながら頻りに口笛を吹きはじめた。そしてとある小川のほとりまで來かゝると、突如下駄をぬいて膝頭まで水の中へ踏み入れながら、脚早に流れてゆく水を拯つて顔を洗つた。

宿へ歸つてみると、もう母親も合宿の姉弟も身しまひを濟まして、茶を啜りながら彼の歸りを待ちあ

ぐねてゐた。人懐こい母親はいつのまにか男の子まて手なづけて、何くれとなく他愛のない雜談を交はしてゐた。

女は彼が入つて來るのをみると、約ましやかに居座いをなほして、

「どうも昨晩はお喧ましう御座いましたらう。いくら申して聞かしても聞きませんものですから……」

と、吃りながら云つて、叮嚀に挨拶した。

彼は言葉の脚をとられたやうにどぎまぎして、

「いゝえ、どうしまして、私こそ。」と、つかぬ返事をしながらその儘萎くなつた顏を母親の方へむけて

「ねえ、お母さん。今日は愈々東京へ歸れますよ。旨くいきや午過ぎには上野へ着きます。」と、そわそわしながらいつた。

「さうかい。そりや好い都合だねえ。」と、母親も昨夜とはまるて違つた好い血色を見せて氣輕に云つた。「お前もう停車場へ行つて來たのかい。まあ、まあ、手廻はしのいゝこつたね。そして汽車は何時から通ひ出したんだい？」

「汽車の方はまだ駄目てす。何にしろ橋手前の堤防が百間の上も崩れたつて云ふんてすから、とても三日四日ぢや通じますまい。」

「ぢや又今日も汽車て乘り廻はすのかい、厭だねえ。」

「いゝえ、さうぢやありませんよ。お母さんも氣が早いなあ。」と、浩一は態とらしく高聲て笑つて、「船

て利根を渡るんです。朝の十時から古河と此の先の栗橋の間に渡船が出來るつて云ふからそれて向河岸へ渡るんてす。」

「船？あゝ私や聞いてもぞつとする。こんな出水の時に船へなんぞ乘せられて耐るものかね。」と、母親は肩をすぼめながら、眞顔て云つた。

「だつてそんなことを云たつて駄目てす。何處の線路もみんな不通になつてゐるんだから、もう船て河越しをするよりほかには東京へいく道はないんてす。それに遠州灘ても渡るんぢやあるまいし、たつた利根川ひとつ位越すのに何て恐いことがあるもんてすか。」

「だつて……」と、母親は女の方を向いて、「ねえ、貴女、船は厭て御座いまさあねえ。」

女は微笑んだきりて返答に迷つてゐた。弟はそれをきくと無邪氣な聲て、

「姉さん、お船に乘るの？面白いなあ、謙も乘つけてね、ぎつちやん、ばつちやんするんだ。」と、直ぐにも乘り度いやうにせがみだした。

「えゝ、乘つけて上げますとも。」と、姉はその手を持つて輕くうちふりながら、靜かになだめた。

浩一はその時、ちらりと眞正面にその顏を偸みゝた。寢顏とは違つて、暑さに少し上氣した顏は決して醜くゝなかつた。そして笑ふ度に優しい女らしさが口元のあたりに漂ふのをみると、彼は急に氣が浮々して來て、

「ねえ、坊つちやん。お船に乘りませうね。坊ちやんの方が餘程强う御座んすねえ。伯母さん達はみん

な弱蟲だ。」と、思はず喋いてこんなことまで云つた。

母親は思ひあぐねたやうな顔をしながら、もしもの事があつたらと云つて長いこと心を据ゑかねてゐた。浩一はそれを說き伏せるのに骨を折つた。終には嘲けるやうに、

「そんなに大事を取つてゐた日にや、かうして宿屋に泊つてゐることも出來なくなる理屈ぢやありませんか。それに鐵道院だつて澤山の人の生命や、財産を預つてやる仕事なんですもの、少しでも危險の恐れがありや、船なんか出す譯がないぢやありませんか。……それともそんなに厭なら、一週間でも二週間でも汽車の開通するまで此處で待ちませうか。」と、眞氣になつて云つた。

「それぢやお前のお勤めにも差支へるし、ほんとにどうしやうねえ。」と、母は當惑してゐたが、やがて又女の方をむいて、「貴女どうなさいます？」と、救ひを求めるやう問うた。

女はさすが年が若いだけに早く決心もついたらしく、笑ひながら、

「私は先が急ぎますから、……」と、云つて渡船の方へ贊成した。

母親もそれに氣を勵まされて、兎に角船の出る所まで行つて、樣子を見た上で事を決すると云ふことに心を定めた。

一座には又初めのやうな明るい氣持が歸つて來た。そして朝餐には蕎麥を取り寄せてそれを喰べながらいろ〳〵な雜談に耽つた。浩一はその雜談の間に朧ろげながらこの憐れな合ひ宿の連れの身の上を知ることが出來た。彼等は中流の官吏の子らしく、父に伴はれて長らく仙臺の方へ行つてゐたのが、今

度何かの事情で東京に住んでゐる母親の許へ歸る途すがらであるらしかつた。そしてその深い事情はもとより分らなかつたが、確かにそれが餘り幸福な事情でないことは娘の素振りで明かに分つた。そして話しのあとで、

「どうぞ宜しくお願ひ致します」と云はれた時、彼は又一つの幸福な小説を描きながら心底からの同情をもつて途中の保護を約したのであつた。

九時をうつと彼等はそろ〳〵身仕度をして宿を出た。停車場へ行くと朝にも増した雜沓で、いづれも鐵道院の手ぬるさに對してくど〳〵不平を云ひながら汽車を待つてゐた。此處まで來てゐれば格別急ぐこともないので、彼等は氣を落着けて、柳の木陰に荷物を卸ろして休みながら、次の列車を待つことにした。

彼等が、假造りの棧橋のやうな假乘降場へ下車したのはそれから二時間ばかり後のことであつた。其處から二丁ほど線路線を歩いて、船に乘る處へ行つた。鐵橋からは十四五丁も離れてゐるのに、其邊の松林のなかは最早一面の水で、土手のすぐ下は人の胸に達するほどの深さに達してゐた。そして低い灌木の葉が水藻のやうに白けて、少しづゝ動いてゆく水の面にふわふわ浮いてゐた。

限りのある船の數で一時に多數の旅客を運ばうとするので、其の邊は非常な混雜だつた。それでも、

流石に舟と聞いて怖氣づいたのか旅客の數は思つたほど多くはなかつた。線路の兩側には七分板が幾枚となく敷きつめてあつて、人々は手荷物やら、郵便嚢などと一緒に打交つてその上に腰を降ろした。巡査や驛員は汗を流しながら一人一人列を作らせて、片端の方から少しづゝ船に乘せて行つた。そして人を乘せた船は一艘づゝ順々に河岸の方へ向つて漕ぎだした。

彼等は線路の上に立つて、騷々しいその光景をみてゐた。

「まるで馬でも積むやうだねえ。」母親は浩一の顏をみて笑ひながら云つた。

「ほんとですね、かうなりや人間の價値(ねうち)も一束三文だ。」彼は今度は隣りに立つた女の方を向いて云つて聲高に笑つた。彼の上氣した頰には人の好さゝうな色が浮んで、額口から玉のやうな汗がすたすた流れてきた。

多くの船が何等の杞憂もなく安らかに出てゆく樣をみると母親も漸く安心したらしく、到頭船に乘ることを承諾した。そして、

「こんなことなら初めつから心配するんぢやなかつた。」と云つて自ら恥ぢるやうな色さへ浮べた。

彼等は漸く五番目の船に乘ることが出來た。長さ五間ばかりの大傳馬で、四十人ばかりの旅客と、郵便脚夫と、役場の吏員が乘つた。浩一は母親を胴の間へ連れて行つて、女の隣りへ坐らせた。そして自分は男の子と並んで坐つて、互に顏を見合はせながら話の出來るやうにした。

船はやがて、

「さあ、出した。」と、云ふ聲とともにゆらゆらと土手を離れた。三人の屈强の若者に操られて漸次と河の方へ出て行つた。松林の蔭へ入ると、急に四邊が小暗くなつて、濕つぽい冷氣をおびた風が何處からともなくすうつと快よく吹いて來た。そして、明るい太陽の光が縞のやうになつて洩れて來る葉蔭には油蟬が煎りつくやうに騷々しく鳴きしきつて、時々露氣を含んだ小枝が乘客の顏を柔かに撫でゝ行つた。

船のなかは出水の話でもちきつてゐた。昨日は何處そこの村で桑畑が何町潰れたとか、何處の堤防が崩れたとか、明るい日の光には相應はしくないやうな物凄い事實が方々で物語られた。殊に艫の方に坐つた四五人の農夫達の話は人々の耳を聳たさせた。それは逃げ遲れた憐れな一家の最後に關する話で、一昨夜の眞夜半頃鬼怒川口の堤防でみてゐると、親子三人屋根の棟へ取縋つたまゝ絶叫をあげながら川下の方へ押し流されて行つたと云ふ。そして川波の音に紛れながら消えてゆくその叫聲が今も耳にあるやうだといふやうなことを素朴な、飾り氣のない言葉で頻りに語つてゐた。彼等はその話を別な世界で起つてゐる出來事のやうに笑ひながら聞いた。

松林を出はづれると、廣々とした河の面が一面にみえて來た。彼岸の崖には生々しい赤土が一帶に現はれて、充ち溢れた濁水と物凄い對照をなしてゐる。船はそれを左手に眺めて、水に漬らない前は畑地でゞもあつたかと思はれる上を靜かに川上の方へ漕ぎ上つた。そしてとある雜木林の角を曲ると、一船の人々は思はず驚ろきの叫聲を放つた。それから上流は唯見る茫漠とした一面の湖である。處々に丘陵や、森林の帶が島のやうに浮き上つて、赭黄色の水は殘る隈なく陸地の上を浸してゐるのであつた。

そして水棹の水を打つ音の外は何の音も聞えず、唯午下りの眩ぶしい日光がぎらぎらとその面に輝いてゐるばかりであつた。

「まあ、何んと云ふ酷い水だらう！」母親は眉を顰めながら、茫然その光景を眺めてゐたが、その胸は傍の人にも分るほど高く波打つてゐた。

浩一は出水の範圍が餘りに廣いので却つて壯快な感に打たれながら

「どうです、凄まじい景色ぢやありませんか、彼處なんかどう見ても海だ。實に壯んなもんだなあ。」と頻りに快活に話してゐた。

女もいつか我を忘れて、

「こんな水ぢや隨分人死にも御坐いましたでせうねえ。」など、打解けた口をきいて、浩一の方へ身を摺り寄せるやうにして、延びあがつて水を見た。殊に男の子は船に乘つた嬉れしさに、舷から兩手を水のなかへ突込まうとしては姉に世話を燒かせた。

船は軒先まで水に漬つた四五戸の家の間をぬけて、愈河の中流の方へ乘り出さうとした。そして一足先へ出た他の二艘の船と前後しながら、船首を斜に川上へ向けて、徐々と流れに逆らひはじめた。

「さあ、愈々河越しだ。」と、浩一は面白さうに云つて、踞んでゐた膝を落して袖をかき探つたが、その時はじめて煙草入れを忘れて來たことを思いついて、兩手を拱いたまゝ手持無沙汰さうに又河を見た。

船の進みに從つて、河の流れは漸次と急になつて來た。濁つた水は何處となく黑味をおびて來て、幾

つとなく大きな渦を巻きながら舷を掠めて行つた。一心に艪を押す船頭の額には玉のやうな汗が頻りに流れた。

母親は不安さうにキヨトキヨトとしながら四邊を見まわしてゐたがやがて漸次と浩一の方へにじり寄つて、

「大丈夫だらうかね。」と、慄へを帶びた聲で呟いた。

彼はその顔色を見ると噴笑すやうに笑つて、

「さあ、何とも云へませんねえ。ひよつとしたらひつくりかへるかも知れませんぜ」と、態と嚇すやうに云つた。

その言葉が終るか、終らないうちに船は突然、何ものかにごとりと衝き突つた。そしてあほりをくつたやうに突きあげられて、二三度ゆらゆらと輕く揺れた。彼等は思はずはつとして、顔色を變へながら音のした方を眺めた。と、其處には水の爲めに枝も葉も悉く洗ひ落された大きな流木が怪物のやうな根を舳へ突きあてゝゐるのである。そして、みるみるうちに三抱へもある幹は水中に見え隠れしながら吸ひ寄せられるやうにずるずると舷へきて密着してしまつた。船頭は慌てゝ水棹の先でそれを突き離さうとしたが、流れが早いので中々思ふやうにならない、そのうちに船はその儘流木に押されて漸次と下流の方へ流されはじめた。

女、子供は恐ろしさに聲をあげて喚きはじめた。氣早い男達は舷から手を差しのべて流木を押しはな

さうと試みた。船頭等は

「危い、危い」と、口々にそれを制しながら、今度は力一杯に艪を張つて船を廻はさうとした。その途端にどうしたはづみだつたか、艫の方の艪を漕いでゐた船頭の艪綱がぶつりと切れて、彼はひとたまりもなく渦まく水流のなかへ陷入つてしまつた。

それでなくてさへ浮足だつてゐた乘客は、それを見ると、

「あれ、あれッ」と、狂氣のやうに叫んで、一齊にたち上つた。そして

「立ちやいけない。立つちやいけない。」と、叫ぶ警語も耳に入らぬやうに狼狽へまわつたがそのうちに船は全く腹を流れに打たれるやうな位置になつて、左舷がぐつと傾いた。その刹那、立つてゐた乘客の大部分は體の中心を失つて一度によろよろと傾いた左舷の方へ雪崩をうつて倒れた。

「あれ、母さん。危いッ」と、浩一は人の下に押されながら、母の肩へ手をかけた。母はその時失心したやうな眼つきをしてぎろりと彼の顏をみたが、その次の瞬間にはもう舷を越へて溢れて來る濁水が彼女の腰を浸してゐた。そして鋭い女の絶叫が耳のそばで聞えたかと思ふと、彼の體は何ものかに抱きかゝへられたまゝさつと橫なぐりに水のなかへ突落されてしまつた。

暫らくの間は無我夢中であつた。ふと氣がついた時には彼自身でも漸次と深い水の底へ沈みつゝあることが朧氣に分つた。水は絶えず彼の體を揉むやうに重苦しく流れてゐる。今にも胸を壓し潰されさうな息苦しさが全身に襲ひかゝつてゐる。彼は無上に手足を踠いた。そして何者かの手のやうなものが腰

のあたりにしつかり絡はつてゐてその爲めに體が自由にならないのを感じると、彼は渾身の力をふるつてそれを突き離さうとした、が併し彼が身を踠けば踠くほど却つてそれは股のあたりまで絡はりついて來てどうしても離れやうとはしなかつた。最後に兩足に力を籠めて矢鱈に踏みつけると、それは軟かくぶわぶわになつて剝げるやうにするすると流れ去つたが、それと同時に彼は體が輕くなつてゆくやうに覺えて、何時ともなく再び氣が遠くなつてしまつた。……

彼は頰の邊に熾烈な日光のやうな暑さを感じた。そして何處か遠くの方で大勢の人間がわあわあと大聲をあげて喚めいてゐるやうな轟響をかすかに聞いたが、それと同時に朧ろげな意識が少しづゝ歸つて來て、誰れかゞ遠くの方から

「おうい、おうい。」と、彼を呼びとめてゐるらしいのを感じた。彼は一刻も早く水のうへに浮び出やうとして、手足を矢鱈に踠いたが、どうしたものか五體は釘づけにされたやうにこはばつてゐて少しも動かない。……

その時、彼は唇のあたりに氷の冷たさを感じた。その冷たさは瞬く間に鼻から眼へぬけてゆくやうに思はれたが、やがて彼の體を重苦しく抑へつけてゐた盤石のやうな力は少しづゝ減じて行つて、何とも云ひやうのない心地よさが彼の全身に流れて來た。

彼はぽつかり眼を瞬いた。ぼんやりした眼界には鬚の生へた大きな顔が見えてゐた。「あなた。あなた。お氣がつきましたか。私の顔が分りますか。」その鬚の生へた唇はせはしげに動いて、蚊のやうな細い聲で云つた。

彼はその言葉が自分に對して云はれてゐるのを明かに知ると、大きな聲で返事をしやうとしたが、唇も歯もすつかりとれてなくなつてしまつたやうな飽氣ない氣がして、どうしても言葉が口へ出て來なかつた。

やがて彼は體ごとすうつと持ち上げられるやうな氣がした。そして丁度波に弄ばれてゐるやうに左右へゆらゆら搖られながら、何處か低い方へ、低い方へと引卸されて行つた。それとゝもに眼界は漸次と眞黃ろな霧に掩はれて、はるか遠方でかなかなと悲しげに鳴きしきる蜩の聲が聞えて來た。そして深い穴の底から空を眺めてゐるやうなもどかしさが彼の心を引包んだかと思ふと、又意識はぷつつりと消えてしまつた。

二度目に正氣に反へつたのはもう日沒に近い頃であつた。彼は天井の低い、船室のやうな病院の一室に横たはつてゐた。

今度は彼の精神も略ぼ健康に復してゐた。枕元に坐つた若い鐵道員の姿も、醫員の姿も、亦白いカー

テンの上にさしかゝつてゐる黄ろい黄昏の色もはつきりと辨別された。そして强い藥品の匂ひが鼻のあたりに漂つてゐるのを嗅ぐと、彼は卒然と何等の所因もなく激しい死の恐怖に襲はれて重い手足を機械的に動かしながら

「あゝッ」と、深い唸き聲を發した。

「おゝ、やつとお氣がつきましたね。私の顏が見えますか。」と、年老つた醫員は彼の顏の上に掩いかぶさるやうにして、彼の眼のところをじつと見据えた。

彼は重々しく合點いた。そして顏を顰めながら

「生命は助かるでせうか？」と、張りのぬけたやうな苦しげな聲で聞いた。と、醫員は輕く微笑みながら、

「そんな心配はありません。もう大丈夫です。」と云つて、指先で彼の眼瞼をめくつてみながら、「もう何處も苦しいところはありませんか。」

「え、たゞ少し胸が苦しいばかりです。」

「さうですか。すぐなほりませう。」と、醫員は自信のある調子で云つて、一盃の赤酒を彼れに與へた。

彼は口をひきしめるやうな澁いその味はひを舌に感ずると、急に生命の保證を得たやうな氣がして、踊りあがらんばかりの喜ばしさを感じた。そして何時ともなく涙がほろ〳〵流れ出て來て自分を助けて吳れた恩人の手に縋つて、心の底にある限りの感謝の言葉を吐露したいやうな氣になつた。

その時、鐵道員は醫員の許しを得て漸う口をきつた。鐵道院としては充分責任をつくしたつもりだけれども、思ひがけない天災には敵はないと云ふやうな謝詞を管々しく述べた末、彼は熱心な調子て、

「併し亡られた人の事を考へると、貴方がたは全く幸運でした。なにしろあの水の勢ひてすから、どんな水泳の達者な方だつて迚も泳ぎつけるもんぢやありません。幸ひまあ近所に他の船が居合はせたいで沈んだ船が流木へ吸ひついてゐたんて、やつと半數以上の人をお助け申すことが出來たんてすが、それだけはまあ不幸中の幸だと云つて驛ても非常に喜んで居ります。併しまあ妙なこともあるもんて、男の方は大概助かつて被居るのに、女の方は十人も乗つてゐながら一人も助かつてゐないんてす。船頭の話ては、一旦何かへつかまりついても力が弱いために皆すぐ離してしまうんで、救ひに行つた船が着いた時にはもう一人も水の面に顔を出してゐるものはなかつたさうてす。……」

その時、浩一は突如胸をはげしく抱き緊めらるやうに感じた。今迄は夢のやうに思はれてゐた渡船の覆沒した事實が鐵道員の言葉と一緒に漸次とはつきりして來た。船が流木に引懸つて、船頭が水中へ落ちて、……その瞬間に至つて彼の心には電光のやうな勢て母と云ふ觀念がひらめいて來た。

「母はどうしましたらう？母は。」と、浩一は布團からついと起き上つて、眼をキョトキョトさせながら叫んだ。

「え、お母さん？」と、鐵道員は意外な言葉にグッとつまつて、呆氣にとられたやうな顔をして浩一の方を見たが、醫員は素早くその話の脚をとつて、場馴れた落着いた聲て

「隣りの十二號室にお居でゞす。何か御用ならお言傳てしませうか。」

「助かつたんですか。確かに。あゝまあよかつた。私は又助からなかつたのかと思つて吃驚しました。」と、云つて彼はその儘又力なげにがくりと枕の上へ頭を落して、甘えるやうな聲で、

「一寸招んで頂けますまいか。」

「いや、今は可けません。あの方は少し心臟に異狀がありますから、滅多に體を動かしては却つて惡いです。」と、醫員は飽くまで色を動かさずに云つた。

この頃から浩一の頭腦には妙な錯覺が少しづゝ起つて來た。水中に沒しやうとしたその刹那の恐怖が再び心に返へつて來ると同時に、母親はもう疾うから船になんぞ乘らずに歸京してしまつたやうな氣がして來た。そして自分が宅の門を視つて歸つてゆくと、茶の間の暗い窓から顏を出して、眼鏡越しに自分の顏をじつとみながら、

「お歸り。」と云ふ。……

彼は眼を据ゑたまゝその不條理な妄想を一心になつて見つめた。醫員はその顏を穴のあくほど見てゐたが、やがて何と思つたか、枕元にあつた牛乳に黃いろい睡眠劑を混ぜて彼に飮ませた。そして頻りに眠ることをすゝめた。

彼の妄想は又枝をさした。今度は母と一緒に上野の停車場を出てゆく場面である。母は蒼ざめた顏をして、土産を汽車中に忘れて來たことを頻りに悔んでゐる。浩一は何んだか淚の出るやうな物寂しい氣

になつて、

「それぢや私が行つて取つて來ませう。」と云つて、ふと振り顧へると、すぐ後には例の合宿の女が立つてゐた。……それと共に彼は又胸を厭すやうな疲勞を感じて昏々と深い眠りに落ちていつた。

遠くの方で布を裂ぐやうな泣き聲が聞える。今にも息の根を止められさうな男の子の泣き聲である。

「姉さんがゐないよう。姉さんがゐないよう。」その聲が漸次と近づいて來るに從つて、言葉がはつきりして來た。

「姉さんがゐないよう。姉さんかゐないよう。」

彼はその聲に睡りを覺まされて、かばと飛び起きた。もう夜は深沈と更け渡つて、四邊には不可思議な靜けさがじつとたち罩めてゐる。黑布で包んだ電燈の光は間内を陰晴と照らし出して、その餘映は天井に幻のやうなぼやけた怪しげな象を描いてゐる。そして耳を澄ますと、何處か遠いところで出水の警鐘が頻りに亂打され、カーテンの隙間から見える野の末には幾つとなく紅い篝火が燃えてゐる。風の音が時折ざあッと硝子窓に吹きつけて來た。

「姉さあん。姉さんがゐないよう。」その聲が今度はすぐ間近で聞えた。泣き續けて嗄れはてた憐れな聲だつた。

彼はその時突嗟に、大水が此の家まで襲へかゝつてゐるのだと思つて、悚然とした。

「大水だ。大水だ。おい、早く起きて呉れんか。大水だ。」彼はすぐ傍に寢てゐる看護婦の臥床のうへに倒れかゝりながら火のつくやうに激しく叫んだ。と、看護婦は慌てゝ飛び起きて片手に枕を抱へたまゝ戸の邊をうろうろしてゐたが、彼は忽ちそれに飛び縋つて、

「早くお母さんを起こして來て呉れ。私が連れて逃げるんだ。」

看護婦は物の怪につかれたやうに戸を開けて外へとび出した。その時漸う明らかな意識が彼女の頭に返へつて來たと見えて、彼女はキヨトキヨト四邊を見回はしながら

「あゝ、吃驚した。水なんか來やしないぢやありませんか。ありや風の音です。」と、云つて、又そつと戸を閉ぢやうとした。

「馬鹿を云へ。水だ、水だ。あれあんなにざあざあ云つてるぢやないか。早くお母さんを起こして來てくれ。」

「お母さんて誰何です?」

「十二號にゐる俺の母だ。分らない奴だな。ぢや俺が行くからいゝッ」と、彼は腰に毛布を卷きつけたまゝ戸を開けて外へ飛び出した。そして隣りの室の戸を破れるやうな音をたてゝ明け放した。

室のなかには昨夜の合宿の男の子がたつたひとりしよんぼり坐つて、しくしく泣いてゐた。それをみると彼はとび上るやうに驚いて、

「あッお母さんがゐない。誰か隱したんだ。きつとさうだ。おい。早く行つて探して來てくれ、金はいくらでも遣るから。」と、云つて彼は毛布の裾をずるずる引摺りながら、廊下をうろうろして廻つた。

看護婦はそれをみると、恐ろしさうにふるへながら、

「そんな方は家にやゐません。」

「ゐないことがあるもんか。俺は確かに先刻逢つたんだ。」と、浩一は女に追ひ縋つてその手を激しく握りしめやうとした。彼女はその恐ろしい形相をみるとぞつとして突如悲鳴をあげて當直室の方へばたばたと逃げて行つた。

彼は泣きさうな聲で、

「お母さん。お母さん。」と、そこらを探し廻はつたが、その刹那彼の念頭には船の沈む時彼を見た母の顏がすつと浮んで來た。そしてそれと同時に彼は胸に縋りついた母の手を思ひ出した。水の底で蹴放した柔い人の體を思ひだした。と、彼は急に

「あッあッお母さんが」と、叫んだまゝ聲を放つて號泣しはじめた。そして激しく身悶えしながら室のなかへ驅け込んだが、その時彼の顏面はもうこわばつたやうに拘攣つて、涙にみちた兩眼はどんより据わつてゐた。そして臥床の傍まで來ると、頰から顎へかけて笑ふやうな、泣くやうな異樣な表情がさつと走つて、大きく開いた唇から白い泡をたらたらと吐き出しながら前のめりにばたりと倒れた。

看護婦が當直の醫員を起こして再び歸つて來た頃には彼はもう全く人事不省に陷つてゐた。唯時々、

「うむ、うむ。」と、かすかに呻めいて、指の先をぴくぴく痙攣させるばかりであつた。

醫員は慌てゝ幾筒かの注射を試みた。併し彼はその都度ころころと喉をならして泡を吐くばかりで一向蘇生しやうとはしなかつた。

「もう駄目だ。心臟痲痺を起こしたんだ。」と醫員は投げるやうに云ひ放つた、今度はぼんやり突立つてゐる看護婦の方を向いて、

「早く小使を起こして、警察へ報らせにやつて吳れ。」

彼女は返事も出來ぬやうに眼を瞬つて、まじまじしてゐたが、刻々死の色に掩はれてゆく浩一の物凄い顏容をみると、俄かに鋭い恐怖に襲はれて、激しく歔欷しはじめた。（をわり）

女弟子

高濱虚子

赤い襷が竹垣の傍の青々とした八つ手の葉に投げ掛けてあつた。其八つ手の廣い葉の上に蛇のやうに這つてゐる赤い色が目に浸み込むやうに映つた。さうして其襷を其處に投げ掛けた儘急いで外出したらしい女の容子がまざ〳〵と想像された。

此女の家に斯く裏口から自由に出入し得るものは御用聞きの小僧などの他(ほか)は自分許りだといふやうな心持もした。髮結の女さへ出入はしやしない。――彼女は髮結にさへ結はさないのだもの――其自分て束髮を結んでゐる時に丁度正夫は此裏戸から這入つて來たことがあつた。

「まあ先生！」と其時女は驚いて言つた。

「これは失禮しました。」と正夫は女の方を背にするやうに縁に腰を下ろしてステッキで靴の尖を叩いた。「どうかお構ひなく。」

女は片手で髮を握つた儘正夫に座布團を進めて置いて、

「それでは一寸……」と言つて急いで髮を束ねた。

そんな事が思ひ出された。

「花子さん。」と呼んで見たが返辭がなかつた。固より留守とは承知し乍ら。

垣添ひに庭を行くと二階建の母家があつた。其水口に鍋を洗つてゐるのは時々は花子の部屋の用事をも手傳ふお玉であつた。

「留守ですね。」

「いゝえゐらつしやる筈ですが。」とお玉は言つた。

「ゐないやうですよ。」と正夫は佇立つた儘微笑した。

「さうでございますか、今迄ゐらつしやつたのだが……」此お玉の言葉は八つ手の上の赤い襷を思ひ出させた。

「少し待つてゐませう。すぐ歸るだらうから。」正夫は又もとの方に歩を踊して、いつかと同じやうに部屋の立て締めた障子を背にして縁に腰掛けた。脇に夾んでゐた書物の包みを縁の上に落とすやうに置いた。

女弟子！。何某とか何某とかいふ書家が女弟子を持つてゐる、其が皆相當に成功しつゝあるといふことは正夫に取つて固より緣の無い出來事とは思はなかつたが、其でも今日のやうに自分が女弟子を持つといふ事は此年になるまで全く豫期しなかつたことてあつた。其が此の二年前に繪畫協會が出來るやうになつて正夫が其處の敎師として通勤するやうになつてから此花子のやうな天才（正夫はさう思つてゐた）の弟子を得たといふ事は不思儀の緣といはねばならなかつた。

三日前に終つた繪畫協會の第二回の展覽會、其は或事情の爲め僅に二十餘品の展覽に過ぎなかつたが第一回の時よりもより以上の成功を收め得たといふ事は一に此の花子の繪畫が評判になつたからてあつた。正夫は此繪畫を此程迄に出來上らす爲めには自分が畫を書く以上の骨折りをして、殆ど自分の全精神を此一幅の上に傾注したのてあつた。

其に就いても思ひ出すのは第一回展覽會の時の事てある。其時の目ざましい花子の畫の評判は正夫の人知れぬ苦痛の種てあつた。自分が彼女をして成功せしむべく寢食を忘れて指導して置き乍ら彼女の成功は堪へ難き不平の種てあつた。人生の春に獨り醉ふてゐる花子は、或意味に於て已に書壇の落伍者てある正夫の嫉妬の的てあつた。けれども亦た其に拘らず、今度の第二回展覽會の準備中には第一回の時にも增して、殆ど心身を銷磨し盡くす迄に其全力を傾倒して花子の畫を完成せしめることに怠らなかつた。彼は何故てあるかを自ら問ふて私に答に窮することもあつた。

「おや先生！」質素な着物を着て少しも矜誇の風を見せない美くしい天才はいつの間にか其處に立つて

ゐた。其手には彼の八つ手の葉の上に投げ掛けられてゐた赤い襷が、もう七重八重に縮ねられつゝあつた。

「多分直ぐお歸りだらうと思つたので、失禮でしたが無斷でお待受けしました。」と正夫は立上つて一禮した。少しでも此女に馴れ〳〵しい素振りを見せることは自分でも好ましい事と思はなかつた。

「今朝は協會に來ませんでしたね。」と微笑を含み乍ら優しく正夫は聞いた。

「少し風邪でも引いたのかと思ひます、何だか頭が痛んだものですから。……まあお上り下さいまし、こんなに取り散らしてゐまして。」と花子は會釋をして先に立つて障子を開けた。赤い襷を掛けた布團は敷き流した儘になつてゐたのを花子は狼狽へて片附け始めた。

「其儘にしてお置きなさるがいゝ。私はいつもの通り此處が結構です。靴を脱ぐのが面倒だから。」と言つて正夫は又花子の方を背にして緣に腰を掛けた。

「それでは。」と一通り布團を片附けて置いてから花子は坐布團をいつもの通りに勸めるのであつた。

「たいしたことで無ければいゝが。」と正夫は心配さうに言つた。「熱は無いですか。」

「いゝえ、唯頭が痛む許りなんです。起きた方が却つていゝかも知れぬと思ひまして、臺所の洗ひ物などを濟ませてから今一寸表に出て見ましたら、大分氣分がよくなつたやうに思ひます。」

「其位ならいゝですが、氣をおつけにならんといけません。臺所の洗ひ物などはお玉をお使ひになるがいゝぢやありませんか。其なりに頼んであるのだから。若しさういふ具合にいかなけりやいつでも宅の

下女を手傳によこしますよ。」と正夫は勞はるやうに言つた。「貴女も此間頃の勉强の疲れが出たのでせう。」

「そんな事は無いのですけれども……」と花子は笑つた。

「其筈です。私でさへがつかりしましたもの。兎に角お互に命がけでしたからね。」正夫の窪んだ眼や肉の落ちた頰には隱すことの出來ぬ疲勞の色が見えた。

花子は微笑を含んで點頭いた。

「いつも先生はお大抵ではございませんわ。皆樣のお世話なんですもの。」

「皆樣？」と正夫は心の中で呟いた。さうして花子の口からさういふ事を聞くことを不滿足に思つた。正夫は決して協會の他の生徒を顧みないといふでは無かつた。固より外形に於ては同じやうに骨を折つた。けれども其全精神は花子の上に注がれてゐた。

花子は茶を酌んだり菓子を勸めたりした。菓子は火鉢の抽斗から出した鹽煎餅であつた。正夫は其鹽煎餅を瘠せた指尖に摘んで旨さうに食ひながら庭を眺めてゐた。

「苺がよく出來ましたね。」

「おうさう〳〵、私忘れてゐましたわ。此頃はもう毎朝十餘りは熟したのが取れますのよ。先生召上りませんですか。」花子はもう庭に降りて葉隱れの赤い玉を探しては摘んだ。二十三だといひ乍ら二十位に見ゆる若々しい橫顏を正夫は厭かず眺めた。

やがて美くしく洗はれた十餘顆の苺は一つの皿に載せられて正夫の前に出された。

「これはよく熟れてゐる。貴女も食べませんか。」

「私も戴きますわ。」四十五六の男の手と二十三の女の手とに同じやうに赤い顆がとり上げられた。

「今日は。」と裏戸口から一人の小僧は竹の皮に包んだ一切の肴を持つて來て縁の上に置いた。さうして

「有難う。左様なら。」と歸つて行つた。

「御馳走ですね。」と正夫は戲むれるやうに言つた。

「いやですよ、先生。」と花子は慌てゝ其竹の皮包みを臺所に運んだ。

「はゝゝゝ」と正夫は淋しく笑つたが、其餘り馴れ〳〵しかつた事を自ら戒飭するやうに、「今日上つたのは、どうして缺席なさつたのか其も氣になつたのだ、其から來月の文部省展覧會に出す貴女の畫題について、一寸貴女の意見を聞いて見とき度いと思つて。」

「まあ、其て態々。」

「今度は斯ういふのを一つ晝いて見てはどうてせう。」と正夫は其着想を話して、「一回の時や二回の時とは大分趣が違ひますが、併し貴女には屹度成功するだらうといふ私の考へなんです。」

花子の顔は輝き渡つて見えた。

「教へてさへ戴けば出來さうな心持が致します。」

「出來ますとも、其りや屹度出來る。」と正夫は其美しい天才の顔を見上げて叫ぶやうに言つた。

尙ほそれから二人の間には其畫題についてのいろ〳〵の話が取り交はされた。

正夫が痩せた長い脚を延ばして立上つたのは其から暫くしての事であつた。

「まだ急ぐ事でも無いから充分に靜養して、體具合が直ほつたら早速いらつしやい。」

「えゝ、もう明日は屹度……」

「推してはいけませんよ。」

「えゝ有難う。もう明日は太丈夫です。」

今日協會の畫室に花子の姿を見なかつた正夫は氣の衰へを覺えたのであつたが、一時間足らず斯く話し合つたことによつてすつかり元氣の恢復したことを覺えた。

彼は裏戶を出掛つてから急に思ひ出して後がへりをした。さうして洋服のポッケットに這入つてゐた一つの紙包みを取り出して其を花子に渡した。

「これを貴女に上げようと思つて持つて來たのであつた。」

「まあ。」と花子は手を延べて其を受取つた。其紙包には美くしい西洋菓子が這入つてゐた。

第一回展覽會の時の高評以來、花子の上に試みらるゝ世間の種々の誘惑に對して、正夫は恐ろしい眼をして其を監視してゐた。今此のさゝやかな菓子の贈物に對して花子の子供らしい喜を表してゐるのを見るにつけ彼の淋しい顏には抑へ難い滿足の色が浮んだ。(完)

○改正定價 金貳拾五錢外に郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢但淸國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵稅共		

▲但 新年號春秋二期特別號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替 にて御送金の場合は 本鄕西片町十番地反省社 と指定し拂渡局を 東京市東片町局 と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金 口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加へらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵券代用 必ず一割增の事

一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、坐ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記集金委托料及送達料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄 金五錢
一金三圓迄 金六錢 （集金委托料及送達料）
一金五圓迄 金七錢

一受領證請求 は必ず返信料金を要す

明治四十五年五月廿八日印刷納本
明治四十五年六月一日發行 （禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 藤本兼吉

東京市本鄕區駒込西片町十番地
發行所 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷九一九 電信略號ハンセイ

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す